

ニ一アオ一トマタ～荒
廃した世界は何をなす～
ントは

い湯め

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ニアアオートマタの世界にディビジョンのエージェント（オリキャラ）をぶち込んだものです。理由はどっちも荒廃してるしいけるだろ。という単なる思い付きです。主はニアアオートマタはプレイ済みですがレプリカントの方はプレーしてないです。気分です。投稿するのでお願いします。処女作と駄作誤字脱字大量をお許しください。また、原作世界観への独断、偏見、勉強不足による解釈不一致等あると思います。後キャラ崩壊注意です。

目次

第12話
第11話
第10話
第9話
第8話
第7話
第6話
第5話
第4話
第3話
第2話
第1話

36 33 30 27 23 20 17 14 11 8 5 1

第25話
第24話
第23話
第22話
第21話
第20話
第19話
第18話
第17話
第16話
第15話
第14話
第13話

76 73 70 66 63 60 57 54 51 48 45 42 39

第38話 第37話 第36話 第35話 第34話 第33話 第32話 第31話 第30話 第29話 第28話 第27話 第26話

120 116 112 109 106 103 100 97 94 91 86 83 79

第51話 第50話 第49話 第48話 第47話 第46話 第45話 第44話 第43話 第42話 第41話 第40話 第39話

161 158 155 152 149 146 143 140 137 134 130 126 123

第64話 第63話 第62話 第61話 第60話 第59話 第58話 第57話 第56話 第55話 第54話 第53話 第52話

209 205 202 199 195 192 189 185 180 176 172 168 165

第77話 第76話 第75話 第74話 第73話 第72話 第71話 第70話 第69話 第68話 第67話 第66話 第65話

253 250 246 243 239 235 232 229 226 222 219 216 213

第90話 第89話 第88話 第87話 第86話 第85話 第84話 第83話 第82話 第81話 第80話 第79話 第78話

306 302 297 291 287 283 279 275 271 267 263 260 256

第103話 第102話 第101話 第100話 第99話 第98話 第97話 第96話 第95話 第94話 第93話 第92話 第91話

368 364 360 356 352 348 339 335 326 322 319 314 309

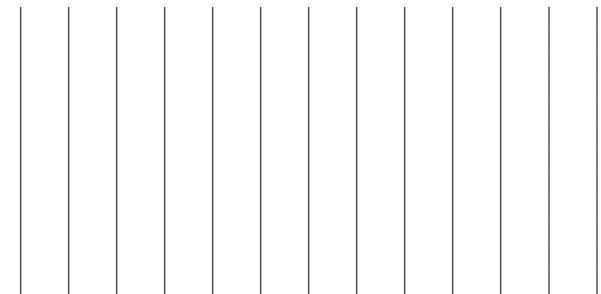
第 116 話 第 115 話 第 114 話 第 113 話 第 112 話 第 111 話 第 110 話 第 109 話 第 108 話 第 107 話 第 106 話 第 105 話 第 104 話

418 414 411 407 403 399 395 391 387 383 379 375 372

第 129 話 第 128 話 第 127 話 第 126 話 第 125 話 第 124 話 第 123 話 第 122 話 第 121 話 第 120 話 第 119 話 第 118 話 第 117 話

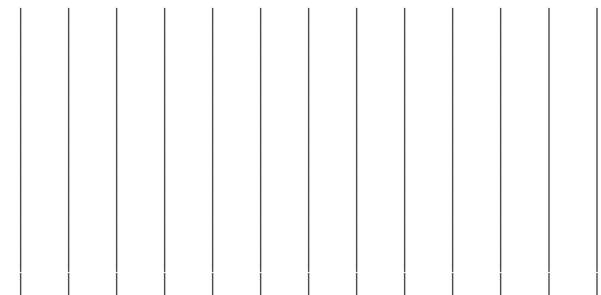
475 471 466 462 458 454 449 444 439 436 432 428 422

第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第
142 141 140 139 138 137 136 135 134 133 132 131 130
話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話



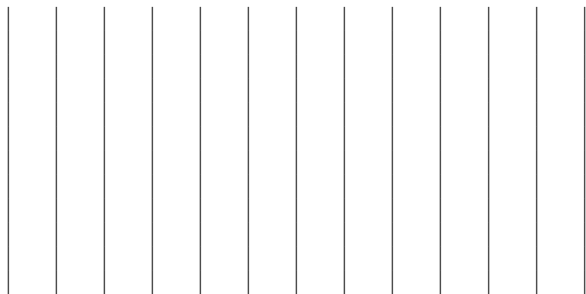
545 539 534 528 523 517 512 507 499 492 487 483 479

第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第
155 154 153 152 151 150 149 148 147 146 145 144 143
話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話



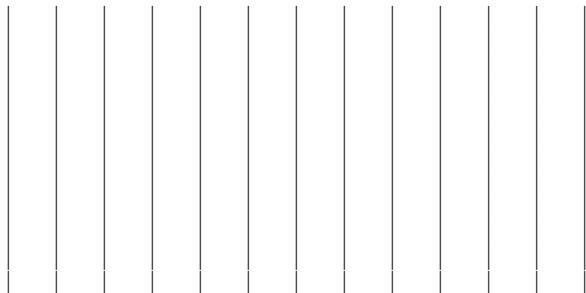
615 608 603 596 590 585 581 577 574 569 561 555 549

第 168 話 第 167 話 第 166 話 第 165 話 第 164 話 第 163 話 第 162 話 第 161 話 第 160 話 第 159 話 第 158 話 第 157 話 第 156 話



680 675 671 665 660 657 652 647 643 637 632 627 622

第 181 話 第 180 話 第 179 話 第 178 話 第 177 話 第 176 話 第 175 話 第 174 話 第 173 話 第 172 話 第 171 話 第 170 話 第 169 話



775 766 757 751 743 734 726 717 713 706 698 692 687

| | | | | | | | | | | |
|-----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 最終話 | 第191話 | 第190話 | 第189話 | 第188話 | 第187話 | 第186話 | 第185話 | 第184話 | 第183話 | 第182話 |
| 前編 | | | | | | | | | | |
| 890 | 876 | 867 | 853 | 840 | 828 | 814 | 803 | 794 | 787 | 780 |

第1話

アメリカ合衆国

この国の栄光は見るに堪えないほど落ちぶれた。かつての生活は、ドルインフルと呼ばれるウィルスによるバイオテロにより今となつては遠い過去のものとなつた。今では、暴徒と化した市民や群雄鬪歩する軍など秩序はないに等しかった。そこで、政府はデイビジョンエージェントを投入治安の回復を目指した。彼らの努力により各地で治安はかいふくしていった。

ワシントンDC

ここはかつてアウトキャストの勢力圏であつた。しかし最近は、その脅威もなくなつてきていた。

「ママ怖いよ」

「大丈夫きつときつとね」

この親子は、顔に麻布を被せられ今にも処刑されそうになつていた。

「うるせえな」

「さつさと殺そうぜ」

パスッ パスッ

突然響く銃声に母親の混乱は頂点にたっしていた。

「何なの」

「安心してもう大丈夫」

彼女の視界が開けるとそこには、SHDエージェントがいた。彼らは脅威がなくなるまで戦い続ける。

「ありがとうございます。」

娘も一緒に頭を下げる。

「ここは危ないさつきと移動するわよ。いい？」

そして、エージェントと親子はセーフゾーンへの移動を始めた。

エージェントを先頭に親子が続く。エージェントは周囲を警戒し移動するが、つい子供がふらふらしてしまうことがあった。ついには、母親が

「すみません。ほらエージェントのお姉さんに迷惑かけないの」

「いいのよ。帰ったらおやつ食べようね」

「うんっ!」

傍から見れば微笑ましい光景だったのだが、それを見ていた人影があった。

アウトキャスト side

「エミリーンは勇気を称える俺たちもな」

「俺のことを忘れんな」

「当たり前だ」

「うおおおおおおお！」

「くそ！イカレ野郎め！」

爆発の後そこには硝煙と惨たらしく飛び散った血液があった。

エージエントside

「うおおおおお！」

「くそ！イカレ野郎め！」

突然出てきた、糞あまのカリスマ性とやうに魅せられた狂信者に私は、弾を浴びせまくった。倒れる気配がない距離もかなり詰られた。このままだとあの子が死ぬそう判断した私は母親に彼女を放り投げ叫んだ

「止まるな！はしれ！」

2人が走つたのを確認した瞬間、私の後ろで爆音がした。そして、悲鳴が聞こえるなか私の意識は闇におちた。

これであの人の元に逝ける。最後に良いこととしたし後悔もないな。

「エージエント生体反応ゼロ」

彼女はやり切った表情を浮かべていた。

しかし彼女の遺体は見つからなかった。彼女はどこにいったのか。それとも吹き飛んでしまったのだろうか。

第2話

エーリエントステータス

名前：デリア・ミレットド・ハヴィランド 通称ラヴィ

所持武器

カスタムP416G3 アタッチメント 小型RDSスコープ マズルブレーキ

タクティカルマガジン アングルグリッパ レーザサイト緑

M700タクティカル アタッチメント 9倍スコープ サプレッサ

M45A1 コンパクトレーザーポインター

スキル Plus スキャナー シールド クルセイダー

所持品M9銃剣 フラッググレネード ジップライター

※弾薬に関しては明確に表記しません。また所持品は、一応各4個ずつぐらいだと思ってください。理由は個数でがばりそうだからです。

経歴

若くして海軍に入隊しそこでSEALsとして活動した。その後彼女の様々な知識に目をつけた政府関係者によってスカウト、入隊した。アウトブレイク後DCに招集さ

れた際、当時付き合っていた彼を置いてDCに向かったことを後悔している。また、性格面では親し人や子供には優しいのだが、戦闘になると口が悪くなるほか、気に入らない相手には目上の者にも容赦なく噛みつく。またDCでエージェントとして活躍していた際には、よく仲良くなった子供たちと一緒に遊んだり、時には一緒に昼寝をしているところを目撃されたりしている。親たちは彼女が子供たちと遊ぶのは、単に子供好きただけだと思っているが本人よれば別の理由があるらしい。

「うあああ」

重い体を何とか起こすことができた。しかし、目の前に広がるの爆弾の破片でも飛び散る血しぶきでもなく、荒廃し荒れ果てた景色であった。ここはどこ?とても見慣れたDCには見えない。とりあえず立ち上がり装備を確認すると、一式そろっているし爆発で吹き飛んだのものにもかかわらず、一切の外傷すらもない。この状態に困惑しつつとりあえず、少し歩けば市民や敵対コミュニティの人間に会うことができるだろう。しかし、いくら歩こうとも人間に会うことができない。ふと目の前に農場が視界に飛び込んできた。

「おじやましーす」

言つては見たもの家の中から一切の反応がない。もしもに備えM45A1を構え中に入った。中はある程度荒れてはいるもの比較的きれいな状態であつた。キッチンに入ると何か灰色の丸いなにかいる。

「あのすみません。ここはいつたいどこか教えてもらえないかしら？」

声をかけても一切反応がない。徐々に近づくと突然ピカッ！と丸い何かが振り向き目を赤く光らせていた。そしてよく見ると両手には斧を持っておりそれをこちらに向かつて振り回してきた。

「動くな！武器を降ろせさもなければ撃たよ！」

しかし何かはその警告を聞く様子はない。ダンッダンッダンッと続けざまに3発何かの頭に発砲した。すると何かは動かなくなり倒れたのだった。死骸を調べるとそれほどここからどう見てもロボットであつた。一瞬以前に彼と見た映画「ターミネーター」を思い出した。「なんの冗談よ」

つい口に出してしまつた。それからキッチンを調べようと死骸の奥に進んだ。奥の壁を見ると、白骨化し獣かなにかに食いつくされた死体と傍には2連水平ショットガンとメモが置かれていた。ショットガンをバックバックに入れメモ帳を開いた。

第3話

メモ帳はかなりの劣化が激しくほとんど読める物ではなかった。しかし1ページの少しだけ読むことができた。

何が月面への避難だ。役人どもは俺たちを見捨てて逃げたんだ。俺にはもう何も残っていない。しかしこのままくたばるのはごめん。俺は絶対に生き残るからな。

その後のページは読むことはできないが血液らしきものがついていていた。メモを読み終えたのち私は彼の農場を出て歩き始めた。そして歩いてみると何やら軍の陣地のような物が見えてきた。そこもかなり荒れ果てており先ほどの農場で見つけたショットガンを構え建物に入った。そこにも何かがいたがショットガンをぶっ放して進んだ。結局のところ収穫は無く無駄足だった。そう思っていると周辺の地図を見つけた。地図を見るにここはアリゾナ州のようだ。地図には丸がついてあった。そこには航空機の墓場つまりモスボールがあるはずだ。そこで足を調達して人を見つけたかしてDCに向かおう。しかしなぜ私はDCからアリゾナにいるのか？そもそもどうやってここまで来たのかしら？そしてあの農場でみた月面への避難とはなにかしら？とにかくなぞはあるがそこに行きましよう。そう思い私は歩き出した。何とか歩き続

けて墓場にたどりつけた。なにか使える機体がないか探そう。しかし先ほどの陣地はボロボロだったのにこちらは比較的きれいなのはなぜなのかしら。そんなことを考えていると外から爆音が聞こえ私は外に飛び出した。

外に出ると白い髪に大剣を背負っている女性が戦闘していた。相手は農場で殺した何かが戦車のような物に乗っているというおかしな敵だった。現状は彼女の方が優勢ではあったのだが時折ダメージを受けているようだ。私はスナイパーライフルを構え攻撃を開始した。

パスツ　パスツ　パスツ何発か打ち込んでみたがダメージを受けている様子がない。まあ大剣で攻撃している彼女の攻撃が通用しているので効いていないことはないだろうが無力感を感じていた。本体への攻撃をやめ横に乗っている方に攻撃してみた。すると、爆発が起きているのがわかった。彼女もここでようやくこっちの存在にきずいたようだ。しかしすぐさま切り替え戦車に攻撃していた。すると彼女は突然、力むような姿勢をすると攻撃のスタイルが荒々しくなった。声も大きくなって先ほどよりこちらに聞こえて来るほどだった。その後こちらでもはつきりと見えるほどの大きな爆発がおき、戦車型は倒されていた。その後、2人のいる地点は砂嵐に飲まれるのだった。

「ああもう！助けてあげるんだからしつかりここはどうか教えなさいよね！」

そう言って私はまだ会ったこともない相手に愚痴をこぼしつつ砂嵐の中を進むの

だ
っ
た。

第4話

A 2 s i d e

私の目的はただ機械生命体を殺すだけだ。この復讐だけが目的なのだ。司令部は私を脱走兵扱いしている。だが裏切ったのはあいつらの方だ。あんな捨て身同然の作戦の方がおかしいのだ。そして私は時折、追跡してくるヨルハ部隊と戦闘し破壊している。もうこの時点で後には引けないのだ。今日も変わらず破壊するだけだと思つていい。廃墟都市の郊外で戦車型の巨大機械生命体とあった。相手が誰だろうと変わらないう破壊する。バーサーカーモードとなり私はあの機械生命体の破壊を開始した。ふと戦闘していると自分の攻撃の音以外に何かか命中しているような音がした。最初は石ころか何かか当たっているのだろうと思ひ気にも留めなかつた。だが突然横に乗つて来た機械生命体が爆散した。よく見ると額に弾痕があいていた。レジスタンスが使う銃を一瞬思い浮かべたが発砲音が気こえずどこに撃つた相手がいるかもわからなかつた。とりあえず気を取り直し機械生命体への攻撃を再開した。その後は支援おかげもあり何事もなく破壊に成功した。私は急いでその場を離れようとした。もし助けていた相手がヨルハの脱走兵だと分かればレジスタンスに迷惑が掛かると思つたからだ。

そして移動を考えた矢先、私は砂嵐に飲まれた。急いで移動しようにも砂が入り込んだのか思うように動けない。自分の体の状態を悟った。

「アンドロイド殺ス」「敵ヲ取ルンダー」

私はこのまま機械生命体に殺されるのだ。復讐も何も果たせなかつたな。と自分の運命を呪った。

ダンっダンっ　ダンっダンっ「重っ　さあ早く立っていくわよ。」

私は朦朧とする意識の中で暖かくそして規則正しいリズムを確かに聞き取っていた。

エージェントside

何と彼女を救い出せたわ。正直あと少しでも遅かったら死んでたかもしれないわね。彼女とおつきな剣をその後とりあえず墓場まで戻って屋根がある部屋まで連れていき壁にもたれさせた。ところで私の予定だと彼女のケガを直して話を聞こうと思っていたのだけれど、この子どつからどう見てもロボットとかアンドロイドそう言う類よね。こう言う時はエージェントウオッチに聞いてみるしかないわよね。私は自分のエージェントウオッチを外して寝ている彼女につけた。

「報告：彼女を救うには細部への治療が必要。」

「は？・細部へつてどいいうことよっ。」

「回復を待つほかに細部にたまっている汚れなどの清掃」

私は、眠っている彼女に起こさないように慎重に体を横にし、リュクサツクを枕に私の着てたパーカをかけた。床に野ざらしにしていることは正直勘弁してほしい。どこを探しても布がないのだ。でもロボットつて腰とか痛めるのかしら？そして自分のハシカチを水筒の水で濡らし体の細部を拭いてあげた。にしてもこの子かなりぼろぼろね。恐らくかなりこういった戦闘を続けているのかしら。にしてもお腹すいてきたわね。

第5話

A 2 side

目をさますと。暖かくそして頭には何か柔らかいなにかがあった。そして体を起こすと

「おはよう」

私は咄嗟に拳を構えてしまった。ここは何処そして目の前のこっちを見て微笑んでいるコイツは一体。いろんなことを考えていると女が

「ねえ命を助けた恩人に普通そんな身構えないでくれる？」

そう言われ私はさつと拳を降ろした。すると女はまた微笑み

「私はデリア・ミレッド・ハヴィランド みんなからはラヴィって呼ばれてるわ。あなたはお。」

「私はアタツカー2号A2と呼ばれている。助けてくれたことには感謝する。私の武器はあるか？すぐに出発したい。すまないあんたには本当に感謝している。」

すると女はムツとした表情になった。

「申し訳ないけど無理ね。こっちだってお人よしじゃないの。助けたお礼だと思って

ちよつと情報をもらうわ。大丈夫私の質問に答えてもらうだけだから。あと私はラヴィ」

なんだ？このおん．「ラヴィよ」ラヴィは何を考えてる？私がヨルハだからか？

「悪いな。私はヨルハ部隊からの脱走兵だ。ラヴィに渡せる情報はないぞ？」

さてこれで移動できるだろう。私はそう思いたちあがった。

「ヨルハ？何のこと？申し訳ないけど気になることが増えたわ。A2私はあなたの武器の持つてるのよ？返してほしかったら質問に答えなさい。」

ハヴィは意地の悪い笑みを浮かべこちらをみた。仕方なく私は腰を降ろした。

「わかった。答えられる範囲で答えよう。あとこつちからも質問をいいか？」

そうして彼女との質疑応答が始まった。あとしれつとA2って呼ばれてるし。

エージェンツト side

「まず今は何年で何月何日？」

「確か西暦111945年日時はわからん。」

正直自分の耳を疑ったわ。だけど実際に目の前に証拠がいるし。A2も嘘を言っているとは思えない。

「あ、ありがとう。次にここら辺は何があつたの？私の知っている風景じゃないの。」

「ラヴおは面白い事を言うな。ここら辺はエイリアンが来て機械生命体どもがあふれか

えってから変わっていないよ。」

エイリアン？機械生命体？私は夢の中にもいるのかしら。ますます混乱してきたわ。

「エイリアン？それで人類はどうなったわけ？」

「月面に少ないけど逃げたって話さ。」

「ごめんなさい。悪いんだけどあなたの知っている限りの歴史を教えてください。」

「ああまず始めにだな・・・」

彼女の口から出たことは正直信じたくなかった。つまり私たちがDCを守ったことは無駄になったということ？しかもA2達のほかにアンドロイドがいる？頭の情報を処理しているとA2が口をひらいた。

「質問がないならこれで私はいくぞ。」

「まって最後に一つだけおしえて。なぜあなたはヨルハ部隊とやらを脱走したの？脱走何て褒められた物じゃないわよね。」

A2の表情が一気に暗くなった。そして立ち上がりおもむろに歩き出した。

「待つてあなたは一体なんのために戦ってるの。それじゃいつか壊れるわよ。」

第6話

A 2 side

私は我慢出来なかった。何に我慢出来なかったのかはわからない。気づけばラヴィに向け殴りかかっていた。しかし、躲されたかと思おうと私は気づけば彼女に抱きしめられていた。暖かかった。そして怒るでもなく優しく微笑み落ち着くように言った。私は力が抜けたかのように座り込みそして話した。

「私たちは実験部隊だった。私は真珠湾降下作戦に参加した。機械生命体との戦闘は激しく増援もなくそのまま押されていき結局生き残ったのは私だけだった。しかも私は作戦終了後に破壊命令が出ていた。私たちを使い捨てられる運命だったんだ。私は司令部と人類とやらを信じられなくなった。だから帰還しなかった。そのため脱走兵として指名手配され時折追跡部隊が送り込まれている。」

エージェントside

震えた声で語るA2は次第に落ち着いてきた。私は無意識に頭を撫でていた。そして平然のように彼女らを使い捨ててる人類の正気を疑ったわ。こんなことしてるから人類は滅びたんじゃないかしら。私は、A2の頭をなでながら

「そう頑張ったのね。いいのよ、たまには肩の力を抜きなさい。ほら深呼吸。そうね信頼できない人類からの言葉だから響かないかもだけど、辛いことがあったら私に相談しなさい。エージェントが解決してあげるわよ。」

A2は私の人類という発言に驚いたようだった。

「ラヴィが人類？だからこんなに温かいのか。」

「そうね左のほう耳をあててごらん。規則的な音がするでしょう。これが心臓の鼓動よ。」

A2は納得したのか落ち着いた表情を浮かべた。

数分後

「すまない。もう行くよ。」

そう言つてA2が立ち上がった。

「もう少しこうしてもよかったのよ。かわいい子の頭撫でてると落ち着くの。」

「うるさい！私がかわいくなんかかない。」

「あくあすねちやつたよ。ところでA2ここら辺で食料があるとところはない？」

「廃墟都市に動物がいたな。しかしここから若干遠いぞ。」

「お構いなく。私はここで使える機体がないか探してみるわ。あなたも一緒にどうぞ？」

「いや目立ちたくないからいい。」

私はエーリエントウオツチを指しながら

「何かあつたら連絡してね。頼れるエーリエントがすぐ行くわ。」

A2は若干の苦笑いのうち頷き、自分の武器を背負った。チクシヨウドつから見つけてきやがった。そして、外へと出て行つた。さて、私もそろそろ行動しないと。折角生きているのに次の死因が餓死とは洒落にもならないわ。私は使える機体がないかと墓場の調査をはじめたのだった。

第7話

墓場の中をくまなく調べてはいるもののなかなか使える機体に出会えない。ほとんどは使えないジェット戦闘機かボロボロの何かわからないものばかりだわ。やつとみつけたわ！これはUH—1Yね。かなり古い機体だけれど使えそうね。武装はドアガンナー用のGAU—17か。弾薬は何とか調達出来たし幸先いいわね。さて、久しぶりの操縦だけど問題じゃないわね。A2の話だと空を飛ぶタイプもいるみたいだからある程度高い所を飛ばないと。見えてきたわね。あれが廃墟都市かしら？ここから見てもかなり樹木がビルを浸食しているわね。着陸できる場所を探しましょうか。さすがに広場は目立つわね。結局ビルの上に着陸した。とりあえずへりは機械生命体から隠すために布をかけた。これだけでかなり疲れたわ。でも上から見てるだけでもイノシシみたいなのがいるのがわかった。善は急げね。お腹すいたし行きましよう。階段を降りて一階の出口から外にでると日の光と樹木がビルを侵食している光景が目に見え込んでいた。とても幻想的な景色なのだがそれより食料だ。さつきイノシシが見えたあたりまで行くとやはり。イノシシより大きい気がしたしけど食べがいがあるつてもよね。M700を構え息を整え頭を狙って撃った。脳天に弾が命中したと同時に周囲

の鳥などの動物たちは驚いて飛び去ってしまった。私は目標に近づくとイノシシは絶命していた。私はそれ背負い拠点へと持ち帰るのだった。ああもう重いっただらありやしない。

それを遠くから見ている人影があった。

???
Side

「ねえデポル今イノシシを背負って歩いて行った人がいたのだけれど、見間違いかしら？」

「なにそれ！ポポルその人どっちに行ったの？行ってみましょうよ！」

「あ、コラ！今は仕事の最中よ。予定の時間までにレジスタンスキャンプに戻らないと」「大丈夫よ。どうせ仕事はもうほとんど終わってるし。いやならここで仕事終わらせといて。」

「あちよつと待ちなさいよ！まったくもうデポルったら。」

エージェントside

重いイノシシを背負って何とか拠点についたわ。さあラヴィあともう少しでこの肉が食べられるのよ。自分を励ましてもお腹はなり続けている。まずナイフを頸動脈に突き刺して血抜きして内臓と肛門を摘出その後つるして骨を取って皮を剥いぎ肉を切り取った。ここまでにさらに空腹はピークでお腹の音は大合唱を始めていた。薪を集め

てジツポで火をつけ肉をやいた。肉はしばらくすると香ばしい匂いがしてきた。さあたべますか！久しぶりに食べた肉はおいかったわ。油の乗りも程よく筋肉質の張りのある美味な肉ね。また食べたいわ。そんなことを考えていると下から足音がした。武器を構え階段の方向にじつと見る。

「動かないで！頭を吹っ飛ばすわよ!!」

「まずいわよ！デポル！ごめんなさいすぐに出ていきますから。」

「あら？」

「え？」

「え？」

そこにいたのはかわいいピンク色の髪をした2人だった。

第8話

デボル・ポボル side

「あちよつと待ちなさいよ！まったくもうデボルつたら。」

ポボルは急いでデボルを追いかけた。しかも、ここからそれが見えたという場所にとどり着くまでが遠いのだ。やっと追いつけたと思えば忙しく鼻をひくつかせていた。

「何やつてるの？そんなにクンクンと。」

「あつちから良い匂いがする！いくわよ！ポボル」

そう言つてまた走り出すデボル。なんであんなに元気なのよ。また走つた私であつた。

「ねえここじゃないかしら。ほら煙が出てる。」

ほんとね。煙が出てるし良い匂いがする。私たちは建物に入った。階段を上り階が高くなればなるほど匂いは強くなった。最上階までの階段を登りきると

「動かないで！頭を吹っ飛ばすわよ!!」

「まずいわよ！デボル！ごめんなさいすぐに出ていきますから。」

「あら？」

「え?」

「え?」

私たちは女性に武器を向けられていた。もうホントうちのデボルがすいません。

エージェント side

私が銃を向けていた階段を登って来たのは、機械生命体では桃色髪のかわいい2人だった。

「ごめんなさい! てつきり機械生命体かと思つてつい。本当にごめんなさい。だから怖がらずにね? こつちにおいで。」

「こちらこそデボルがすいません。ほらデボル謝つて。」

「ごめんなさい」

私も武器を降ろして2人の前にでた。身長は同じくらいでどちらもよく似ている。どうやら片方の気まぐれでここに来たらしい。

「あなたたち名前は? 2人ともそっくりだけれど双子か何かなの?」

すると、見るからに活発そうな方が

「私はデボル。私たちは双子なの。そして、私はお姉ちゃんなの。」

しかし、妹のほうは今の姉の自己紹介に不満があるようで

「私はポ波尔。双子の妹のほうです。先ほど姉が頼れるお姉ちゃん感を出していました

がそんなことはありません。」

「ちよつとポポルそんなにいうことないじゃない！」

「私は、デボルのわがままにいつつも付き合っただけよ。」

仲のよい2人の姿をみて私は、無意識に微笑んでいたらしい。私の2人への視線に気づいたらしく2人は顔赤らめた。名にこの子たち可愛すぎない？母性を刺激されるわ。

「ところでお姉さんの名前おしえて。あとさつきイノシシ担いでたわよね。何してたの？後この良い匂いはなに？」

とデボルから一気に質問が来た。

「まず私の名前はエリア・ミレッド・ハヴィランド。みんなからはラヴィっていわれられてるわ。」

「よろしくラヴィ。」

なんだこの可愛い生き物いやアンドロイドか。すつごいなでなでしたい。

「さつきのイノシシは、仕留めた後にここに運んだの。後この匂いは、そのイノシシを焼いてたのよ。あなた達もたべる？いっぱいあるし遠慮しないでいいわよ。」

すると、2人は目を輝かせ好奇心を含んだ目でこつちをみた。

「食べたい！どうポポル？ラヴィもこう言ってるしいいでしょ？」

すると、ポポルは仕方ないという顔をした後同じく「お願いします。」頭をさげた。

第9話

デボル・ポポル side

久しぶりに食べ物を食べたけどおいしいわね。ポポルもニコニコしてる。美味しいらしい。食べているとラヴィが食べながらでいいわと質問してきた。

「1つ目まず君たちは何をしてたの？2つ目レジスタンスキャンプというのは何処にあるの？3つ目エイリアンが来る前までの君たちはなにをしていたの？」

私たちは顔を見合わせた。普通レジスタンスは私達のことを避けていて、時には憎悪を向けて来ることもあるのにラヴィはそのような様子がない。目の前の人物に興味が湧いたのだった。私たちは、なぜラヴィが私たちに対して好意的に接してくれるのか分からなかった。すると、デボルが口を開いた。

「失礼だけどラヴィって周りの人から変な人って言われたりしない？」

「ちよつと！デボル！」

「いや、別に？ねえ私の言っている事ってそんなに変かしら？」

突然、失礼なことを言う姉に驚きつつラヴィの私たちのへの接し方について私もかなり気になってきていた。すると、突然今度はラヴィが私たちに

「なんであなた達はそんなに私を物珍しそうにみるの？」

私達は黙ってしまった。怖かった。私たちの事を話してラヴィの態度が突然変わってしまいかもしれないと思った。黙り込む私たちにラヴィは優しく微笑み

「嫌なら無理しなくていいわよ。誰しも秘密ごとの1つや2つあるもの。」

「ちよつとで良いから時間をもらえない？」

「いいわよ。2人で話し合つて決めなさい。大事なことなんでしよう？」

一旦下の階におりた。デボルも複雑な顔つきをしていた。私と同じ気持ちなのだと思ふ。

「どうするの？このまま話さないでお礼だけ言つてかえる？」

「いや、本当の事を言おう。なんとなくラヴィなら私たちの事を変わず接してくれそう。アネモネさんみたいに。」

「しかもラヴィとは仲良くしたい。またあのお肉たべたい。」

理由はともあれ賛成ね。彼女に私たちの事を話しましょう。

エージェント side

姉妹が下にいった。とりあえず私は火加減を調節していた。イノシシの方はある程度小分けにした。作業をしながら私は質問したことを後悔していた。あの反応からしてかなり複雑な事情があるような気がするわ。もし、話してくれなくても嫌われないよ

うにしないと。そんなことを考えていると、2人が上がってきた。2人に対してまず私は謝罪したわ。辛い事を聞いてごめんなさいと。2人は構わないと言ってくれた。いい子だなあ2人とも。そして私たちは座り姉妹が話し始めるのだった。

「すべての始まりは…」

姉妹の話の内容を聞けば聞くほど、私たち人類の醜さが出ている気がしてならないわ。別にあの姉妹に罪は無いのに。ただ違うデボルとポボルが犯したミスなの이다。同じ人類として人類が荒廃したことは、ある意味運命か神の罰か何かだと思った。そして、私のいた世界と違う歴史を歩んでいることもわかったわ。だからと言って人類やアンドロイド達が彼女らにしたことは許されることでもない。ある意味簡単な話だ。人類の作ったアンドロイドだ。差別や偏見があるに決まってる。姉妹を含めたアンドロイド達が信じている人類など完璧ではないのだ。そんな事を考えながら話を聞いてた。

第10話

E—J—E—N—T—S—I—D—E

私は2人の話を聞いて同じ人類としての罪悪感に駆られていたわ。彼女たちからすれば、自分たちの身の上を話して私の態度が変わるのが怖いと言った。しかし、私からすれば今私が人類だと打ち明けることが怖くなってしまった」。そして、私の前だけでも2人が落ちていて、自分たちの悲しい過去を忘れられるようにしてあげたいと思った。2人の顔を見れば辛そうな顔をしていた。話は終わった。すると、デボルが震えた声で

「ラヴィどう思った？ やっぱりこんな私たちのこと憎い？ 恨めしい？」

私は彼女らの目をみて、大きく息を吸い込み

「それ、あなた達姉妹と関係ないわよね。」

姉妹の表情は驚きと安堵の表情を浮かべていた。私は続けた。

「あなたとは違うデボル、あなたとは違うポボルがやったこと。それにあなた達姉妹が虐げられたり、罪悪感を感じる必要もないわよ。」

すると、姉妹は顔を見合わせ笑い出した。

「え、ちよつとなんで笑うよのよ。しつかり悩んであげたのに。」

「ごめんなさい。いやラヴィの考えってかなり変わってるのね。ねえデボル？」

「うん。正直、脳の回路のどこかに不具合でもあるんじゃないかと思えるほど。」

2人に笑われた事に困惑したけれど、笑顔になつてくれたことに売れしく感じたわ。やっぱり2人は姉妹つてこともあつて笑うところも似てるわね。そして、可愛い。みんなで顔を見て笑いあつた。

「ところでラヴィはこの後どうするの？」

どうしよう考えて無かつたわ。とりあえず2人のこの後の行動を聞いて決めよう。

「2人はこの後どうするの？」

ポボルが何かを思い出したような反応をしながら教えてくれた。

「私たちは残つた仕事を片づけたらレジスタンスキャンプに帰ります。ラヴィさんもどうです？」

「いや遠慮するわ。1人でいるほうが好きだもの。」

デボルはええ〜といった声を漏らしていたが私としてはこんなにも可愛い姉妹を迫害している所にいつたら、私、必ず手をだすもの。突然、ふてくされていたデボルが何か閃いたようで、

「そうよ！ラヴィなにかほしいものない？貴重な物とかは無理だけどある程度の物なら

持つてこられるわよ。」

なんて魅力的な提案だろう。とりあえずとしてA2用のアンドロイドの部品と、偽装用にアンドロイドの服、弾薬も頼んだ。なんで、服なんかと言われたけれど、

「レディは身だしなみに気をつかうものよ。」

って言ったら2人からまた笑われたけれどね。とりあえず帰るといふ2人を見送るため下に降りた。

「2人ともまたいらっしやいね。」

と言うと2人とも笑顔で頷いてくれた。やっぱり可愛いし姉妹つてところもポイント高いわね。さあ明日からも頑張らないと。

第11話

エージェントside

姉妹の2人と別れてから数日が過ぎた。ここ数日間は特に何もなく周囲を探検したりしたけれど、別に特段物珍しい物もないしやはり正体を隠してレジスタンスキャンプに行くべきかしらね。今日はまだ行ったことのない工場廃墟のほうに行ってみようと思っている。あとついでにまた食料も調達する予定。日常とかけた半分探検、半分散歩のスタートね。

工場地帯のほうも他の場所とたいして変わらず強いて言うならばトラックのスクラップがあるだけで面白いものはないわ。なのでハンティングして帰ろうと思ったんだけど、突然私の上を何かが通り過ぎていった。恐らく航空機ね。しかも、私のいた時代には無かった形状の航空機だわ。ちよつと追いかけてみようつと。私はその航空機を見失わないように走って追いかけているのだけれど、戦闘しているのだから戦闘機よね。しかもホバリング？もできるの？すると突然、赤色のレーザーが空を切った。数機が被弾したようで爆散してしまった。続いて一機被弾し墜落していった。他の機はそのまま作戦をつづけるようだ。私は爆散しなかった機体を見失わない用に急いで

追いかけた。

11 B side

再起動完了。ボディユニットは各所に不具合。通信機能は破壊済み。

被弾を装い不時着する予定だった。しかし、本当に被弾。修復できるだろう。

少し寒い。センサー系に不調があるらしい。

視界にノイズ混ざり始めた。ウイルス警告が頻繁に出るが本当かシステムエラーかは不明。

追手が来るかもしれない。焦りからか修復が進まない。

怖い。だめだ。ココにいたらいけない。ヨルハ部隊は間違ってた。もっと安心できる場所探サナイと。

苦しい。寒い。イヤだ。ワタシハシニタクナイ。ダレかタスケテ。

EーJ エント side

やっと工場の辺りにこれたわ。さてあれはどの辺りに落ちたのかしら。よく見ると工事の外に黒煙が上がっていた。私は武器を構え工場に入った。工場の中はとっても熱いわ。この工場は一体何の工場？なにかアナウンスが流れてるけどまったく何言ってるかわからないわ。しばらく歩いてると何か広いとことのでた。すると機械生命体どもがコンテナの中から出てきた。中には盾を構えた物もいる。しかし、別に強敵で

もなかった。回り込んで倒せた。しかし、盾を持っている奴はストッピングパワーが強い銃なら貫けるかも。いけない、いけない、そんなことより急いで墜落地点を見つけなきゃ。自動ドアを抜けると外にでた。するとそこには、炎上し黒煙が上がっている航空機らしきものとすぐそばで荒い息を立てて昏睡している少女がいた。

第12話

EーJエント side

彼女どうやらA2と同じヨルハ部隊のようね。この機体の構造がきになるのだけれど、とりあえず彼女を墜落機から離さないで。でも、A2で学んだけれどアンドロイド達ってかなり重いのよね。すると、墜落機から燃料が漏れ出していたのがみえた。マズイ！急いで私は彼女の服を引っ張って思いつき引きずったわ。その後燃料に燃え移った。危なかったわ。この航空機の構造を調べられないのは、ちよつと惜しいけどこの子の命には変えられないわ。後はこの子が起きるのを待つだけなのだけれど、この子かなり危険な状態よね。EーJエントウオッチを彼女の腕につけて診断結果を待った。

「報告：彼女は重度の損傷とウイルス汚染を受けている模様。回復には高度な医療処置が必要。」

「高度な医療処置ってどういうこと？A2と同じやダメってこと？」

「報告：ウイルス汚染はこちらで対処可能。ウイルスの除去を開始しますか。」

「お願い。あと医療処置はどうすればいい？」

「推奨：レジスタンスと接触。彼らに依頼する。」

さて、どうするべきか。彼女を救うためにはレジスタンスと接触しないと。しかし、接触してしまえばA2と会うことやあの姉妹との関係がこじれるかもしれない。仕方ない。あの姉妹に連絡しよう。姉妹にこういった知識があれば2人を頼ろう。無理ならレジスタンスの誰かに頼むしかない。方針は決まったのだがこうなると問題がある。ここにアンドロイドを呼ぶか、どこか別の場所で合流するかどちらかになるのだが、正直この重量を移動させるのはキツイものがある。だが、先ほどから近くで爆発音がする。誰かが戦闘してるようね。その影響か機械生命体どもが激しく動き回っていた。この位置を伝えたところに来てくれるものかしら。急がなくてはいけない事はわかっている、けれど決断が出来ずにいた。突然、燃えていた機体から破裂音が始めた。恐らく搭載されている弾薬が高温になって誘爆し始めたようだった。機体から離れていたら大丈夫だと思っていたのだけれど、大量の足音が聞こえてきた。もしかしてと思つてP u r s スキャナーをつかった。そしたら、案の定よ。めつちや機械生命体集まつてきてるじゃない！私はシールドを構えて彼女の前に立った。

「ねえ！2人に連絡つないで！急いで！」

私はライフルをフルオートで撃ちまくった。しかし、勢いを抑えれないし、シールドに敵の弾が当たつてよろけてしまうことがあった。仕方なく、数少ないグレネードを投げた。

「どうしたの？ラヴィ？私たちに会いたくなくなった？」
「ええ！とつても会いたいわよ！（やけくそ）」

第13話

エージエントside

「どうしたの？ラヴィ？私たちに会いたくなくなった？」

「ええ！とつても会いたいわよ！（やけくそ）」

「そう！なら今からそっちにいい？頼まれてた物もしっかり用意したわ。こう見えて約束はきっちり守るのよ私。ところでどうしたの？かなり雑音が入ってるのだけれど。」

「こっちは戦闘中なの！ところであなただ姉妹ってアンドロイド修理できたりしないかしらー！」

こっちが戦闘中だとわかるとデボルは、「大丈夫!?!死んじやいやだよ!?!」などと、とにかく大きな声でなにか言ってるのだけは聞こえた。うるさすぎて耳なりがしてるわ。近くで爆発でもあったかと一瞬勘違いするほどにね。すると、ガサゴソと音がした後

「ラヴィさん、ポボルです。戦闘中との事ですけど修理ってことはケガしたんですか？」
ポボルがどうやら無線機を奪い取ったらしい。グッチョブ！後でなでなでしてあげよう。

「違うのよ！墜落したヨルハ部隊のアンドロイドを助けようと思ってね！で？どうなのよ修理できるの？」

機械生命体の数は減ってきているのだけれど、まだ安心できない。フルオートで撃ち続けているし、サイドアームも使ってなんとかここまで減らしたのだ。

「修理できます。どうしますか？いまどこです？そっちまで行きます。」

「場所は工場廃墟だけど来なくていいわ。ここは機械生命体が多すぎる。なんとかしてここを脱出するわ。あなた達は私の拠点に行つて。そこで合流しましょう。」

「はい。気を付けて！ほらデボルいくわよ！ラヴィさんまた後で！。ラヴィ！死なないでね！」

訂正やっぱり平等に撫でよう。さて、まずは目の前の機械生命体を鉄くずにしないと。大方倒したのだけれど、結局グレネードを全部使ってしまったわ。後で何か代わりをものを調達しないね。最後の1体を倒した後Pursスキヤナーを使って周りを索敵。よし、敵検知なし。さて、彼女をどうやって運ぶか？A2でしたけどアンドロイドはかなり重いよね。

仕方ないか。私はリユクサック、シールド、P416、M700を降ろして、配管の裏に隠した。その後、彼女を担ぎあげた。かなり重い。しかも今手持ちはM45A1だけ。レーザーサイトがついてるから、エイムは問題ないわね。工場の中に入ったらP1

u s スキヤナーを使っただけど今の所接敵はない。ああ重い！やつと外で出られるわ。マズイわ。入口に機械生命体がいる。でも一匹か問題ないわね。気づいたようどこっちに突っ込んできた。レーザーサイトを頼りに倒せたわ。ドアを抜けて外に出た。

「あともう少しだから頑張つて。きつとあなたを助けるから。」

第14話

EーJエンツト side

扉を抜けて外に出ると、恐らくヨルハ部隊の2人が大きな丸のこ？か何かと戦闘していた。支援してあげた方がいいのかしらとも思ったけれど、別に苦戦していなさそうだしさっさと拠点で2人と合流しよう。そう思い私は工場跡地から離れようと走り出した。しかし、工場跡地の周辺に攻撃的な機械生命体がいるようで簡単には行かないらしい。私はM45A1をレーザーサイトだけを頼りに撃ちまくっていた。彼女を担ぎあげている状態での射撃はかなり辛いものがある。だが、速度的にはあっちのほうが上で撃たないと追いつかれるのだ。何とか拠点の近くまで戻ってこれただけけれど、未だに数体が追いかけてきていた。

「ラヴィさんこっちはです。急いで！」

拠点にしている建物の屋上からポポルが手を振っているのが見えるわ。私は声にならない叫びをしながら拠点に走りこんだ。階段を駆け上がり屋上についたわ。そして待機していた姉妹の2人に彼女を渡した。

「ラヴィ大丈夫？さっきポポルから聞いてるわよ。何とかやってみるわ。ところであな

た負傷してるとことかない？つてどこ行くのよ！」

「下の階に私を追ってきた鉄くずがいるはずよ。そいつらを掃討してくるわ。」

「気を付けてください。この人はお任せください。私たちが必ず助けます。」

頼もしい2人に彼女を預けて私は階段で下の階へ降りた。にしても、デボルってあんな顔でできるのね。始めてあった時とは全然違う印象だわ。なんて思っているうちに1階まで降りた。鉄くずどもは1階でうろついていた。どうやら拠点に入つてすぐの段階で私のことを見失っていたらしい。私はM45A1を構え一体の頭に対して射撃した。それを見て2匹突っ込んできた。私は冷静に頭に命中させていき機械生命体は鉄くずへとかえた。45口径はまだまだ現役ね。DCにいたころ、知らんチャラ男に女が45口径なんぞ扱えるものかと馬鹿にされ切れて股間に突きつけたの懐かしいわね。さて、上に戻りますか。さて、この後どうしたもかしらね。リュクサックなど置いてきた物資をいつ回収しようか。またあの戦闘中の中を取りに行くのはかなりリスクよね。そんなことを考えながら屋上へ戻ると

「ねえねえラヴィこの腕時計みたいなのなんかしやべってるんだけど！なにこれ！」

「デボル病人がいるんだから静かにしなさい！。ラヴィさんお疲れさまでした。この子の修復は終わりました。恐らく命に別条は無いかと。ところでエヴァさん足にケガしてますよ。ちよつと見せてください。」

あれ？デボルが得意げにしてるけど、あの子人間への治療ってできるのかしら。

第15話

デボル・ボボル side

エヴァが下に降りて行つた。よく働くわね。私は彼女が運んできた恐らくヨルハ部隊の治療を行つていた。

「ねえポボル。ラヴィ大丈夫かしら彼女に何かあつたらどうしよう。私今から下の階にいつていい?」

「ふざけたこと言つてないで仕事して。頼まれたことはしつかり守るんでしょ。私だつてラヴィさんのこと心配なのは同じ。さあ仕事するわよ。」

私達はエヴァの身の安全を案じながら彼女の治療に集中していた。数分後やっと治療が終了した。できることは全部やった後は目覚めるのを待つだけとなった。

「やれることは全部やったわ。でも、若干呼吸が荒いのが気になるのよね。」

「バイタル正常」「ウイルス除去完了」「再起動まで待機中。」

突然彼女の腕についているオレンジ色の光が出ている腕時計がしゃべりだした。最近のヨルハ部隊は、こんなすごい物を支給されているのか。

「ねえこの子の名前はなんていうの?ヨルハ部隊の人つてぱっと見ると同じ見た目に見

えるからさあ。できれば名前も覚えてあげたいなつて。」

「不明。また、このウオッチはエージェントハヴィランドの物」

エージェントつてなんだ？突然、明かされるラヴィの秘密に困惑していると

「ハヴィランドつてラヴィさんの本名だよな。ラヴィさんつて何者なの？そういうえば、さつき凄く息が上がってたし、額が濡れてたよね。アンドロイドなら工場跡地からここまで戦闘してこの子担いでも、あんなになることは無いのに。」

私達姉妹は、エヴァという普通のアンドロイドの常識から逸脱した存在に興味を湧いていた。今回もラヴィさんに質問しようと思つていたのだが、事前に考えていた事よりも最優先事項ができた。

「ラヴィさんが戻ってきたら聞いてみよう。」

「そうね。私たちになんで優しくしてくれるかとか気になる事があるけどこつちの方が先ね。」

そんな事を話あつてしているとラヴィが戻ってきた。

「ねえねえラヴィこの腕時計みたいなのなんかしやべつてるんだけど！なにこれ！」

「デボル病人がいるんだから静かにしなさい！。ラヴィさんお疲れさまでした。この子の修復は終わりました。恐らく命に別条は無いかと。ところでラヴィさん足にケガしてますよ。ちよつと見せてください。」

横で「まっかせなさい！」とデボルが決まり顔だが私はしやがんで彼女の足のケガを見る。

ラヴィさんの足きれいなあ。なんてことを思いながら傷口をよく見ると、どこか私達アンドロイドとは違い傷口はそれこそイノシシを切った時のような生々しさがあつた。私は気になった疑問をラヴィさんにぶつけた。

「ラヴィさんあなた一体何者ですか？」

第16話

エージェント side

「ラヴィさんあなた一体何者ですか？」

「私たちがこの子を治療してたら突然この腕時計がしゃべりだしたの。てつきりヨルハ部隊の装備かと思ったけど、これが自分からあなたの物だつて言ったの。後、エージェントって何？」

なんてこつたい。これは手ごわいわよ。何処から説明すればいいのかしら。しかも、2人私のことめつちや見てくるんですけど。悪くないわね。

「あくえつとね、私は、これからとんでもない事をいうから覚悟してね。」

「とんでもないってそんなに可笑しい話なんですか？」

「ええ、あなた達は私はイカレてると勘違いするかもね。」

2人は顔を見合わせた後、大きく頷いて

「ラヴィさんは私たちの事を受け入れてくれました。大丈夫です。どんなことでも受け止めます。」

デボルもうんうんと頷いている。

「わかったわ。じゃあまず何処から話そうかしらね。」

私は2人に自分は人間である事、エージェントとはどういった物か、DCで何をしてきたか。ここまで何をしてきたか。A2のことも包み隠さず、すべて話した。2人は終始、驚いていたし、一生懸命に理解しているようだった。

「これで全部よ。どう?このこと信じられる?それとも私がイカレてると思う?」

「いや、私はラヴィの言うこと信じるわ。これで一応大体の疑問に納得がいくしね。」

「私も信じます。でも、一つ質問いいですか。なんでラヴィさん以前に、レジスタンスキャンプに行かないと言ったんですか?あの時の理由は嘘ですよね。」

私は気づけば2人のことを抱き寄せていた。2人は驚きながらも私に身を委ねてくれた。私は2人の頭を撫でた。

「だって、こんなにも可愛い子しかも姉妹に憎悪を向けてる連中の所に行ったら、私確実に手を出すわよ。それとね、こっちが本命なのだけけど月面にいる人類の事を信用してないの。数世紀もアンドロイドに戦わせておいて作戦立案や陣頭指揮もせず激励するだけって無茶苦茶よ。人類は本当に地球を取り戻す気はあるのかしら。」

2人の表情は暗くなった。人類のために製造されたアンドロイド達には辛すぎる話なのわ理解してるわ。でも、この姉妹には罪の意識など背負わず笑っていてほしいの。

「わかったわ。ラヴィの事は誰にも言わない。ね!ポポル!」

「ええ、アネモネさんにも黙っておきます。だからこれからもこうしてほしいです。」
「ポポルだけじゃなく私にもこれからもよろしくね！」

「いいわよ。後、もし今後問い詰められたらある程度なら答えていいわよ。さて、難しい話したらお腹へってきたわ。2人の分もちやんと用意してあるから安心してね。」

2人はにつこり笑った。やっぱ似てるし可愛すぎてまぶしいわ。その後、私たちはご飯を食べた後、疲れてたのもあってすぐに寝ることにした。

第17話

Eージエントside

日の光が顔に当たって目が覚めた。なんか腕が動かせない。見るとデボルが私の腕にしがみついていた。私はつい抑えられずに頭を撫でていた。ああ最高の朝だわ。1分ほど撫でた後私は2人を起こした。

「ほら、2人とも起きなさい。」

「ん〜ラヴィイ？おはよう。あ！ごめん今すぐにどけるから！」

「おはようございます。ラヴィイさん。あ！デボル何やってるの。ほんとデボルがすいません。」

「いやあいなのよ2人とも寝顔可愛かったしね。はい、はい起きた起きた。」

それからみんなで起き上がり私は手くしで髪をとかした。アンドロイドは寝癖とかないのかしらね。

「ラヴィイ人類は朝ごはんつてのを食べるんですよ。何を食べるの？」

「悪いけど朝は抜いてるの。本当なら食べた方がいいんだけど肉はもたれるのよ。」

「そうなんですわ。ところで、今日は何をしますか。私達は今日まで休みなので今

日の夕方ぐらいいまでここにいます。」

「なるほど、なら今日は装備の回収に行つて来るわ。だから、2人は悪いけどお留守番しててくれない？あ、後A2にも連絡しないと。」

デボルは留守番ということに残念がつていたがポボルがなだめていた。今日の夕食は豪華にしてあげようかしらね。そんな事を考えながら私はA2に通信をかけた。

「ラヴィ久しぶりだな。どうした？頼れるエージェント様から連絡とは。」

「A2久しぶりね。いや、可愛いA2の事撫でたくなつてね。毎日頑張るエージェントにも癒しが必要なのよ。」

「ふざけてるならこの通信終わつていいか？」

「ごめん、ごめん待つて切らないで。実はうちでヨルハ部隊の子を拾つて治療したんだけど、どうやらこの子脱走を試みてみたいなの。だから、あなたの知識がほしいの。」

「そんなものそつちでどうかしろ。私にできることなどない。」

「悪いけど無理ね。いいからこつちに来て。それにあなたの傷もメンテナンスできるから。」

「メンテナンスは必要ない。分かったなら通信終了するぞ。」

私は自分の事を大切にしていないA2に怒っていたのだろう。ついドスの効いた声で

「おい、また無理して限界までいくのか？復讐するのか自殺志望かどっちだ。死にたくないならこっちに來て。」

「： わかった。昼頃にはそっちの方につけると思う。近くに行ったら連絡する。」

そう言つて通信は切れてしまった。ふと、見ると姉妹も少しおびえているようだった。私はやつてしまった。自分のほつぺを思い切り殴つた後、姉妹には謝りつい我慢できないところなつてしまう事を伝えた。2人は分かってくれたようで、いつものように接してくれた。私は申し訳なく思いながら2人に留守番を頼んで出発した。絶対に昼食は豪華にしてあげないと。

第18話

デボル・ポポル side

ラヴィが出て行った後、私達は雑談した。話題は先ほどのラヴィについて。

「さっきのラヴィ普段では考えられない声だったわね。私かなり驚いたわ。」

「仕方ないわよ。無理をしている相手に言い聞かせるにはあれくらいしないと。でも、あれは私も驚いたわ。でも、ラヴィさん私達含め大切にしてきてくれる事に感謝しなきゃ。」
「そうね。私達も無条件にラヴィに甘えてちゃいけないわよね。帰ってきたらありがとうって伝えようかしら。」

私達はそんなこと話しながらラヴィの帰りを待っていた。

エージエント side

私は工場跡地に来ていた。A2が来るまでには装備を回収して、拠点に帰りたいわね。そんなことを思いながら工場の中に入った。一応警戒してM45A1を構えて進んでいる。昨日はあんなにいた機械生命体共は一切見当たらなかった。私は一応警戒しながら奥に進んでいった。そして扉を抜けると、装備を隠した場所に戻ってこれた。M45A1をホルスターにしまいリュックを背負い、装備に異常が無いかを確認した。

特に異常は無いし帰ろうかしらね。そう思い出口を見ると、彼女が乗っていた墜落機が目に入った。昨日は燃料に引火して激しく燃えていたが今は鎮火していた。私は墜落機に近づき何か使えるもの、彼女の名前などが分かる物が無いかと探したが無かった。どうやら私が離れた後、火が弾薬に引火し誘爆を起こしたようだった。ふと、後ろを見ると大きな刀が落ちていた。これは彼女の物だろうか？回収しようと思いついてその武器を手にとった。大きな武器ね。これをあの子が振り回して戦っているって正直信じられないわ。改めて自分と彼女達は違いを感じたわ。けれどそれ以外は人間と変わらないのね。そうして刀を背負い、帰ろうとすると、

「あのーちよつとすいません。その武器、こちらに渡していただけませんか？」

そこには、恐らくヨルハ部隊と思われる2人が立っていた。

「その武器は、私の仲間の武器なの。それに、この武器を持っていた者の友人から回収を頼まれた。だから、その武器を渡してほしい。」

「いいわよ。ごめんなさいね。てつきりここに放置されてるものだと思っていたから。ところであなた達はヨルハ部隊名なの？」

「はい、僕は9S、スキヤナータイプです。普段は調査やハッキングによる支援がおもな任務です。」

「9S、この行為が任務に必要なとは思えない。この行為をする理由はなに？」

「2B いいじゃないですか。別に減るものじゃないですし。」

「分かったわ。じゃあ私からすれば文句ないね？私の名前はハヴィランドみんなからはラヴィって呼ばれてるわ。さて、お嬢さんの番よ。自分だけやらないなんて事無いわよね？」

彼女は呆れた表情を浮かべあきらめた様子で

「私は2B、アタッカータイプ。今は9Sと共に任務に当たっている。」

私は2人のテンションの違いに驚きつつこの際、拠点で寝ている彼女の事を知っていないか聞いて見ることにした。

第19話

エージエントside

「2Bと9Sだね。ねえこの武器の持ち主ってどんな子だったの？」

「実は僕たちはこの武器と遺品の回収は11Bさんの後輩の16Dさんに頼まれたんです。恐らくですけど回収を依頼するほどですし、良い人なんじゃないですか。」

すると、2Bは会話をしていて私達を無視して11Bの回収しようとしていた。

「ちよつと2B？僕まだ喋ってるんですけどー。」

「別に私は話してない。それに9S、私達にはやらなきゃいけないことがある。だから、あまり会話をする時間はない。」

2Bってかなりの堅物ね。だから9Sと一緒に行動してるのかしら？

「わかりましたよー。すいません、ラヴィさんそれじゃ僕たちは行きますね。」

「ええごめんなさいね。私も外へ出るから出口まで一緒にいいかしら。」

「それくらいなら構わない。」

そう言つて2Bが一足先に中に行つてしまった。私と9Sは急いで彼女を追いかけた。最初に来た時はいなかったのに今は機械生命体があった。2人が処理してくれたの

で私は一切攻撃してない。なのでゆつくりと工場の中を見ることのできた。しっかしここは熱いわね。ふと、見ると鉄パイプを見つけた。丁度いい。グレネードがなくなつて代わりの物が必要だったし持って帰つてパイプ爆弾を作ろう。そんな事を考えながら工場に外に出た。

「ありがとう助かつたわ。お仕事頑張つてねー。2人とも仲良くするのよ。」

そして、2人と別れた。さて、あとはA2と合流するだけね。

「ラヴィもうちよつとでそつちに着く。」

「ナイスタイミング。そつちに合流するわ。」

「ナイスタイミング? まあいい。わかつた合流しよう。」

2B・9S side

「ラヴィさんともう少し話したかつたなー。」

「文句言わない。一旦レジスタンスキャンプに戻つてから転送でバンカーにいこう。」

「そうですね。」

広い場所についた。レジスタンスキャンプまで後少し。広場には機械生命体がいるのだが攻撃してこないので無視する。広場を抜けてキャンプに戻つてきた。転送装置に入りバンカーに戻つてきた。そして、遺品を渡すために16Dを探すと依頼してきていた位置にいた。

「ありがとうございます。この武器……戦闘使用ログがある。最後まで戦っていたんですね。実は、……私先輩と付き合っていたんです。私、先輩や2Bさんのような攻撃型に転向しようと思っています。先輩の仇を討つために。」

「そう。」

私達は彼女と別れ軽い補給を済ませた後、転送装置でまたレジスタンスキャンプに戻った。

「16Dさんが攻撃型に転向か。よほど、大切な人だったようですね。残骸すら残っていないなんて。」

「どうするかなんて人の勝手。私達にはやるべき事が沢山ある。」

「そうですね。」

第20話

エーゼント side

2人と別れ私はA2と合流しようと移動している。こちら辺は攻撃的な機械生命体が多いから隠密で行動してるわ。だって、戦うだけ弾薬は消費するし、疲れるだけで対してうまみがないのよね。さて、A2から伝えられた合流地点はこの辺りなのだけけれど、彼女がいない。え、なに？ドタキャンですか？一瞬そんなことを考えたが突然近くで金属どうしがぶつかる音と聞きなれた声があった。はああの子どんだけ戦闘狂なのよ。援護に行こうか考えていたところにA2がやって来た。

「ラヴィイ久しぶりだな。元気そうでよかつ」

言い終わる前に私はA2の事を抱き寄せ頭をなでていた。

「久しぶりねA2。さつきはごめんね。あなたの復讐したい気持ちは分かるけどもつと自分を大事にして。私はあなたの笑った顔が好きなのよ。」

「ラヴィイ！私のこと動物かなにかのように愛玩するのは辞めてくれ！それに私は笑った顔なんていつ見せた？」

「初めて会ってこうした時。まさかだけど、あの時真顔のつもりだったとか言わないわ

よね。」

「……とツとにくだ私をなでるの今すぐにやめろ。」

「カリカリしちやつて。また心音聞く？落ち着くかもしれないわよ。」

「いいから！離れろ！」

強制的に離された。まったく素直になればいいものを。そんなわけで私達は歩き出した。A2が道中の機械生命体を片付けてくれたおかげで特に障害はない。

「ところで、今日私はラヴィが拾ったヨルハ部隊員についてだったよな。正直どんな奴に聞いても大体同じような答えしかないし、私は所詮捨て駒だ。ほかの奴より持つてる情報は少ないと思うぞ。」

「いいのよ。なぜ脱走を企てたのかとか同じ脱走兵どうしわかりあえる物もあるんじゃない？」

そんなことを話ながら拠点に戻って来た。デボル達はすっかり留守番してくれてるかしら？

「ちよつと！あなた！助けた相手にお礼もなしに逃げようとするなんてどういことよ！」

「離してください！私に構わないで！私には任務があるんです。仲間のもとに戻らないと！」

「ラヴィ、拾ったヨルハ部隊員ってあいつか？」

「言ってなかったわね。彼女の名前は11Bよ。」

すると、彼女はさらに焦ったようにデボルの腕をはがそうとしていた。

「もう名前まで知られてる。嫌だ戻りたくない！安全な場所、落ち着ける場所に」

これでは埒が明かれないと思っただろう。A2が11Bに近づいた。

「ヨ、ヨルハ部隊！私はもう嫌なんです！もう戦いたくない。」

「私はお前と同じだ」

そう言っつてA2は11Bの意識を刈り取った。

「よし、今のうちに拠点にいこう。」

その光景に姉妹は啞然とし、ラヴィは頭を抱えた。

「どうしたみんな？行かないのか？」

「A2、目が覚めたら11Bに謝りなさい。」

気絶した11BをA2が持ち、私達は拠点へ戻った。

第21話

エージエントside

拠点へ戻り11Bを壁にもたれかけさせた後、私達は一息つくことにした。と言つても私以外は別に疲れてないようだけどね。水が体に染み渡る。すると、A2は興味深そうに、私のことを見てきた。

「ん？どうしたの。私ただ水飲んでるだけなんだけど、私の顔に何かついてる？」

「いや、私はラヴィに会うまで人類というものを見たことが無かったからな。それに私達アンドロイドは食事をしなくても何とかなるからな。」

「そんなに面白いものでもないわよ。まあ欲を言うならコーヒーが飲みたいけどね。」

「コーヒー？あんな苦いのよく飲めるわね。」

「まあおこちゃまのデポルには無理でしょうね。」

「ポポル！今のはカチンと来たわよ！」

「2人共落ち着け。」

A2が楽しそうでよかった。私は3人のやり取りを眺めていると、

「イタタタ。えっと私はーあっ！」

11Bが目を覚ました。

11B side

私はヨルハ部隊を脱走を計画、そして実行した。被弾を装い墜落する。ここまでは実際に被弾してしまつたけれど計画通りに行つたと思つた。そして、急いで治療してこの場から離れば問題ないはずだつた。だけど、被弾した際の損傷が思つたよりひどかつた。治療しようとしたけど出来なかつた。挙句の果てには、ウイルス感染の警告まで出てきた。私は怖かつた。寒かつた。死にたくなかつた。今、通信して生きていること、救助の要請をすればどうにか助かると思つた。バンカーに戻されてしまうけど、回復を待つてまた機会を伺えばいい。そう思い通信を試みた。でも、通信ができなかつた。私は死と寒さに侵され意識が切れた。

「懐かしいわねー。あの時はさあ、」

私は生きてた。正直死んでここは以前何かで読んだ天国というところかしら？てことは目の前にいるピンク髪の2人は天使とかいうものなのかしら。

「あ、ああ」

私が声を上げると2人は会話を辞めこつちを見た。

「目が覚めたんですね。どうですか？どこか痛むところはありますか？」

「天使？」

「あなた大丈夫？ 私達は天使なんかじゃないわよ。」

「まず、名前を教えてください？ ヨルハ部隊のお姉さん？」

マズイ！ 私がヨルハ部隊だつてばれてる。2人はどう見てもアンドロイド。つまり、私が生きていることはもう知られてる！そして、たぶん私のログも見られてる。このままじゃバンカーに連れ戻される。それだけは嫌だ！ 急いで逃げないと！

「ちよつと！どこに行くんですか！あなたと話がしたいと言っている人がいるんです。」
どうせ、そういう口実で連れ戻されるだけだ！ 体も問題ない！ これなら逃げられる！

第22話

I l B s i d e

どうせ、そういう口実で連れ戻されるだけだ！体も問題ない！これなら逃げられる！
私は立ち上がり走って出入口と思われる場所に走ろうとした。

「待って、止まってください！」

誰が待つもんか。これを逃したら希望は無くなるに等しい。なりふり構っていられるか。

「ちよつと！あんた折角命を救ってあげたのに、お礼も言わずに出てこうとするなんて非常識にもほどがあるんじゃないの？」

2人のもう1人が私の前に立ちはだかった。何としてもここから私を出さないつもりか。できるだけ早くここを出ないと。早くしないとさつき言ってた、私と話をしたい人とやらが来るかもしれない。仕方ない。幸いにもこの2人はアンドロイド。戦闘特化の私なら武器はなくても何とかなるはず。

「ねえ！話聞いているの！とにかく落ち着きなさい！」

ごめんね。私は心中で謝りながら、彼女に拳を振りかざした。

「デボル危ない！」

ブンツ

外した。でも彼女あまり戦闘は得意じゃないみたい。これなら、このままいけばなんとかなりそう。

「ちよつと！あんた！いい加減にしなさいよ！そつちがその気ならこつちもやつてやるわよ！」

「デボルさすがにそれはまずいんじや」

「多分ラヴィだつて同じことするわよ。さて、非常識なあんたにお灸をすえてやるわ。」
自分から向かつて来てくれるなんて好都合だわ。とにかく急がないと。

数分後

何てこと彼女なかなかの強さよ。完全に見誤つた。

「そろそろ降参しなさい。あなた何か誤解してるわ。」

あまり時間をかけれない。そろそろ2人が言つてた相手が来るかも。そう思い私は制圧をあきらめ隙を作り脱出することにした。そして、私は彼女に思いきり殴りかかった。結局ガードされたけど隙はできた。その隙に私は出入口からその部屋を出て、階段を全速力で駆け下りた。後ろで何か声が聞こえたがそんな事どうでもいい。そして、1階まで降りて外に出ようとしたとき、私の腕はつかまれた。さっきの

「ちよつと！あなた！助けた相手にお礼もなしに逃げようとするなんてどうということよ！」

私は咄嗟に嘘をついた。

「離してください！私に構わないで！私には任務があるんです。仲間のもとに戻らないと！」

「ラヴィ拾ったヨルハ部隊員ってあいつか？」

「言つてなかったわね。彼女の名前は11Bよ。」

見ると2人の女性がこちらに向かつて来ていた。

「もう名前まで知られてる。嫌だ戻りたくない！安全な場所、落ち着ける場所に」

2人のうちの片方が近づいてきた。私は背中の武器を見て恐怖した。

「ヨ、ヨルハ部隊！私はもう嫌なんです！もう戦いたくない。」

「私はお前と同じだ」

そう言いヨルハ部隊の女が私の意識を刈り取った。

「あ、ああ」

こうして、目覚める感覚は2度目だ。そして、目の前にはにつこりとこちらを微笑む女がいた。

「おはよう、11B。さつきはA2がごめんなさいね。さて、突然だけどあなたに聞きた

「い事があるの。」

「ああ私はこれからどうなるのだろう。」

第23話

11B

「おはよう、11B。さつきはA2がごめんなさいね。さて、突然だけどあなたに聞きたい事があるの。」

11Bは奥歯を噛みしめこちらを睨みつけた。

「何も話すことなんてないです。」

「話してくれば後はどうしてくれても構わないのよ？あなた、なぜ、ヨルハ部隊から脱走を？」

「話すことなんてないです。どうせ、私が話しても、話さなくても変わらないう結末は変わらないでしょ。バンカーに連れ戻すなり、ここで殺すなりしてもらって結構ですよ。」

私はため息をついた。この子さ、なぐんか感じ違いしてない？

「あのね、私は11Bを傷つける気も、原隊に復帰させようとも思っていないわよ。」

「口先だけだったなら何とでも言えるわ。証拠をみせて。」

「私が証拠だ。」

A2？A2が11Bの正面に立った。11BはA2を睨み続けていたが突然ハッと

思い出したかのような表情になり叫んだ。

「あなた！真珠湾降下作戦の後帰還しなかったために脱走兵として、指名手配されてる正式名称アタッカー2号通称A2じゃない。」

「自己紹介する手間が省けたな。」

「A2つてヨルハの間じゃ有名人なのね！」

「ほっとけ。」

A2はさらに11Bとの距離を詰めた。11Bに逃げ場はない。そして、おもむろに彼女を抱き寄せた。え、さすがに強引過ぎませんか？抱かれてる方もものすごい速さで瞬きしてるけど。

「いいか。一旦おちつけ。私もお前と同じ脱走兵だ。つまりだ、こんな私と一緒にいるこいつ等全員見つかったらただじゃすまないってことだ。」

そう言うとA2は11Bを離れた。解放された11Bは頭を押さえ、覚悟を決めたようだった。

「分かったわよ。まず、なんで脱走を試みたかだったわよね。」

数分後

11Bは私たちの質問にほぼ全て答えてくれた。その過程で人類だつてことを打ち明けたのだけど、すごく驚いていた。A2と同じように生きている人類は初めて見たの

だと言う。この事実にはA2も驚いていた。真珠湾降下戦時はいまだに混乱していたため人類は通信のみでしか交信できないのだと思っていたそうだ。それが、膠着状態であるとはいえ、音声ログしか来ないと言うのはおかしい話である。

「昔は何とも思わなかったがですけど、ラヴィさんに言われてから聞くと変な話ですね。」

「レジスタンスキャンプの皆は何とも思っていないのよ。実際私たちもそうだったし。」

まったく何時の時代もどこの世界も政治家って頭おかしいのね。神様ごっこでもしてるの？考えたところで理解できそうもない。

「よし、お腹すいたし、ご飯にしましょうか。」

「ごはんって食事のでしょ。私たちは別に必要ないからご自由に。」

「同意見だ。さて、私はもう行くぞ。」

「別に食べれないわけじゃないんですよ。折角だから一緒に食べましょう？今日は豪華よ。」

無視して出ていこうとするA2に対してデボルが、つれない態度をとる11Bに対してポボルがすごい早口で食事の良さを熱弁してた。時折、私の料理がおいしいなどと聞こえて来る。うれしいことね。根負けしたのか2人も一緒に食べることにしてみたみたい。よし、腕を振るわないとね。

第24話

エージエントside

さて、11Bとのわだかまりも無くなったし、A2もいるし今日のご飯は楽しくなりそうだ。そんなわけで私は今料理の準備をしている。姉妹に怖い思いさせてしまった詫びも込めて今回はかなり豪華にしようと思う。といっても普段のイノシシ肉に散策中に見つけたハーブを使って香りをつけたり、ローストビーフ（ソース無し）を作ったりした。

「できたわよく。といってもいつものイノシシ肉の調理方を変えたただけだけどね。」

みんな料理に目線が釘付けになってるわね。いつも、ここに来るたびに私のご飯を食べていた姉妹の2人もこれは予想外だったらしいわ。デボルに関してはさつきから唾を飲み込む音が隠しきれてないし、ポポールもだらしがないデボルを見てなんとか我慢してるし、これが人生？初めてのまともな食事になる脱走兵2人は拳を握ってじっと耐えている。

「これ以上待てるのも無理そうね。どうぞ召し上がれ。」

みんな競い会うように料理を頬張ってる。

「どう？みんな美味しい？作り手としては感想が欲しいのよ。」

「ラヴィさんいつも美味しいですけど、今回は特に美味しいです！こっちのハーブを使った方のお肉は味にしつかりと香りがしますし、こっちのローストビーフでしたっけ？はいつもの物より柔らかくて食べ易いです！」

横でデボルも大きく頷いている。

「脱走兵のお2人さんお味のほうはいかが？」

「ラヴィ私はこれを食べられただけでも、脱走した自分を褒めたいわ。」

「ラヴィと私達に出会えなきゃ生きてない人がよく言うわ。」

「A2どう？口に合った？」

A2は少し黙った後、

「ああ、とつても美味しい。」

「ちよつとA2折角こんなに美味しいんだから、ちゃんと感想言ったらどうなの？さっきの間は何だったのよ。」

「私は真剣に考えた結果この言葉がいいと思っただよ。そもそも11Bだって味の感想言っていないだろ。」

「脱走に意味を持たせるくらいの味だったてことよ。理解力ないわね。」

マズイ脱走兵どもが火花飛ばし始めた。ここで喧嘩始められるのはごめん被るので

なんとかしなきゃ。そんなことを考えているうちに2人はさらにヒートアップしていった。本当に何とかしなきゃ。

ガンッ

「2人とも? ご飯の時に喧嘩しないでくれる? 折角のごちそうが不味くなるから。」

デボルが恐ろしい顔で2人を睨んでいた。脱走兵2人は完全に静かになった。

「まあ、みんな口に合ったようじゃなかったわ。作った側からすれば美味しいって言うってもらえることが何よりも嬉しいのよ。だから、喧嘩しないの。」

まあこれで仲良く終わりそうね。みんな食べ終わった後、私はみんなにお湯を出した。これである程度リラックスしながら話せるかしら? 私は本題を切り出した。

「さて、これからのことについてなんだけどね……」

第25話

エーゼント side

「さて、これからのことについてなんだけどね。11Bあなたどうするの？質問に答えて貰ったし別に私から言うこともないわ。何処に行こうとあなたの自由よ。」

11Bは目を閉じ考えいたが目を開け、

「私ラヴィと一緒にいてもいいかしら？別にやることもないし、まだ助けて貰った時の恩を返せてないからね。」

「いいわよ。11B改めてよろしく。次にA2はどうするの？」

「とりあえず今までと変わらないさ。」

「そう。最後に姉妹のお2人は？」

「私達はキャンプに戻ります。」

「わかったわ。当の私の方なんだけど、当面はここでの生活基盤を固める事にするわ。それでね、グレネードを使い切ってしまったの。だから、早急にこの分の火力を埋めないといけないと思ってね。パイプ爆弾でも作ろうかと思ってるんだけど、誰か爆薬が手に入る伝手とかない？」

正直ダメ元なのよね。何せみんな武器は刀とかだし、そう思っているとデボルが得意げに手を挙げた。

「私知ってるわよ。ジャツカスっていう人が爆薬の扱いに長けてるといふか、爆薬を愛してるの彼女。今はヨルハ部隊の支援つてことで砂漠の入り口の辺りにいるはずよ。なんでも、爆薬で入り口を吹っ飛ばしたらいいから。」

やるのが派手ね。でも、これで入手の目的が立ったし良かった。

「でも、ラヴィさん気を付けてください。あの方一度スイッチが入ると止まらなくなりますから。」

「ありがとう。覚えとくわ。後、また弾薬の調達を頼みたいの。前の分も含めて、11Bを運ぶ際に打ち尽くしてしまったの？」

11Bが申し訳なきさそうにこっちに頭を下げてきた。いいのよ。撃たずに後悔はしたくないしね。

「ラヴィさん悪いんですけど、今回はこちらでもある程度融通できたんですけど、また同じ量となるとこちらも厳しいです。一旦費用は立て替えますから次までに、資金を用意できませんか。」

なるほど、確かに無償は無理よね。でも、稼ぎ方なんて知らないし。

「11Bお前、明日機械生命体を狩りまくってこい。そして、エヴァ手を出せ。」

手を差し出すとA2から何か渡された。どうやらこれがお金らしい。

「これである程度売買はできるだろう。返さなくていいからな。」

A2ありがたいわ。話も終わり、みんなもお湯を飲み終わったようだしお開きね。

「またねラヴィ！ケガしないでよー」

「ラヴィさんご馳走様でした。申し訳ないですけど次来るまでにお願いしますね。」

私は姉妹の頭を撫でた。（*、口、）可愛い。

「すまない世話になった。何かあったら連絡してくれ。つておい！」

何か11Bと話していたようだ。が別に何ともないらしい。なので私はA2のことを抱き寄せ頭を撫で回した。

「いい？A2もつと自分の体を大事にね。私はまだあなたと会いたいわよ。」

A2は小声で「わかったよ」と言ったあと出て行った。

「ラヴィこの後どうするの？」

「どうするも何も寝るわよ。どうせ、明日も動くしね。」

私はいつものようにリュックを頭の下に敷き眠りの体制に入り11Bも真横に来たので私は頭を撫でてあげた。満更でもなさそうな彼女は私より早く眠りについた。

第26話

エージエントside

朝日が当たって目が覚め、体を起こした。隣を見ると11Bがまだ寝ていた。とりあえず頭を手櫛で整え姉妹が持つてきてくれた着替えに着替えた。できるならそろそろ熱いシャワーを浴びたいわ。そして、リュックを背負い装備の確認もしたし、さすがに起こしましょうかね。

「ほら、11B起きて。」

「おはよう。ラヴィもう出発するの？」

「おはよう。ええそろそろ出発よ。武器は悪いけどそののを使って。」

「私の元の武器は拾ってないの？助けて貰った分際なのはわかってるけどさ。」

「悪いけど、あなたがの後輩の依頼で来たっていうヨルハの2人に渡したわよ。あの2人の会話から察するにあなた死んでることになってわよ。」

すると、11Bの顔が暗くなったかと思えば、焦ったような表情をしていた。

「大丈夫？その子となにかあったの？」

「だ、大丈夫。大したことじゃない。ところで、他に16Dの事何か聞いてないか。」

「別にないわよ。さて、そろそろ出発するわよ。何かあったら連絡して。」
そして、私達は別の方向に歩き出した。

数分後

砂漠の入り口の坂を上ると、男女が売店？みたいなのをやっていた。近づくと女性のほうがこちらの事を気づいたらしく、

「どうもー。こんなところに来るなんて珍しいね。あまり見ない顔だけど何のようだい？」

「ああそうね。今日はジャツカスって人に用が有ってね、この辺りにいるって聞いたんだけど。」

すると、横の男性が

「お姉さん、この人がジャツカスだよ。珍しいねこんな変人に用があるなんて。」

「話は聞いてるわ。爆薬に精通してるともね。さて、自己紹介がまだだったわね。私はラヴィっていうの。よろしくね。」

「よろしくラヴィ。ところで、私に変人だって噂誰から聞いたの？」

握手をしながらこの人すごい圧かけて来るんですけど。

「いやあ誰だったかしらね。(すつとぼけ)ところで、今日はあなたの爆薬を分けてほしいのよ。もちろんタダとは言わないわ。」

すると、ジャツカスはこつちの手を強く握って興奮したように、

「私に爆薬に関する事を要求するなんて、君の友人は見る目があるようだね。壁の爆破や、機械生命体どもを吹っ飛ばすにもなんでも爆薬は使えるからね。」

「そうね。で、どの位分けてもらえるの?」

ちよつと待ってくれ。ジャツカスは懐から紙袋を取り出した。

「これの半分くらいでいいなら今渡せるよ。後、爆破装置もいっしょにどうだい?これが有れば離れた所から安全に爆破ができる。」

「それも貰うわ。爆破装置の信号の範囲はどのくらい?」

「毎度あり。珍しいね。いままでそんな事聞かれたことないよ。精々何もないところで15メートルつてところだ。」

「ありがとう。ところでこの奥はどうなってるの?」

「この奥は気性が荒い機械生命体どもがたくさんいて、危険だつて言うんで封鎖してたんだよ。だけど、ヨルハ部隊のおかげである程度数が減ったんで今は通れるんだ。」

「ここら辺で活動してるヨルハ部隊つてことは2Bと9Sか。」

「ありがとう。これ料金ね。」

ジャツカスにお金を渡すと、すぐさま彼女はすぐに計算し異変に気付いたようで、

「これ、若干多くないかい。」

「いいのよ。情報料と、これからもよろしくって意味も込めてるからお釣りはいいわ。」

「じゃあこれからもよろしく。」

私達は握手をして、その後私は砂漠の方へと進んだ。

第27話

I l B s i d e

私の方はラヴィと別れた後、廃墟都市の郊外まで来ていた。何故かって、廃墟都市の方で戦闘すると、ヨルハ部隊に私の生存が知られかねない。しかも、このどうやらこの地区で活動しているのが2Bと9Sらしい。下手をすると、姿を見ただけで私だとわかるかもしれないからだ。まあそんなわけ私はここににいるわけだ。さて、慣れない武器と、ポッドによる遠距離攻撃もできない。慎重にやらないと。すると、目の前に機械生命体の集団が見えた。どうやら、向こうもこつちを見つけたらしく、距離を詰めて来た。武器を構え、気合を入れ脱走後の最初の戦闘に突入するのだった。

数時間後

気づけば時間を忘れて鉄屑を量産していた。少し休憩してもバチは当たらないだろうと思いきその場に腰を下ろした。ふと、昨日A2が帰り際に言っていた言葉を思い出した。

「ラヴィの事を頼んだ。まだ浅い付き合いだ、あいつは1度決めたことは曲げない節がある。」

その時は別に気にしなかったが、確かにお人よしな感じがした。もしかしたら、ラヴィになら私と、16Dとの関係性を打ち明けても問題ないのかもしれない。いや、ダメだな。ラヴィはこんな私を見てどう思うのだろう。打ち明けたところでどうしようもない。多分16Dにとっても私は死んでた方が都合が良いだろう。そろそろ戻るか。私はまた武器を取って歩き始めた。

エージェント side

ジャツカスとの取引の後、砂漠の奥に進んでいた。確かにここは機械生命体多い。ここで派手にぶつ放せばリンチになること間違いないだろう。でも、姉妹も私のために弾薬を調達してくれるのだ。しっかりとってお金は用意しないとね。いくら11Bが機械生命体どもを狩ってくれられているからと言っても、お金は多い方がいい。そんなわけで今はM700を構え孤立している機械生命体の頭を狙っていた。そして、息を止め

パスツ

撃たれた方は何が起きたかわからなかっただろう。周りに気付かれた様子もなく、その後も静かにそして、確実に1体ずつ仕留めていった。すると、胴体が長い風変わりな奴が出てきた。同じように狙いを定めていると、こつちの位置に気付いたらしく攻撃してきた。さらに、その周囲にいた、通常サイズの奴も突っ込んできた。私は覚悟を決め、M9銃剣を装備し、シールドを構え白兵戦をするのだった。

数分後

「くそつたれ。お前で最後よね。」

最後の1体に銃剣を突き刺した。そして、使えそうな鉄屑とお金を回収し、汗が引くのを待って、ジャツカスに挨拶し、拠点へと戻った。

オマケ

「ジャツカス、あのラヴィって人どう思った?」

「そうだね。私としては、珍しい事を聞くなと思ったよ。なにせ、起爆装置の通電範囲なんて聞いて普段聞かれないしね。それに、恐らくだけど彼女も爆薬に精通してる気がするんだ。」

「案外、気が合いそうだな。でも、心配だ。爆薬好きは変人しかいないからな。」

第28話

エージエント side

砂漠で白兵戦を繰り広げた私は拠点へ帰ってきた。どうやら、11Bはまだ帰ってきていないようだった。私は食事の準備に取り掛かった。今晚の献立はいつものイノシシ肉のステーキだ。フライパンを温めて肉を焼く準備をしていると、11Bが帰ってきた。

「おかえりー。タイミングいいわね。今から肉を焼くわよ。」

「ただいま？だっけ？お腹すいたー。」

「そこに座って待ってて。一応聞くけど焼き加減はどうする？」

「焼き加減？なんだかわかんないから、ラヴィに任せるわ。ただ、焼くだけじゃないの？」

「そうね、前は一応ミディアムで焼いたし、今回は思い切ってレアでやってみましょうかね。因みに、今回のレアはかなり柔らかいわよ。」

こんな会話をしている、うちに焼き上がった。焼きあがった肉を見て11Bは唾を飲んでいた。アンドロイドには唾もあるのね。さて、いただきます。私が肉を食べ始める

と11Bもおいしそうに食べ始めた。

「さて、互いの成果報告でもしましょうか。結果から言うとお爆薬も手に入ったし、その後、ちよつとだけ戦闘して、少しだけ稼げたわ。しかも、機械生命体に対してはステルスが有効だと分かった。でも、正直白兵戦はあまりやりたくないわね。」

「白兵戦って、何やったのよ。こっちは今回この位稼げた。エヴァのと合わせれば弾薬代と少し余る位ね。」

良かった。これで、ある程度気楽になる。しかし、11Bの顔が一瞬曇ったのが気になった。

「どうしたの？何か気になることがあるなら遠慮なく言ってもらっていいわよ。」

「別に特段支障はないんだけどね、前ならポッドの射撃も多少あったから、それがないと違和感と言うか、火力不足を感じたの。」

「そう。出来れば何とかしたいわね。と言っても明日になるでしょうし、今日は疲れたから休みましょうか。」

そんなわけで、私達は床に寝転んで私は、いつもの様にリュックを枕にして、眠りについた。

いつもの様に朝日が目に当たって起きる。身だしなみを整えた後11Bを起こす。

「おはよう。さて、今日はどうするの?」

「そうね、まず昨日の話から片づけましょうか。11B銃を撃つたことは?」

「ないわ。それにラヴィみたいに大きいのは扱えないわよ。一応私近距離特化の型だからね。」

「なら、少し撃つてみましょうか。下にきて。」

数階したに降りて、使っていない適当な部屋に、昨日拾ってきた機械生命体の頭おいて射撃レンジを作った。

「これから、銃を撃ってもらおうわ。大丈夫これで11Bに銃を持たせるって決まった訳じゃないから。ただ1つの提案よ。」

「分かった。とりあえずやってみよう。」

11BにM45A1を持たせ、構え方と狙い方を教えた。そうして11Bは撃った。正直お世辞にもうまくはない。

「やっぱり私には向かないかな。それに、武器を持ちながら正確に狙える自信がない。でもありがとうラヴィ。」

どうしたものか。確かにA2のようにポッドなど必要なくてもいいのかもしれない。でも、11Bの顔を見るにやはり納得いかないようだ。武器を持ちながら相手にダメージを与えられる武器。そんなものあるかしら。でも、力になってあげたいしなあ。そん

な時1つの名案を思いついた。

「ちよつと11Bこれ撃つてもらえる?」

私はこの世界に来てから手に入れた水平2連ショットガンを手渡した。

「さつき言ったわよね。こんな長いの持てないって。」

「いいから、撃つてみて。さつきより少し近づいたこの位置から。」

前回と比べればかなり当たっていた。まあ散弾だから当たり前なんだけどね。

「で、前のと比べれば当たってるけど、こんな長いの使う気はないわよ。」

「反動は感じた?」

「別がないよ。だから何なの?」

「OKなんとかできそう。上にいきましょ。」

上の階に戻り私はとりあえず11Bを座らせ私はショットガンの銃身とストックを鋸で切り落とし、ストックの方を布で巻いた。そして、それを11Bに投げ渡した。

「なにこれ?かなり短くなった見たいだけど、説明してもらってもいい?」

「そうね11B、あなたはお世辞も射撃のセンスは皆無。でも、さつき撃つて分かったと思うけど、これは散弾だからあまりセンスは必要ないし、銃身とストックを切り詰めたから片手でも打てる。それに、近距離でぶっ放せばある程度なら吹っ飛ばせるはずよ。でも、装弾数は2発だから気を付けて。」

「なるほどね。ありがとうラヴィ。なれるまで時間はかかるかもだけど使ってみる。早速したで軽くイメージトレーニングでもしてくるわ。」

そうして11Bは下に行ってしまった。さあこっちも作りますか。先日ジャツカスからもらった爆薬をとりだした。やはりTNTか。それを工場で拾った鉄パイプに詰め、導火線と鉄屑を詰める。これで、パイプ爆弾の完成だ。形はパイプのため細長く、フラググレネードよりは投げにくいが対して変わりはない。使い方は導火線に火をつけて投擲する。大体火をつけてから5秒くらいで爆発するようにしてある。また、ジャツカスから貰った爆破装置を使った遠隔式の物も作っておいた。パイプ爆弾を量産していると後ろから11Bがのぞき込んできた。

「なにこれ？こんなちっぽけなのが爆弾なの？」

「気を付けてねー。下手したら半径10メートルぐらいのなら即死だから。」

「それは人類の話でしょ。私達アンドロイドなら大丈夫よ。」

「まあ確かに即死はないでしょうけど、私は嫌よ？あなたのお腹に突き刺さった破片抜くの。」

それを聞いて11Bはサッと私の傍を離れた。なんだ意外と可愛いじゃない。こうして1日は過ぎていった。

第29話

エージエントside

今日も朝起きて、身支度と装備を確認して、11Bを起こす。11Bもこの日常に馴染んできたようね。さて、今日私は昨日作ったパイプ爆弾を試しに砂漠に行こうかしら。

11Bもショットガンを持っていつもの機械生命体狩りだ。互いに何かあつたら連絡することを確認し、拠点を出る。一昨日ぶりに砂漠に行くと、ジャツカスがいた。

「久しぶりだね。どうだい？私の爆薬は役に立ってるかな？」

私はパイプ爆弾を取り出し、

「これから実地試験つてところね。つてあなたどうしたの？」

これをジャツカスの目の前に出した途端、彼女の目が私の手を追っていた。

「これは何だい?!こんな物見たことない!でも、この大きさからすると、爆薬の量は少ないよね。それに私の起爆装置もない。とにかくすぐ興味をそそられる!これから実地試験するんだろう?私もついて行って良いかい?」

と、ゼロ距離で迫られた。なんだろう。アンドロイドって全員顔がいいから、残念美

人が引き立つのよね。興奮するジャツカスを見無視していると手を握られ迫られた。

「分かったわよ。いいわよ。ついてきてもいいけど使うのはこの1つだけだからね。」

ジャツカスはそれでも良いとの事なので同行許可したわ。ジャツカスが道行く機械生命体を倒していく。私は残骸とお金を回収するだけ。ある程度進むと丁度固まっている集団を見つけた。ジャツカスを止め。口に手を当て静かに手段の数メートルまで接近した。

「じゃあ行くわよ。爆発で集まって来るだろうから、それも片づけてから評価しましょうか。」

「今私はとても興奮しているよ。」

嫌だ。こんな美人が待てを食らった犬の様に涎を飲み込んでいる様な見たくないわ。いや、待てよ案外ありかも。やめよう。集中しよう。邪念を振り払うように私はパイプ爆弾に着火し、放り投げた。

「Frag out!」

この声に気付き一齐にこちらを見たと同時に集団中央が爆発した。

「f o o o o o o o o o ! 最高だね!」

「さあ集まって来たわよ。早く片づけましょう。」

言い終わると同時にジャツカスが駆け出し、いつの間にか殲滅していた。彼女の爆薬

愛は本物ね。とりあえず威力の方は問題なしかしらね。近づいてよく見た。

「威力は申し分ないし、導火線の長さは問題なし。あと、投擲者の腕も完璧。」

「うわあすごいねこれ。爆発自体は小さいけど破片が突き刺さってる。それに小さいから投げて使える。これ凄いね！これの作り方教えてくれないかい？」

「気になったんだけど、爆薬に精通してるのよね。前に貰った以外の爆発物ってないの？」

「知らないよ。データに無いんだ。だから、作り方教えてよー。お願いお願い。」

うーんこの残念美人。データに無いってなんでかしら。ジャツカスが無視していると、またゼロ距離で詰められる。しかも、腕もぶんぶん振られる。すると、通信がなくなった。

「久しぶりー。ラヴィ無理してない？あのね、今日で仕事が片付きそうなの。だから、この後そっちにいくわね。」

一方的な通信が終わった。

「ねえ聞いてたでしょ。用事ができたからまた今度ね。」

「そんなあ。そうだ！私の連絡先だ。爆薬の調達や次の実験の時は連絡くれない？」

まあその位はいいか、つながりは持ってた方がいいしね。頷くとすっごくうれしそうな顔をしていた。そして、入り口で彼女と別れ、私は拠点へと戻った。

第30話

エーゼントside

ジャツカスと別れて拠点へと帰つて来た。中に着くとまだ、姉妹は来ていないようで、誰もいなかった。とりあえずお湯を作る。ああコーヒーが飲みたい。それか、味とする飲み物が飲みたい。紅茶でも何でもいい。食料品に関してはヨルハもレジスタンスも役に立たないのよね。ここに来る前が懐かしい。あの頃もひもじい時もあったけど、今は別の意味でひもじいわ。突然目の前が真っ暗になった。

「ラヴィ久しぶり！考え事？」

なんだ、デボルか。ビックリしたわ。なんかどうでもよくなってきたわ。よし、とりあえず撫でるか。

「デボルー、久しぶりね。無理してない？」

「してないわよ。」

「そう！良かった！」

デボルの髪をわしやわしやした。それこそ、犬みたいに。そしたらポボルが遅れてやって来た。

「デボルちよつとくらい待つてくてもいいじゃない！あ、ラヴィさん久しぶりですね。で、何してるんですか？」

「ポポルもいらしゃーい。おーよしよし、(・ω・)」

あの後10秒くらいわしゃわしゃした。そしたら、さすがに離してくれって言われたけどね。よしっ！元気出た！

「ラヴィさん頼まれてた弾薬です。」

「ありがとう。ハイこれ、立て替えて貰った分よ。これで当分は持つと思うわ。」

お湯をとりあえず出して、談笑でもしようかと考えていると外から突然爆音が轟いた。

「何が起きたの!!!」

屋上に出ると、市街地中央で2体の巨大な機械生命体となにか2つの飛行体が戦闘しているのが遠くからも見えた。M700のスコープを使い飛行体を見る。あれは2Bと9Sね。

「ねえ。あれ苦戦はしてないけど、こんな時レジスタンスって何してるの？」

「大体は避難してるか、一応周囲の警戒してるくらいですね。」

「なんで？支援した方がよくない？」

「ヨルハ部隊なら飛行ユニットとか良い装備持つてるけど、私達の装備の殆どが長い間

使ってるお古か、ヨルハ部隊か死んだアンドロイドの再利用よ。」

確かに、精密な整備が必要な物もあるけど、いまだにブルーシートを被ってるこのU
H—Yなんかはモスボールされていて、部品をかき集め何とか飛ばしたのよね。そう
いえばジャツカスもパイプ爆弾の作り方を知らなかったし、ちよつと調べてみないと
ね。

「あーあー、ラヴィ凄いいことになってるな。どうすればいい?」

11Bからの通信だ。

「とりあえず帰ってきて。後、気を付けて。今戦闘してるの2Bと9Sよ。あなた顔が
割れてるから見られれば面倒になるわ。」

「OK。どさくさに紛れることにする。」

通信終了

「11Bさんとは問題ないようでした。とりあえず帰ってくるまでどうします
?」

「観戦でもしましょうかね。」

第31話

エージエントside

あの後、2体とも2Bと9Sが撃破した。それを私達は観戦して、終わったと同時に11Bが帰ってきたので、食事にしてその日は休んだ。寝るときにみんなの頭を撫でてる時、めっちゃ幸せだった。

朝

いつものルーティンをこなした後、みんなを起こし今日の予定を決める。

「私はいつもの通り砂漠である程度戦闘した後、あのデカイ鉄屑見てきたいんだけどいいかしら？」

「OK。私もいつも通りよね。何かあったら連絡して貰えばいいわ。」

そんなやり取りを見たデボルが不満げに「いつの間に関係に」とか何とか言ってたけど、ポボルにお口チャクさせられてた。後は、入り口で互いに別れた。砂漠に向かうと入り口にジャツカスがいなかった。不思議に思っている売店のお兄さんが

「やあその顔はジャツカスは何処だ？って顔だな。あいつはアクセスポイントの起動の調整に行ってるよ。」

「ありがとう。良い一日を。」

とりあえずテンプレ社交辞令を送った後、私は砂漠の奥に進んでいった。今日は射撃訓練も兼ねて遠慮なしに撃ってるからサクサク進むわね。いつものペースで来ているはずだったのだが知らぬ間に結構奥に来てしまったらしい。そろそろ引き返そうかしらね。

「うう……おうちにかえりたいヨウ……おねえサン……」

え？迷子？でも声が妙に機械質な気がく……とりあえず行きますか。その方向に行くとリボンを付けた機械生命体があった。

「どうしたの？大丈夫？こんなところになにしてるの？」

「お姉さん……ダレ？」

「私はラヴィっていうの。であなたはここで何してるの？」

「ワタシね……おねえサンがパーツの調子が悪いって言ってて、それで私おねえサンのよろこんで欲しくてココに来タノ。でも怖くて足が動かなくて帰れないノ。」

「そう。おねえさんの事は知らないけどよく頑張ったわね。でもきつとおねえさんあなたの事心配してるわよ。」

「お姉サンが？ホントに？」

「きつとそうよ。さあ頑張つて、勇気を出して一緒にお姉さんのところにいきましょ？」

「う……うわあああん！こわかったアア。こわかったよオオ！」
「よし！行くわよ！お姉さんのところへ！」

機械生命体にも家族って概念があるのね。興味深いわ。

「そういえばおねえさんへのパーツは見つかったの？」

「うん……おねえサン、よろこぶカナ？」

「そうね、でも元気で帰らないとおねえサンが喜んでくれたか分からないわよ。」

「……うん」

さっきまでの恐怖は取り除けたみたいで良かった。さて、後はお姉さんのところまで送り届けるだけね。ところで、そこに私いつでも大丈夫かしら？

第32話

EーJエントside

先ほどまで怯えてたあの子の不安も取り除けたので、今は姉の元に一緒に向かっていく。この子と会うまでにここら辺は殆ど掃討したので問題はない。

「ねえ、どうしてさばくはできタノ？」

「それはねえ、今私達が歩いてる地面の植物が枯れてしまつてできたのよ。」

「なんでシヨクブツは枯れちやつたのカナ？」

「わかんないわね。私もここが砂漠になる前はどうなつてたのか、分からないからなあ。もしかしたら、一面お花畑だったのかもね。」

「わーい！ワタシお花ダイスキ」

本当に子供っぽいわね。今まで見て来た機械生命体とは根本的に違う気がするわ。

「ねえ、なぜはどこからクノ？」

「難しい質問ね。簡単に言えば蝶が飛ばたいからかしらね？」

「でも、ちようがヒラヒラ飛んでもなぜはふいてないヨ」

「私たちの知らない遠い場所の1匹の蝶がヒラヒラ飛んで起きた小さな風がやがて大き

な風になつて私達にふいてるのよ。」

「すごい！お姉さんはものしりなんダネ！」

これ、彼の受け売りなんだけどね。こんなに小さい子にも使えるのね。あ、つまり私の事子供だと思つてたつてことなのかしらね？

「ねえ、こどもはどうやってうまれルノ？」

／＼（ \circ 、 \circ ）＼ナンテコツタイ 私は頭を抱えた。こんな純粋な子になんて教えられるのよ。そもそも本当の事言つたてわかるかどうか。

「そ、そうね。まず、お父さんとお母さんは神様をお願いするの。子供が欲しいですつて。すると、神様がお父さんは種を使えるようになるの。その種をお母さんに渡して貰つたお母さんはそれを大事に育てると子供ができるの。」

「ふーん。なんだか、むずかしいネ。」

よかつたー。何とかそれっぽくまかせた気がする。そうこうしていると、砂漠の入り口に着いた。

「ここまでくれば、もうだいジョーブ！こわくないモン。」

「よく頑張つたわね。おねえさんのところに早くいきましようか。」

結局おねえさんのところつてどこなのかしら。しばらく歩いてみると以前見たときは閉ざされていた場所が開いていた。どうやら、ここがそうらしい。奥に進んでいく

と、そこには機械生命体たちの集落があつた。

「ねえ、こつちこつちー。」

呼ばれて行つてみると、その子と水色のリボンした小さな機械生命体がいた。

「あなたは……？どなたか存じあげませんが妹を連れ戻してくださいまして、ありがとうございます。」

「いいのよ。ところでお姉さんは喜んでくれた？」

「ウン！でも、しんぱいだったって、おこられちゃツタ。」

つい、口角が上がってしまう。

「あ、そうだ！これ、あゲル。」

その子の姉も手を差し出していた。見ると、ピンクと水色のリボンだった。

「ありがとう。良い色ね。」

受け取ると、どちらも嬉しそうだった。さて、この後どうしたものか。

「あのくすいませぬ。ちよつとお時間いいでしょうか？」

そこには、流暢に話す、優しそうな顔の機械生命体がいた。

第33話

エージエントside

「いいわよ。ところであなたは・・・？」

「私の名前はパスカル。この村の長をしています。この村には戦いから逃げてきた平和主義者しかいません。」

「よろしくね。パスカル。私はハヴィランドみんなからはラヴィって呼ばれてるわよ。」

機械生命体の平和主義者か。確かにどの機械生命体にもある程度の知能はあるみただったし。そこからこんな個体も生まれてくるのね。それにしてもどこか良いわ。どっかの部隊みたいに追跡部隊も送られてこないようだし。

「ところで、よくこんな所で暮らしてるわね。近くにレジスタンスキャンプがあるのを知ってるわよね。ばれたらタダじやすまないと思うんだけど？」

「ええ、私達はレジスタンスの皆さんと交易をしてるんです。ご存じないのですか？」

なるほどね。機械生命体と交易。レジスタンスにも良心はあるらしい。それなら、なんであの姉妹の善悪を判断できないのかしらね。まあいいわ。

「あれ？もしかして、この辺りのレジスタンスの方ではないのですか？」

「いや、こちら辺で活動してるわ。でも、実際に見るのは初めてなの。そこで、お願いなんだけど、ここに私が来たことは黙っててもらえないかしら。私あまり目立ちたくはないの。」

「分かりました。では、私はこれで。もしよろしければこの村を見て回って見てください。」

とりあえず見てみましょうか。にしても、ここにいと時間がゆつくり進んで良いわね。ん？ここは商店？

「どうぞ、みていってください。」

と言つても、何も目ぼしいものは何も・・・ん？

「ねえ、この種は何の種？」

「コレは別にに売りものじゃナイ。たまにトリがくるからエサをやつテル。」

「悪いけど、これ全部くれない？いい値で買うわ。」

「これ、うりものじゃナイから、カネはいらナイ。」

やった！やった！これ、小麦の種よ！これを育てれば、パンが作れる！思いがけない収穫に年甲斐もなくルンルンになったわ。さて、大方見れたし本来の予定だった、昨日2Bと9Sが撃破した巨大な機械生命体を見に行こうかしら。村を出ようとしたところ、さつきの機械生命体の姉妹が手を振っていた。やっぱ、仲いいのね。手を振り返し、

歩き出そうとした時

「こどもの作り方おしエテくれてありがとうとおおおおお」

待てええい！その他にも質問に答えたのになんでそのチヨイスをしたー！私はいあまりの恥ずかしさと、気まぐさから走って村から出た。ねえ、私次からどんな顔してあの村に行けばいいのよ？私を考える事を辞め、巨大な機械生命体のところに向かうのだった。

第34話

I l l B s i d e

朝いつもの様にラヴィに起こされ、身支度を整え出発した。今日も前と同じように郊外で機械生命体を狩るだけなんだけどね。最近やっとラヴィから貰ったこの銃の扱いに慣れて来た。ある程度の遠距離、それに近距離火力が大幅に上がった。にしても、今日は風が強い。顔に砂が結構当たって鬱陶しい。それに、砂煙で機械生命体が見えにくい。今日は帰ろうか。今、ラヴィはあのデカ物を見に行ってる頃かな？ そうだ！ 今から行つて驚かせてやろうツと！ すると、数メートル先に機械生命体の集団がいた。でも、別にこつそり行けばバレないか。

ハアアアアツ

聞き覚えのある声と金属のぶつかる音が聞こえて来た。そこにいたのはA2だった。「あんたこんな所で何してんの？」

「ただ通りかかっただけだ。それよりもお前、なんで機械生命体を見逃してる。」
「別にあんたと違って復讐心なんてないからね。これはある意味生きるためにやってる事。はあ、ラヴィも言ってたでしょ。自分の体をもっと大切にしろって。考えなしでド

ンパチやるなんて、あんた言われた事分かってる？」

A 2は私に背を向け走り出してしまった。なんなのあいつ。何かあったのかしら？
まあ、どうでもいい。

A 2 side

11Bに会う前私は森林地帯にいた。特に目標があつた訳ではない。ただ己の復讐を果たす為の行動である。ここはおかしな場所だ。何やら、この機械生命体は森の王？とか言うのに従っているらしい。つまり、そいつを殺せばいい。道中遭遇する機械生命体は皆鉄屑に変えた。そして、今城の最上階に上ってきた。どうせ、森の王とやらを殺せばいいのだ。わざわざ1階から行く意味もない。下では機械生命体どもが何かを守っていた。しかし、突如すべて駆け出した。なんだか知らんが都合がいい。私は飛び降り、森の王を殺した。

「2B！あれ．．．アンドロイドだよ！しかも、あれは．．．ヨルハタイプじゃないか！」

「ヨルハ特殊指定機体を確認。破壊を推奨。」

「破壊？どうして!?!」

ああ、またこのパターンか。何度も何度も飽きないのか？

「9S．．．いくよ。」

「2Bッ」

私は2B、9Sと戦闘を始めるのだった。

数分後

さて、そろそろ決着をつけないとな。改めて武器を強く握る。ふと、ラヴィの顔が浮かんできた。本当に突然だった。だが何故だか集中が切れた感じがした。気づけば私は2人の前から退散していた。今は廢墟都市の郊外にいる。とにかくこの気持ちを整理しないと。そう思い歩いていると、11Bがいた。その先には機械生命体の集団。私はまた気づけば突っ込んでいた。

「あんたこんな所で何してんの？」

こんな質問が来るのも当然か。でも気持ちの整理なんて言えるわけない。

「ただ通りかかっただけだ。それよりもお前、なんで機械生命体を見逃してる。」

「別にあんたと違って復讐心なんてないからね。これはある意味生きるためにやってる事。はあ、ラヴィも言ってたでしょ。自分の体をもっと大切にしろって。考えなしでドンパチやるなんて、あんた言われた事分かってる？」

自分の体を大切に。でも、これが私なんだ。私は背を向け走り出した。

第35話

エージエントside

うわあ凄いことになってるわね。目の前に先日の2Bと9Sとの戦闘で撃破された機械生命体とその影響でできた地下空間が広がっている。しかも何あれ？下の方に不思議な形をした機械生命体がいる。とりあえず無視、触らぬ神に祟り無しって言うしね。ん？よく見ると撃破された機械生命体の上に誰かがいるのが見えた。あんな所で何やってるのかしら？M700を構えスコップを覗きもうとしていた。

「わあッ！どう？ラヴィびつくりした？」

「びつくりしたー。なんだ11Bか。ところでどうしたの？連絡もなしにこんなところにいるなんて。」

「いやね、今日風が強いから顔に砂がかかるわ、砂煙のせいで敵が見えないわ大変で、あの程度狩れたし帰ろうと思って。連絡しなかったのは単純に驚かせようと思っただけ。」

コイツ・・・まあいいや。

「何しようとしたの？」

「あそこの上の人に人がいるみいでね、何をしてるのか見てみようと思ってるね。」

「で、なにやってたの?」

「それを今から見るところだったのよ。」

ため息をつきながらスコープを覗いてみると、どうやらヨルハ部隊らしい。あれ? 11Bから聞いた話と違う。ポッドがない。それに異様に周りをキョロキョロ見てるしなんか変な感じ。

「どう? どう? 何が見えてるの?」

「あれ、ヨルハ部隊ね。ねえ、11B? ヨルハ部隊っていつもポッドが随伴してるんですよ。見た所いない気がするんだけどどうかしら?」

11Bもえ? みたいな顔してる。そして、機械生命体の上部に目を凝らしている。

「ほら、貸してあげるから見てみなさい。」

11BにM700を渡し構え方を教え、スコープを覗かせた。11Bの疑いの目は強くなった。

「どう? いらないように見えるでしょ。こんな事あり得るの? それとも、特別な編成とか?」

11Bがライフルを返して来ると、思い切った表情で

「恐らくだけど、彼女たちは脱走を企ててると思う。」

「そう。で、どうするの？私としては別にこのまま放っておいても別にいいんだけど。」
「できれば、ある程度手助けをしてあげたい。どんな理由で脱走したかは分からないけど、脱走がバレれば捕縛されるか殺されるかのどっちかなの。捕縛されたら最悪で殺された方がましなくらい。」

なるほどね。だから、111Bはあの時あんなに必死だったのか。私達のころも、脱走する奴は海兵隊にいた頃たまにいた。でも、大体は軽い刑罰ぐらいな物だったけどね。ふと、横を見ると、111Bが震えていた

「111B大丈夫？私1人でいくわ。なにかあった時のために無線はオープンにしておくからヤバそうになったら来て。」

「分かった。ラヴィ気を付けてね。」

第36話

エーゼント side

そんなわけで私は巨大生命体の上を目指して登ってるわ。

「IIBそろそろ接触するわ。何かあったらよろしくね。」

梯子を上り、頂上についた。すると、シヨートヘアの子の方がこちらに気付いた。

「えーつとー」

もう一方の赤髪の子の方も気づいたようね。うわあ敵意剥き出し。誰かさんと一緒。

「なに？私達に何の用。」

「別に何も無いわよ。丁度見えたからね。ところでどうしたの？こんな目立つ所で。あ

なた達ヨルハ部隊よね。何かのお仕事？」

「そんなところですよー。」

「大変ね。流石にお仕事の内容までは聞けないわよね。」

軽く世間話してみてるけど、赤髪の子未だにこつち睨んでるのよねえ。どうしたものか。

「ねえ、あんた用がないならどっか行ってくれない？私達も暇じゃないの。」

かなり気が立ってるわね。流石に本題に入った方がよさそう。

「最後に一つ聞きたいんだけどね。あなた達のポッドは何処にいるの?。」

すると、一気に2人の顔が険しくなった。

「あんたには関係ないだろ。さっさとどっかに行ってくれ。」

「もしかして、あなた達脱走兵?」

2人は無言で武器を向けて来た。でも、ショートヘアの子の方は若干迷いが見えるけどね。

「武装展開、隊長に連絡!」

「は、はいっ」

「待つて待つて、私は別に追手でも何でもないわよ。」

「じゃあなんなの。」

「その前に、あなた達A2と11Bこの名前に聞き覚えは?」

「あるよ。質問を質問で返さないで。」

「あら、ごめんなさい。実は11Bに関しては今私と一緒に暮らしてるの。それでね、1

1Bが君たちがもしかしたら、とこんなわけ。」

「嘘です。11Bさんは先の降下作戦で撃墜され破壊されてボディも残っていないはずです。」

本当に死亡扱いなのね。でも、ボディが残ってない事については詮索されてないのね。

「おい、お前嘘をついたな。本当の事を言え。さもなければ殺すぞ。」

「へえ、私ってあつちじや死んだことになってるんだ。案外うまくいったのね。」

後ろに立っていた11Bに私はまた驚いた。

「どこから動いたの?」

「ラヴィがA2と私の名前を聞いた時。こうするなら言つてよ。私走つてきたのよ。」

これは失礼。さて、2人の方はショートヘアの子は信じられないって顔してるし、

赤髪の子は瞬きめっちゃしてるし。

「さて、これで証明できたわよね。どう?まだ納得できない?」

2人はコソコソと何かを話している。

「ねえラヴィに2人共話をするのは結構だけど、移動した方がいいわよ。ここじや嫌でも注目を集めるわ。」

確かにPlusスキャナーで一応周りを見ときましようか。

スキャン中

一応この辺りにはだれも、ん?あの2つの影どつかで見覚えが・・・

「検索:あの影誰だと思つ?」

「回答：あの影は恐らくヨルハ部隊員。この地域で活動している2B、9Sと推測。
推奨：速やかな移動。」

「おい！聞いてたでしょ。11B、2人を案内して。さあ早くここから離れて！急げ！」

第37話

エーゼント side

「おい！聞いてたでしよ。11B、2人を案内して。さあ早くここから離れて！急げ！」
3人は飛び降りると11Bの案内で拠点の方へと走って行った。さて、私も向かわないとな。

「あれ、ラヴィさんじゃないですか。こんにちは。」

「こんにちは。久しぶりね。2B、9S。」

よし少し時間を稼いでみよう。

「ラヴィさんこの辺りで僕たちのようなヨルハ部隊員を見ませんか？」

「見てないわね。なにかあったの？」

「いや、そのお」

「9S、ラヴィは見えてないって言ってる。これ以上の会話は時間の無駄。」

「いいじゃないの。もしこの後どこかでそのヨルハの人と会った時のためにさ。」

「極秘事項だから話すことはできない。行くよ。9S」

でも、ヨルハ部隊員で極秘事項って絶対あの2人のことよね。これ以上の足止めも無

理そうね。

「そう。ごめんなさいね。任務頑張ってるね。」

「はい！またいつか！」

そうして、私は拠点の方へと歩き出した。

「目撃情報が無いとなると、後の2か所のどこか……」

ん？ 最後の方は聞き取れなかったけど、後2か所って聞こえたけど、大丈夫よね。とりあえず11Bに連絡しよう。

11B side

「おい！聞いてたでしょ。11B、2人を案内して。さあ早くここから離れて！急げ！」

私達3人は急いで機械生命体の上から飛び降りた。

「ほら！ここを離れるわよ！ついてきて！」

「おい！これから何処に行くんだ教えるよ！」

「私達の拠点よ！無駄口叩いてないで走って！」

つたく、なんでこいつらは助けてあげてるのに感謝って物がないのよ。

数分後

「さあ着いたわよ。入って。」

「ホントにこんな所で隠れられんのかよ。」

「ちよつと22B、折角助けてもらつてるんだし、落ち着きましようよ。」

「64B私は落ち着いてるよ。まだ信じられないんだよ。目の前にいるのが11Bだつてことがな！」

はあ、死人になるといろんな事が面倒になるわね。とりあえずラヴィが帰つてくるまで暇を潰そう。

「改めて自己紹介するわね。私は11Bあなた達と同じアタッカータイプよ。前の第243次降下作戦で墜落を装つて脱走。今は死人つてことになつてるんでしょ？はい次、口の悪い方から。」

あからさまに睨んできてるけど、折角助けてやったのに感謝の一言もないのはそつちだからな。

「22Bだ。とある秘密を見ちまつてこうして脱走した。」

「もう、64Bです。タイプは皆さんと同じようにアタッカータイプです。助けていただきありがとうございます。私も同じくとある秘密を見てしまつて部隊のみんなで脱走して今に至ります。」

なるほどなあ。もし、私も誰かと一緒だったら、あんな風にならずに済んだのかなあ。

「へえ、ん？今64B隊のみんなと一緒にって言った？部隊のメンバー教えてよ。」

「いいですよー。22Bと私それに隊長の8Bの3人です。」

「その隊長の8Bさんは何処にいるの？」

「私達と隊長は別行動してるんだ。多分隊長の方の潜伏場所はバレてないだろう。とりあえず私達の位置を報告しないと。」

C A L L

あ、こつちもラヴィからだ。2人の名前と隊長の8Bがまだどこかにいること。そして脱走の原因となったヨルハの秘密があるらしいとね。

第38話

エージェント side

「11B、そつちはどう？ 拠点に着いた？」

「ええ、何事もなくてね。それで、今ちよつと話をしてみたんだけど、2人の名前は赤髪の口の悪い方が22B、シオートヘアの子が64B。脱走の原因はよくわかんないけど、ヨルハに関する秘密を見たとかで、部隊みんなで仲良しこよしって事らしいわ。」

「OK。こつちは若干の足止めも兼ねて喋ってみたんだけど、完全に脱走がバレてるっていいわね。」

「了解。そういえば2人のほかに隊長の8Bがいるらしいの。どうやら、別行動してるらしくて、それで今自分たちの位置を報告してる。」

「部隊単位の脱走はさすがにバレるわよね。それにヨルハに関する秘密って何かしらね。」

「そう、所で実はなんだけど、9Sが後2か所候補があるって言ったの。近くに来たときは、、、、「本当ですか!!!」、何かあったみたいね。」

こつちの会話が遮られるほどの64Bの声

「ごめん。ちよつと待つてて！」

11B side

「64B どうした、そんなに大声出して。」

「隊長の潜伏場所の辺りにヨルハ部隊員が2人うろついてるらしいです。」

「多分2Bと9Sでしょ。ラヴィによると、あんた達がいた場所の他に2か所候補があるらしいから目ぼしは付いてるんじゃない？」

すると、22Bが拠点の外に出ていこうとする。

「ちよつと何処にいくのよ。」

「あああん？隊長の事助けに行くんだよ。離せよ。」

「22B、落ち着いて！行ったら捕まってしまいます！」

「じゃあどうしろってんだよ！このまま隊長を見捨てろって事か？そんなことできるか！」

うーん正直私じゃどうしようもできない。でも22Bの隊長さん助けてあげたい気持ちもある。確かに口は悪いけど、仲間思いなのは良い事だから。私と違って、

「よし！ラヴィ！今から8Bの位置を送るから何とかこつちに連れてきて！」

エージエントside

「ねえ、こつちは2人に顔が割れてるのよ。もしかしたら、皆が危険になるかもしれない

わ。」

「そんなの覚悟の上よ！それに助けたら大事なヨルハの秘密を教えてくださいわよ。おい！これでいいわよね！」

「ああ！ほぼ初対面のあんたに頼む事になるけどお願いだ。どうか隊長を助けて欲しい。」

「私からもお願いします！」

みんな覚悟は決まってるのね。一応、鎌掛けたけど無駄な問いだったわね。

「分かったわ。位置を教えて。出来る限り静かにやるつもりだけど、もしもの時に備えて心構えだけはしてて。」

第39話

8 B s i d e

私達はヨルハにまつわるとある極秘事項を偶然知ってしまった。それを知った後私達は脱走を決意し、行動を起こした。脱走計画は順調だ。今は22B、64Bと別行動している。計画ではこの後、追手がいない事を確認して落ち合う予定だ。その時間まで私は廃墟都市の高架下の辺りで息を潜めている。数時間経った頃、ヨルハ部隊の2人が近づいて来た。この辺りで活動してるのは2B、9Sか。私の位置は恐らくはバレないだろう。だが、恐らく脱走はバレてる。だが流石に私達の潜伏位置はバレていないだろう。

「2B、この地点で最後ですね。さっきの場所はくまなく探しましたし、ここがダメならラヴィさんと話した所に戻りましょうか。」

「恐らくこの辺りにいる。」

マズイ。潜伏場所がバレてるようだ。2人は無事だろうか。そんな事を考えているうちに徐々に2B、9Sはこちらに近づいてくる。どうしようか。そう考えていると、

C A L L

「隊長、私達2Bさんと9Sさんにバレそうになったので心優しい方と11Bさんの案内で移動しました。ので位置を報告します。」

は???11B?どういう事だ?

「は?ちよつと待て。11Bは死んだはずだろ。それが生きてるってそんな事あり得るのか?」

「そうみたいです。それで今その拠点に匿って貰ってます。」

「あくとりあえず状況は理解した。こっちの状況だが今私がいる辺りで2人ヨルハ部隊がうろついている。」

「本当ですか!隊長の位置はバレないはずです。あ、ちよつと待ってください。」

後ろの方で22Bらしき声と別な声がする。どうやら11Bかどうかはともかく誰かに匿って貰ってるのは確からしい。

「すいません。どうやらすでおおよその潜伏位置がバレてるみたいです。隊長今の位置から移動できますか?」

「無理だ。後ろが行き止まりで前方にしか道がない。」

「不味いですね、あ、22B、落ち着いて!行ったら捕まってしまうす!」

「どうした。報告しろ。」

「22Bが隊長を助けようと外に出ようとして今11Bさんが抑えています。」

「じゃあどうしろってんだよ！このまま隊長を見捨てろって事か？そんなことできるか！」

マズイ22Bまでこつちに來られたら一網打尽にされかねない。なにせ相手は2Bだ。だがこつちもどうにかしないといけない。

「64B何とか22Bを押しえてろ。こつちは自分でどうにかする。やってみるしかないがな。」

「隊長!!!」

さて、ここまで運よく來たんだ。やってみるしかないな。

第40話

8 B s i d e

私は覚悟を決め2人の前に飛び出した。

「確認。逃亡ヨルハ機体の元隊長8b。推奨・捕縛」

「お願い！抵抗しないでくださいっ」

「うるさいっ。何もー何も知らないくせに!!」

ここで大人しく捕まっても私は殺させるんだ。捕まるもんか。

「報告。機体8bは近接戦闘特化型モデル。推奨・遠距離攻撃による破壊」

「破壊ー破壊ってー」

2人相手はかなりきついぞ。それにあっちはポッドがいるから遠距離に持ち込まれるとほぼ勝機はない。

数分後

ハアハアハア

さすがにキツイ。隙を作って逃げられるかも知れないが確実に追いつかれる、行く当てもない。

CALL

「隊長！11Bの仲間の方が助けてくれるみたいです。」

「ホントか？で、その11Bの仲間の奴つてのは使える奴なんだろうな。こっちの相手は2Bと9Sだぞ」

11Bの仲間そう言った瞬間2B、9Sの顔に驚きの表情が浮かんだ。だよな。死んだと思つてた奴が生きてたました。なんて普通あり得ないよな。

「11B？ありえない。彼女は生きてるの？」

「2Bそんな事あり得ません。彼女の死亡は司令部が確認してます。そちらの通信相手が誰かは知りませんがど分それ騙されてますよ。」

動揺したようだけど直ぐに何事もなかったように攻撃して来やがる。あ、マズイ。

その瞬間私は宙を舞っていて仰向けに倒れてしまった。そして目の前には2Bが止めを刺そうと刀を振り上げていた。

はあ、結局2人には合流できなそうだな。

カキンッ

何かが金属にぶつかる音がした。すると、止めを刺そうとしていた2Bは別の方向を睨んでいた。一体なんだ？すると、通信が入った。

「ねえ、いつまで日向ぼっこしてるつもり？支援するから隙を見て逃げて。」

エージエントside

11Bからデータが送られて来た。彼女よつぽどバレない自信があったのかしらね？これじゃ見つかったら逃げられないじゃない。

「ラヴィさん!!!」

今喋ってるのは64Bね。

「どうしたの？状況を知らせて。」

「隊長が2B、9Sと戦闘を開始。早急な救援を要請します。どうかお願いします…。」

「分かったわ。必ず助けるからそんな声しないの。ね？エージエントを信じなさい。」

急ぎましょう。何としても助けてあげないと。

数分後
私は8Bの潜伏場所が見える廃墟ビルの中にいた。M700を構えスコープを覗く。

さて、どうしたものか。8Bと2B、9Sは接近戦の乱戦状態で下手に発砲すると8Bにもあたりかねない。それに、いくら8Bを助けるためとは言え、2人を傷つけることはしたくない。しかも、機械生命体に対してはある程度のステルスが通用したけど、ヨルハのしかもポッドがいる相手にどれほど通用するのか。初弾命中を心掛けないと私もどうなるかわかったもんじゃないわ。確実なチャンスを待っているだけど、一向に来る気配がない。あ！2Bが8Bに強烈な一撃を与え8Bが宙を舞った。2Bは止めを

刺そうと刀を改めて構えていた。ここだ！チャンスは一度だけ。

スーウハーア パスツ

カキンツ

命中。2Bはこつちの方を睨んでいるが、見えているはずがない。まだ、8Bは仰向けに寝ていた。

「ねえ、いつまで日向ぼっこしてるつもり？ 支援するから隙を見て逃げて。」

9Sもこちらの方をキョロキョロ見ている。私は多少の申し訳なきを感じつつ射撃した。もちろん弾は外れるようにしている。8Bがこつちの方へ走ってくる。彼女を追跡しようとする2人に射撃を続ける。よし、釘づけになってるわね。こつちの方へ8Bが近づいて来たところに通信を入れる。

「ナイスタイミングだったでしょ。さあ、ついてきて私達の拠点に案内するわ。」

「なぜ我々に手を貸す。」

「あなたの大切な部下が切なそうな声で頼んできたからね。それにみんな覚悟はできてるみたいよ。」

8Bは下を向いて何も言わなかった。その様子を2人のヨルハ部隊員が見ていた。

「8Bじゃない方、腕に何かオレンジの光が見えました。」

第41話

エージエント side

「ここが私達の拠点よ。」

8Bを拠点に案内し、私も中に入った。

「隊長！」

「隊長！」

中に入るなり2人が8Bに抱き着いていた。もしかしてだけど、ヨルハ部隊って愛に飢えてたりするのかしら？

「お疲れラヴィ。ありがとうね。また私達の我儘聞いてもらって。まだ対して恩返し出来てないのに。」

「いいのよ。あの子達の笑顔が見れるだけで私としては満足だからね。」

3人の再会を喜んでいる様子を私達は、見守っていた。

「あ、おい！そろそろ離れろ。」

私達の視線に気づいた8Bが2人を離すと2人も恥ずかしそうに顔を伏せた。

「いいのよ。続けて貰っても。」

「さ、流石に恥ずかしいので・・・」

「さて、今回私達の事を助けて頂いて大変感謝している。」

「お礼なら私じゃなくあなた達の事に気付いた11Bに。」

8Bは改めて11Bの方を向き頭を下げていた。

「改めて一応自己紹介を。私はハヴィランド。通称ラヴィ。」

「死人扱い11Bです。」

「22Bだ。よろしく。ラヴィ、隊長を助けてくれた事感謝してる。」

「64Bといます。武器は槍を使います。よろしくお願いします。」

「そして、私が隊長の8Bだ。ラヴィ、助けて貰ったのに名前も知らなかった。申し訳な

い。」

「いいのよ。私も名乗らなかつたしね。で、8Bそんなに11Bが気になる?」

改めて自己紹介した後、8Bは11Bの事をじっと見ていたのだ。

「いや、あんたは本当に11Bなのか?バンカーだと撃墜されて跡形もなくなつた。つて事になつてるんだが。」

「本当よ。つたく一体どうしたら信じてくれるのよ?」

「すまない。私も64Bから11Bが生きていると言われた時は信じられなかつたな。

それに、2B、9Sも驚いてたし。」

「は?? 私を頭を抱えた。横を見ると11Bも頭を抱えている。／(^ o ^) \ ナンテコツタイ」

「なんで8Bはあつけらかんとしてるの? ねえ、バカなの? 22B、64Bもあちやちよみみたいな顔してる。」

「ど、どうしたんだ。なにか変なこと言ったのか。」

「隊長。11Bさんは死んだと思われてるんです。でも私達の目の前にいる。つまり、生きてますね。撃墜されたと思ったら生きてた。生きてたことを司令部に報告してない。そしたら、11Bさんは脱走したと思われると思うんですけど・・・。」

「……」までの説明を聞いて8Bはハッとした表情を浮かべた。

「本当に申し訳ない。ただ、死んだと思ってた仲間が生きてたら不思議に思うだろ。それに、その仲間が助けに来るなんて疑うだろ。でも、本当に2B、9Sは動揺してたぞ。」

「ちなみにその時の2人の反応は?」

「9Sは騙されてる。とか言ってたな。2Bはあり得ないとか言ってたけど、嬉しいんじゃないか?」

「は? え? ホントに何言ってるの?」

「嬉しいってどうやってたらそうなるわけ?」

「だって死んだと思ってた仲間がいきいたら嬉しいだろ。また生きて会えるんだぞ。」

なんか技術の進歩を感じるわ。はえ〜アンドロイドにも天然ってあるのね。11B
は地に頭を付け悶えていた。

「なんかもう怒るに怒れなくなっちゃったんだけど、どうすればいい?」

「私に聞かないで。よし、状況は分かった。この事は後回しにして、あなた達を助けた報酬をもらおうよ。」

第42話

エーリエントsode

「助けた報酬？一体何の話だ？」

「8Bあなたが助けるために22B、64Bが申し出てくれたの。」

「私の生存がバンカーにバレた可能性がでた。この時点でこっちにも何か利益が無いと釣り合わないの。」

8Bは一瞬考え

「分かった。その前に1つだけ、今から言うことは全アンドロイドの存在意義にかかわるものだ。これを聞けば本当の意味で戻れなくなるぞ。」

さて、どんなものが来るのかしらね。存在意義にかかわるって出生の話？

「まずはだな・・・」

そこから出た話は予想を上回るどころかそれ以上に凄い話だった。ヨルハ計画と言われた一連の計画それに基づいた作戦、出来事の時系列だった。最初こそ私と11Bは驚いたり反応したりしたのだが、後半になるにつれ何も言えなくなってしまうた。

「これが私達が知ってしまった真実だ。私達ヨルハやアンドロイドが戦い続けることに

疑問を持たずにはいられなかった。すべてが無意味に思えた。だから、脱走した。」
「ねえ、ラヴィイ? どう思った? . . . 同じ人類として意見を頂戴。」

若干言葉が震えていた。私は11Bの背中をゆつくりと落ち着かせるように擦った。
8B以下は私が人類だということに驚いていた。

「ま、まっつてくれ。あんたが人類 . . . ? 流石にこれは冗談だよな?」

「これはす、すごい発見ですよ。バンカーに報告 . . . いや私達脱走したんでしたね。」
はあ、またこれか。説明するのも面倒になつて来るわ。手っ取り早く済ませよう。私
は手招きし3人に心音を聞かせてあげた。3人は反応はそれぞれだったけど一応納得
してくれた。

「さて、私が人類つて事に納得してくれたみたいだし話すわよ。まず、ヨルハ計画に関し
て、聞いていて思ったのはプロパガンダにしては、大した脚本だなと思つたわ。人類が
生きてるつて事を作り上げるならこんな面倒な事をせずに人類は生きてますと声高に
宣伝すればいい。それこそ、月面会議からくる音声ログこれだけでも十分よ。でも、あ
なた達ヨルハ部隊という存在が作り出された。それつてどういう事なのかしらね。ま
あ、インテリ連中のしかもこつちの世界の話なんて、私にだつてわかんないわよ。確か
めようもないし。」

「じゃあ、ラヴィイこれから私達はどうすればいいと思う?」

皆を見ると下を向いたり険しい表情をしていたり、はあ、硬いわね。私は4人を抱き寄せ頭をわしやわしやした。

「みんな自分の好きなようにすればいい。例えばそうね、今私は疲れたから寝たいわね。こんなもんでいいのよ。」

「ラヴィさん？ふざけてます？確かに私達の事を慰めてくれるのは嬉しいですけど、もつとこう真面目に……」

「あのね。あんた達が思ってるほど人類って賢くも偉くもないものよ。ほとんどの人類は自分は何をしたいのか。これを考えて行動してるの。強いて言うならそのやりたいことをやりたい理由が自分のためか、他人のためか、そのやりたいことは近いことなのか、遠い先の事なのか、それぐらいの違いよ。さあて、話し疲れたし私寝るわよ。お休み。」

私が寝る体制に入ると11Bがいつものポジションに入り、まねして3人も寝る体制に入ったのだった。

第43話

2B、9S side

「8Bじゃない方、腕に何かオレンジの光が見えました。」

「銃を使用しているため、レジスタンスであると推測。」

「推奨：レジスタンスのキャンプでの聞き込み。」

「そうですね。2B移動しましょうか。」

数分後

レジスタンスキャンプ

「ん？どうした何かあったのか？」

「実は確認したいことがあって・・・先ほど僕たちは、レジスタンスキャンプから物資を盗難したというヨルハ部隊を捕縛しようとしていたのですが・・・」

「ちよつと待て、ヨルハが物資を盗んだ？そんな件は初耳だが、」

「・・・え？」

「この資料は分散管理してるけど、そういう報告は受けてないな。」

「・・・そうですか。それと、お聞きしたいのですが腕にオレンジ色に光るものを付け

たレジスタンスの方ってご存じですか。」

「オレンジの光る物を付けたアンドロイド？すまない、聞いたことが無い。」
「すいません。ありがとうございます。」

CALL

「司令部に通信。こちら9S応答せよ。」

「こちら210。どうしました？」

「実は逃亡したヨルハ部隊についてなのですが……」

「はい。こちらでもその情報は確認しました。」

「しかし、司令官から言われているような盗難事件はレジスタンスキャンプでは発生していませんでした。一体……これって……」

「……当該案件へのアクセスはできません。司令官命令によるものです。」

「え？どういう事です？」

「11Bの件に関してもこちらで対処します。9S気を付けて。」

エージェントside

朝いつもの様に目を覚ました。いつものルーティンをこなした後11Bを起こす。その後3人を起こそうと目をやると、互いに手をつないで寝ていた。

「おはようラヴィ。どうしたの？」

「いや、なんか微笑ましくてね。」

11Bも寝ている3人をみて納得したようで顔が緩んでいた。そして、3人を起こそうと体をゆすつても起きない。

「きつと疲れてるのよ。寝せてあげなさい。」

「どこ行くの?」

「食材を調達にね。なにせ一気に人数が増えたから量が足りないのよ。それに、今までの傾向を見ると、ヨルハってのは大喰らいのようだしね。」

11Bの顔が赤くなった。自覚はあるようね。

「私も手伝おうか?」

「別にいいわよ。それに、この3人が起きた時よろしくね。」

私は拠点から出て、M700を構え静かに呼吸を整え鹿の頭を撃ちぬいた。そして、近づいて絶命を確認して持ち帰る。ああ、もつと原始的な食事じゃなくて文明的な食事がしたい。フレンチのコース料理とは言わないけど。早く、小麦育てないとな。

第44話

EーJエンツト side

拠点に帰ると3人共起きていた。私が担いでいる鹿に驚いていたけど、とりあえず無視して鹿をつるして3人の前に戻った。

「おはよう。よく眠れた？」

「おはようございますー。ところでさっきの鹿は一体・・?」

「ああ、それね。今保存してる量じゃあ、あんた達3人の食べる量が足りないのよ。」

「私らが食べる? 私らアンドロイドは人間のアんたと違って食事は必要ないんだぜ?」

「他の2人もそれが当たり前のようだ。前にもしたわね。こんなやり取り。ちらつと

11Bを見るとパツと目を逸らした。

「前に、似たような事を言つてた脱走兵がいたんだけど、食べ始めたらすぐに虜になつたわよ。」

3人が一齐に11Bを見た。

「ふふ。まあ、とりあえず皆座つて。今後の方針などを決めるわよ。」

「了解した。」

「まずは、8Bの可愛いミスによって11Bの生存がバレてしまったことについて。」

8Bは申し訳なさそうに頭を下げた。

「聞いたときは頭を抱えたけど、なったものは仕方ない。切り替えるわよ。ほら8Bも顔を上げてね?」

「本当にすまない。」

「もういい。許すわよ。それに今まで脱走がバレてなかったのが奇跡だったんだよ。」

よかった。仲良くやれそうね。

「で、どうします?」

「とりあえず、ここら辺を徘徊してるヨルハ部隊と遭遇したらできれば逃げてほしいかなー。」

「なんでだよ。やらなきゃこつちがやられるぞ。」

22Bの意見も分からなくはない。

「それにブラックボックス信号をポッドに探知されれば逃げようにも逃げられませんが、私も22Bの案が妥当かなと思います。」

おーつと?今ここで初めての情報がでたぞー?でも、GPSのようなりアルタイム追跡はできないと仮定しても、ヨルハ同士ならそういう事もできるのかしら?

「ねえ、そのブラックボックスってのがどんな物あまり知らないんだけど、発信してる信

号を探知してるのよね?」

「ええそうです。それにこれはいわば私達の心臓です。鼓動したりしませんけどね。」

「ならそれをハッキングして、送信する信号の周波数を変えればいいんじゃない?」

4人はええ?みたいな顔をしてこつちを見るのよねえ。

「あれ?私の言ってる事って非常識だったりする?」

「いやね、ラヴィの言ってることは十分非常識んだけどさ、そもそもラヴィってハッキングとかそういう技術ってあるの?」

「あるわよ。ないならこんな提案しないわよ。で、他にいい方法は?」

全員特にないらしい。

「よし!ならこれで行きましようか。まずは誰からいく?」

ん?どうしたの皆そんなに互いの手を握って。仲いいわね。

第45話

エージェントside

「よし！ー11Bからいきましようか。」

どうやら11Bはものすごく緊張しているらしい。

「ラヴィ大丈夫？64Bの言う通りこれは私達ヨルハにとつての心臓なの。ラヴィを信用してないって訳じゃないんだけど、ちよつと抵抗がね。」

「なるほどね。じゃありラックスするように何か歌か音楽でも聞く？」

「でも、この中で誰も音楽を奏でたり歌を歌ったりなんて出来ませんよ？」

私はエージェントウオッチをいじりながら

「うーん、万人受けするような曲入ってたけなー。あ、あつた。」

「再生 リパブリック賛歌」

とりあえずの選曲だけ4人共リズムに合わせて若干揺れている。

「さあ、11Bやるわよ。」

11Bは一瞬ビクツとしたけど、落ち着いた様子で私の方に体を預けて来た。私はエージェントウオッチを11Bの近づけハッキングを開始した。システムへの侵入は

あまり苦勞しなかった。そして、ブラックボックス信号の発信周波数を変更する。

「ok終わったわよ。次は？」

8 Bが私の方に体を預けて来た。同じように周波数を変更する。その次に64 B、最後の22 Bには念を押されてけど特に何事もなく全員分終了した。

「ラヴィすまない。これで他のヨルハ部隊に遭遇しても逃げられそうだ。」

ふうう。とりあえず終わったから曲止めましようか。

「あーちよつとー！」

「ハイハイ一旦おしまい。また近いうちに別の曲も聞かせてあげるからね。」

22 Bがこつちをじつと見て

「約束だぞ!!」

やべえ。なんでこうアンドロイド達って母性をくすぐられるのかしら。

「8 B、気持ちちは分かるが落ち着け。大事な話をするんだからな。」

その言葉で他3人も落ち着いたようだ。

「じゃまず初めに、私としては8 B達の考えを尊重したいと思ってるの。折角自由になつたのに、それを縛るような事をするつもりはないわ。だから、遠慮せずに話して頂戴。いいわね。」

私の言葉に8 Bが安堵の表情をしていた。ごめんなさいね。助けた後報酬なんて

言っちゃったから勘違いさせてしまったかしらね。

「わかった。参考までに111Bはどうしてラヴィと一緒に行動してるんだ？」

「私の場合、ラヴィに命を救って貰って、別にやることも決めてなかったから恩返しも兼ねて一緒にいる事にしたの。まだ、全然恩返し出来てないけどね。」

「なるほどですね。いつかその時のお話も聞きたいものです。」

まだ111Bを拾ってからそんなに経っていないのに、もう懐かしく感じるわね。あの時はあの時で色々あったわねー。ね111B？111Bは目を逸らしたのだった。

第46話

8 B、22 B、64 B side

「11 Bの事はよくわかった。実を言うと私達は脱走した後の事を決めてはいたんですがすでに狂ってしまっている。それに、それこそA2の様に一生追われる身だと思つていたんだが、お陰様で本当の自由が手に入ってしまった。この自由をどうすればいいかわかつてないんだ。」

「8 Bが言つてゐることは良くわかったんだけど、他はどうなの？ほれ何か言つてみ22 B。」

22 B落ち着いて、ね？はあ、11 Bさんもなんで22 Bに突つかかるんですかね。

22 Bは軽く苛立つてゐるけど、押さえられているみたい。

「私？私はーとりあえず隊長達についていくよ。みんなと一緒に居ようつて決めただ。」

22 Bーそれはあんまり人前で言わないでほしいかなー。私も若干恥ずかしい。隊長もですか。同じですね。あれ？11 Bさん、ラヴィさんどうしたんですか？2人共太陽を見たような仕草をして、ここ屋内ですよ。

「へ、へえ素敵な約束ね。次64B。」

「私はですね、どこか落ち着いた所でゆっくりしたいですね。でも、もし隊長や22Bが嫌なら皆の方針に従います。」

隊長達の反応はどうですかね。実はこれ今初めて話してるんですよ。でも、これが通らなくてもみんなと一緒に居ればいいです。

「64B、今私はその話を初めて聞いたがとてもいいと思っただぞ。」

「今初めて64Bのやりたい事聞いた気がする。でもいいな。私もその案に賛成です。隊長。」

すると、ラヴィさんが何かを考え出した。そして、ゆっくりと口を開けた。

「じゃあ、私から提案があるんだけど聞いてくれる？」

エージェント side

「じゃあ、私から提案があるんだけど聞いてくれる？」

3人共大きく頷いてくれた。

「実はね、あなた達を拾う前に私、戦いを嫌った平和主義の機械生命体達が暮らす集落に行つたの。そこでね、こんな物を手に入れたの。」

私は、小麦の種が入った袋を見せた。

「これは植物の種ですよ。これがなんですか？」

「これは小麦の種なの。これを育てて加工すればパンが作れるのよ。そうすれば普段の食事のグレードがあがるのよ。」

反応は様々だ。11Bはグレードが上がると聞いて凄いわくわくしている。それに對して他3人の反応はいまいちな物だった。

「おい、まさか、これのためにその機械生命体共の村で暮らさせて事か？冗談キツイぜ。それに私らアンドロイドは食事は基本的には必要ない。あんたには恩があるけど、これは割に合わないぞ。」

なんか既視感あるわね。そう思わない？11B？私は微笑んで11Bを見るとまた目を逸らした。

「そうかもね。でも食事は大切よ。あなた達にとつては必要ないと今は思っているかもしれないけど、食べてみると考えも変わるかもよ。」

「ホントかあ？おいそこんどこどうなんだよ。11B？ん？どうしたんだ、下向いて。」

11Bは小さな声で何かを言った。まあいいわ。早速食事の準備を始めましょう。3人の歓迎も兼ねて盛大にやらないとね。

第47話

エージエントside

私は今食事の準備をしている。今日の献立は11Bが初めて食事した時の様に豪華バージョンである。

「ねえ、焼き方の指定ある？」

「私は、この前のレアが好きだけど、一応2種類お願い。」

私は肉を焼いていく。焼く音に混ざって聞こえないが11Bもある程度仲良く出来てきているようで何よりだわ。

さて、できたわよ。机に並べると、露骨に8B達の唾を飲みこむ音が聞こえた。

「どうだ？22Bこの時点で降参した方が身のためよ？」

なんか11Bが凄い悪そうな顔してる。そして、22Bは必死になんか耐えてるし、どんな状況よこれ。まあいいわ。

「さあ、どうぞ召し上がれ。」

私が言い終わる前に食べ始めていた。

「そんなに急いで食べると詰まらすわよ。」

「ラヴィさんこれ凄い美味しいですね!!!」

「ああ、64Bと同意見だ。こんなに美味しいなんて知らなかった。」

「口にあったようでよかったわ。で、なんで11Bと22Bは互いの事見つめ合いながら食べてんの?」

「ラヴィ私やつぱりこの肉の柔らかさが好きだわ。それでね、私22Bがあまりにもご飯の事をバカにするから、食べてみて美味しかったら私に謝るって事にしたの。」

「へえ、22Bどう?」

22Bは手に肉を持ちながら、

「あなたの料理をバカにしてすまなかった。これはすつごく美味い。それと、ごめんな11B」

そういうと、22Bは素早い手つきで最後のローストビーフもどきを食べた。

「おい!それ私の!!!」

「ほらほらケンカしないの。」

なんやかんやで全員食べ終わり皆ある程度落ち着いた所で私は切り出した。

「どう?私の案に乗ってくれる?」

「わかった。食べてみるとこれには十分な価値があると思えるな。私としてはラヴィの提案に乗りたい。」

「私としても願ったり叶ったりですね。」

「私もこの話に乗った。」

「OK。それじゃあ、一旦見学ついでに、挨拶にいきましょうか。くれぐれもヨルハに気を付けてね。」

私達はパスカルの村へと出発した。

パスカルの村入り口

「じゃあまずは私が挨拶してくるからここで待ってて。許可が下りたら連絡するわ。」

私は村の中に進んでいった。特に警戒されている様子もない。

「あ、この前のお姉サン。」

「あら、久しぶりね。元気にしてた？」

「ウン！今日はどうしたノ？」

「パスカルはいる？」

「居るヨ。呼んデ来てあげル。」

あの子が奥にいき少し待っているとパスカルが来た。

「こんにちは。何か御用でしょうか？」

「実はね……」

第48話

エージエントside

「こんにちは。何か御用でしょうか？」

「実はねここに移住したいって言う人達がいるの。ちよつと訳アリなんだけどね。」

「ええ、私としましては歓迎しますが、その訳アリとはどういう事でしょうか。」

「今、村の外にいるのよ。見た方が早いと思うから呼んでもいいかしら。」

「構いませんよ。」

「ごめんなさい。少し待ってて。」

私は村の入り口に戻った。

「皆ついてきて。くれぐれも敵対行動はしないでね。」

そして、私達は村の中に4人を連れて戻った。村の機械生命体達は動揺するでもなく11B達を歓迎しているようにも見えた。

「こちらの方々ですか？」

「いや、右の11Bを抜いて順に8B、22B、64Bの3人よ。」

「見た所ラヴィさん以外はヨルハ部隊の方ですよ。訳アリとはこの事でしょうか？」

「それもあるのだけど、実はこの子たちヨルハ部隊を脱走したの。それを私が保護したの。そしたら、戦いから離れてゆっくり暮らしたいらしいの。それでここを思い出したの。ダメかしら？」

パスカルは顔に手を当てて考えている。今更だけど機械生命体よりも人間味があるわね。そんな事を考えているとパスカルが口を開いた。

「わかりました。この村は戦いを嫌った平和主義者が集まった村です。戦いが嫌なのは私達もヨルハの皆さんも変わらないんですね。細々とした村ですがよろしくお願います。」

「こちらこそこれから世話になる。」

「おねがいますー。」

「おねがいます。」

3人が頭を下げた。以外にも22Bも礼儀がしっかりしていた。

「こちらは無理なお願いをOKしてもらって大変ありがたいわ。それで、これは私からの我儘なんだけどこの子たちにある植物を育てさせてほしいの。」

「ある植物ですか？」

「これよ。」

私は袋を開け、中をパスカルに見せた。

「これは小麦の種ですか・・・?」

「そう。これを育ててみたいの。諸事情があつて私には時間が無くて。我儘を言いすぎだつて事は分かつてるの。ほかの事で埋め合わせもしたいと思つてるからどうかお願いできないかしら。」

「わかりました。植物の栽培には私も興味があります。私や村の皆も参加しても宜しいでしょうか。」

よし、これで話はまとまつた。私が手を差し出すとパスカルは手を握つてくれた。彼の手はゴツゴツしていたけど何処か温かさを感じた気がした。

「じゃあ、色々準備して5日後あたりになるわ。もし前後する時は連絡するわ。今日は私達の我儘を聞いてくれて本当にありがとう。」

「いえいえこちらこそ。」

こうして私達は村を後にした。

「さあ、お腹すいたからかえつてご飯食べましょ。」

「あんたはブレないなあ。」

そして、4人は笑い出したのだった。

第49話

エージエントside

「あの後私達は拠点に帰ってご飯を食べ私は明日の動きを説明した。」

「明日はいつもより早めに起きてね。8B達の分の銃の調達と他に目ぼしいものが無いか探索に行くから。」

「私達は別にポッドなしでも戦闘できるが?」

「11Bの生存もヨルハにバレてるんだから、いつ戦闘になってもおかしくないのよ。その時に遠距離で攻撃されたら対処できないでしょ。それに銃の扱いが美味ければ戦術にも幅ができるのよ。」

「11Bさんは銃を持ってるんですか?」

「持つてるわよ。」

「11Bは私が以前渡したショットガンを取り出し、先を折りその後戻した。」

「まあ、自分のスタイルに合うものが見つかればの話ね。明日も早いしもう寝るわよー。」

翌朝

いつもの様に目覚め、身だしなみを整える。そして4人を起こすのだが11Bは一回で起きるのに他3人はなかなか起きない。そのため、2人でゆすつて何とか起こした。「ほら起きた起きた。焦らなくていいから準備してくれる?」

3人は徐々に起きて準備を始めた。かわいい。64Bが22Bの髪を整えてあげて。そして、全員の準備が整った。

「さて、出発するわよ。皆屋上に上がって頂戴。」

「屋上? ラヴィ入り口じゃないの?」

「アレもたまには飛ばしとかなないとガタが来るのよ。いいから行った行った。」

私は屋上に着くとUH—1Yに被せてあったブルーシートをはがした。

「ラヴィ、これは何だ。」

「UH—1Yよ。今日はこれで行くわよ。これなら物資を満足に持つて帰れるわよ。」

皆が乗り込んだの確認するとパイロットヘルメットを着けてエンジンを稼働させ出力を上げていく。

「!!」

22Bが何か言っているけれどまったく聞こえない。私はヘルメットの無線部分を指で数回叩いた。それに気づいた4人が無線を入れてくれた。

「プロペラのローター音がうるさいから無線を使うわね。で、22Bなんだって?」

「この横にあるやつなんだ？ポッドに似たような射撃機構に見えるが同じ奴か？」

「悪いわね！ポッドの中身を私見たことないのよ！」

「ラヴィ、なんで叫んでるの？私達聞こえてるよ？」

え、ヨルハの耳つてノイズキャンセリング機能ついてんの？さすが未来。技術の進歩つてすげー。

「そろそろ着陸するわよ。」

そのまま何事も無くへりは着陸した。

「新鮮な体験だった。」

「あんたよくこんな骨董品動かせるな。」

「人類がいた頃の乗り物に乗れてよかったです。」

「私達の頃はこれが主流の一つだったのよ。まずはここからね。」

第50話

エンジント side

私達はまずU H—1 Y ヴェノムを見つけたモスボール基地を探索していた。ここにはヘリの予備部品の調達ためね。

「あれと似たような機体で錆びてない状態の良いものがあつたら教えて。」

私も探してみるけどなかなか使えるものが見つからない。

「ラヴィー！これどうかな！」

11Bから呼ばれて行ってみると一部錆びているけどある程度状態の良い機体だった。

私は工具を片手にエンジン部分を開ける。良かった使えそうな部品が結構あるわ。部品を外した。

「よし。こんな物ね。さて、次に行くわよ。」

「あんたつてホントに器用だよなあ。」

「ふふ。ありがとうね。」

22Bが照れている。褒められるの慣れてないのね。

「さて、どつちかつて言うところちが本命。ここでは爆薬と銃の調達ね。危ないものもあるかもしれないから気を付けて。それに、銃の部品を見つけたら錆びてない奴は片っ端から回収して。」

そうして、皆散会して動き出した。なにかいいものはあるかしらね。

数分後

これは・・・60ミリ迫撃砲ね。かなり埃をかぶってるわね。まあ当然か。近くにはいくつか砲弾も。でも、これ当然だけど期限切れてるわよね。一応危ないけど回収しましょうか。上手く行けば中から火薬を抜いたりできるかも。その他にもいろいろできるしね。ほかに何か目ぼしいものもないわねえ。ほとんどは錆びてしまってるし。

「みんな大体終わった？そろそろ集合しましょう。」

そして最初に分かれて場所にみんな集合した。それぞれ、まずまずの成果があったらしい。

「みなさんも大量ですね。ラヴィさんこれで終わりですか？」

「そうですね。帰りましょうか。」

へりに乗り込み帰還していると、何やら下が騒がしい。レジスタンスが慌ただしく動いている。

「なにかあったのか？見た感じ下の連中は忙しそうだ。」

22Bの疑問にみんな頷いた。

「拠点に着いたらデボルに連絡してみるわ。とりあえずこのままでも目立つだけだからさっさと移動しましょう。」

その後は何事も無く拠点に着いた。姉妹に連絡入れてみましょうか。

CALL

「あ、ラヴィさん久しぶりですね。ちよつと待つてください。おくいデボルー。ラヴィさんから。」

通話越しにドタドタ足音が聞こえて来た。

「ラヴィ！久しぶり！元気にしてた！無理してない？」

「デボル・ポボル久しぶりね。こつちも元気にやつてるわよ。」

「で、ラヴィさん何か御用でしょうか？」

「実はさつきヘリで拠点に戻ったところだったんだけど、上からみてたら下が騒がしそ
うだったから何かあったのかなと思って。」

「あゝ、その件ですか……」

第51話

エージエントside

「実はさっきヘリで拠点に戻ったところだったんだけど、上からみてたら下が騒がしそ
うだったから何かあったのかなと思って。」

「あく、その件ですか・・・。」

ポールの説明によると、レジスタンスの空母が補給のために寄港する予定だったのだ
が機械生命体の攻撃に遭ったため、救援のために付近のヨルハ部隊をかき集めた。そし
たら、機械生命体側の巨大兵器出現、EMP攻撃により多数のヨルハ部隊に被害がでた
らしい。

「これでも、ある程度の整合性は取れてる情報です。」

「それで、あなた達アンドロイドはこの後どうするの?」

「いつもと対して変わらないわ。どうせ私達の仕事なんて雑用みたいなもんだし。」

「ちよつとデボル!」

「いいじゃない。2人共私の前くらい愚痴言っても怒らないわよ。また会えるといいわ
ね。」

「じゃあねラヴィ。」

姉妹との通信を終えた私は下の階に降りて姉妹との通信内容を話した。

「へえ、私ら運が良かったのね。」

「EMP攻撃とは。最近機械生命体が賢くなってるのか。」

それぞれさまさまな反応をしている。11Bと8B達の見解が違うのは脱走の理由が違うのもあるのかしらね。

「とりあえずみんな生きてた事に感謝しつつ、こつちも始めましょうか。みんな回収した物をみせて。」

みんなが回収した物を広げていく。大体は銃の部品だけど一部、砲弾やロケット弾が混ざってる。錆びてないとは言えよく爆発しなかったわね。

「OK、順にやっていきましようか。まず、砲弾・ロケット弾と銃に分けて。後、弾頭の扱いには気を付けて。下手すると吹っ飛ぶから。」

「え・・・」

大丈夫よ64Bよつぽど変なことしなかったら爆発しないから。

「よし、分け終わったわね。ってみんなどうしたの？」

「あんたが怖い事いうからじゃねーか。すげー緊張したぜ。」

「それ、へりに乗せてる最中に爆発しなきゃよつぽどなきゃ爆発しないわよ。」

「ラヴィのその凶太さは一体どこからくるんだ。」

8 B それは長年の勘と経験つてやつよ。

「わかったわよ。これから私ジャツカスのところに行つてくるから戻つてくるまで休憩でいいわよ。」

「ありがとうラヴィ、助かるわ。」

私は集めた各種砲弾を持って拠点を出た。

数分歩いて砂漠の入り口についた。すると、ジャツカスがこつちに気付いたようで、「やあーラヴィ久しぶりじゃないか。君が来るのを首を長くして待っていたよ。」

「久しぶりねジャツカス。それにお兄さんも。」

「あんたか、久しぶりだな。てつきりもう来ないかと思ってジャツカスをなだめる準備をしてたんだが必要ないみたいだな。」

「そうみたいね。さて、ジャツカスあなたに頼みたいことがあるの。」

「なんだい？」

「この中から火薬を抜けないかと思つてね。じつは作りたいたいものがあるんだけど、火薬が大量にいるのよ。」

私は砲弾を渡した。

「大丈夫だ。これ位ならあまり時間はかからない。」

そう言つて作業を始めていく。ええ：普通砲弾の処理つて慎重にやるものだけど、彼女の手つきは凄いはやい。

「良ければ少し質問に答えてほしい。」

「いいわよ。」

会話もできるつてどういふ事よ。そんな風に彼女の腕に感心していた。

第52話

エージエントside

「その腕についてるのは何だい？」

「どうやら、エージエントウオッチについて聞きたいらしい。まあ、見た目派手だしね。でも、変にしやべる必要もないか。」

「これの事？これはただの腕時計よ。オレンジの光を出してるし、派手に見えるのよね。」

「なるほど、にしても凄い見た目の腕時計だ。これなら、遠くから見ても君を見つけられる。そんなにかっこいいならもつと見える位置につけたらどうだい？」

「いいわよ。それに私目立つの嫌いだから。この時計も大切なもので、普段使いにも丁度いいから身に着けてるだけよ。」

「そうかい？私はかっこいいと思うよ。それに、君を見つけやすくもなる。だから、もつと下の方に位置をづらしてもいいんじゃないかな。」

「おかしいわね。普通、偏見だけど学者つてのは身だしなみに気を遣うものかしら？それに、妙にオレンジの光の事を褒めるし、ちよつと鎌掛けてみようかしら。」

「そうねえ、そういうならちよつと位置を下げてみようかしら。あ、そうだ！私、あの辺りまで行つてみるから、見えるかどうか教えて頂戴。」

そう言つて私は少し離れて場所から手を振りその後、ジャツカスの場所へと戻つた。

「どう？遠くからでも見えた？」

「ああ、昼間だから光はみずらかつたかが夕方なら問題なく見えるだろさ。」

夕方ねえ。もしかして、8Bを助けた時見られたかしら？あ、それでレジスタンスに情報提供を求めてるとかかしら。

「そう。で、なんでそんなに私のこの事気になつてるのかしら。」

「いや、別に目立つから気になつただけだし。」

あ、一瞬彼女、何か変わった気がした。これは何かあるわね。

「嘘ね。偏見だけど、あなた普段人の身だしなみ褒めたりしないでしょ。誰に言われたの？」

「いやあ別に何もによ。本当さ。」

案外すぐに言わないわね。どうしようかしら。彼女かなり腕が立つし関係は大事にしたい。それに、変なことをすれば答えを言っているようなものだし……仕方ない。あれを使いましょうかね。

「そう。ところで前にあなたコイツの作り方気になつてたわよね？」

私はパイプ爆弾を出して彼女の前でちらつかせる。凄いい。目がパイプ爆弾を離さない。

「もし、教えてくれるなら、私もお札に教えよるわよ。さあどうする？」

「いやーでもこういうのは良くないっていうか・・・」

「ふん。ならいいわ。そうね、さっきのお兄さんに聞いてみようかしら。」

「待ってくれ!!分かった。誰に言われたか答えるよ。」

「ふふ。素直な気持ちは大切よ。」

第53話

Eーエージェント side

「待ってくれ!!分かった。誰に言われたか答えるよ。」

「ふふ。素直な気持ちは大切よ。」

「最近あったヨルハの脱走事件の調査に来たらしい。以前2B・9Sが8Bを捕獲しようとした際に妨害にあつたらしい。それで、その犯人がオレンジの光を発している何かを見たらしい。その犯人の目撃情報がないかとここに数日前に聞きに来たんだ。これが全てだよ。」

なるほど。見た所どうやら嘘は言っていないようね。

「ありがとう。はい、これ報酬ね。」

ジャツカスは渡した図面を受け取ると、うつとりした様子で図面を眺めていた。

「ああ、その何て言うかいけない事だとは思っている。でも好奇心には逆らえない。私はあ、私はあ」

「なんかすごい葛藤始めたんですけど。とりあえず私は違うと何とかでつち上げないと。」

「ジャツカスごめんさい。実は私知つてたのよ。この話。ここに来るまでも何人にも同じ事言われたし、追跡に来たヨルハ部隊のえーつと誰だっけ。」

「16Dだよ。」

16D・・・？確か11Bの後輩よね。面倒事になる気がするわ。

「そうそう、16Dね。彼女にも確認されたわよ。何も言われなかつたけどあれは疑われてるのかしら？まあいいわ。どうせ犯人じゃないし。ところで・・・」

私はジャツカスに近づき耳元で囁くように

「お詫びも兼ねて私がこれから作る物の手伝いをしてくれない？勿論作り方もおしえるわよ。」

すると、ジャツカスは一瞬身震いし目はうつとりしていた。

「いいだろう！その話乗ったよ。」

「ありがとう。じゃあ、近いうちに連絡するよ。」

こうして私は砂漠を後にした。

16D side

私は今レジスタンスキャンプにて先日発生した8B以下2名の脱走兵の行方、またこの地区担当の2B・9Sが8Bを捕縛を妨害した者の調査を行っています。

「16Dさ〜ん。どうです。何か掴めました？」

「ああ、9Sさんですか。あなた方に本件へ関与する権限はありませんのでお教えすることはできません。」

「そうですか。でも気になるんです。死んだはずの11Bさんが生きているかも知れな……」

「黙ってください。先輩は降下作戦に参加して撃墜され 跡形 もなくなりました。教えてください。」

「でも、あの時8Bは確かに11Bと……」

「跡形もなくなりました。何度も言わせないでください。」

すると、2Bさんが戻ってきました。

「いくよ。9S。私達にはどうしようもできない。」

「2B!」

「16D、9Sがすまない。」

そうして、2人は任務へと赴いていった。先輩、もし生きてるなら私の手で……

オマケ

「ジャツカス、どうだった。」

「正直なところどちらとも言えない。」

「でも、マークぐらいされてるんじゃないか。俺だったらそうするね。」

私にとっては彼女が犯人だろうが関係ない。それより、彼女から貰った凶面で早速試作だ。

第54話

エージエント side

「ただいまー。」

「おかえりー。」

私はあの後何事も無く拠点に帰った。

「あら、みんな回復したみたいね。じゃあ次行くわよ。」

「おい、また危険な物をいじったりしないだろうな。」

22B だって結構はつきり物事をいうわよね。まあ、それも良い所の一つだと思っただけだ。

「良い勘してるじゃない、22B。と言っても次に触るのは使い方をしっかりしてれば何も問題ないわよ。」

そう言い私は先ほど仕分けして拠点の方にまとめてある銃の方を指さした。

「あの中から部品をかき集めて使える銃を組み上げるわ。その中から馴染むものがあったら持って行っていいわよ。」

ちなみに、11B 以外は若干の困惑が見える。

「あのー、私あまり銃の事詳しくないんですけど、やっぱり持たなきゃダメですか？」
やっぱり自分たちが銃を使っているところが想像できないのね。

「ちなみに、今11Bは銃を持つてるけどそこるところどう思ってるの？やっぱり邪魔？」

「いや、そんな事ないわよ。私の使ってるやつの場合パワーが大きいから近距離で撃てば盾ごと吹っ飛ばせるから重宝するわよ。」

「なるほどな。ラヴィ、銃なんてと思っていたがポッド分の火力を補えるなら私は持つてもいいと思う。」

「まあ、とりあえず組んでみるわ。」

部品の山を見てみると、案外いろんな銃があった。とりあえず組めるだけ組んでみましょうか。

数分後

組み上げられた銃器は

M1911

Beretta M9

S&W 629

MAC-10

AK—74

Winchester Model 1897

M240

結構組めたわね。正直M240は使いどころがかなり限られるわよね。それに、とりあえず拠点のどこかにでも置いておきましょうか。

「終わったわよ。みんな持つの手伝って下にいくわよ。」

そうして私達は下の階に移動した。

「さて、まず基本的な撃ち方をせつめいするわね。」

そうして私は8B達に射撃の仕方やスタイルに合ったものを選んでいった。その結果

8B:M1911

22B:MAC—10

64B:S&W 629

「上2人は理解できるのだけれど64Bあなたそれでいいの？」

「いやあこの大きな反動と発砲音に惚れちゃいましたー。」

別にアンドロイドに反動なんてあって無いような物でしょ。しかも、なんか大口径好きなきな感じがする。

「なんでもいいだろ。でも、隊長の奴はあんまし強くなそうだなー。」

あ、なんか8Bがしゅんとしてる。これはいけない。

「別に弱くはないわよ。使い方によるわよ。そうね、じゃあ22B格闘戦してみる？あ、威力は加減してね。」

「いいぜ。」

私は22Bと向かい合うと頷いた。そうして、22Bは私の事を投げ、私の首に手をまわした。

「どうした？私の勝ちだぞ。」

「いいや、引き分けね。」

私は22Bの腹部にM45A1を当てた。22Bは驚いていた。

「ま、こんな風にどんな銃にも1長1短あるものよ。」

「すごいな。ラヴィよかったら私に教えてくれないか。」

「また今度ね。8B」

第55話

EーJエンツト side

あの後にはみんなでご飯を食べてから眠った。そして、またいつもの様に朝日に当たって目を覚ます。なんだかまだ眠たい。きのうは細かい作業も多かったし、ジャツカスの件で精神的にも疲れているのかしら？とりあえずみんなを起こしましょうかね。

「ほら、みんな起きて。」

「ん？おはよう。」

やっぱりこういう時の1ーBは起きるのが早い上に寝起きがいい。それに比べ他人は・・・うん、言わないでおこう。

「ふわあ。」

「大丈夫ラヴィ？」

「ごめん。まだ若干眠たいからちよつと屋上で風を浴びて来るわ。」

「いつてらつしゃい。」

そんなわけで今私は屋上にいます。はあ、にしてもここ数日だけでかなりいろんな事が身の回りで起きてるし、これからもこういう事が増えるのかしら。そうになると、私達

の関係もバレると面倒なのよね。さて、そろそろ戻りますか。

「おはよう。ラヴィどこ行つてたんだ？」

「外の空気に当たりにね。」

8Bはふんと鼻を鳴らすと席に着いた。ねえ、聞いといてそれはなくない？ まあいいや。

「さて、今日からは小麦の育て方について勉強していくわよ。」

「ねえ、ラヴィ？ これ私必要ないよね。なら私はこれからお金稼ぎに・・・」

「ダメですよ。11Bさん？ 私達に任されるといっても全てではないんです。だから、ね？一緒に勉強しましょう？」

「だだつて私には関係ないじゃない!!」

「ほら、お前も一緒にやるぞ。」

「あんた達ラヴィの資料の多さから本気度を知つて道連れを企んでるだけでしょ!!」

うるさいわよ。11B。さて、始めるわよ。そして私達はパスカルの村に8B達が引越すまでの数日間ずっと勉強をした。いやあ久しぶりに勉強すると童心に帰った感じがするわ。でもなぜか毎日ご飯の減る量が多かった気がするわ。

パスカルの村

「お久しぶりです。それでは8Bさんたちの住まいはあそこになります。それと、小麦

を植える場所はあそこで大丈夫ですか？」

「ええ、問題ないわ。ありがとう。パスカル。」

「では早速で申し訳ないのですが、みなさん村の子供たちと遊んでいただけませんか？
親睦を深めると意味も込めて。」

「オネーチャン達あそんでー」

新しい仲間が増えると分かったのか機械生命体達が寄ってきていた。3人はおぼつかないながらも楽しそうに笑っていた。

「3人楽しそうね。」

「羨ましいなら混ざってもいいし、なんならついて行ってもいいのよ。」

「いいわよ。それに、まだ対して恩も返せてないし。」

「平和っていいですよねえ。」

いつの間にかパスカルが横に来ていた。

「こんな風にできる場所が増えるといいわね。」

「そうですねえ。実は私達のところに廃工場でコロニーを形成している機械生命体達から和平協定の連絡があつたんです。もし、気になるのでしたら、この後2Bさんと廃工場で合流する予定なんです。行きませんか？」

気になるけれど・・・あの2人かあ。前の事がバレたわけではないけど・・・

「パスカル、私も一緒に行つていい？」

「ラヴィ大丈夫なの？」

私はエーリエントウオッチを操作して、11Bに預けた。

「バレるとまずいからこれ持つてて。それと、ここ押して。」

11Bが操作すると音楽が流れだした。内容は前回のリパブリック賛歌にヤンキードゥードゥルなどの子供向けな曲を数曲リピートするようになってる。

「なにかあつたら連絡するから、よろしくね。」

11Bは半ばあきらめたような顔をした後村の広場に降りて行つた。

「ふふ、じゃあ行きましょうか。」

第56話

エーゼント side

現在私はパスカルと一緒に廃工場前で2Bを待った。工場についてから数分待つと誰かが階段を上ってくる音が聞こえた。

「2Bさんこんにちは。」

「久しぶりね2B。」

「なんであなたがここに？」

「パスカルから興味があるなら来ないかとお誘いをいただいてね。喜んでついていったのよ。」

「じゃあ行きましょうか。同盟を結びたい機械生命体はこの奥にいるそうです。しかし、気を付けてくださいね。我々機械生命体は危険ですから。」

「自分たちが危険？」

「客観的事実です。ネットワークから切り離された私達は、お互いの情報を共有していません。言葉を交わしても、本心とは違うかもしれないので。」

そう語るパスカルは私の直感からして悲しそうな顔をしていた気がする。私達は工

場の入り口から中に入った。

「ようこそ。神の宿る場所へ。」

紫と独特な見た目の機械生命体達は私達を出迎えてくれた。げっ、コロニーを形成してるとは聞いてたけど、まさかのカルトかよ。DCにいた頃からカルト教団にはいい思いが無い。でも、機械生命体に宗教概念ってあるのね。念のためセーフティは解除しておきましょうか。

「こちらの通路にお進みください。」

その機械生命体の案内で私達は奥に進んだ。

「そんなに急いでも教祖様は逃げませんよ。」

機械生命体の教祖か・・・さて、どんなものが来るのかしらね。

「予想した通り、非常に怪しい集団ですね。」

「じゃあなんでついて来た。」

それは同感ね。

「2Bさんにここを紹介した以上、責任を持って最後までお付き合ひする必要があると思いますので。」

真面目か。もしかして、私も誘われた風を装ってパスカルの身辺警護させられてるのかしら?!

「……一応感謝しておく。」

そうしてエレベーターが到着した。出ると火で照らされた通路があった。

「あちらの扉を開くと教祖様のいらっしやるお部屋です。」

私達はその通路を進んだ。

「私達は教祖様に導いて頂いたのです……」

「この地上から苦痛と戦争が無くなりますように……」

聞いている分だと案外までもそうではあるけれど……

「神を信じるようになって心が安らぐようになりました……」

「ごめん、どちらとも言えない気がしてきましたわ。」

そして私達は扉から部屋の中に入った。

「あ……私パスカルと申します。和平交渉についてお話をさせていただく為に……」

パスカルが一番高い椅子に座っている機械生命体に向けて声をかける。あれがさつき言つてた教祖様かしら？

ゴロン

すると、教祖と呼ばれている機械生命体の頭部が外れこつちに転げ落ちて来た。なんとなくだけ嫌な予感がする……私はそつと銃のトリガーに指をかけた。

「教祖様はカミになった。」

「カミになった！」

周りにいる機械生命体達が揃えて唱える。

「教祖様はカミになった！」

「カミになった！」

「私達もカミなる！」

「カミになる！」

「私達もカミなる！」

「カミになる！」

「君たちもカミになる！」

「カミになる！」

「君達もカミになる！」

「カミになる！」

私達が入って来た扉が閉められる。

「君達もカミになる！」

「カミになる！」

「皆で死んでカミになる！」

教祖様の首が転がったときから嫌な予感はしてたけど・・・

「ああああ」

2Bもやつと武器を抜いた。

「クソ！そんなに死にたいならお望み通り殉教させてやるわよ！」

私は目の前にいる機械生命体の頭を吹っ飛ばした。

「こいつら……！」

「やはり私の予測は的中したようですね。しかし興味深い。こんな思想を持つ機械生命体は見たことありません。」

「喋ってる暇があったら手を動かして！」

第57話

エージエントside

「fuck!これじゃきりがないわよ!」

現在私達は囲まれている。遠距離の攻撃をしてくるタイプがいるわけではないので2Bの火力もあつて何とか持ちこたえている。

「みなさん!部屋の奥のゲートが開いたようです。行ってみましょう。」

私達は追ってくる機械生命体を足止めしながら何とかエレベーターに乗ることができた。どうせこのエレベーターを抜けた先にもいるんだろうなあ。エレベーターの入り口が開くと目の前には機械生命体があった。私は迷わず銃のストックで殴りつけ、倒れた所で頭部を撃ちぬこうと思っただけど、

「待つて待つて待つて!僕です!9Sです!」

「9S(さん)!?」

「バンカーからハッキングして、この機械生命体をコントロールしています。これから工場のシステムに侵入してお二人を脱出させます。2B無茶はしないでくださいね。また後で会いましょう。」

「大丈夫私がちゃんと見とくわよ。」

そうして、目の前の機械生命体は力が抜けたように倒れ崩れ去った。確かバンカーつて宇宙のどこからしいけど、そこからハッキングできるなんて改めて技術の進歩を感じるわ。そうして、私達はゲートを抜け部屋の外の通路を抜け走っている。何処からか、あの忌々しい信者共の「カミになる！」の連呼が聞こえて来る。少し進んでいると、こちらに走ってくる機械生命体が見えた。見たことのないタイプね。とりあえず、近づかれる前に撃つてみると、数発で倒れそして派手に爆散した。

「カミになるのだー！」

「君たちも死んでカミになる！」

「そこら辺で適当に死んでカミとやらになりなさいよ！巻き込まれるこつちの身にもなつて見てほしいわ。」

つい口が悪くなる。ベルトコンベアーに乗って進み、壊れた階段を飛び越え、巨大なプレス機の間を通り抜けた。あれに潰されたら骨も残らなさそうね。目の前の段差を上った。

「2Bそのまま真っ直ぐ進んでください！」

「了解。」

ゲート抜けると中には機械生命体があったが、2Bが一瞬で黙らせてくれた。そしてま

た部屋を出て先ほどと同じような道を進む。

「カミ！カミ！カミ！カミ！カミ！」

「カミイイイイー」

「機械！人！アンドロイド！皆まとめてカミになるのだー！」

「死ぬだけで神となれる訳ないでしょ！」

数体の自爆型を対処した後、またベルトコンベアーに乗り段差を上がった。

「ゲートのロックを解除しました。先に進んでください。」

9S が見かけによらず優秀なのね。部屋を出て進みまた巨大プレス機の間を通り抜ける。あれ通ってる時生きた心地しないわ。

「何故逃げるのだ!？」

「カミになれると言うのに！」

「悪質な宗教勧誘はお断りしてます！」

「アハハハハ!!」

何とも不快な笑い声ね。段差を上りゲートを抜け部屋に入ると1体の機械生命体。他の機械生命体を虐殺していた。しかもされている側は平和主義ではあるのか抵抗しない。私は部屋の中央を通る際に頭に1発ぶち込んで黙らせた。部屋を抜けて階段を上った。

「出口までのルート確保完了です。！」

「ありがとう！」

微笑ましい。部屋に入る。似たような風景だから飽きて来るわね。奥のエレベーターに乗る。エレベーターから降り通路を進むと今までとは違う異様な部屋に出た。

「この部屋熱いわね。早く出ましょう。」

私達のはね橋に近づくと突然その跳ね橋が稼働し、私達は出られなくなった。

第58話

エージエントside

突然の状況に困惑していると私達の目の前に、巨大なボールに甲殻類の足がついたよ
うな明らかに今までのとは違う機械生命体が出て来た。

「やるしかないみたいよ。」

私はライフルを数発撃ったがバリアのような物に防がれた。

「敵本体にエネルギーシールドを確認。物理防衛シールドを確認。報告：遠距離攻撃近
接攻撃共に効果なし。本工場から大量のエネルギー供給を確認。推奨：エネルギー供給
源の破壊。」

「9S今遭遇している大型機械生命体が・・・」

2Bのポッドの会話は殆ど聞き取れなかったけど、どうやら攻撃しても無駄っぽい？
「ラヴィさん。今は2Bさん達が何とかしてくれるのを待つしかないようです。」

「そうみたいね。」

私とパスカルは敵の攻撃を避けることに専念した。にしても、機械生命体のバリエー
ションの多さには驚くばかりね。

「怖いよお。怖いよお。」

「死んで・・・カミになるんだ！」

「死んでしまおう！」

そうして、次々に機械生命体がが灼熱の中に飛び込んでいった。

「パスカル、見ない方がいい。」

「そうですね・・・」

パスカルは下を向いた。

「サヨウナラ！サヨウナラ！」

「バイバイ！バイバイ！」

また複数の信者たちが飛び込んでいった。

「悲願の時が来た！皆でイコウ！」

「神トナリ我々は苦しミから解き放たレルのだ!!」

こっちは元からイカれてた連中か。私達はその後も終始無言のまま工場をでた。「そのイカれた經典の神様とやらが救ってくれるといいわね。」
私とパスカルは2Bと別れパスカルの村に戻った。

第59話

エージェント side

私とパスカルは2Bと別れパスカルの村に向かっている。

「パスカル大丈夫?」

パスカルは廃工場を出た後からずっと下を向いたまま。当然だ。幾ら自分たちが機械生命体のネットワークから切り離されていたとしても、信者自ら死んでいく様子を全くの別物として切り離すことはできない。

「ラヴィさん、私は怖くなつてしまいました。あの工場の機械生命体達は救いを求めて自ら死んで行きました。もしもそれが村の中の誰かが同じ考えに行きついてしまったらと考えると……」

「確かに、いつの時代も極めて稀にさっきの信者たちのような思考を持つものがあるものなの。でもそれに感化される人はいたとしても本当に少なかったの。どうしてかわかる?」

「わかりません。」

「答えはみんなしつかりと考えているから。みんなしつかり正しい事を考えられるなら

「コレはおかしいって気づいて判断できるようにするの。」
「考えるですか？」

「そう。でも、みんな一種の基準が必要よね。だから教育という物があるの。だからねパスカル、貴方が村で子供たちに知識を教えることは大切なことよ。これからも、村の子供たちと楽しく勉強し合ってくれさえすれば、それで良いのよ。」

いつの間にかパスカルは顔を上げており、目の部品の光が心なしか輝きが増したような気がした。

「よし・明日から頑張っていこうと思います。ラヴィさん貴重な意見をありがとうございます
いました。」

「頑張つてね。それと、あの3人の事よろしくお願いね。」

そんなこんなで村の広場に着いた。広場では陽気な音楽と、楽しそうには遊んでいる11Bと村の子供たち。誰かが「パスカルおじいちゃん帰って来たヨ！」という村の機械生命体達が集まっていた。ふふ、パスカルはみんなに愛されてるわね。

「ラヴィ、大丈夫だった？こっちは特に何もなく平和に終わったわ。あとコレ返すわね。」

私はエージェントウォッチを受け取ると、11Bと市街地方面の出口に向かった。

「ねえ、何かあったのラヴィ？」

「実は・・・」

私は先ほどの工場とこの村に戻ってくるまでの事を話した。

「凄い話だね。でも、機械生命体よ。そんなに気に病む要素はないと思うけど。」

「私にはその割り切り方出来ないわ。自分が大切だと思ふ人を傷つけるようなことをやってはダメだからね。」

「・・・うん、分かってるわ。」

11Bは下を向いてしまった。

「大丈夫よ。私は11Bがそんな事しないってわかっているから。ほら、疲れたし早く拠点で休みましょ。」

「ラヴィ。私あなたが思っているほどいい子じゃないの。16D元気してるかな。こんな奴の事忘れてるかな？その方がいいか。」

第60話

16 D s i d e

今日も脱走した8B以下2名の捜索、情報の収集です。今は砂漠にいます。

「こんにちは。」

「やあ、こんにちは。何か用かな。」

「ちよつと聞きたいことがあるんですけど、このヨルハ部隊を見てませんか？」

私は3人の映像をお兄さんに共有した。

「うくん見てないなあ。元々こんな所に人が来ること自体珍しいからなあ。ここ最近来たのはラヴィだけだしな。でも、ラヴィは違うんだろ？なら特に見てないな。」

「すいません。ラヴィ方はどなたですか？」

「ん？あんた確認したんだろ。ラヴィは結局2B達の妨害はしてないって。」

「え、そんな事してませんけど。誰がそんな事を？」

「本人が前に聞いた時そう言ってたよ。」

「なるほど、ありがとうございました。因みにその方は今どちらに？」

「ちよつと待つてくれ今ジャツカスが一緒に居るはずだ。」

CALL中

「すまない。取り込み中のようだ。でも多分少なくとも砂漠じゃなくて廃墟都市の方にいると思うよ。」

「ありがとうございます。」

やっと尻尾を掴めるかもしれない。先輩の事も何かわかるかもしれない。私は廃墟都市に急いだ。

エージェントside

いつもの様にルーティンをこなして11Bを起こす。

「おはよう。」

にしても、3人が引越してなんだか静かになった気がするわ。

CALL

「ラヴィー！おはよう！元気にしてた？」

「朝から元気ねえ。で、どうしたの？」

「久しぶりに休みになったの！今からそっち行ってもいい？」

「いいわよ。じゃあ、ちよつとお願いなんだけど、出来たら金属製の円筒と使わないガスボンベとか持ってきてもらえない？勿論タダとは言わないわ。」

「分かった！使えそうなものがあつたら持っていくわ。」

さて、ジャツカスにも連絡しないとね。

CALL

「やあ久しぶりだね。どうしたんだい。」

「前の情報のお礼をしようと思つてね。来るでしょ?」

「当り前さ。」

「それと、ついでに追加の爆薬と使えるタイヤがあつたら持つてきてくれない。もちろんタダではないわよ。」

「わかつた。すぐに行くよ。」

そんな会話をしているうちに11Bの準備が終わつたらしい。

「じゃあ、行つてくるわ。なにかあつたらすぐに連絡してね。」

「ええ、あなたも以前より気を付けてね。」

11Bを手をひらひらと振つて入り口から出て行つた。さて、みんなを待つとしましようかね。

数分後

「ラヴィー!久しぶりー。」

「ラヴィーさん久しぶりです。すいません、朝早くからデボルがうるさかつたですよね。」

「大丈夫よ。」

「ラヴィー！呼んでいただき感謝するよ。」

さて、みんな揃ったし作りたいものを発表しますか。

第61話

エージエントside

「みんな揃ったわね。それじゃあこれから作るのは……」

「ちよつと待ったラヴィー！」

デボルが手を何回も上げ何回も「待て」を連呼している。

「どうしたんだい。デボルちゃん。」

「子供扱いすんな！なんでここに爆薬オタクの変人がいるのよ！」

「へえ、君かい？ラヴィーに私に変人だと吹き込んだのわ。」

2人の間でバチバチに火花が飛び出した。

「ちよつとデボル！落ち着きなさいよ！ジャツカスさんも落ち着きましょう？ね？」

「ポポルの言う通りよ。2人とも仲良くしなさい。特にジャツカス、こんな事やってる間にも時間は過ぎていくのよ。分かったら2人共仲良くね？」

ジャツカスは本来の目的を思い出したのか大人しく席に着いた。

「あら、どうしたの？ジャツカス。ほら言い返してみなさいよ！」

はあ、まったくデボルは子供みたいね。すると、ポポルがデボルの頭を押さえ

「デボル、いい加減にしなさい。すいません。ジャツカスさん。」

「まあ、みんな仲良くね。じゃあ、これから私が何を作るのか発表します。」

「YEEEEEEEEEEEEEEEEEEEE!!」

ジャツカスだけ盛り上がりがおかしい。

「今回作ろうと思っているのはこれよ。」

私が机に図面を広げると、3人は1通り図面を見ていた。反応は様々。

「ラヴィさんこれなんですか？ 私達はこういったものに詳しくなくて、説明がほしいです。」

と、こつちに説明を求めて来る姉妹と、

「ラヴィ！これは凄いぞ！君は一体どこでこんな知識を得たんだい？」

と興奮の度合いがさらに上昇した。

「さあ、今回私が作ろうとしていますは、HELLキヤノンと言う即席兵器です！」

「なんでラヴィ、突然そのテンションになったの？」

「概要を説明します。砲身は3フィート、弾頭は爆発物と榴散弾を詰めたガスボンベを利用します。一応車輪は付けますがこの拠点の屋上に設置します。質問は？」

ないみたいね。

「じゃあ、2人は砲の本体の製作を、私とジャツカスは砲弾のほうね。」

姉妹が道具などをもって行つた。こつちも始めますか。私はジャッカスと砲弾の製作を始めた。

「ところで、君はこのような兵器の知識をどこから得ているんだい？」

「それは秘密よ。悪いけどパイプ爆弾の設計図とこれの設計図で手を打ってもらえないかしら？」

「構わないさ。それには少なからず感謝しているんだ。私の愛しているものをさらに引き立てる事ができる物を私にくれるのだから。」

あれ？私口説かれてる？言い回しが爆薬への愛を語っているとは思えないわ。

「早く完成させていつもの様に実地試験をしよう!!」

うーん、やっぱり残念美人感が凄いわ。

第62話

エージエント side

前回に続き私とジャツカスはHELLキャノンの弾頭を製作している。

「にしてもこの砲弾はガスボンベで作れるのは凄いなと思うけれど、本当にちゃんと飛ぶのかい?」

「この設計図通りにできればちゃんと飛ぶわよ。そういえばレジスタンスの砲編成ってどうなってるの?」

「砲って大砲の事かい?この辺りレジスタンスは殆ど使わないよ。」

「どうして?大型の機械生命体が出現した時なんかには火力は必要でしょ?」

「そんな時のためにヨルハがいるんだ。だからレジスタンスで砲をつかうのは前に壊滅した艦隊の艦船位な物だよ。」

なるほどね、だからあの陣地に迫撃砲が置いてあったのね。なんやかんやで砲弾の方は完成した。

「お疲れ様。悪いわね。こんな地味な作業頼んじゃって。」

すると、屋上からポポルが降りて来た。

「ラヴィさんこつちの作業は全部終わりました。」

「そう。こつちも終わったわ。じゃあ、上にいくわ。」

私達が屋上に行くと、デボルが疲れた様子で、寝転がっていた。出来上がった本体を見ると、非常によく来ている。

「お疲れ様。見たけれど、設計図通りにできてるし、溶接なんかも丁寧ね。突然のお願いだったのに丁寧に作業してくれてありがとう。」

「当たり前でしょ！こんなの私の手にかかれば苦労のうちに入らないわ。」

デボルは起き上がり満面の笑みを見せてくれた。私は姉妹を頭を撫でた。はあ、やっぱりこの子達可愛いわー。

「じゃあ、早速試験してみようじゃないか！」

「待つて、待つて、いきなり撃つたらアネモネさんに怒られますよ！」

そうね。それに何処に撃つか決めないと。

「じゃあ、休憩も兼ねて下で話しましょうか。」

下に降りるて、この辺り一帯の地図を広げる。

「まず、どこに着弾させます？」

「そうねえ、あくまでも即席兵器だから命中精度は数で補う節もあるのだけれど、今回は一発だけね。」

「なら、やっぱり砂漠がいい。それにアネモネには私から連絡しておこう。」

「頼んだわ。後ね、着弾地点に2人、悪いんだけどこっちで砲の手伝いに私と残ってもらう人を1人頂戴。」

「じゃあ、私が残ります。デボルとジャツカスさんは着弾を見届けてください。」

「OK、じゃあちよつとしたら始めましょうか。ジャツカス連絡して貰っていい?」

私達はジャツカスが連絡するまで待つてから、デボル達は砂漠に出発した。

「さて、こっちも準備を始めましょうか。」

「そうですね。ところでラヴィさん、作業は続けて頂いて結構です。以前レジスタンスキャンプで2B・9Sさんの調査を妨害したレジスタンスの情報を集めてたんです。それで特徴がなにかオレンジの光が見えたと言うんです。もしかしなくてもラヴィさんですよ?」

第63話

エージエントside

「もしかしなくてもラヴィさんですよ。」

「そうよ。」

「どうしてそんな事したんです？」

「簡単に言うともたまたまヨルハからの脱走兵を複数名拾ったの。」

「またですか。それでどうして2Bさんと9Sさんの妨害になるんですか？」

「とりあえず、今はジャツカスがいるし、この試射が終わってデボルと11Bが戻ってきたらしつかり話すわ。」

CALL

「ラヴィこっちは準備OKよ。」

「今から起こることに凄くワクワクしてるよ！さあ、初めてくれ！」

よし、射撃準備よし！

「さあて、派手にやるわよ！いいわねポボル、合図を頂戴。」

「いきますよ。Fire!!」

砲弾は問題なく飛んだ。さて、ちゃんと目標に落ちるかしらね？あっちの無線機からかすかに爆発音とジャツカスの叫び声が聞こえるから、たぶん上手く行ったと思いたい。

「ラヴィ、聞こえてる？ごめん、ちよつとジャツカスうるさい。多少のずれはあるけれど誤差の範囲よ。それに本来はもつと打つんでしょ。なら問題ないわよ。」

「そう、ありがとう。それじゃあこつちに戻っておいで。」

「すまない。ラヴィ私はここで失礼するよ。今日は素晴らしい体験をありがとう。また爆薬関係で困ったことがあればいつでも相談に乗るよ。」

「という事だからラヴィ今からそつちに戻るわね？」

「気を付けてね。」

私は無線を切った。

「さて、ごはんを始めましょうかね？」

「ラヴィさん、私手伝います。」

「あら、可愛いわね。さて、11Bに連絡しましょうか。」

11B side

CALL

「11Bそろそろ帰ってこれる？」

私はラヴィイからの通信を受け取り、今日の成果を改めて確認する。そこそこの数を狩ったから時間がかかる。量は、まあ、上々ね。さて、帰ってご飯たべよ。

「ラヴィイ分かったわ。今からそっちに戻るわよ。」

カチャ

「ポポル動かないで。」

多分あの金属音、銃を構えた音よね。なにかあったのかしら？

「ラヴィイどうし・・・」

「11B、悪いけど帰ってこないで。必ず連絡するから。」

「は？ラヴィイ一体何言ってるの？」

「今は大人しく聞いて。マズイ！ポポル構えて！」

「ちよつと、ラヴィイ！ラヴィイ！」

「先輩の事聞かせてくださいよ。」

私の足は自分でも気づかぬうちに拠点へと向かっていた。

エージェンツ side

「あら、可愛いわね。さて、11Bに連絡しましょうか。」

CALL

「11Bそろそろ帰ってこれる？」

さて、今日は久しぶりに姉妹と食べられるわね。

「今、先輩の名前呼びました？」

私は突然聞こえた聞きなれない声に驚きふりくと、そこには見慣れないヨルハがいた。

第64話

エージエントside

「誰よ、あなた？ 挨拶もなしに。何の用かしら。」

「今、先輩の名前を呼びました？」

「質問に答えて。」

あれの子はどう見てもヨルハよね。

「あの、突然一体何の用でしょうか。それに先輩ってどなたの事ですか？」

ポポルがさり気なく探りを入れてくれた。

「ああ、先輩じゃわかりませんよね。先輩の名前は11Bって言うんです。先ほど間違
いなく呼んでましたよね。」

「聞き間違いではありませんか？」

ポポルと話している間に私はそのヨルハを見る。あれ、背中に背負ってるのあれ、1
1Bの武器じゃないかしら。確かあれは16Dだかの依頼で2Bと9Sが回収に．．
あ、もしかして彼女が16Dかしら。

「あなたと話していても埒があきません。あなた先ほど11Bと確実に呼んでいました

よね。」

「だから、あなたの勘違いよ。」

「なら、失礼ですがその通信相手の方とお話させていたただ来ます。」

「先ほどから何度も言ってますけど、あなたの勘違いです。なんなんですか？ いいかがげんにしてください。」

ポポルの口調が変わった。どうにかしないと。

「でも、11Bの遺体は粉々になったんじゃないかなかったの？」

「そのはずです。でも、先輩が死んでいるなら先輩の名を語る奴は許せません。」

はあ、どうしたものか。すると、無線機から音がした。

「ラヴィ分かったわ。今からそっちに戻るわよ。」

「Shit!」

無線の声を聴いて疑問が確信に変わったのだろう。現在私と彼女は武器を向け合っている。

「今の声はやっぱり先輩ですね。あく良かったー。生きてただく。これで私の手で決着をつけれますね。」

何だろう、彼女の狂気が増した気がする。すごく嫌な予感がする。

「ポポル動かないで。」

「アハハハハハ、やはりあなたは先輩と繋がりががある。そのことについて教えてくださいますよ。」

未だに状況を捕まえていない11Bをここに戻らせるわけにはいかない。

「ラヴィどうし・・・」

「11B、悪いけど帰ってこないで。必ず連絡するから。」

「は？ラヴィ一体何言ってるの？」

「今は大人しく聞いて。マズイ！ポボル構えて！」

「ちよつと、ラヴィ！ラヴィ！」

「先輩の事聞かせてくださいよ。」

狂ったような笑みを浮かべて突っ込んでくる彼女を躲すと、再び武器を向け合った。そして私は彼女の名前を聞いてみた。

「あなた16Dでしょ？」

「先輩から聞いてます？は〜い先輩の恋人の16Dです。」

恋人!?!まあ、でもヨルハは女性が多いからこうなるのも納得ね。

「11Bからは聞いてないわ。今あなたが背負ってる武器それ私が見つけた後2B達に渡したものだもの。」

「へえ〜これあなたが回収してくれたんですか〜。一応感謝しま〜す。」

間髪入れずに16Dは突っ込んでくる。私はすれ違いざまに腹に一発入れたけどまったく聞いてる様子がない。撃つてもいいけれどそうすると11Bの恋人さんを殺しちゃう。うくんどうしたものか。

「ラヴィさん！デボルを今呼び戻してます。私も加勢します。数で押しましょう！」

第65話

Eージエントside

「いや、ただの力押しでどうにかなる相手じゃない！考えるから時間を頂戴！」

「分かりました！急いでください！」

何か、何かないか？このまま攻撃し続けるのは無理ね。私の体力が持たない。それに、銃を撃った所で簡単に死なないだろうしどうすれば・・・あ、ハッキング！でもその間ポボル1人に16Dの相手をさせる？そんなの無謀に近いしデボルが戻って2人でやれば何とかなるかも知れないけど、下手すると片方もしくは両方が死んじゃう。そんな事絶対にダメ。

「提案：このウォッチを16Dに直接装着させる。装着後ハッキングを行い目標を無力化可能。」

でも、今の彼女に接近するのは危険ね。とりあえず、デボルが戻ってくるまで待つしかないか。

「あー、そのオレンジの光9Sさんが見たつていう光ですよねー。これは確実に黒ですよねー。あなたですかー。2Bさんが16D達を捕縛しようとした際に狙撃したの

ガゴン!!

「アハハハハハハハハハハツ、アハつっ」

誰かが16Dの頭を後ろから殴りつけた。殴られた16Dは頭を押さええてうずくまっている。

「話はポポルから聞いてるわ。まったくなんでラヴィと関わるヨルハは非常識な奴しかないのかしらね。」

「まったくよ。」

とりあえず急いでエージェントウォッチを16Dに装着させましょう。そう思い近づくと

「アハハハハハハハハハハツ殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す」

「そろそろ、お寝んねの時間よ。16D起きたらゆっくりお話ししましょうね。」

暴れる16Dを押さえつけエージェントウォッチを装着させた。すると、電池が切れたようにプツンと意識を失った。

「ラヴィ!」

「あら、私帰って来るなって言わなかった? 11B?」

第66話

エージエント side

「あら、私帰って来るなって言わなかった？ 11B？」

「えっと・・・そのお・・・そんな事より！」

11Bは気絶した16Dに近寄り武器を抜き止めを刺そうとする。

「ちよつと！ 何しようとしてんのよ！」

そんな11Bをデボルが押さえつけた。

「離して！ こいつはラヴィイを殺そうとした！ 幾らヨルハが可哀そうだからって、こんな奴生かす必要ないでしょ！」

なおも激しく暴れる11B。

「11Bさん。あなたがこの方を殺そうとしている理由はラヴィイさんを殺そうとしたからではなく何か、別の理由がありますよね？」

先ほどもで暴れていた11Bがピタッと動きを止める。 凶星ね。 そんな11Bをポボルは問い詰める。

「私達が襲われているとき、11Bさんあなたの事を先輩とも恋人とも呼んでいました。

彼女とはなにかと親しい関係だったんですね。」

完全に11Bは黙ってしまった。

「11B教えて。私達と出会う前この子と一体何があったの?」

「言いたくない」

私は11Bに近づくと隣に座り彼女の頭をそつと撫でた。

「11Bゆつくりでいいわ。深呼吸してね?大丈夫よ。私はあなたの事を裏切ったりしないわよ。この子との関係がどれほどの物だったかは分からない。でもね、そう簡単に大切に思ってた相手を殺すことないじゃない。なにか殺さずに済む方法があるかも知れないじゃない。私達も力になるから、ね?」

11Bは深く深呼吸し、大きく頷き顔を上げた。どうやら覚悟ができたみたいね。

「まず、みんなが知ってるの通り私達は元恋人だった。始まりはバンカーでの訓練、私は攻撃型で彼女は防衛型だったのだけれど、一緒に訓練してみると呑み込みがいいし、誰から見ても優秀な子だった。それに私もこの子と訓練していて楽しかった。いつしか一緒に任務も受けるようになった。そんな時に私は彼女から想いを伝えられて、伝えられた当初はあまり深くは考え無かった。でも毎日一緒に居るようになって自然と私も意識しててた。でも、その時思ってしまった。これはいけない事なんだって。だって人類は男?と女?というのが愛し合って子供を設け子孫を残すと情報に有った。でも私

達は女どうし。この常識から外れていると気づいた。この事を伝えるとこの子は嫌がったの。私がこの関係を終わりにしたがつて気づいたのかもしれないわね。だから落ち着かせるために、みんなの前では関係を避けようつて。でもこれがマズかった。結果的にプライベートが無くなってしまった。反動からか私は、たまに一緒に任務にあたる際に彼女に強く当たるようになった。この子はそれでも文句を言わなかった。そんな彼女の事を私も申し訳なく思つて、他のヨルハに聞いたりもしたけれど誰に聞いても女同士という関係を肯定してくれる人はいなかった。もつと広く聞けば一人くらい居たのかも知れないけど、司令官にバレるかもと思うと聞けなかった。そうして私は常に周りの視線を気にして任務に従事した。いつの間にかこんな連中のために戦うのが嫌になって、心が安らぎを求めたの。だから脱走した。でも、8B達の件を聞いて私のしたことに意味はあつたのか分からなくなつたの。でも、ラヴィが16Dに襲われたと分かつた時私が原因だつてなんとなくなつた。だから、自分でケジメを付けたかつたの」

辛そうに語る11Bの頭を私はずっと撫でてあげた。

第67話

エージエントside

11Bも話し終えた後は震えていたけれど段々落ち着いてきたみたい。そこで私は11Bの頭を撫でるのをやめ手を握った。

「11B大丈夫そう?」

「うん、ありがとうラヴィ。ところでラヴィは私達の関係どう思う? やっぱりおかしいと思う?」

「いいじゃない。私の周りでもあなた達みたいに女の子どうして恋愛する人はいたわよ。もちろん数は少なかったし、それをバカにする人もいた。でもね、それをどのカッブルも乗り越えたのよ。大丈夫あなた達もきつと何らかの形で幸せになれるわよ」

「うん、ありがとうラヴィ。ごめんなさい。今日はもう寝るわ。もし16Dが暴れたら起こして」

「ええ、おやすみなさい」

彼女はそのままスヤスヤ寝息をたてて寝てしまった。私は着ていた上着を被せてあげた。

「さて、お疲れ様。2人共ありがとう。そして私達のせいで危ない目に合わせてごめんなさい。」

「いいのよラヴィ。ところでさっきの会話の中で少し聞きたいことがあるんだけどいい？」

「ああ、少し待って。」

私はカップにお湯を入れると2人に渡した。

「どうぞ。この件はかなり内容が濃いからゆっくり話そうと思つてね」

「そんなに濃いですか。」

「ええ、まず何から話そうかしら？」

デボル・ポボル side

私は11Bさんのお話を聞いて私達一般のアンドロイドとヨルハ部隊の方々に戦力の違いはあれど大した差はないと改めて実感しました。11Bさんと16Dさんの関係は特殊かもしれませんが、でも、願わくば幸せになつてほしいものです。ところで8B達の件とありましたがなんですかそれ？するとデボルが近づいて来て小声で話しかけて来た。

「ねえ、8Bつてどつかで聞いた事ある気がするんだけど何だっけ」

「確か16Dさんがこの地区に派遣されてきた理由が脱走し消息不明の8B以下2名の

搜索だったような・・・」

「もしかして、その8Bの脱走の件にもラヴィが関わってるのかな」

「あり得るわ。そういえばラヴィさんのエージェントオッチってオレンジ色に光ってるわよね」

「これは絶対に関わってるわね」

「後で聞いてみましようか」

「にしても驚いたわ。11Bに恋人がいたなんてね。羨ましいなんて気はないけど、話を聞いてる限りラヴィの言う通り仲良くしてほしいわね。まったくラヴィに絡むヨルハは碌な奴がいらないわ」

「これに関しては同感ね」

その後落ちついた11Bさんにラヴィさんが上着をかけてあげた後私達にお湯を出してくれた。

「どうぞ。この件はかなり内容が濃いからゆっくり話そうと思つてね」

「そんなに濃いんですか。」

「ええ、まず何から話そうかしら？」

「8Bというヨルハ部隊の脱走兵のはなしからお願いします。」

第68話

エージエントside

「8Bというヨルハ部隊の脱走兵のはなしからお願いします」

「あゝその話からね」

私は最初にあつたのが8Bではなく、22B、64Bだったこと。2人に頼まれて8Bを迎えに行った。その時に仕方なく、2B、9Sをバレずに攻撃したこと。3人はいまパスカルの村にいる事を話した。

「ねえラヴィ? 11Bの件は脱走を企てたと分からなかったから仕方ないとして、この件に関しては脱走兵だつて分かつて助けて、その時にヨルハ部隊に喧嘩を売るなんて、本当にお人好しね。それで、コイツが来たんでしょ。まったく」

「ごめんなさいね。お札に何かして欲しい事ある?」

するとデボルがニコツと笑い

「じゃあ、明日のご飯は飛び切り美味しいのをお願い!」

「言われなくても豪華にするわよ」

すると、ずっと下を向いていたポボルが顔を上げ

「ラヴィさん？この件まだ話してない事ありますよね？幾らラヴィさんがお人好しだからって、2Bさん9Sさんと対峙している8Bさんを助けますか？何か取引でもあったんじゃないんですか？」

ちよつと、ポポルの勘鋭すぎないかしら？でも、あの情報を喋ってもいいものかしら。これは彼女たちを含めたアンドロイド全体の存在意義、今まで戦ってきた意義、彼らの払った犠牲が意味のないものだったと言う事になってしまふ。悩んでいると、

「ラヴィ？」

「ラヴィさん？」

姉妹が私の両脇に来た。

「ラヴィ、私達もあなたの事裏切ったりしないわよ」

ポポルの方を見るとこっちを見て大きく頷いた。

「分かったわ。でも、この話はあなた達にとつてはかなりつらい話になるわ。もしも途中で辛くなったら遠慮なく言つてね。いい？」

そして私は8Bを助けた報酬と聞いた衝撃の話をした。

数分後

「これが真実。2人とも大丈夫？」

2人はしばらく黙っていたけれど

「なるほどねー。もしこの話を知らない奴から聞かされてたら、私そいつに掴みかかったわ」

「確かに知らない人からこんな話されたら溜まったもんじゃないわよね」

「でも、私達はラヴィさんに出会って話しているうちに正直、私達が信じていた人類という存在が過度に誇張されていたものだと気づきましたし、それを踏まえて生活している人類が本当にいるのか分らなくなっていました。それを今更、人類はもう居ないと言われても驚きませんよ。それに私達はレジスタンスキャンプの皆さんが優しくしてくれるから、戦い続けるんです。」

この姉妹・・・ホントカワ（・▽・）イイ!! ぞしてええ子や。

「じゃあ、そろそろ休みましようか。今日はゆつくり休んで」

「あれ、ラヴィは一緒に寝ないの?」

「もし、私達が寝てる時に16Dが起きたら下手すると皆殺しにされるわよ」

「見張りなら私達も手伝います」

「いや、今日はいろんな事があつたし、整理しなきゃいけない事もあるでしょ。だからゆつくりやすんで」

「わかりました。お言葉に甘えます。おやすみなさい」

「おやすみー」

「ええ、おやすみ」

第69話

E-ジエント side

あの後しばらくして姉妹も寝てしまった。寝顔を見ようと近づいて足をぶつけどちやつたけど全く気にもせずスヤスヤ寝ていた。やっぱり疲れてたのね。私も壁にもたれ掛かった。

「はあ〜」

自分でも驚くほど大きなため息が出た。こんな事DCにいた頃はしよっちゆうだったけど、久しぶりにでたわね。今日の事を自分なりに振り返るなら散々な1日つてところかしらね。まったく、結果的になんとかうまく収まったとはいえ、こんな大事になるとは思わなかったわ。でも、これからが大変になるわね。まず11Bと16Dとの関係は何とかしてあげたい。それには2人共直接話し合いをした方がいいでしょうね。でも下手すると、ヨルハに私達の事が全部バレちゃう。それだけは何としても避けたい。それに、目を覚ましてまだ私達に危害を加えようとするなら、殺害するしかないわね。いけない考え事してたら眠くなってきたわ。気を紛らわせる方法は・・・あ、

「音楽をランダムに再生。音量は小さめでいいわ」

ランダムに流れてくる音楽に耳を傾けながら、私はDCでの出来事、ここに来てからの濃すぎる出来事を振り返り、懐かしみながら朝を迎えた。

朝

いつも通り起きる時間になったので、屋上にでて髪留めを解いて、眠気覚ましも兼ねて顔と髪を洗った。前に髪をあらった時から少し間が空きすぎていたので髪も多少べたついていたけれど、ある程度きれいになったと思う。タオルと朝日で粗方乾かした後下へ降りた。そろそろ皆起きてるかしら？下に着くと皆まだ寝ていた。昨日でかなり疲れたのは分かるけどそろそろ起きてもらいましょうか。

「ほら、朝よーIB起きて」

あらら？いつもの様にゆすつてもIBが起きない。まあ、とりあえず後回し。

「ほら、デボル起きて」

デボルもか。まったく仕方ないわね。

「ポポル起きてー。朝よー」

「デボルくまったくしかたないわねく」

いやいや仕方ないのはどっちよ。寝言まで言っちゃって。どうしようかしら。あ、この音源確か入ってたわよね。

「再生起床ラッパ、音量は最大ねー」

再生が始まった途端みんな飛び起きて来た。

「うるっさ！何々！何があったの！」

「ちよつとラヴィー！朝っぱらから流石にうるさいわよ！」

「あ、ラヴィーさん。すいません、起こしていただいて。」

よし！みんな起きたわね。

「おはようみんな〜」

「ちよつとラヴィー！てつきり16Dが暴れたか何かしたかと思つたじゃない！びっくりさせないですよ。」

「そうよ！あーびっくりした」

「すいません、ラヴィーさん私、ラヴィーさんと交代しようと思つてたのに寝ちゃいましたね」

「悪いわね。寝坊助さんたちが揺すつても起きないし、ポポルの可愛い寝言も聞いちゃつたしで、少し意地悪しなくなっちゃってね。」

みんな下を向いていたし、なんならポポルは顔も真っ赤になっていた。

「すいません、突然爆音が聞こえたんですけど何事ですか・・・？あ、」

一番の寝坊助も目を覚ましたみたいね。

第70話

エージエントside

「あら、おはよう16D昨日はよく眠れた？」

みんなの表情が一気に険しくなった。とりわけ11Bは武器に手まで掛けている。こんな状況を把握できたであろう16Dもこっちを睨みつけた。

「離してもらえますか？それに先輩やっぱ生きてたんですね。嬉しいです。私2Bさん達の話聞いて飛び上がったんですよ。だからね、先輩一緒にヨルハ部隊に復帰しましょう？私が司令官に口利きしてあげれますし、また2人で組めれば最強ですよ」

11Bは嫌悪感を隠しきれてない。

「アンタ、なにバカな事言ってるの？」

「脱走したヨルハ部隊がどうなるかは私達は知ってます。どんな事情であれ一度脱走したと判断されたら無事ではすみませんよ」

「うるさい、これは私と先輩の問題です。先輩と2人きりで話させてください」

「わかったわ。ラヴィ悪いけど少しの間屋上借りるわね」

「ええ、有意義な話し合いができるようになればいいわね」

2人は頷いて、11Bの案内で屋上にいった。

11B・16D side

屋上に着いた私達。私は何処かよそらしい16Dをよそに大の字になった。

「先輩何やってんすか」

私は近くの床をたたいて16Dも同じようになるように促した。

「まったくやつと素だしたわね。まあ、久しぶり。元気にしてた16D?」

「こつちのセリフです。撃墜されて遺体も見つからなかった聞いた時、私、私、ホントにもう……」

私はラヴィイにして貰ったように頭を撫でた。

「先輩、一緒に帰りましょう。私が何とかします。」

「何度も言うけどそれは無理ね。それにヨルハ部隊の属という闇の部分を知ってしまったの。アンタが派遣されてきた理由でもある8B達の件でね」

「その闇の部分って?」

「結論から言うると私達のコアは機械生命体の流用」

8Bは驚きすぎて声も出ないみたい。

「そんな事あるんすか? え? アンドロイドと一緒にやなくて?」

「私も正直信じらんないわよ。ついでに言うると人類はもういない。私の存在は人類がい

るって信じ込ませるための壮大なプロパガンダ」

「先輩、冗談でも言つていい事ありますよ」

「じゃあ確かめてみる？司令部に通信して聞いてみればいい？ホントだったらアンタは帰ったら死ぬけど」

16Dの顔が真剣になった。私、確かこの子の反応が面白いって思ってたんだっけ。

「分かりました。信じますし、誰にも言いません。ああ、でもそっかあ」

また16Dが悲しそうな反応をした。

「どうしたの？」

「認めたら先輩と一緒に帰れないじゃないですか。先輩、なんでヨルハを脱走したんですか？」

「できればあんまり言いたく・・・」

突然寝ていた16Dが起き上がり私に馬乗りの体制になった。

「私は先輩の口から直接聞きたいんです」

・・・

「わかったわ。でもこれは私もアンタも傷つく話よ」

「覚悟はしてます」

第71話

11B・16D side

「まず、私は16D、アンタの事が嫌いになった訳じゃないの。覚えてる？ 私がバンカーでこの関係をどう思うか聞いた時」

「覚えてます。突然どうしたのかと思いましたよ」

「アンタはその後みんなの前では関係を避ける事にしたわよね。その代わりOFFにそういう事をするようになったじゃない。次第に普段はアンタとは離れないといけない。そんな毎日に疲れてしまったし、私達の事を認めてくれない司令官を含めた連中の為に戦うのが嫌になった。だからアンタを置いて1人逃げちゃったの。ホント私最低よね。辛い思いさせちゃったよね。本当にごめんなさい」

私は泣いていた。改めて自分の身勝手さが嫌いになる。

「先輩、顔を上げて、可愛い顔を見せてください。ね？」

16Dの手が顔に触れる。少しひんやりしてすべすべしていた。顔を上げると16Dがにっこり微笑んでいた。

「先輩、いいんです。私も先輩のプライベートを侵食しすぎましたよね。先輩の口から

すっかり聞けて良かったです。先輩が全て悪いわけではありません。私にも責任はあります」

「でも私はアンタを置いてっんっ」

16Dは私の口到人指し指を当てて来た。

「先輩、もういいんです。この話は私も先輩もどっちも悪い。だから私は、もう何も言いません。でも最後に一ついいですか？先輩、私はあなたの事を愛しています」

「16D、私も愛してる！もう他人の評価なんか知ったことか！」

「フフツツすが先輩ですね」

CALL

「先輩静かにお願いします。バンカーからです」

「はい、こちら16Bです。あつ司令官、はい、わかりました。えっ！いえ、わかりました。すいません。後1日だけ猶予をください。はい、ありがとうございます」

「どうしたの？」

「帰還命令が出ました。明日までに帰還せよと。」

「ダメよ！16Dやつと仲直りできたのにこんなやつて！それなら私と一緒に」

「無理です。もしここで私が脱走したら恐らくこの辺り一帯はしらみつぶしにされま
す。それに私はバンカーを裏切るつもりはありません」

「でもー」

「なるほどね。話は聞かせて貰ったわ。私に考えがあるの。うまく行けば16Dを自由にできるかも」

ラヴィが屋上の上って来た。ちよつと聞いてたいつからよ？じやなくて

「ラヴィ、それホント？」

「まあ、うまく行けばね。で、どうするの16D、私の話乗ってみる？」

「でも、バンカーの皆さんの為にも戦いたいです。ありがたいですけど・・・」
すると、ラヴィはニヤツと笑って

「大丈夫。自由にするとは言ったけど別に脱走させるわけじゃないわよ。」

第72話

エージェントside

「脱走させるわけじゃない？ラヴィなに言ってるの？」

「どうする？16Dこの話乗る？」

「お願いします」

ワオ、この子思いきり良いわね。

「じゃあ、ここに横になって？」

「ラヴィ一体何するつもり？」

「やりながら説明するわよ。あと、悪いけど適当に音楽かけるわよ」

音楽がかかり始めると、16Dも初めて聞くような音楽に耳を傾けリラックスしている様子だった。

「じゃ始めるよ」

ハッキングを始めると16Dは以前の様にパタツと眠りについた。

「で、ラヴィ一体何するつもりなの？」

「それはね…」

ガチャ

「ラヴィー！何やってんの！ちよつと様子を見て来るって行ってから戻ってこないから様子を見に来てみれば、聞きなれない音楽が聞こえて来るは、16Dは膝枕されてるはうらやま、いやどんな状況よ！」

「デボル落ち着いてよ。で、ラヴィーさんどういふことか説明してして貰えますか」

「分かったわよ。とりあえず、私がこれからやろうとしているのは11B達の信号の周波数を変えた奴の応用ね」

「え？でもそれじゃあ、バンカーにバレないの？」

「恐らくは大丈夫。今やろうとしているのはブラックボックスの信号の周波数を16D自身が任意のタイミングで変更できるようにするの。プログラムを付け加えて特定のキーワードを3回命令すると自動で周波数が切り替わる仕組み。どう？かみ砕いて説明したけど分かった？」

あれ？みんなの反応が無いんだけど、どうしたのかしら。まあ、いいわ。とりあえず、16Dの方を終わらせませしょうか。

数分後

よし、16Dの方の作業は終わり。それと同時に16Dが起きた。

「おはよう。16D終わったわよ」

「ありがとうございます」

「いいのよ」

「あ の つ」

「どうしたの?」

「ラヴィさんでしたよね。昨日は本当にごめんなさい。あんな事したのにここまでして貰ってなんとお礼を言ったらいいか」

「ホントにいいのよ。こちらこそ、これからも11Bと仲良くね。それであなのブラックボックスの信号の周波数を任意に変更できるようにしたから。特定のワードでそれが発動するようになってるわ。それを教えるからこつちによつて」

よつてきた16Dの耳元でそのキーワードを囁いた。

「つっ!!」

「これをするときはいこれ位の時でしょ」

「そうですけどこれは!!」

「ふふつ、さて、次はこの3人ね。ほらデボル・ボボル大丈夫?」

ダメね。叩いても戻らない。うゝん

「ごはんにしましょうか」

「はー」

まったくこの子たちは・・・

「16D、11Bをよろしくね。私達は下にいるわ」

「アレを言われてから先輩のこと変に意識しちゃうんですけど！それにこの状態の先輩をどう起こせと！」

「あら、案外キスで目覚めるかもね」

第73話

16D side

「先輩、先輩」

ちよつと揺すつても全く治らないんですけど！え、ホントにあの言葉言わないといけないんですか。私は茫然としている先輩の正面に座り勇気をいっぱい出した。

「先輩、愛してます」

「私もアンの事愛してるわよ」

!!

「先輩！いつから戻ってたんですか！」

「戻ったのは最近よ。なんかアンタが面白そうな事やろうとしてたからね。乗ってあげたのよ」

「もう！下に戻りますよ！」

Eージエントside

下に降りてからしばらくして2人が降りて来た。16Dの顔が真っ赤だったけれどね。

「11B どうだった？」

「すごく可愛かった」

「なに、何？なんかあったの？」

「デボルあんたって本当に鈍いわよね」

「デボルがポポルに食って掛かっていると16Dが小さな声を上げた。

「あ、あの恥ずかしいので、みなさん辞めてください」

「「あ、はい」」

流石にいじわるしすぎちゃったかな？私はお湯をコップに入れて2人に渡した。11Bが近くに16Dを座らせてお湯を飲んでた。最初は渡されたお湯に戸惑っていた16Dだったけど、11Bの真似をして飲み始めた。徐々に顔にも落ち着きが出始めた。

「あの、良ければお2人の思い出とか聞かせて頂けますか？」

「えーつとまずほ・・・」

そのまま私達は日が暮れるまで雑談にふけた。たわいのない話だったけれど、みんな楽しそうだった。

「ねえ、16Dそろそろ時間じゃない」

「あ、流石にバンカーに戻らないといけませんね」

16Dが立ち上がるとみんなも何も言わずに立ち上がり入り口まで無言で移動した。「見送りはここまでで結構です。それじゃあ皆さんいろいろ色々お世話になりました。私も気持ち新たに、毎日の任務がんばります！」

「私はまだ恋人とかいたことないから、あんまわかんないけど辛くなったらいつでも相談に乗るからね」

「デボルと同じです。あまりため込みすぎるのも良くありませんよ」

「はい」

「暇ができたなら何時でも来て良いわよ。もちろん歓迎するわ」

「先輩」

「16D、私はアンタを置いて脱走しちゃったけどアンタのこと嫌いじゃないから！司令部の連中がふざけたこと言ったらさすがにでも殴りに行ってやるわ！私はいつでも待ってるからね。元気だね」

「もし、11Bがやらかしたら私が殴つとくから！」

「デボルったらなんでそうなるのよ」

「お願いします」

「公認貰っちゃった」

あ、11Bこれからもしっかりしないとね。

「じゃあもう行きます」

そして私達は16Dが見えなくなるまで手を振り続けた。そのあとはご飯をお腹いっぱい食べて、姉妹も休暇が終わるので帰った。その後片づけを一通り終われさせた後、寝る体制に入った。

「11B、いつか必ず16Dと楽しく過ごせるようになるわよ。だから、そんなに泣かないの」

反応を示さない11Bを私は彼女が眠るまで撫で続けた。

第74話

エージエントside

朝、いつもの様に起きて身支度を整え、11Bを起こしたら身支度を始める。双方準備ができたのを確認した。

「おはよう11B。良く寝れた？」

「お陰様でぐっすり」と

「それは良かった。さて、今日はどうする？」

「いつも通り郊外に行つて稼いでくるわ」

「頼もしいわ。私の方なただけ8B達の様子を見にパスカルの村に行つてくるわ」

「OK。ラヴィなにかあつたら連絡して」

「そつち気を付けて」

私は11Bと別れパスカルの村に出発した。

パスカルの村

村の中に入る。子供たちと遊んでいる22Bを見つけた。馴染めてそうで良かったわね。微笑んでいると後ろから突然パスカルに声をかけられた。

「こんにちは。ラヴィさん。今日はどうされましたか。」

「つつ!!びつくりした!パスカル久しぶり。今日は8B達の様子を見に来たの」
「そうですか。ならついて来てください」

パスカルについて行くと土いじりをしている8B、64Bが見えた。あら、見ない間に様になったわね。するとあっちも気づいたよう

「おうラヴィ久しぶりだな!」

「しばらくですー。あ、22B呼んできますね」

そうやって64Bはさつき通ってきた広場に22Bを呼びに行った。

「それじゃあ私も22Bさんに変わってきますね。どうぞゆっくりしてってください」

パスカルが広場にいくのとすれ違うように22Bと64Bが戻って来た。

「よう!久しぶりだなラヴィ!」

「とりあえずラヴィここら辺に座ってくれ。ちょっと土が着くかもしれないがすまないな」

「大丈夫よ。こっちこそ急に連絡もしないでごめんなさいね」

「ラヴィさんならこっちも大歓迎ですよ」

「いつでも来てくれよな」

「ありがとう。で、どう畑の方は」

すると22Bが立ち上がった。え？何すんの？

「ラヴィこれを見てくれ！」

手がさす方向を見るとすくすくと育つ小麦があつた。

「凄い！私感動して泣きそう」

「なんで育ててないラヴィさんが泣きそうなんですか」

だつてやつと人間らし暮らしができそうなのよ。

「いやーここまで来るまで大変だった」

「本当によくやつてくれたわ。収穫出来たらおいしい料理かならずご馳走するからね

！」

「2人共落ち着け。まあ、楽しみにしとくよ」

「飛び切り美味しいのを頼みますね。ラヴィさん」

「ところで聞いた話なんだが・・・」

話が切り替わると3人が体を近づけて来た。

「最近、ここら辺一帯を統べる機械生命体が撃破されたらしい。」

「誰がやったのかは何となく想像できるけどね」

「それでですね・・・」

第75話

EーJエント side

「それでですね、その機械生命体との戦闘でレジスタンスキャンプが結構な痛手を負ったらしくてですね、このままだと機械生命体が増えるつてことで、近日大規模な降下作戦をするらしいです」

え？ 私達が拠点であれこれやってる時にそんな事があつたのね。まったく知らなかったわ。

「で、それがどうかしたの？」

「そこで提案なんだが作戦の間だけ1ー1Bだけでもこつちに来れないか？」

「どういう事？」

すると8Bが上を指さした。

「この村は一応この木々で覆われてるから見えないとは思うんだがな。何せ今までは機械生命体の反撃で失敗、痛み分けが多かつたからな。でも今回は違う、何かなければ今回は成功する。そうすればこの辺りは一時的とは言えヨルハが溢れる」

「この村が見つかる可能性があるというわけね？」

3人共が頷く。

「それがなんで11Bを預けることになるわけ？一応バンカーはこの村の存在を認知してるのよね？」

「認知してるのはバンカーの司令官とオペレーター連中だけだろう。現にこの村の事を私達は一切知らなかったしな。それに普通降下作戦つてのは大部隊で行う。その中にはこの辺りの事情を知らない奴らもいる。そんな連中がこの村の事を知ってたとしても何もしないとは限らない」

「だから、その時には11Bを含めた4人で撃退すると？」

「そこまでに至らなくても司令部に確認させて辞めさせればいいだけです」

「あなた達はその後どうするつもり？」

3人は下を向いた。

「最悪、投降します」

64Bが呟いた。

「それに11Bを加えて仲良く一緒に？」

「そんな事しません。11Bさんは私達の命に代えても逃がします！」

すると22Bに手を掴まれた。

「ラヴィー！頼む。私らはただこの村を子供たちを守りたいんだ！あいつらには笑ってて

欲しいんだ！ただこの村の幸せを壊したくないだけなんだ」

3人の目には覚悟が宿っていた。

「分かったわ。11Bはあなた達に預けるわ。それとね、私も少し手を貸してあげる。」

3人の顔に安堵が見えた。

「ありがとう！ホントにアンタには世話になってばかりだ」

22Bに至っては私の腕を激しく上下させた。ちよつとかなり痛いんだけど・・・

「で、手を貸すつてのは？」

「前に物資を収集に行った時のへりを覚えてる？」

3人はこくんと頷く。

「連絡があればアレを使って迎えに行つてあげる。皆の待避はもちろん回数を分けて場所を選べばこの村全員を運び出せるわ。でも、そうなると私はここに居れないわ」

「どうしてです？」

「森の中に見慣れない物があつたらそれぞれこそ目立つでしょう？それに連絡されればすぐに来られるわよ。あら、あなた達それまで持ちこたえる自信ないの？」

私は3人を見渡すと3人の目が変わった。

「ラヴィー！私達をなめてないか？これ位やってやるさー！」

「良いわ、その域よ」

「おい！全力を尽くすぞ！いいな！」

「はい！！」

「ウーラー！！」

あ、つい昔の癖が・・・

第76話

EーJエントside

「みなさんお元気ですね。あの子の子たちがラヴィさんに遊んで欲しいらしいんです。もし、お時間あれば遊んで頂けませんか？」

その後村の子供たちと遊んだ。ホントに3人共楽しそうにしてるわ。そろそろ日が沈み始める時間になって来たので帰ることにした。

「じゃあ、明日以降IーBを超越するようにするわ」

「すまない、よろしく頼んだ。」

私は拠点に戻って夕飯の準備をしつつ近日行われる降下作戦について考えていた。

本当に何事も無く終わればいいけれど、そうなると明日はヘリの点検と整備でもしましようかね。

「ただいまー」

IーBが帰って来た。

「お疲れ様。いつも悪いわね。貴方にばかりキツイ仕事を押し付けちゃって」

「いや大丈夫。最近私のせいでまた迷惑かけちゃったし、まだ私の事助けて貰った時の

事すら恩返し出来てないし」

「良いのよ別に。私としては誰かと一緒にのんびり出来れば幸せなんだし」

「ラヴィの中の基準が分からないわ」

「知らない方が良いこともあるのよ。ところで11Bちよつとお願いがあるんだけど……」

私は8Bの提案を話した。

「どう、最悪ヨルハに捕まる危険もある。嫌なら断つてもいいわよ」

11Bは少し考えた後

「やるわ。私もあの村の雰囲気は大好きだしね。後、これは勝手な妄想んだけど、もしあの村をヨルハが襲つても司令部はそれを隠ぺいすると思う。あくまで妄想だけどね」
「なるほどね。とにかく引き受けてくれてありがとう。じゃあ、明日からパスカルの村に行つて数日お泊りしてきて」

「ただのお泊りになることを願うわ」

「まったくね。さて、ご飯食べましょ」

私達はそれぞれの出来事を話しながらご飯を食べ、その後仲良く眠りについた。にしてもそろそろこの食事にも飽きが来たわね。でもあと少しすれば小麦も収穫できるし楽しみね。

翌日

いつもの様に準備を整えた後、11Bは村に出発した。さて、こっちもボチボチ始まりますか。屋上に行つてヘリのブルーシート外してエンジンの部分を点検した。出来れば定期的に動かすのが一番いいんだけど、これ乗ってるだけで悪目立ちしちゃうしなあ・・・

CALL

ん？誰かしら

「やあ！ラヴィ元気してるかい！最近こっちに来てくれないから寂しくてね。実はだねー」

「ちよとちよと勝手に何やってるんですか！あ！デボルそっち行つたわよ！」

うるっさー！え？何これどうなってんの？

「お前らちよつと落ち着け！」

あ、なんか知らない人の声が入った。

「ラヴィ！久しぶりね！後でかけなおすから少し待ってて！」

「え、ええ」

第77話

エージェント side

何だったのかしらあれ。とりあえず、こつちの事に集中しないとね。どうやらまたかかって来るらしいし。それから一通りの点検を終わらせて機体を洗った。

CALL

「いや、あ、先ほどはすまなかつたね。ではやり直してやあ！ラヴィ元氣してるかい！最近こつちに来てくれないから寂しくてね」

「あら、ごめんなさい。最近忙しくてね。で、何か御用かしら？」

「あ、そうだったね。まず、明日ヨルハの降下作戦が行われるのは知ってるね？」

「ええ、もちろん」

「それで、当たり前だけれど私のいる砂漠の方でも作戦が行われるんだ。いつもならその時は私は君もご存じのあの場所にいるだけなんだが、先のレジスタンスキャンプの襲撃によってキャンプの損害が酷くてね。いつもなら何かの拍子に機械生命体が来ても撃退できるんだけど、今回は先の事もあって不確定要素があるから私も呼ばれたん

だ。それで作戦時はもしもに備えて付近で待機なんだけど……」

「その時に私のところに居たいから、そのアポ取りつてわけね？」

「察しがよくて助かるよ」

でもどうしようかしら。これと言って断る理由が無いのよね。うくん、

「ラヴィ？よかつたら私達も行つていい？前からそんなに時間空いてないけどやっぱりラヴィと居ると楽しいなって」

ええ子や、マジで可愛いなそして眩しい。

「良いわよ。皆でいらつしやい。と言つても別に何もなければ」

「ありがとうラヴィ！私はあなたの心の友だよ！」

「ホントにうちのラヴィに加えてジャツカスさんがすいません。では、後ほど伺います」
「気を付けてねー」

そういえば前のHELIXキャノンの試射の時みたいにジャツカスに頼んだらへり飛ばせないかな？着たら頼んでみましょうか。にしても今日も暑いわ。私は日差しを避けるために下に降りた。下に降りて涼んでいるとしたから声が聞こえて来た。どうやら来たみたいね。

「来たよー。ラヴィーいやー悪いね。突然無理言つて」

「別にいいわよ」

「いやーやつぱりラヴィは話に分かるね」

「すいません、ラヴィさん本当にありがとうございます。あと、ジャツカスさん、少しは反省してください」

「ホントよ！そのせいでアネモネさんに怒られたんだからね！」

アネモネさんも大変ね。

「ところでジャツカスちよつと相談なんだけど、この前のHELLキヤノンの試射の時みたいにあネモネさんに話付けて貰えないかしら？」

するとジャツカスの目が輝いた。そして凄い勢いでしがみ着かれた。

「なんだい！なんの兵器の実験だい！」

「落ち着いてよ。今から見せるわ。付いてきて？」

第78話

エージェント side

「落ち着いてよ。今から見せるわ。付いてきて?」

3人連れて屋上に上がった。

「これを久しぶりに飛ばしたいんだけど、ダメかしら?」

あれ? ジャッカスの目がキラキラしてるのは予想通りんだけど、デボルとポポルはなんで頭抱えてるのかしら?

「2人共どうしたの?」

「ラヴィさんこれ前にも一度飛ばしました? 例えばレジスタンスの空母が寄港しようとした時とか?」

「ええ、それにあなた達と話してる時これだったんだけど」

「あのねラヴィ、あの後見たことない航空機が飛んでるって情報が入って新手の機械生命体かと大騒ぎだったのよ」

思ったより大事になってるわね。これは飛行許可下りるかしらね?

「あー、その節はごめんなさい。なにも言わなかったこっちの責任だわ。今回はちゃん

と許可をとるから許して貰えないかしら？」

「はあ、それなら」

「話は纏まったようだし、アネモネに連絡するよ」

CALL

「アネモネ今いいか？」

「構わんがどうした？何をやらかした。もう私は一緒に謝らんからな」

あ、さっきの無線で怒ってた人ね。なるほどこの人がアネモネさんか。

「失礼な！どうして私がいつもやらかしてる前提なんだ！まだ何も言っていないだろう！」

「わかったわかった。で、用件はなんだ」

仲がいいのね。2人共。

「これから私の掛け替えのない友人の試験飛行にご一緒するんだ」

「掛け替えのない友人って、ラヴィ、マジ？」

デボル、小声でも聞こえてるわよ。

「試験飛行？一体なにを飛ばす気だ。それにお前の友人？悪いことはしないから今すぐ解放しろ」

「いい加減に私も怒るぞ？それにラヴィはわたしと一緒に爆薬の知識がある大切な友人

だ」

「そのラヴィってやつを私は知らんが多分変人だな。で、何を飛ばすんだ」

「あー、その説明はラヴィ本人からして貰おう。変わるから少し待ってくれ」

へ？私？するとジャツカスに無線機を押し付けられた。ロパクで「話せ」って言われても、さっきのやり取り聞いてなかったの？

「あー、あー、初めましてアネモネさん、ジャツカスとは仲良くさせて貰ってます」

「そういうのは良いから何を飛ばすんだ？」

「UH—Yヒューイです」

「あのな、アンタらのネーミングセンスを評価する気はないんだ。もっとわかるように言ってくれ」

完全に私も変人扱いね。泣きそう。分かるようになって、アンドロイドに兵器の知識は無いのね。

「分かりやすく言うならヘリコプターです」

「ん？」

「ヘリコプターです」

「は？」

ええ？ある程度解説した方がいいのかしら？

「すまん、ヘリコプターってのはあの人類がいた頃の乗り物で、回転翼機ってやつか？」
「そうだけど・・・」

無線越しに息のすう音が聞こえた。

「お前かああああああああああああああああああ！あの時飛ばしてたの！そもそもヘリをどうやって動かした！おい！一回レジスタンスキャンプに来い！」

「ちよつとごめんねー」

そのまま無線をジャツカスに奪い取られ、ジャツカスは無線を切った。

「よし！それじゃあ行くかうか！」

ジャツカス絶対あとでアネモネさんに怒られるわよ。

その後は廢墟都市や遊園地の辺りを飛行した。鳥が近くを飛んでたりとこつちも癒される時もあった。終始、デボル、ジャツカスもキャツキャしてて可愛らしかった。遊覧飛行を終えて屋上に着陸した。

「楽しめたかしら?」

「うん! すつごく楽しかった! 空を飛ぶって楽しいわね!」

「貴重な時間だったな。憧れの空をしかもロストテクノロジーだと思ってたヘリコプターでなんて興奮が抑えられない!」

「どうだったポボル?」

「ラヴィさん出来たらで結構なんですけど、私にヘリの操縦を教えてくださいませんか?」

「構わないけど、どうしたの突然」

「いや、ラヴィさんが忙しいなら結構です! それに理由も大したものではないですし……」

「別に教えないとは言っていないわよ。それに大した理由じゃなくたって構わないから教えてくれない?」

「馬鹿にしないでくださいね。ただやってみたいなつて思っただけです」

「これはいわゆる趣味って奴かしらね? ホントこの世界の人類の科学技術には脱帽ね。」

「あら、いいじゃない。「やってみたい」立派な理由だわ。ね? ジャツカス」

「そうさ！科学の発展も素朴な疑問から始まる物さ！だからその気持ちで大事にするといふさ」

あら、ジャツカスも偶にはいい事言うのね。

「ポポル、ラヴィの前くらいもう少し素直になれないの？あまりにも過去にとらわれちゃ進むものもないわよ」

デボルの言葉で気づいたのかしらね。顔を上げたポポルの顔は何だが少しすつきりした表情だった。

「ラヴィさん！私ヘリの操縦をやってみたいですよ！」

「いいわよ。ただし簡単な物じゃないわよ」

「はい！」

すると、デボルがスツと手を挙げた。

「話もまとまった所でご飯にしない？お腹すいちやった」

「まあ確かに。それにある程度の基礎知識もいるし、今日は座学して、明日以降から本格的にやりましょう」

「ごはん？私達には食事はいらないだろう？」

「ジャツカス、最初はみんなそう言うのよ」

第80話

エージエントside

私達は拠点に入った後、私はご飯の準備をした。

「どうぞ召し上がれ」

「ふん。デボルがあまりにもうるさいからどんなものかと思ったけどただ肉を焼いただけかい？」

「いえいえ、ラヴィさんの料理はそこら辺の料理と違ってとっても美味しいんですよ！」
「ふん。でもただの料理だろう？ 私達には別に必要ないものだ」

「良いのよポポル。興味のない奴はほっておけばいい。私達の取り分が増えて結構じゃない」

「デボルも大人になったのかしらね？ それとも本当に取り分が減るのが嫌なのかしら？」

「ラヴィさん今日も美味しいです！」

「同じく！これがあれば何でも頑張れるわ！」

「そこまで言われると照れるわ／／／」

くっ

誰かの喉がなった気がした。

「そ、そこまで言うなら一切れ頂こうじゃないか」

「はい、どうぞ」

「ちよつとラヴィー！」

やっぱり取り分を気にしてたのね・・・

「ん！ラヴィー！さっきの発言は撤回する！これ凄くうまい！」

「慌てないの」

あの後デボルとジャッカスのヒートは続きポポルに叱られるといういつもの流れができた。食後私とポポルはヘリに関する座学を始めた。

16D side

「ただいま帰還しました」

「そうか。どうだった？」

「自分の中で気持ちの整理もできました。私のわがままにわざわざ対応していただいてありがとうございます」

「構わん。それに我々も死亡が確認されている機体が生きているなんて初めての事態だ。その確認も兼ねてだ。別に問題ない。それでだ、明日の降下作戦に備えてデータの

アップロードを済ませておいてくれ」

「了解しました」

正直、先輩のいないバンカーは嫌いだ。それに、あんなことを聞いたらなおさらだ。はあ、先輩、会いたいな。私はその後、司令官からの指示をわすれそのまま眠ってしまった。

「現在、敵の指揮系統は一時的な混乱状態にある。この好機を逃さず、人類軍は機械生命体に総攻撃をかけることが決定された。無論我々ヨルハ部隊も例外ではない」

私は今、出撃前です。司令官さんの演説を聞いてます。

「思い返せ！故郷を奪われた苦しみを！我々は諦めはしない！」

良く言いますね。そもそも地球を奪還したところで、私達を迎えてくれる故郷なんてありはしないのに。

「海を、空を、大地を、おぞましき機械生命体に奪われた地球を取り戻す！」

私にとって今は機械生命体より、このヨルハの方が正直おぞましいです。

「本作戦の成功をもって今ここでこの戦争を終わらせるのだ！」

戦争なんてとづくに終わってますよ。

「人類に栄光あれ！」

「人類に栄光あれ！」

私は動作こそすれどこの言葉を口には出さなかつた。

第81話

エージエント side

「始まったわね」

私達が空を見上げると、今まで見たことない程のヨルハの航空機が降下してきていた。

「にしても今回は特に規模が大きいわね。私も初めて見たはこの規模は」

「どうやら、月面の人類様は今回の一連の作戦でこの戦争を終わらせるつもりらしい」「そんな簡単に行くんでしようか」

「科学者としては断言したいが、残念ながらこればかりは分からない」

「私達にはできる事言えば、この作戦が成功することと、レジスタンスキャンプが何事も無い事を祈るぐらいよ」

「それも、そうですね」

「さて、座学を始めるわよ。まずは基礎から・・・」

11B side

「おい、どうやら始まったようだぞ」

「うわあ、今回は規模がでかいな」

「ホント、私が脱走した時と比にならない規模ね」

「改めて11Bさんって無理な脱走方法しましたよね」

辞めて、あの頃の私思い返すと色々恥ずかしくなってくるのよ。

「さて、脱走した身とはいえ、作戦の成功を祈らずにはいられないな」

「そうですね。早く成功して帰ってもらいたいものです」

「64Bに同感」

「さて、そろそろ始めるぞー」

何やら8Bが大きな袋を持ってきた。

「ほれ」

袋を渡されてつくっさー！

「ハハ、時期になれるさ。頑張れ11B」

「やめろ、その先輩面」

「2人共仲良くしてくださいよー」

16D side

「——っつー！」

私は今機械生命体と戦闘中。にしても数が多い。質では有利だけど、数では劣勢だ。

機械生命体の攻撃を力任せに押し返す。そして別な奴を切る。これの繰り返しだ。流石にキツイです。

「増援を受けませんか！」

息が途絶え途絶えになりつつ叫ぶ。

「無理だ！何処も苦戦してる！私達は善戦してる方らしい！」

何が指揮系統が混乱状態ですか！むしろ状況は前より悪いと思うんですけど！

「これで最後だっ！」

最後の1体を撃破した。こちらの被害も少なくない。これで善戦してる方ならほかの隊はどうなってるんですか。

「おい！ほかの隊の援護に行くぞ！」

ジー——ジー——

「おい、なんだこの音は」

次から次へと一体何ですか！

「おい！構えろ！」

気づけば周囲を機械生命体に囲まれていた。しかも首と胴体がリングのようなもので繋がっている。初めて見るタイプだ。

「気をつけろ！」

誰かが叫んだ瞬間、機械生命体から電磁波が発せられた。

「ああっ！」

私は体から力が抜ける感覚がした。EMP！攻撃！こんなのありか！何とか動かないと。私はハッキング自分自身にした。ラヴィさんに感謝ね。よし！システムオールグリーン。

「みなさん大丈夫ですか」

私の声に反応してくれる人はいない。状況は最悪。戦えるのは私だけ。やるしかない！

第82話

16D side

「フウーハアー」

私は深呼吸した。そして地面を蹴り目の前の機械生命体に突っ込んだ。疲れてるけど、やるしかない。

ジャージャー——

またあの忌々しい音が聞こえた。突如、視界にノイズが走った。ジャミング。なにがどうなってるんです！とにかく動いてる物を切りまくった。マズイ、視覚が正常じゃない。いせいで攻撃やジャミングを完全に避けきれない。

CALL

「こちら16Dからバンカーへ」

応答なし。ジャミングの影響下にいるからか。

CALL

「こちら、先攻撃部隊エコー。誰か救援を要請します！」

CALL

「こちら16D！この通信が聞こえてるのなら応答を！」

何で誰も応答しないのよ！まさか全滅とかしてないでしょうね！畜生！

「私はまだ死ねないんだあああああ!!!」

先輩にまた生きて会うんだ！その「心で狂ったように刀を振り回した。

「ハアハアハアハア。これで終わりです！」

最後の1体を力任せに押し倒し、ブレードを突き立てた。やっと終わった。

「大丈夫ですか・・・」

隊の位置に戻ると、いまだにEMPの影響を受けているように見えた。でもまあ何とかあったと思いたい。

「ううあああがつつ」

すると、今度は声にならないうめき声をみんな上げ始めた。

「広域ウイルス！いつの間にも！」

「アハハハハハ」

先ほどまで一緒に戦っていた仲間がウイルス汚染されてしまった。

「アハ！」

「ガハっ！」

私は近くにいた奴に蹴飛ばされた。そして、私の目の前には狂ったかつての仲間た

ち。そして全員武器を抜いている。もはや仲間とは言えなくなった。

「みんな！畜生！何がどうなってるのよ！」

私は走り出した。私はもうボロボロだ。連戦によるダメージが蓄積している。私はかつての仲間からの時折飛んでくる攻撃を躲しつつ、逃げ続けた。

「!!」

行き止まりだ。目の前には鉄の板が縦にそびえたっていた。

「アハハ」

狂った者たちの声がした。後ろを振り返ったと同時に投擲されたブレードで足が傷ついた。ああ、私は死ぬんだ。どこか穏やかな気持ちになれた。

「アハハハハハハハ」

徐々に不快な声が近づいてくる。私は目を閉じた。最後に先輩に会いたかったな。

「先輩、愛してます」

覚悟を決めたとき、私の目の前で大きな銃声が二つ響いた。恐る恐る目を開けた。目の前には大きな名が開いた元ヨルハと、一度は失ったと思った背中。

「私もアンタの事愛してるわよ」

私は我慢できずにその背中にすがった。

「大丈夫よ。よく頑張ったわ16D。立てる？」

「大丈夫です。でも、どうします」

「アハハハ!!」

結局状況はたいして変わってない。数は圧倒されている。

「16D合図したら後ろに全力で走って。いいわね」

後ろを見ると、行き止まりだと思っていたところの一部が開いて道が続いていた。入り口にはなにやらブロックのようなものがある。どうやらあの道に走ればいいらしい。

「わかりました」

「OK、ラヴィー！派手にやって！よし！走れ!!」

「了解！デンジャー・クロース!!」

先輩の無線機越しにラヴィーさんの声と爆音が聞こえる。

第83話

11B side

「段々11Bも様になって来たな」

「私達に比べたらまだただけだな」

「あああん？」

「喋つてないで手を動かせお前ら」

畑仕事ってかなり疲れるわね。こりやラヴィが1人でやろうとしないわけだ。まあ何となく前の座学の時点で大変さは察してただけど、やってみると実感するわ。

「そろそろ休憩にするか」

8B合図で休憩となった。私が水をのんでいると、3人が笑った。

「どうしたの？」

「気づいてないのか？お前、脱走前は水なんて飲まなかったろ」

「確かに、ってアンタらも飲んでるじゃない」

「私達も最初は無意識だったんです。パスカルさんに指摘されてそれでそういえばってなりました」

「なんでかしらね？ラヴィの影響かしら？」

「かもしれないな。ところで11Bどうした。なにか心配事でもあるのか？さつきから時折悩むような顔をしているからな」

8B、私そんな顔してた？

「ラヴィほどじゃないが私も良い勘してるだろう？お前が良かったら話せ。大丈夫だ誰にも言わん」

「実はね……」

私は16Dの事を話した。ある程度濁しはしたけど、ほとんど伝えたつもりだ。

「なるほど。その方が無事だといいですね」

「おい！静かにしろ。なんか聞こえないか？」

ジー……ジー……

なにか動作音のようなものが微かに聞こえて来た。

「なんでしようかこの音」

「ヨルハの新兵器かそれとも新型の機械生命体かのどちらかだろう」

「ちよつとラヴィに通信してみてもいい？」

CALL

「どうしたの11B」

「さつきから鳴ってるこの音なんだかわかる？」

「そつちにも聞こえてるの？ どうやら至る所で鳴ってるみたい。それで・・・」

ザー

「こちら・・・」

「待ってラヴィ混線してる。周波数を変えましょう」

「珍しいわね。了解この周波数に変更して」

本当、混線なんて珍しいわね。周波数を変更しようとした時だった。

「こちら16D！この通信が聞こえてるのなら応答を！」

16D！どうしたの！何があったの！聞こえてきた声は息も絶え絶えだった。それになぜほかのヨルハは応答しないの！16D！

CALL

応答なし

「16D！16D！」

お願い・・・応答して・・・

「どうした！」

私の大声に驚いた3人もこつちに寄って来た。と、とりあえず周波数を変更して、

「ラヴィ！16Dが16Dが！」

「落ち着いて、11B何があったの」

「さっきの混線で喋ってたの16Dだった！それで何か息も絶え絶えで……」

「OK、他に情報は……ん？ちよつと待って」

少しの間が恐ろしく長い。

「不味い事になったわ。16Dがヨルハに攻撃されてるわ」

「なんですつて！助けに行かないと！ラヴィ場所を教えて」

「それが、その村の市街地にでる入り口よ。11B急いで！」

第84話

11B side

「それが、その村の市街地にでる入り口よ。11B急いで！」

私はそれを聞いた瞬間走り出した。後ろから8B達の呼び止める声が聞こえた気がしたが私の耳には届かなかった。

「ラヴィー！前言ってた砲撃ってできる!？」

「できるわ。で、どのあたりに砲撃するの?」

「私が合図したら村の入り口をお願い！」

「それじゃあ2人共巻き込まれるわよ」

「良いからお願い！」

「了解！巻き込まれないでね！」

見つけた！私は入り口を塞いでいるブロックをどかした。16D！私は16Dを殺そうとするヨルハの腹にショットガンをぶち込んだ。

「先輩、愛します」

最期まで私のこと思ってくれてるんだ。これは私も、もっと正直にならないといけないな

いのかな？

「私もアンタの事愛してるわよ」

私は16Dの手を掴んで立たせた。

「大丈夫よ。よく頑張ったわ16D。立てる？」

アンタの事私が死んでも守るから。

エージェント side

私達は昨日ポポルがヘリの操縦を覚えたいとのことで、それに関する座学を行っている。

「ラヴィー、疲れたー」

「それもそうね。少し休憩しましょうか」

「私としては休憩など必要ないんだが、まあいいか」

にしても、激しいわね。

「今回の作戦は長引くわね」

「そうね。今のところキャンプからなにも要請来てないからこのまま終わって欲しいわ」

2人の話的に今回は長引いてる方なのね。それほど熱い戦いつてわけだ。

ジー——

突然、聞きなれない電子音が聞こえて来た。

「これ何の音かしら？」

「分からん。少なくとも私が把握してる限りだとレジスタンスにもヨルハにも、こんな音が鳴る装備品はないぞ」

「機械生命体の攻撃って事よね。しかもレジスタンスも知らない新しい攻撃。ねえ、この降下作戦ってこの辺りの機械生命体の頭が撃破されたから行われてるのよね？」

何か嫌な予感がする。私が屋上に行こうとすると三人もついて来た。屋上で周りを見渡してみていた。

CALL

「どうしたのー11B」

「さっきから鳴ってるこの音なんだかわかる？」

「そっちにも聞こえてるの？ どうやら至る所で鳴ってるみたい。それで・・・」

ザー

「こちら・・・」

「待ってラヴィ混線してる。周波数を変えましょう」

「珍しいわね。了解この周波数に変更して」

とりあえず、周波数を変更して11Bを待った。

「11B遅いわね。ただ周波数を変更するだけよ。もしかして使い方を知らないとか？」

「デボル、流石に11Bさんの事馬鹿にしすぎよ」

「冗談よ、冗談」

でも遅いわね。本当ただ周波数を変えるだけなんだけど・・・私が前の周波数にもどして11Bを呼ぼうとした時だった。

「ラヴィ！16Dが16Dが！」

「落ち着いて、11B何があつたの」

「さっきの混線で喋ってたの16Dだった！それで何か息も絶え絶えで・・・」

最悪だ。

第85話

エージエントside

「落ち着いて、11B何があったの」

「さっきの混線で喋ってたの16Dだった！それで何か息も絶え絶えで・・・」

最悪だ。

「OK、他に情報は・・・ん？ちよつと待つて」

ふと私の視界の遠くの方に1人の人影とそれを追うそれに似た複数の人影が見えた。私はライフルに持ち替えてスコープを覗いた。

「・・・fuck」

あまりの光景に無意識に声がでた。

「ラヴィどうしたの？ちよつと見せて」

私はデボルにライフルを貸した。そして、見たままの光景を11Bに伝えた。

「不味い事になったわ。16Dがヨルハに攻撃されてるわ」

「なんですって！助けに行かないと！ラヴィ場所を教えて」

「それが、その村の市街地にでる入り口よ。11B急いで！」

無線からは11Bの走る音と、そんな11Bを呼び止める8B達の声が聞こえた。走りながら生き絶え絶えに

「ラヴィ！前言つてた砲撃つてできる!？」

「できるわ。で、どのあたりに砲撃するの?」

「私が合図したら村の入り口にお願い!」

「それじゃあ2人共巻き込まれるわよ」

「良いからお願い!」

「了解！巻き込まれないでね!」

そして無線が切られた。私はブルーシートを外し、HELLキャノンを設置した。

「みんな悪いけど砲弾運ぶのを手伝って!」

私はみんなと一緒にしたから砲弾を運びあげ、おおよその観測を終えた。

「ラヴィこの後どうするんだい?」

「11Bの合図待ちよ。そうね、ジャツカス弾着観測お願い」

私はライフルのスコップを適切な倍率に切り替えた後ジャツカスに渡した。

「OK、ラヴィ！派手にやって！よし！走れ!!」

「了解！デンジャー・クロース!!」

私は弾幕射撃を行った。

「ジャツカス、効果はどう？」

「効果はあったようだよ。連中は村に入れてない」

そういうとジャツカスは私にライフルを返してきた。スコープで見ると村の入り口に数個のクレーターと残骸が来ていた。

C A L L

「11B、16Dは無事？」

「ダメージを結構受けるから治療してあげないと」

「了解、ヘリでそっちに行くわ。こっちには姉妹とジャツカスがいるから何とかできると思うわ」

「了解待ってるわ」

通信をきつてヘリを動かそうとした時だった。

「ラヴィさん！あれ！」

「みんな伏せるんだ！」

その瞬間屋上に飛行ユニット機銃掃射が着弾した。

「みんな大丈夫!？」

「クソツたれ!!」

「また来ます！」

今回は無理なく躲すことができた。

「ヨルハ部隊さんこっちは味方です！射撃中止してください！」

「アハハハハハ」

「ポポル、ダメね。完全に汚染されてる」

第86話

エージエントside

私はライフルを撃つが速度が速く当たらない。正直豆鉄砲である。

「ラヴィー！なにかできることはありませんか！」

「ジャツカス！アレの弱点みたいなものって無いのかしら!？」

「無い。手持ちの火器じやどうやってもアレの装甲破れない。あるとすれば爆弾を直撃させるくらいだ」

「そんな曲芸誰ができるのよ！」

「だから無いと言ったんだ！マズイ避ける！」

その瞬間、私達のすぐ上を飛行ユニットが通過した。それも乗っているヨルハのイカれた顔が見えたくらいだ。

「！」

「ラヴィーどうしたの!？」

見つけたわよ弱点を。

「ジャツカス！一つ質問だけどアレ自体の装甲はぶち抜けないでしょうけど、乗ってる

「ヨルハはぶち抜けるでしょー!」

「確かに搭乗しているヨルハの装甲はそれほどだが……」

「ラヴィさん、何か策があるんですか?」

「あるわよ。3人共下の階に銃があるから1人一丁ずつ持ってきて」

「分かった!」

そうして3人は下に降りて行った。私は散発的に射撃しながら回避に徹していた。

CALL

「ラヴィ、ヘリでこつちに来るんじゃないの?」

「少し時間が掛かるわ11B。なにせこつちはヨルハに攻撃されてるんだからね」

「なんですって!なら私がいまからそつちに……」

「大丈夫よ。16Dの傍にいてあげなさい」

「ありがとうラヴィ」

「じゃあ後でね」

さて、急がないとね。

「ラヴィ遅くなつたね」

「使い方わかる?」

「勿論さ!」

そんな3人の手に握れられた居たのは

ジャツカス：M240

デボル：AK—74

ポボル：Beretta M9

「このタイプは使ったことがあつたんですけど、もう一つのタイプの使い方がわからなくって」

なるほど、だからポボルはベレッタなのね。

「で、ラヴィ策ってなんなの」

「数うちや当たる作戦」

「「え」」

「正直これが一番いけると思うのよね」

「まあ、確かにそれが一番だろう」

「決まりね。よし！Are you ready?」

3人が大きく頷く。そうして私は機銃掃射しようと急降下してくる飛行ユニットに向かつて撃ちまくった。

「Woooooooooooooooooooooooo!!」

ジャツカス、あなたはランボーか何かしら。

「どうでしょう、手ごたえはあつた気がしましたが・・・」

「見て！」

飛行ユニットが物凄い速さで空の彼方に飛んで行った。

「はあ、なんとかなりましたね」

「ラヴィー！この銃は素晴らしいね！レジスタンスが普段使っている銃ではすぐに玉切れになってしまうから、こんなに撃ちまくったのは初めてだ！」

完全にトリガーハッピーじゃないの。

第87話

エージエントside

「ジャツカス、アンタはいつでも元気ね」

「だって人生楽しまなければ損だと聞いたぞ」

「まあ、間違いないわね」

「ラヴィさん、早い所2人のところに行かないと。幸い今なら、機械生命体も飛行ユニットも飛んでませんから」

ポポルが周囲を見回してそう言った。

「そうね、機体に損傷は……ないかな？」

機体の無事を確認すると私達はへりに乗り込んだ。

CALL

「遅くなったわね11B、今からそつちに向かうわ。16Dは大丈夫？」

「今のところ8B達のおかげでは応急処置できてる。けど、これじゃどうにもならない所があるの」

「了解、ラヴィアウト」

「なんか最後のラヴィイカツコよかった」

へ？そういうえば確かに今までは通信というより電話だったしね。

「ところでラヴィイ、」

ふと、ジャツカスが声を上げた。

「私の聞き違いでなければ、11B、8Bの名前が聞こえたが、このふたりは片方は戦死、もう片方は脱走兵じゃなかったかい？」

一瞬の沈黙、

「沈黙は肯定と取るよ」

「ええ、恐らくご想像の通りよ。因みに主犯は私ね。これが落ち着いたらすべて話すわ。

だから今は協力してほしいの」

「私からもお願いします！」

「私も！」

するとジャツカスはやれやれ、といった表情を浮かべ、

「別に協力しないわけじゃない、その代わりこれから言う事を飲んでくれ」

「できる事なら」

「一つ、ラヴィイ、これからも君の実験なんか私を呼んで欲しい。

二つ、そしてその時の成果は共有してほしい。

三つ、きみがなぜ人類の知識をもっているか、それを話してほしい。以上だ」
再び少しの沈黙が流れた。

「いいわ、のった。正直もう少し吹っ掛けられると思ったわ」

「友人割引ということにしておいてくれ。ラヴィこれからよろしく」

「こちらこそ。さて、着陸するわよ」

村の中央の広場に着陸した。ヘリから降りるとすぐに22B、64Bが駆け寄って来た。

「16Bさんは11Bさんと一緒です。案内します」

「この場所も気になるけれど、まずは仕事をしないとね」

私は22Bの肩をたたき叫ぶ

「悪いけど子供たちをヘリに近づけないようにパスカルに頼んで！すぐにどかすから！」

「わかった!!」

22Bがおどおどしているパスカルの元に走って行った。

「こつちですー！」

小屋の中に入ると、そこには足におおきな傷のついた16Bと6B、11Bがいた。

「ラヴィ、無理を言っでごめんなさい」

「大丈夫。それより16Bよ。じゃあ、三人任せたわよ。私達は外に」

外に出た私達にパスカルが寄って来た。

「みなさんお疲れなようですね。ラヴィさん広場にあるアレには誰も近づかないように良く言い聞かせています」

「ありがとうパスカル。ごめんなさい、いつもこちらの都合に巻き込んでしまつて」

「大丈夫ですよ。それにしてもこの辺りを統率する機械生命体が撃破されたという事でしたが、私が言うのもなんですが一筋縄では行かない物ですね」

「そうだな・・・」

「そもそも、その話本当なんですかね」

「また、プロパガンダだったりしてな」

「プロパガンダそれはなんていう意味の言葉ですか?」

話をしているとポポルが小屋から出て来て私達に手招きしている。

「パスカル、後でしっかり話すよ」

部屋に入ると手が血まみれになっているジャツカスと疲れ果てたデボル、先ほどの傷が塞がれている16B、その足元に大量の血に濡れた金属片が置いてあった。

「16D大丈夫?」

「はい、先輩大丈夫ですよ。8Bさん達も助けてくださつてありがとうございます」

「話は聞いてたが、脱走兵を搜索してた奴に感謝されるって変な気分だな」

「で、16D何があったのよ。アンタがこんな風になるっていったい何があったのよ。ゆっくりでいいから話して」

「はい、私も突然の事で混乱してるんですけど・・・」

（数分後）

「そんな事あり得るのかい？ 私はヨルハの事情に詳しくないんだ」

「普通ならあるわけねえ。」

「もしか、バンカー側にも何かしらの攻撃があった可能性がいや、でもそんな事・・・」
脱走兵組も頭を捻っている。

「となるとバンカーにも連絡が取れないとなると状況はかなり悪そうね」

「とりあえず、何らかの方法でバンカーに連絡を取ったらいいんじゃないでしょうか」

「個人の装備で通信ができないんじゃないやレジスタンスキャンプに行くしかない」

「よし、ジャツカス、何度も申し訳ないんだけど、アネモネさんに連絡とつてくれない？」
ジャツカスは頷くと無線機をとりだした

CALL

「アネモネ、ちよつといいいか？」

すると背後で爆音が聞こえ、

「ジャツカスか!?この無線聞こえてるか!」

「聞こえてるどうしたんだ?」

「キャンプが攻撃うけてる!散会している連中に連絡したがつながらなくてな!焼け石に水かもしれないがさっさとこつちへこい!」

ジャツカスは私達に目配せした後、

「分かったそつちに行く。強力な援軍を連れてな!」

「了解!期待してるぞ!」

通信を終えたジャツカスはため息をついた。

「というわけだ。こんどはこつちに手を貸してくれ。」

「はあく、クソツたれなことに何事もうまくはいかない物ね」

「先は長いな」

「よし、ヘリを使おう。動くメンバーは私と、ジャツカス、デボル、ポボル、11B、16B。8B達はもしもに備えてここに残つて。あつちの状況は不明だから詳しくは現地の上空で。よし、そろそろ切り替えますか。みんな準備しろ」

私が銃を軽く点検するとほかも、それに倣つた。そして、小屋をでてパスカルに例をした後、私達はヘリに乗り込み離陸した。

第88話

エージエントside

ヘリに乗り込んで離陸した時、16Bが少し驚いた声を出した。そういえば、16Bがこの機に乗ったのは初めてだったわね。

「大丈夫、ラヴィが操縦してるからめつたなことで落ちないわよ」

「それにしても、こんな事初めてですよ。いつもなら降下作戦が失敗したとしてもキャンプは何の被害も受けませんでした。それなのに今回はキャンプが襲撃されるなんて、状況はかなり悪いですね。これは16Bさん、バンカーへの連絡を急いだらうがよさそうです」

「まったくだ。情報が無きや幾ら私でも予想も何もできん」

「見えて来たわよ」

そこには入り口に殺到する大小さまざまな機械生命体があった。数体がこちらに気付いて射撃してくる。

「状況が分からない。軽く旋回するわ」

そしてキャンプの上空を旋回するとキャンプの奥の方に数人の人、一人はこっちに手

を振って来た。

「かなり押されてますね」

「ラヴィさん、何処に降ろします?」

この間も上空への射撃は続いている。

「高度を落とすと確実にあの弾幕に当たるわ」

「それに、何処に着陸するの?」

問題はそこである。下手に近くに降ろせば機械生命体の攻撃にさらされるだし、遠すぎれば、救援の意味がない。それに悩んでいる暇はない。私は決断する。

「よし、ポボル座学の成果を生かすときよ、操縦を代わって、私と11B、16B「私も行こう」ジャツカスであの集団のところ而降りるわ」

「へ!?ラヴィさん無理です!そんな突然!それにさっき言ってたじゃないですか。高度を下げれば撃たれるって。」

「大丈夫。良いポボル、よく聞いて。これから高度を落として、あの集団の辺りで滞空して。私達はファストロープ降下するわ。そしたら一気に上昇して高度をとってわかった?」

私はヘルメットをとってベルトを外して後部に移った。

「ラヴィ、本気なの?」

「ええ、本気よ。それでなんだけど、デボルは上空からそいつを使って援護して。間違っても味方に当てないでよ」

私はデボルの持つているAKを指しながら言った。

「これは使えないの？」

11Bが言うこれとはGAU-17の事だろう。

「敵と味方の距離が近すぎるの。誤射の危険があるわ」

そして私はポポルに近づき、右の肩に手を置いた。

「ポポル、私も無理を言ってることは分かってる。でも、ポポル、よく聞いて。私はポポルならできると信じてる。落ち着いて、肩の力をぬいて。深呼吸。ね？」

その通りにポポルは幾らか力を抜き、深呼吸をして目を閉じる。そして目をあけ、その瞳には覚悟が決まっていた。

「ラヴィさん、いけます」

「よし、始めるわよ」

へりは降下を始める。私はロープをフックにかけ降下の準備をする。

「ところで、みんなロープ降下はできるわよね？」

「私は大丈夫だ！」

「私達も大丈夫です！」

「最悪、ヨルハならかすり傷で済むし飛び降りるわよ！」

それで何とかなるんだから凄いわよね。アンドロイドって。こうしている間にもへりは目標の高度まで下がった。私はロープを放り投げ先発の11Bがロープを掴み合図を待っていた。

「GO!GO!GO!」

私は11Bの肩をたたき11Bが降下すると、16B、ジャツカスとつづく。私の番になった。私は親指をピンと立て、グッドサインをポポールにした。

「ポポール、その調子で頑張つて！とつても上手よ！じゃ、デボル援護は頼んだわ。よし！ロククンロール!!」

私が降下するとへりは問題なく上昇した。よし、これからが本番ね。私は11B達に指示を飛ばす。

「ヨルハのお2人さん！数を減らすよりも前線を押し上げるわよ！」

「了解!!」

2人は躊躇なく切り込んでいく。11Bもすっかりソードオフショットガンが手に馴染んでいるようだ。

「ジャツカス、分かつてると思うけど、あまり連射しすぎると銃身がオーバーヒートして使い物にならないから、そこだけは気を付けて」

「指揮官はお前か!？」

女性のアンドロイドが頭を下げ、近づいて来た。この声アネモネさんね。

「お目にかかるのは初めてですね。アネモネ司令官」

「お前、前の無線の……」

「ラヴィか!」

「どうも!それで状況は?」

「見ての通りかなり押されてたが、すこしばかり余裕が出てきそうだな!ホント強力な

援軍だ!頼んだぞ!」

私は彼女の肩を叩いた。

「司令官、これが片付いたらヨルハの通信機をお借りしてもよろしいでしょうか!」

彼女は大きく首を縦に振り

「構わん!そうと来たらさっさと片づけるぞ!」

「ウーラー!!」

第89話

エージエント side

「リロード!!」

降下した時よりも幾らか前線の押し上げは出来たけど、未だ数は多いわね。でも機械生命体の攻撃が弱まって来つつある。その手応えがあった。

「ラヴィ、このまま行けば何とかかなりそうよ!」

「了解、デボルもポボルも2人ともいい仕事してるわよ」

ダンっ、ダンっ

機械生命体のコアを的確に狙い、倒していく。所詮は機械だ。

ズダダダダ、ズダダダダ

後ろからはジャツカスが機関銃を断続的に撃ちまくっている。

「畜生! しくじっちゃまった!」

「1人やられたぞ!」

「待ってろ、今行く!」

「アネモネ!」

ジャツカスが驚くのも無理はない。アネモネさんが負傷した味方を助けようと遮蔽物から出たのだ。

「援護射撃!!なんで司令官たる人が前出るのよっ」

ダンっダンっ

アネモネさんに近い機械生命体から始末していく。そこでふと気づいた。機関銃の発砲音がしない。

「ジャツカス?どうしたの?何かトラブル?」

「ラヴィ、リロードの仕方がわからない」

あ、そうか。そうだったわね!レジスタンスにはこれを扱う知識が無いものね!

「待ってて、今行くから。11B、アネモネさんに奴らを行かせないで」

私は立ち上がり射撃しつつジャツカスの所へ移動した。

「寄越して!」

私は急いでバックバックから弾を取り出すと、急いで機関銃に給弾した。

「しっかり狙って、無駄に撃たないで」

「すまない」

私は再びアネモネさんの方へ目をやる。どうやら負傷した味方を引きづるらしい。

現在、11Bが敵を抑えているが遠距離攻撃が狙ってるし、流れ弾に当たる可能性も

あった。とにかく、アネモネさんを下げないと。

「smoke out!!」

スモークグレネードを投げ私もアネモネさんの所へ駆け寄り引きづるのを手伝う。その間も片手でハンドガンを制圧も兼ねて撃つ。

「部下を思うのは大事ですが、このような行動は勘弁してください、司令官」
「すまんな恩に着る」

「2人とも俺が不甲斐ないばかりにすみません.:.」

しかし、私が片手で引つ張っているため、あまり速度がでない。両腕で引つ張れるといいんだけど。・・・彼、損傷しているのは足だけね。なら両腕は使えるのね。

「くよくよしてる暇があるなら撃ち返せ!」

そう私が怒鳴ると、彼はすぐさま撃ち始めた。そうして何とか彼を遮蔽物まで引きづり、彼はメデイックの治療を受けている。私は再びライフルを撃つ。また少し経った頃

CAL L

「ラヴィ、上から見てる限り、あとほんの少しよ!」

「了解!! ジャッカス、行くわよ!」

私が遮蔽物を飛び出すと、少し遅れてジャッカスが飛び出した。それにならつてレジスタンスも飛び出してきた。今まで押されていたのがうその様に押し返せた。

「これで最後！」

最後の機械生命体を11Bがスクラップにした。

「ラヴィより、キューティシスターズへ上から見てください」

「ラヴィ今私達の事なんてよんだの？機械生命体は全部鉄屑にかわったわ」

「了解、オールクリア。それじゃ司令官通信機をお借りします。16Dどうぞ。ジャッ

カス、11Bは休んで。よし、ポボル仕上げよ。誘導するから、ヘリを着陸させて」

さて、ようやく一息付けそうね。

第90話

エージェント side

「そう、その調子。いいわよ。ゆっくり、ゆっくり」

現在、ヘリを誘導して着陸させているところだ。

「よし、良いわよ」

操縦席のポポルに見えるように親指を上げ合図する。ローターの回転数が下がり停止したのを確認すると、私はヘリに近づいた。すると、ぴよんと、デボルが降りてた。

「ラヴィ、お疲れ様」

「ええ、お疲れ。ポポルはどうしたの？」

「今、操縦席で一息ついてるわよ。ラヴィ流石に今回は私もドキドキしたわよ」

そうして、私が操縦席の扉を開けると、そこには緊張が解け、脱力しきつたポポルがいた。

「あゝポポル大丈夫？」

「ラヴィさん、すいません。完全に集中力が切れてしまって、私、頑張りました」

私はポポルのヘルメットを外して、手を取って操縦席から降ろした。

「ポポル、よくやったわ。完璧とは言えないけれど、初めてでかなりできてる。ホントに凄いわよ!!大丈夫?水があるわよ。ほら、ゆっくり飲んで」

私がペットポトルを差し出すと、ポポルはそれを一気に飲み干した。

「ポポル、そんなに焦んないの」

「ふう、落ち着きました。ラヴィさん、これ癖になりそうです」

「本当によく頑張ったわね。それじゃ、あつちに戻りましょ」

「そうですね」

私達がキャンプの入り口に差し掛かると16Dの声が聞こえて来た。

「こちら16Bからバンカーへ繰り返し返すこちら16Bからバンカーへ、誰か応答を」

見ると、16Dが自分の頭を軽く数回叩いていた。

「やっぱりダメです。バンカーとの通信は困難です」

「ジャミングの影響は殆どない。今、各地に散会していた連中と連絡がついた。お、デボル、ポポル、さつきは迷惑かけたな。いつもありがとうな」

あら、良かったわね。2人共。

「そうなる、問題があるのはバンカーの方の無線ということになる。仕方ない。転送装置で戻ると良い。敵前逃亡だとか言われても、状況を説明して、アネモネの名前を出せば大丈夫さ。なんせ、ヨルハの司令官とうちのアネモネは古い知り合いだからな」

「そうなのね。へえ、にしても古い知り合いってその話聞きたいわね。」

「なあーにが、うちのアネモネだ。まったく。まあコイツの言ってることは事実だ」
「そうですね。それじゃ、みなさんお世話になりました」

16Dが転送装置に入り装置が閉じた。が、すぐに16Dが出て来た。

「どうしたの？」

「なんかエラーって出て出されたんですけど……」

「なんだって？そんなことはないはずだ。私が調整して以前まで何の問題もなかったんだぞ？」

「そう言っただけじゃカスは転送装置をいじり始めた。そしてすぐに深いため息をついた。」

「これは不味いことになったぞ。さつきからバンカーにアクセスしてるんだが、アクセスが弾かれる。おそらくウイルスだぞ」

「アハハハハハ」

突然、私達の頭に聞きなれない声が響いた。

「バンカーは今風前の灯です」

第91話

エージエントside

「風前の灯？何を言ってるんだ？まずお前は誰だ？」

「私は誰かって？それは秘密ですww。そんな事よりバンカーはもうおしまいです。転送装置が使えないのもそのせい。ねえどんな気持ち？この作戦始まる前から失敗するって運命だったの。それを知らずに皆、死に物狂いでハハツ美しいねえ」

「黙れクソガキ」

私は無線機を切った。

「全員通信を切れ。安心して。多分なんとかできると思う」

みんな私の声に驚きつつ無線を切った。私は転送装置にエージエントウォッチをつなげハツキングを開始した。

「ラヴィどうするの？」

「とりあえず、この転送装置を使えるようにする。今、やってみてる感じ、どうにかできるのはこの装置だけ。根本的に解決するなら、バンカー側のウイルスを除去しないと」
「つまり、バンカーに乗り込めって言うんですか？私、汚染に備えてブラックボックス

号の周波数を変えちゃったんですけど……」

「ラヴィー！君はそんなことまでできるのかい？」

ジャツカスが興奮して私の腕に抱き着いて来た。

「やめてジャツカス手元が狂うわ」

そんなこんなでハッキングにが完了した。それと同時にデボル、ポボルも装置自体の点検は終了したようだった。

「よし、11B、16Dいける？」

11Bの顔が露骨に嫌な顔になった。

「分かってるわよ。16Dを1人で行かせる訳にはいかないってことくらい。でも、嫌な物は嫌じゃない。それにもし、ウイルス汚染が解けたら私、拘束されるかもしれないでしょ？」

すると、16Dが立ち上がり11Bに近づくと突然11Bを抱擁した。

「おぉ〜」

「ジャツカス黙ってろ」

16Dは何も言わない。

「16Dどうしたの。あのー離して欲しいんだけど。は、恥ずかしいから」

「いや、言われてみればそうだな。もしもに備えて味わつところと思って」

16Dはそういうと11Bから離れた。なお、11Bはいまだに思考停止している。私は11Bの肩を叩いて

「11B大丈夫よ。16Dと組んだあなたは最強でしょ？なんなら司令官の事殴ってきたら？」

「そうね。そうするわ。ふふ、あいつらの驚いた顔が想像できるわ」

「そういうことなら急いだほうがいい。早いことに越したことはないからね」

「11B、これ持って行って」

私はエージェントウオッチを投げて渡した。

「これを使ってウイルスを取り除いた後、バンカーの信号を切り替えてデヴィジョンのシステムでカバーする。あっちに行ったらこれをコンソールにでもつないくればいいわ。時間が掛かるかもしれないけど、確実にうまく行くと思う。でも、信号を変更するということは、地上にいるヨルハ部隊は諦めるしかないの。ちから不足でごめんなさい」

「ラヴィさん、これでも十分な方ですよ」

2人は転送装置に入って行った。

「2人には辛い決断をさせてしまったな」

「そうね・・・」

すると、アネモネさんがこちらに寄って来た。

「ひと段落か?」ところでラヴィ一つ聞きたい。先ほど言っていた11Bはあれは本当に11Bか」

「ええ、本物よ」

「なら、問題だ。あれは脱走兵だぞ。なんで匿ってる。それにお前には聞きたいことが山ほどあるしな」

「11Bたちが戻って来るまでならいくらでも話すわよ。ジャツカスの件もここで話しましょうか」

そこで私達も一息つこうとアネモネさんとジャツカスについて行こうとした時だった。

「ラヴィ、あれ・・・」

空に小さな点のような物が見えた。それは最初鳥かと思ったが徐々に近づいてきていた。あれは! マズイ!

「incoming!!!」

私は近くにいたアネモネさんを突き飛ばし、向かってくる飛行ユニットに射撃した。「いっつ!!」

私の足に一瞬だが痛みが走った。しかし、これは銃創などではない。恐らく大丈夫だ

ろう。

「さあ立って！」

「ラヴィさんあれ、さつき追い払った飛行ユニットですよー！」

休憩していた姉妹が出て来た。

「ラヴィ、大丈夫？まったく、ラヴィのところに来るヨルハってなんでどいつもこいつも非常識な奴ばっかりなのかしらね!!」

そんなの私を知りたいわよ。まったく。

第92話

EーJエントside

以前の様に、攻撃のたびに低空侵入してくる飛行ユニットに対して射撃していた。

「どうやら私達はアレを怒らせてしまったらしいぞ。前より増して攻撃の際の高度が低いぞ。」

「良い事じゃない！その分弾が当たるわよ！」

確かに言われてみると、攻撃の際の進入角度が深くなっている。まったく死ぬのが怖くないのかしら？すると、アネモネさんから肩を叩かれた。

「話を聞いているとお前から以前にも飛行ユニットと交戦したのか!？」

「はい司令官！以前といつてもここに来る少し前ですが！」

「その時はどうやって撃退したんだ!？」

「私らが弾を浴びせてやったんだ！ラヴィー！先ほどから当たってはいるが前の様に撤退しないぞー！」

掃射を躲し見ると飛行ユニットには相当な数の非弾痕があった。

「ラヴィーさん、ダメです！飛行ユニットには当たっても操縦者に当てるのは流石にきつ

いです！」

考えろ、考えろ私。進入角度が深くなつて弾が当たるようになって、飛行ユニットの装甲をぶち抜けないなら意味がない。ん？待てよ。でも・・・、いや、やるしかないか。

「皆よく聞いて！私が今からアイツに乗つてるヨルハを狙撃するわ！」

「ラヴィ、正気か貴様!？」

「アネモネ、彼女は正気だよ。このまま、まぐれ当たりを狙うくらいなら、こうした方がいい。それに、彼女の腕は私達3人が保証する。お前が思つてる以上に彼女は優秀だ。で、ラヴィ私達はどうするればいい」

「嬉しい事言つてくれるわね！で、あなた達はアイツをぎりぎりまで引き付けて。具体的に進入してきたらタイミングを合わせて一斉に射撃開始。そこを私が狙撃する。良いわね！」

説明すると、ジャツカスは親指を立て、姉妹は目を合わせ頷いてくれた。それを確認すると私がライフルからM700に持ち替えた。

「ラヴィ、私にそのライフルを貸せ。手を貸してやる」

驚いた私がアネモネさんの方を振り向くとあつちも真つ直ぐ目を合わせて来た。こりや何言つても聞かないわね。私のライフルをアネモネさんに渡し、全員をぐるりと見

渡し、大きく頷いた。そして、幾度となく掃射の為に進入してくる飛行ユニット。私はあえて正面で膝立ちの姿勢になり、ライフルを構える。そして飛行ユニットの高度が下がりはじめたときに叫んだ。

「open fire!!」

私以外のみんなが一斉に撃ち始める。これをチャンスと見たのかさらに深く突っ込んでくる飛行ユニット。私はスコープを覗き、数回呼吸したのちに、息を止める。

頭に照準を合わせる。そして、撃った。この時間が凄く長く感じられた。再び上昇する飛行ユニット。

「ラヴィー！当たったの？」

「すぐにわかるわよ」

飛行ユニットは上昇していったがある程度上昇したのち、コントロール不能になり落ちて行った。

「ラヴィー！やったぞ！君は良い腕してるよ全く！」

「ジャッカス落ち着け。でも確かに、貴様の狙撃の姿は一種の芸術だな。あれに当てるとはなかなかだ」

ホント命中して本当によかったわ。

「ほら、やっぱりラヴィーの腕はいいだろ？」

「アネモネで構わん。そうだな。：。そもそも銃自体あまり使わんだろ。なにせ、ジャムぐらいなら何とかなるが壊れた銃はただの鉄の棒にしかならん。だから、それこそ、今デボルが持つてるような物がこころ辺のレジスタンスのスタンダードだな」

なるほど、だからジャッカスもリロードの仕方が分からないわけだ。そのくらいに思っていると、アネモネの口から衝撃的な言葉がでた。

「お前は知らないだろうが、私達が生まれた時の知識なんぞ、近接戦闘と銃の撃ちかた位だぞ。そして、生まれた瞬間に前線だ」

何よそれ。アフリカ当たりの民兵と変わらないじゃない。それなら、レジスタンスが砲を運用しないのも、銃がAKしかないのも領けるわ。

第93話

エージエントside

「だからな、私はなぜ貴様が、ヘリやその銃を扱えているのか大変興味がある」

「良いわよ。ジャツカスとも約束したしね。今ここで1人が2人になっても変わらないわ。それじゃ、2人が戻って来るまでゆっくりと話しますか」

私は飛行ユニットが来る前に、アネモネ達に案内された場所に行こうとした時だった。

「おい、ラヴィ、貴様ちよつととまれ」

突然、アネモネから発せられる低い声。

「何? どうかした・・・つつ!!」

振り向きざまにジャツカスに足を撫でられ、鋭い痛みが走った。足を見ると、ズボンが裂け大きな傷が出来ていた。どうやらアネモネを突き飛ばした時の傷ね。弾が当たった訳じゃないから放置してたけど、こんな大きかったとわ。興奮してて気づかなかったわね。今更になつて痛くなつてきた。

「ラヴィ、この傷は・・・?」

ジャツカスとアネモネは驚きの表情だ。ジャツカスも流石に目を何度も擦っている。まあそうよね。アネモネはあ、ダメだ。完全にフリーズしてる。私見えるもん、アネモネの頭の上のNow Lodgingの文字が。

「ああ、デボル、ポボル、2人を正気にもどして」

すると、ポボルがアネモネを揺すり、デボルに至ってはジャツカスの顔を叩いていた。

「あ、ああすまない、あまりに信じられなくてな」

「こんな事ホントにありえるのかい？ラヴィ、私達のことからかかってる訳じゃないよね？」

「ええ、後から話すから、とりあえず治療していい良いかしら？」

2人がうんうんと頷くので私は手ごころな場所に座り、ズボンを捲し上げ、傷口にガゼを当て軽く消毒も兼ね汚れを取る。その後一応ある程度深い傷だったので包帯を巻いた。因みにその間、ずっと皆に見られてた。ジャツカスに至っては私の手先をずっと追ってたし正直ちよつと怖かった。

「はい、終わったわよ。あと、あんまりジロジロ見ても面白くないわよ」

「いや、何と言うか・・・初めて見たから気になって」

ジャツカスが小学生みたいね。

「じゃあ、なんで私が人類のロストテクノロジーを知ってるのか、大体予想がつくだろう

けど、話すわよ。因みに、これから話すことは私自身よくわかってないから、ある程度しか話せないのと、一部自分語りが入るわ」

「構いません。始めてください」

え？なんでアネモネ？

「どうしたのアネモネ。かしこまらなくても良いわよ。さつきみたいに接して貰って」

「いえ、私は知らなかったとは言えそのお・・・」

「そうだぞアネモネ、「おいアホ！」誰がアホだ。ラヴィがこう言ってるんだ。そうしなきゃ逆に失礼だろ」

「まあ、なんでもいいわ。あ、その前にジャツカス、この銃のリロードの仕方教えておくわ」

第94話

11B、16D side

時は少し戻りまして・・・

私が先に転送装置に入った。はあこれが開いたら、あの思い出したいくないバンカーか。そして、起動ログが流れ、転送装置の扉が開いた。

「ああクソ、最悪」

扉が開くと汚染され、目が赤く光っている司令部要員と目が合った。私は向かってくる奴を掴み向かってくる集団に投げつける。そして、切りかかってくる奴の刃を受け止め、力任せに押し返す。すると、扉が開き16Dが出て来た。

「ああうそ、そんなっ」

「全く、どうやら私達が思ってたよりも状況は悪いみたいよ」

「とりあえず、先輩とりあえず、コンソールにラヴィさんの奴を繋ぎましょう」

「そうね。ところでこいつ等どうするの？ 私は殺しても別に構わないけど、どうする？」

「ダメです。殺したらそもそもここに来た意味ないです。でも、邪魔ですね。これ位ならOKかと」

そういうと近くの奴の顔面を思いきり殴りつけた。殴られた奴はよろけてフラフラになつていた。

「アンタそれ手痛くないの?」

「痛い痛いですよ?でも、先輩忘れてませんか?私、元防御型ですよ?」

「そうだったわね。でも、確かにコレ良いわね。使える」

私も片っ端に向かつてくる連中に格闘技を決め込んだ。そして、コンソールにたどり着きラヴィイから貰ったウオッチを接続した。

「ウイルスの除去を開始」

よし、後はこれが終わるまでこいつ等を殴るだけね。

「君たち強いねー!!」

先ほどの声が響いた。

「バンカーはもうお終いだって分かんないの??そんなことをしたって無駄なの、分かる?」

大きな爆音と共に地面が揺れる。

「あーあ、2人共行っちゃった。2Bちゃんと9S君。でもでも、2Bちゃんの方にはしつかりプレゼントできたみたい。君たちもあの2人みたいに仲いいね!互いに背中を預ける相棒って感じ、でも皆死んじゃうね」

「ホントうるさいわね。このクソガキ。少しは静かにできないの?」

「私達は勝機があるからここに居るんですよ。バンカーの皆は救い出します」

「ウイルス除去率、60%」

「何言ってるの? 無理だつて諦め・・・」

「ウイルス除去率、90%」

「ウイルス除去率、100%」

「おしゃべりは身を亡ぼすわよ」

ウイルス除去が完了すると、一瞬照明が落ち、皆パタッと糸が切れたように倒れた。繋がれたコンソールにはオレンジの丸が映し出されていた。コンソールからウォッチを外した。

「これ、大丈夫です?」

「大丈夫よ。アンタが正気失ってた時もこんな感じで鎮圧したのよ」

16Dはさつと顔を下げた。

「その節はご迷惑をおかけしました」

「あれ? 私達は一体・・・」

「なんか頬がめっちゃ痛い」

先ほどまで糸が切れたようにしていた、司令部要員共が起き始めた。

「先輩そろそろ・・・」

16Dが小声で囁いた。

「おい！なぜ貴様がここに居る！11B!!」

やっぱり来たわね。お久しぶりですね。クソ司令官。

第95話

11B、16D side

「おい！なぜ貴様がここに居る！11B!!」

「イヤイヤ、カンチガイデスヨ」

「先輩、隠す気一切ないですよね」

司令官の一声で一気に戦闘態勢に入る司令部要員たち。

「そもそも貴様なぜ生きている！」

「いや、なんか墜落しちゃつてもうダメだなーって思ってたなら、心の優しい人に助け
て貰いました」

「なら、何故報告しなかった」

「だって、私アンタらが嫌いだもん」

「なっ！」

「司令官、でも先輩は何はともあれ、司令官を含めたみなさんを救ったのは事実ですよ」

「だから、何だ？」

「何だって何ですか！」

「なんで、16Dがヒートアップするのよ。因みにその様子を私と他の司令部員は眺めてるだけです。あ、そういえばさっきのクソガキが2B、9Sとか言ってたな。少し聞いてみましょうか。」

「ところで、さっきのクソガキが2B、9Sって言ってたけど、その二人何かしたの？」

「2Bさんが来たんですか！」

「60静かにしろ！」

2Bと聞いた途端金髪のオペレーターが騒ぎ出した。2Bの担当オペレーターはコイツか。60はコンソールに向かう。

「なんで!?司令官、地上とのアクセスが出来ません!それに、各部隊の緊急回線もどの隊も応答しません!」

「応答するわけないでしょ。殆ど地上の連中は汚染されてるんだから」

「2人の報告は本当だったんだな」

「情報があつたんですか？」

「ああ、9Sが言うにはアップデートの際にノイズが混入してたそうだ。だが、9Sの判断でアップデートを保留にしてからか、2人は助かったらしい。そして、2人は先ほど飛行ユニットで脱出した」

へえ、やつぱりスキヤナータイプは優秀ね。となると、汚染されてないのは、私らと

村の3人か。

「脱出したと言っても通信ができないのなら、どうしようもありませんよ」

「ラヴィさんに連絡して、何とかして貰えませんかね」

正直こいつ等の為にラヴィを頼るのはなんか癪だなあ。そんな表情を察したのか16Dがこつちを向いてウインクしてきた。かつ可愛い。私ってチョロいな。

CALL

「ラヴィ、今いいかしら?」

「11Bごめんなさい。今ちよつと取り込んでるの。ジャツカスにある程度任せてるかー!」

後ろからはローターの大きな音が響いていた。

「誰だアイツは?」

「黙ってて」

ホントこいつ等大っ嫌い。

CALL

「あージャツカス聞こえてる?」

「聞こえてるよ。用件はなんだい?」

「バンカーの通信機能を復活させて欲しい」

「了解、でも意味あるか？バンカーってもう限界だろ。そこと格納庫しか残ってないぞ」
「何だと!？」

「何だ？ヨルハの司令官さんにも聞こえてるのかよ。おーい、アネモネお前の知り合いのようだぞ」

「あのなあ、あー久しぶりだな。ホワイト」

え？アネモネさんと司令官知り合いなんだ。

「久しいな。で、一体何がどうなってる」

「まーお前の現状だけ説明するとだな、そのバンカーに居ても良いことがないぞ。ラヴィの話だと、残ってるのは指令室と、格納庫だけだ。それにな、爆発の影響で周回軌道？から外れてるらしい」

アネモネさんはその他にもたくさんバンカーの状況を話した。なんだか良くわかんないけど、相当不味いらしいわね。司令部要員も露骨に焦りが見える。

「・・・分かった。これから対策を協議する」

「ジャツカス、変われ」

「はいはい、他に何か聞きたいことはあるかい？」

「あの一！」

さっきの金髪のおペレーターが声を上げた。

「おい！60」

仲間が静止させたが、もちろん声は入っている。

「何かな？」

「2Bさんと、9Sさんはどうなりましたか？2人は飛行ユニットで脱出したらしく手ですすね！それで、それで、」

いいわねえ、こんなに寄り添ってくれるオペレーターで。私の担当なんて無愛想な、210だったわよ。でも、アイツいないわね。まあいいわ。

「もしかしたら、ラヴィと姉妹が今行ってるよ。繋げばいいさ」
「でも、さっき今忙しいって言われたんです」

「終わったかもしれないし、繋げてみたらどうだい？後、用が終わったらさっさと帰って来た方がいいぞ。自分の立場を忘れてないだろう？」

「私が先輩に無理言ってるんです。この件が終われば戻ります」

えくだるいなあ。なんでこいつらの為に・・・

「11Bさん！」

60が真っ直ぐな目で見つめて来た。あー、私ってやっぱりチョロいわ。

CAL L

「ラヴィ、今大丈夫？ジャッカスに聞いたら、もしかしたらって聞いたからさ・・・」

私はこの時、どうせあの2人は生きてるって思ってた。けど、聞こえて来た息遣いは荒くて、絶え絶えで

「落ち着いて聞いてね。2B KIA繰り返す、ヨルハ機体2BはKIA、その他9Sが重症、A2がMIA。9Sは保護、また、空域を離脱する。2人共戻ってきてないなら急いで戻って来なさい！」

「了解」

「わかりました」

なんてこった、A2もMIAとはどういう事かしら。とりあえず、急いで戻らないと。

「16D！」

「待て！」

クソ司令官が指揮棒で私達をさす。

「返すわけにはいかん。11B、貴様を脱走の容疑で拘束する！」

「いい加減にしてください司令官！」

「16B、コイツを拘束しろ。安心しろ、バンカーを助けて貰った事を鑑みて、そのまま、またお前と組ませる」

その瞬間、16Dの雰囲気が変わった。プツンと何かが切れた音がした気がした。

「16D!!」

私は16Dを制止する。そして、挑発するように司令官に近づく。

「司令官、こんな私に大変嬉しい申し出ではありますが、嘘付きだろ。アンタ。」

「何を言ってる……」

「黙ってください」

16Dの庄で司令部要員も黙った。

「私達は、知っちゃったんだ。人類がもう居ないってことも、私達ヨルハがなんで出来たかとかさ」

その瞬間の顔は私は一生忘れないだろう。

「それを知ってるってわかったら、アンタ結局私をリセットするんだろ？」

司令部要員の連中も顔を逸らす。さては、全員知ってたな。

「だから、何だ。いいから拘束しろ!!16Bもだ!」

16Dは武器を抜いて司令官を睨みつけた。よし、私も動きまますか。私は懐からソードオブを抜き1発上に撃った。発砲音にびっくりしてる連中他所に、司令官に肉薄し、指揮棒を力任せに吹っ飛ばし、頭に銃を突きつけ、腕を回し、拘束した。

「離せっ!!」

「さすが必要です。先輩」

「ラヴィはもつとカツコよくやるんだけどね。16D退却するわよ」

クソ野郎を引きずりながら転送装置の前に来た。

「16D先に行つて」

16Dが先に装置に入る。その後すぐに転送が可能になった。

「また、お会いしましょう。司令官」

私は思いつきり司令官の頬を殴り、よろけ警備が駆け寄つたのを見て、装置に入った。そして流れるログ、扉が開き日が差し込む。私やっぱり地上の方が好きだ。

「せーんばい!!」

「ちよつと!16D」

「だくつて」

「みんな見てるから!!」

私達に注がれる視線。ジャツカスもなんか喋つて!あ、ラヴィ!ちよつと助けて。

「いいわねー11B。ジャツカス、好きに騒げ」

「f o o o o o o o o o o o !」

もう!

オマケ

「司令官……」

「総員退去の準備を始めろ。60アネモネにそちに合流すると言って置いてくれ」

立ち上がり頬を撫で、司令室を出ようとする。

「司令官!!」

「問題ない。私も準備をする」

第96話

エージエントside

「じゃあ、行くわよジャツカス。まあここまで早くしなくてもいいけど、理想はその位の速さね」

私は機関銃のリロードをジャツカスに見せた。

「おぉー、流石の技術だね。なるほど、時間を見つけて練習しておくよ」

「ジャツカス、その辺にしておけ。ラヴィ、そろそろ良いか？ああ慣れないなクソ」

小声で言っても聞こえてるわよ。まあ確かに気持ちは分かるわ。ドッキリには達が悪すぎるものね。

「そう。じゃあ始めるわよ。一応最初は身の上の話になるけど、大丈夫？」

「私は構わないよ。ラヴィ、君がどのような存在なのか、私は興味がある」

「OK、まずは……そうね。私の名前はデリア・ミレッド・ハヴィランド、通称はラヴィ。まずは、ここに来る前の話を……」

私はここに来る前に何をしていたか、ここに来てから何を話したのかを話した。しかし、人類がもう居ない事は話していない。私自身、この話をしているものか判断しかね

ているのだ。

「二応、全部話したかしらね？他に聞きたいことはあるかしら？」

ああまた2人の頭の上にNow Loadingの文字が。姉妹も今は休憩中ではない。仕方ない。私が起こすか。

「ほら、2人共大丈夫？」

2人の肩を揺すつた。

「ああ、大丈夫だ。何と言うか信じられないというか、いや、ラヴィが信じられないという訳ではないんだ。決してな」

大丈夫よ。私も最初に関しては自分でも信じられないから。

「ラヴィ、これは一応、私が一科学者として、君に意見を求める。月に人類はいると思うか？私は、正直どちらでもいい。なにせ、存在しているという証拠もなければ、いないという確固たる証拠も無いんだ」

随分、攻めた質問ね。そして痛い所を突いてくるわね。でも、答えてあげるべきよね。「そうね、もう居ないんじゃない？もしくは、地球にもう興味がない」

この言葉にアネモネは驚きを隠せないようだった。それを他所にジャツカスは淡々と続ける。

「根拠は？」

「人間の寿命は私の頃で最長で130ぐらいだったから、不老不死でもない限り、もう避難した当時に生きてた奴はもう死んでるでしょう。まあ、あくまで予想だけどね」

しばらくの沈黙。

「まあ、さつきも行つた通り私はもうどちらでもいい。それより、そろそろバンカーの様子を見た方がよさそうだぞ」

「確かに、時間が掛かるとは言え、心配だ」

すると、タイミングを見たように、姉妹がコンソールを持ってきた。それを使ってハッキング中のデヴィジョンのシステムに入る。

「なんだ、ハッキング終わってるじゃない。それなのに2人はなんで戻ってこないのかしら」

「まさかな・・・」

私も心配になり、司令室の恐らく2人が接続したであろう、エージェントウオッチのマイクをONにする。

「おい！なぜ貴様がここに居る！ーIB!!」

「イヤイヤ、カンチガイデスヨ」

「先輩、隠す気一切ないですよね」

どうやら、まだ捕まってはいないようだった。私はマイクをそのままに、バンカーの

被害状況を見る。

「こりや、かなりひどいぞ。バンカーの事をあまり知らんが、普通ならこんなに警報ならんだろ」

「確かにそうですね」

にしても、データの量が多いわね。どれがどのデータなのかパツと見でわからない。とりあえず、適当なファイルを開いてみる。

「お、これあの飛行ユニットの出撃記録だぞ。これを使えば今地上に何機飛行ユニットがいるかが分かもしれない」

そうね。私はログをスクロールさせ、今日出撃した機体の数を調べる。

「多すぎでしょー！」

「これが全部敵か。頭が痛くなってきた」

「ん？ちよつと待て、一番下のログ、これついさっきじゃないか？」

見ると、ほんの数分前に、2機の出撃ログがある。

「見る。搭乗者は2Bと9Sと書いてある。あの2人ほんの数日前まで地上にいたぞ。もしかしたら汚染されてないかも知れない」

「ラヴィさん、あれ！」

ポボルがさす方を見ると、二つの飛行ユニットが大気圏を突破してくるのが見えた。

第97話

エージエントside

「アレが恐らく、2B、9Sだろうな」

ポポルが指下方角をみると、2機の飛行ユニットが大気圏を抜けた所だった。しかし、それとは別に黒い点がいくつも2機のところへ向かって行っていた。スコープを覗いて倍率を最大の9倍にする。もちろん鮮明には見えない。しかし、多くの発砲炎が見える。

「どうやら、あの2人は感染してないみたいよ」

「根拠はあるのかい？」

「飛行ユニットから攻撃を受けてるもの」

「アネモネさんどうします？」

「ラヴィ、何か策は？」

ちよつと待って？ 私に丸投げなの？ 危険だけどヘリを使うしかないか・・・

「デボル、ポポル準備して。ジャツカスとアネモネは悪いけど、ここに残って11B達から何かあったら誘導かこつちに連絡して、いい？」

「了解、あの2人はしつかり面倒見とくよ」

「頼んだわよ。よし、質問は？」

よし、誰もいないわね。

「よし、2人共行くわよ」

「ラヴィー！」

「なにかしら？」

「お前はさっきのジャツカスの質問の答えを知ってるのか？」

「ええ、でも、悪いけど答えを言うのはまた今度になりそう」

「わかってるさ。気を付けてな」

私と姉妹はへりに乗り込む。今回は私も操縦席に座り、ヘルメットを被る。

「良かった。今回は隣がいる」

「分からないわよ。また、さっきみたいに頼むかもね」

「正直勘弁してほしいですよ。大丈夫ですか？操縦桿強く握りすぎちゃって・・・」

「ww大丈夫よ。それに、操縦もうまかったわよ。ね、デボル」

「出来てたと思うわよ。撃つてた時も、あまり揺れなかったし。もうちよつとポポルは

自信を持ちなさいよ」

話している間に出力が上がり、私は離陸させた。

「2人共、今回は私達は下手すれば、戦闘のさなかに飛び込むことになるわ。一応、ある程度激しい動きには注意して！」

2人は頷いてくれたが、正直私も乗り気じゃない。徐々に高度を上げていく。まだ、飛行ユニットにバレていないが、それも時間の問題だろう。出来る限り早く、2人がこつちに気付いてくれればいいんだけど・・・すると、1機が速度を上げ、離脱していった。

「もしかして、撃墜されたとかじゃないわよね」

「いや、撃墜されたなら、あんな速度は出ない」

「多分、何か策があるのでは？」

「策ってなによ？それに、見てあの機体かなり被弾してる。多分、あれは囿になったわね」

「なら、助けないと！急がないと・・・」

CALL

「ラヴィ、今いいかしら？」

「IIBごめんなさい。今ちよつと取り込んでるの。ジャッカスにある程度任せてるからー」

「ごめんなさいIIB。今忙しいの。さらに囿の方の飛行ユニットに近づこうとした

時だった。

ピピピピピピピピピピ

「ブレイク！ブレイク！捕まって！」

私はフレアとチャフを出し、急降下した。その直後、フレアが広がったあたりでミスイルが炸裂した。

「畜生！今のはヤバかった！2人共大丈夫!?!」

「何とか！」

「大丈夫です！」

何とか、回避できたけど……正直あの飛行ユニットとやり合うなんて無理に決まってる。

「ごめん！一時離脱するわ。この機体と飛行ユニットとじゃ、スペックが違いすぎる！」

ピピピピピピピピピピ

「また来たわよ！構えて！」

再度、フレアとチャフを散布する。ミスイルは先ほどより近くに着弾した。それに加え機銃掃射も飛んできた。

「ラヴィー！」

「ああ、そんな！今、一瞬ですが飛行ユニットが落ちていくのが見えました。恐らく、囨

の機体かと・・・」

私達のストレスを飛行ユニットが3機飛んでいく。今度の狙いはこっちかしら。

「かなり激しく動くわよ！2人共何かに捕まって！特にデボル！振り落されないでね！」

私はヘリを地面から約10メートルぐらいの高さで飛ばし、時より建物を乗り越え3機から逃げ回った。因みに姉妹の2人は声にならない叫び声をあげていた。それからしばらくした時、3機は撤退した。

「2人共大丈夫？」

「ああ、死ぬかと思った」

「デボルと同意見です。後ラヴィさん、私は絶対にこんな事できませんからね！」

まあ2人共無事そうよかった。ところで2人は何処かしら？

「とりあえず、飛行ユニットに気を付けつつ、お2人を見つけてみましょう」

「そうね。私もすっかり見張つとくわ。さつきみたいになりたくないし」

そうして、私達は廃墟都市一帯を飛び回った。

「見つかりませんね。水没都市の辺りも行ってみましょう」

うわあ、水没都市もなかなかひどいわね。

「あつた！あそこよ！」

そこには炎上した飛行ユニットの残骸と、機械生命体の死骸があった。私がそこにへりを着陸させるとデボルが真っ先に駆けていき、操縦席を見た後すぐに戻って来た。

「乗ってない！多分どこかに移動してる！水没都市に居ないなら、廃墟都市に居ると思う」

デボルが飛び乗ったのを確認し、私はすぐに離陸する。

「もう一方は何処にいるんでしょうか？」

「残ってるのは砂漠か、商業施設跡ぐらいだし……まずは近い商業施設跡に行ってみて」
「了解」

廃墟都市に戻り、商業施設跡へ向かう。少しでも見渡せるように高めのビルの屋上辺りまで上げた。

そして、商業施設に近づくと、地上に白い物が見えた。

「あれ、9Sじゃない？」

「あの方向は商業施設跡じゃない？」

私が9Sとほぼ同時に商業施設跡の橋に着いた。

「A2……？」

その瞬間A2は2Bの腹部を突き刺した。

「アイツ……一体なにやってんのよ」

2Bを殺され、激高した9Sが叫ぶ。

「そんな……2B……そんな……」

それを他所にA2はチャームポイントと言えるロングヘアを切りショートヘアになった。

「ううっ……あああああああああつ!!! A2ツツウウウツツ!!!」

もはや、9Sに理性は残っていないようだった。彼は刃を抜きA2に突っ込んでいこうとした。

「デボル! 9Sの辺りに何発か……マズイ、一旦空中に待避するわよ!」

地下から何本もの柱のような物が出現した。それは天高く上り、その先から光り輝く球体が3つ散らばった。

「一体、なにがどうなってるのよ!」

「そもそもこれ人類? アンドロイド? 機械生命体? エイリアン? どこが作った建物よ!」
「とりあえず、着陸して生存者の搜索を!」

私ばかりうじて着陸できそうな場所を見つけ着陸した。そして、最初に2Bの義体を確認する。

「ダメ。ブラックボックスの信号は停止してる!」

「A2さん、一体どうしたんですかね……」

「さあね。こればかりは直接聞いてみないと。とりあえず、A2の武器と2Bの義体を回収して。9Sはもしかして谷底かしらね」

私はロープを近くにあった杭に結び付け、谷底に投げた。

「谷底は暗いから気を付けてください」

私は谷底に降り、暗いためM45A1とライターを付け谷底の散策を始めた。しばらく歩いていると横たわる9Sとポッドがあった。9Sを触ってみるが、死んでいるかどうか分からない。どちらでも、上にあげないと。ん？暗闇から赤い光が見えた。あれは・・・？わかれないけど急いだほうが良さそうね。私は9Sを担ぎ、ポッドをリュックに入れ来た道を戻ろうとした。すると、目の前に大きな機械生命体が現れた。

「fuck!!」

咄嗟に躲したつもりだったが少し貰ってしまった。次が来る前に全力で走り、ロープの所まで戻ってこれた。

「ラヴィ大丈夫？」

ナイスタイミング!!

「ごめんちよつと私の事引き揚げて!!」

するとすごい速さで私と9Sの体が上がっていく。そして一瞬で上まで戻ってこれた。

「ちよつとラヴィさん大丈夫ですか!？」

「大丈夫、でも喰らったわ。悪いんだけど、ポポル帰り操縦頼んでいい？」

C A L L

「ラヴィ、今大丈夫？ ジャツカスに聞いたら、もしかしたらつて聞いたからさ・・・」

流石に言つてあげるべきよね。

「落ちていて聞いてね。2B KIA繰り返す、ヨルハ機体2BはKIA、その他9Sが重症、A2がMIA。9Sは保護、また、空域を離脱する。2人共戻つてきてないなら急いで戻つて来なさい！」

第98話

エーリエント side

「ラヴィさん離陸しますよ」

私の方は傷の治療も兼ねて後ろの方に乗った。

「ごめん、デボルちよつとここ抑えてて」

私はシャツをめくりそれを口で咥え、デボルに傷に当たったガーゼを押しさえてもらいながら、ポーチから医療品を取り出す。消毒を済ませ、包帯を巻き、治療を完了させる。

「ラヴィ、大丈夫？」

「多分大丈夫。でも、もう医薬品が残りにくいわね。一応聞くけど、レジスタンスキャンプに人間の医薬品ってあつたりする？」

「無いですね」

「ですよねー。どうしよう。包帯は最悪、衣類を破いて使えばいいけど、それ以外がもうない。」

「そろそろ着きますよ」

ヘリがレジスタンスキャンプ前の広場に着陸すると、ジャツカスが頭を下げ、それを

真似してアネモネが来た。

「どうだった!？」

「2BKIA、9Sは負傷してる。彼を治療してあげて」

「2Bが・・・そうか。おい!誰か来てくれ!」

その後、9Sは担架で運ばれていった。

「いずれ目を覚ますだろう。ところで3人は大丈夫か?」

「私は大丈夫ですけど、ラヴィさんが・・・」

私はチラッとシャツをめくり、傷を見せる。

「少し痛むけど大丈夫よ。それと、若干吐き気がする」

「吐き気?どうしたんだい。もしかして何かの病気かい?」

「軽く酔ったのよ」

「酔った?」

声を揃え姉妹がこちらを見て来る。

「自分でやつといて何だけど、あの飛行は酔うわよ」

「よくわからんが大丈夫なんだな。すまないな、アンドロイドの方が傷を受けても修復が楽なのに」

「そうよ。ラヴィは無茶しすぎな所があるのよ。危ないのは私達は任せればいいのに」

「備品の備蓄を確認したが無いな。必要なら、ある程度探させることもできるが」

「気持ちはあるがたいけど、大丈夫よ。あつたらの話だから。で、そっちの話は？」

「ああ」

アネモネの顔は真剣そのもだった。

「ラヴィ、今すぐこのキャンプから離れろ。そして、身を隠せ。できるならこの都市からも、出て行った方がいい」

第99話

エージエント side

「ラヴィ、今すぐこのキャンプから離れる。そして、身を隠せ。できるならこの都市からも、出て行った方がいい」

随分と突然ね。

「それはまたどうして？身を隠せって言うのはわかるけど、出て行ってのはどういう事？」

「こいつを見ろ」

アネモネから渡されたパッドを読む。

「バンカーの放棄及び、レジスタンスキャンプへの駐留の許可申請？」

「そうだ」

「これがどうしたの？ヨルハ部隊がこのキャンプで活動した所で、私達は見つからないと思うけど・・・」

「はあ」

アネモネは大きな溜め息を着いた後、私からパッドをひったくると凄い勢いでスク

ロールさせた。

「(ここだここ!)」

パッドを指差し、私の目の前に持つてくる。

「脱走兵、11B及び16Bの捕縛要請」

「そうだ。要はあの2人を捕縛もしくは、情報提供を求めるって奴なんだが・・・」

「それ11Bが生きてるかも?みたいな頃からなかった?何を今更」

「そうなんだ。それでだ、引つかかる表現があつてな」

「引つかかる表現?」

「もし、この2体と遭遇した場合、危険なため直ちに付近のヨルハ部隊に通報せよ」

は?最初の命令文と言つてる事矛盾してない?

「違和感を感じるよな。実はな私はこの命令文を見るの2回目だ」

「2回目?」

「A2の時だ。その時どうなつたと思う」

アネモネが目を閉じこう言った。

「連中はA2を殺そうとした。今思えば捕縛なんぞする気がなかつたんだろう。ただ隠密に処分したかつただけだ。それを本人から聞いた時、私は自分を責めた」

アネモネが私の前に立ち、向かい合う。

「だからな、逃げてくれ。私はこのキャンプこ司令官だ。命令をしなきゃいけない。もし、これで誰かが死ねば、私は自分を許せなくなる。頼む、お願いだ」

そう言うアネモネの声は震えていた。私はそのアネモネの肩に手を置いた。

「悪いけどそれは無理ね」

「ラヴィー！」

「私にも譲れない物があるのよ。そうね。あなた達レジスタンスは私の存在を最近まで知らなかったわね。これは偶然じゃ無いのよ。ちゃんと隠密で行動していたし、痕跡すら残ってなかったでしょ？」

「そうだな。それにヘリの存在はここの連中しか知らん。安心しろ、自分の仲間を助けて貰った恩を仇で返す様な奴はいない」

お互いに顔を見合わせ微笑むと、一気に緊張が途切れた。

「死ぬなよ。死んだら恨むぞ」

「任せなさい。アネモネも自分の役職に誇りを持って」

「そうだな」

そうしてその部屋を出ると、ジャツカスの「ヤベツ」と言う声とドタドタと走る音、コケたのかデボルの「イテツ」と言う声があった。

「コイツらこっちの気も知らないで」

「これが続くようにしないとね」

第100話

エージエントside

「集まれ覗き見ども」

アネモネの声を聴いて集まって来た5人。

「よし、これからの方針を決めましょうか」

「あのお、ラヴィ・・・」

「ん？どうしたの？」

「怒らないのかい？」

すると、アネモネがポキポキと骨を鳴らした。それ、アンドロイドもできるのね。

「なんだ、怒って欲しいのか？しようがないな。よし、ジャツカスこっちへ来い」

「アハハハーソンナワケナイダロー」

「よろしい」

流石、付き合いが長いだけあって仲いいわね。

「すまん、ラヴィ邪魔したな」

「じゃ、始めるわよ。まず、私と11B、16Dは一旦拠点に戻りましょう。そしたら、

村の3人と連絡を取って無事を確認したら、明日以降の事を確認しましょう。次に9S
さんだけど、流石にレジスタンスキャンピングに置いてもらえるわよね？」

「ああ。それと、治療したらバンカーの連中は無事なことを伝える」
すると、姉妹が手を挙げた。

「9Sさんの治療の事もありますし、ここに残ります」

「そうなれば、私は砂漠の方に戻るとするよ」

「あ、ジャツカス送るわ。ここから砂漠に戻るの地味に大変でしょ」

「お言葉に甘えるとするよ」

「後、アネモネ近いうちに姉妹と、ジャツカス借りるわよ」

「分かった。直前でいいから、連絡寄越せ。何をするか、しっかり説明だけはしてもら
うぞ」

へりを指さしてアネモネは続けた。

「アレの時は本当に大騒ぎだったんぞ!!」

私と、姉妹、ジャツカスは無意識に頭を下げていた。その節は大変申し訳ございま
せんでした。

「まあいい。解散」

11B、16D、ジャツカスはへりに乗り込んだ。見送りに来るアネモネと姉妹。

「じゃあ、アネモネ色々押し付けるようにしてしまつてごめんなさい。いつか、お茶しながらでも、ゆっくり話したいわね」

「構わん。それと、ジャツカスをよろしくな」

「2人共! あんまり辛い事溜め込んじや駄目よ!」

「そうなたらラヴィのところへ行くわよ!」

「おう! いつでもおいで!」

私はへりに乗り込み離陸した。

「ふう〜」

「何とか一息ついたわね」

「そうですね。でも、明日以降も色々ありそうです」

「そうですね。さて、帰ったらご飯にしましょうか」

「f o o o o o o o ! ?」

「ちよつと、なんでアンタが喜ぶのよ」

「なんでつて、私の分もあるだろう? な、ラヴィ?」

そんな、真つ直ぐに見つめてこないでよ。全く、美人なのが卑怯よね。

「良いわよ。16Dは初めてよね。まあ、味付けはまだ塩ぐらいなだけだね。まあ期待はあまりしないで」

「ジャツカスさんの反応が凄いですけど・・・」

第101話

エージエントside

「さて、ついたわよ」

「なにこの銃弾跡」

「さっき私達は君たちを助けに行くために、飛行ユニットと交戦したのさ」

「話は聞いてたけど、大分凄かったわね」

「へりに当たって無くて良かったわよ」

そんな話をしながら下の部屋に戻って来た私達。なんか一日で色々な事がありすぎて帰ってくるだけで、懐かしさを感じるわ。11Bも体を伸ばし、一息ついている。

「11B」

「んっ」

私は11Bに水を投げ渡し、自分も水分補給する。

「16Dも一口」

「ジャツカス、悪いけどご飯は少し待ってて」

そんな三人を見つつ私は村の三人に連絡を取った。

CALL

「お、ラヴィか？あの後どうなった？」

「いやー、かなり濃かったわよ。色々伝えなきゃいけない事があるからよく聞いてね？」

私は村を出てからの事、近いうちにバンカーの連中が地上に来ることなどを伝えた。

「聞いている限りかなり大変だったみたいだな。こっちの方はさつき言いそびれたんだが、そろそろ収穫まで行けそうだぞ。収穫したら久しぶりにラヴィの料理が食いたい」

「良いわね。とりあえず、気を付けて」

「了解」

「さて、ご飯作りますか」

その後、机の上には大量の肉が置かれた。

「ラヴィ大丈夫？これかなりの量だけど．．．？」

「いいのよ。みんな疲れたでしょ？こういう時はいっぱい食べなきゃ」

すると、16Dが一切手を付けていなかった。

「16Dどうしたの、食べないの？」

「いえ大丈夫です。私達アンドロイドは食事を必要としません。ラヴィさん人類にとつては生きるために必要な物ですが、私達にとつて食べるとは一種の娯楽に入ります。でするので、みなさんが食べればいいだけです」

「幾度となく見たわねこの流れ。ね、2人共?」

サツと目を逸らす2人。よし、16Dも墮とすか。

「ねえ16D、でも私達が食べてるのに、一人だけ食べないって言うのも何かこつちからすると落ち着かないのよ。だから、ね?」

「じゃ、じゃあ頂きます」

恐る恐る、肉を口に入れ、噛みしめる16D。

「うわあ、ラヴィがなんか悪い顔してる」

悪い顔もしたくなるわよ。

「ん!ラヴィさんコレ凄い美味しいです!!」

「沢山あるからゆっくり食べてね」

その後食事を済ませたら、お湯を出してゆっくりしていた。

「じゃ、ジャツカスそろそろ戻りましょうか」

「そうだね」

「ラヴィ、先に寝てていい?」

「ええ、おやすみ」

私とジャツカスがヘリに乗り込み離陸する。

「ところでこの2Bの義体はどうするんだい?」

「もしかしたら、ウイルスについて何か調べられないかなと思って」

「なるほど。その時はぜひ呼んでくれ」

「ハイハイ。じゃ、この辺でいい?」

「ああ、またつまらない毎日の始まりだ」

「近いうちにまた呼ぶわよ。じゃ、おやすみ」

その後、拠点に戻ってみると、11Bの背中を抱くように16Dが寝ていた。

第102話

エージェント side

朝、目覚め顔を洗い、とりあえず水を飲む。さて、2人を起こしますか。

「ほら2人も起きて」

2人を揺すっているのと徐々に目が覚めてきたようだ。

「あ、ラヴィさん、おはようございませう」

「おはようつてちよつと16D!？」

11Bは16Dが自分に抱き着いているということに今気づいたらしい。

「それ昨日私が帰つて来たらずでにこうなつてたわよ」

「なんで言つてくれなかつたの！」

「だつて2人共寝顔が幸せそうだったからね」

すると、寝顔を見られていたということを知つた16Dも顔が赤くなつた。

「ほら2人共」

私水を渡すと2人共一気に飲み干した。

「目覚めたかしら?じゃ、今後の方針について決めましょうか」

「そうね」

「まず、近いうちにバンカーの連中が地上にくるのよね。前行ったとき、あのクソ司令を含んだ司令部要員ぐらしいしかなかったし、よほどしらみつぶしにされない限り見つからないと思う」

「それって裏を返せばそれ以外の皆さんは皆汚染されて敵になったって事です」

はあ、あの飛行ユニットとの戦闘なんかを思い出すとイヤになって来た。

「となると、前に1ー1Bがやってたみたいないな機械生命体狩りは無理ね。ただでさえレジスタンスはヨルハというだけで警戒するようになるでしょうし、ましてやそれが脱走兵二人となればもつと状況は拗れるでしょうね」

「じゃラヴィどうするの?」

「そうね、とりあえず飛行ユニットに対抗できるような武器があるわね」

「それ、当てがあるの?」

「無いわけじゃないけど、使える奴が残ってるかどうかね」

候補としては幾つかあるが、アネモネに話していて分かったけれど、銃は殆ど整備無し
の放置だから共食い整備で、使える奴が組めるかどうかなのよね」

「なるほど・・・?」

16D 良いのよ別に無理に合わせなくても。

「とりあえず今日は2Bの義体の解析を進めていこうと思う」
「義体を解析ですか？」

「ええ、あまり死者をいじるといふのはやりたくないんだけど、もしかしたらバンカーに侵入したウイルスのパターンが分かれば解析して対抗策が打てるかもしれないの」

「で、私達は何をすればいいんですか？」

「とりあえず、屋上のへりから2Bの義体を運び出しましょう」

私達3人は屋上に向かい、へりから2Bの義体を運んだ。

「何か変な感じ。別に私が16Dを持つことができるのに何で2Bのはこんなに重いのか？」

「多分それはね、死んでるからよ」

2人の表情が一瞬強張った。

「人間もそう。生きてる人は軽いのに、死んだ奴は重いのだよ」

「ねえラヴィ」

「ん？どうした……」

突然11Bに持ち上げられる。

「お願いだから、こうしてずつとラヴィの事持たせてね」

「私はたぶんまだ先よ。あと11Bなんか恥ずかしくなったから降ろして」

「私達の寝顔を見た仕返しよ」

第103話

エージエント side

「先輩そろそろ」

11Bから降ろされる。そろそろ始めないとね。

「眠ってるところごめんなさい」

私は2Bのもう動かないブラックボックスにウォッチを接続する。繋げてみて分かるが相当なデータの数とプログラムである。

「データの一部分に欠損あり」

「欠損？パット見た感じブラックボックスの損傷はなさそうですが」

「でも色々あるんじゃない？衝撃による破損とか」

なるほど。データの送信歴とかみれたりしないかしら？大量のプログラムの中から送信ログを見つけた。えーと送信相手は9S・・・ん？

「A2？」

「なんで？2Bを殺したのはアイツなのに」

「分からないわよ。私が見たのは2Bが殺されるところだけだし、それに至った事情が

わからないしね」

「それは本人に聞いてみるしかないぞ」

「でもA2さんって行方不明なんじゃ・・・」

「死体が確認できない限り、死んだって言いきれないわよ。ね？」

どや顔で親指を上げる11B。

「残された側はたまったもんじゃないですけどね」

「すいませんでした」

16Dには敵わないわね。

「データの修復がおよび義体の修復が完了すれば再起動可能の可能性あり」

ウオッチの発言に2人は驚きの声を上げた。

「出来るんですか！」

「これが言うには行けるみたいね」

「義体に関しては姉妹かジャツカスに頼めばいけるでしょうね。とりあえず、今日できることはもう終わったし、後はゆっくりしましょうか。明日はまたあのモスボール基地の辺りに行くわよ」

その後私達は他愛のない会話をし、ご飯を軽く食べ眠った。

A 2 s i d e

「識別番号A2の起動を確認。おはようございます。A2」

私の目に眩しい日の光が飛び込んだ。

「何だお前……?」

「私は随行支援ユニットポッド042。ヨルハ機体A2の射撃支援を担当」

「そんな事……頼んでない」

「肯定、A2からの命令は受けていない。この行動は全随行対象機体の2Bからの最終命令として記録されている」

「必要ない」

「ヨルハ機体A2にその判断をする権限はない」

「一体何なんだあれは」

「役に立たない箱だな」

「要請ヨルハ機体A2の行動目的の開示」

「なんでイチイチそんなことを」

「要請ヨルハ機体A2の行動目的の開示」

A2とポッド042のコンビ結成が去っていた頃

エージェントside

CALL

「アネモネ今大丈夫？」

「構わんぞ」

「私達これから、物資調達も兼ねてへりを飛ばすから。よろしく」

「2人をそつちに送るか？」

「大丈夫」

「じゃあのバカは」

「どつちも今日はいいわ。明日空いてるならこつちに來れるかどうか頼んでだけ貰えな
い？」

「了解だ」

第104話

EーJエンツト side

ここに来るのも何度目かしらね？ 私達はヘリに乗り、モスボール基地に来ていた。

「よし、いい2人共この武器に似てるやつがあつたら、錆びててもいいから回収して」
「分かりました」

解散して各々探索に移る。にしても今日は風が強いわね。しかも吹いてくる風が熱風だからかなり熱い。ああ、昔は暑い日にコーラとか飲めたのが懐かしいわ。今は炭酸すら無い。あの喉を通る時のしゅわしゅわした感覚をいつかまた味わいたいわ。あービール飲みたくなってきた。落ち着け、落ち着け。あ、欲しかった奴は無かつたけど薬があつた。やつぱり12.7mmは重いわね。

「2人共どうだった？」

「スコープがついてるのは無かつたけど、こつちの方はあつたわよ」

「私の方もこつちはありました」

「よし、目的は達成したし戻りますか」

ヘリは廢墟都市に進路をきつた。

A 2 side

「目的は機械生命体をぶつ壊すことだ。わかったか！」

「了解付近の機械生命体のスキャン及び、マーク完了。砂漠地帯に大型の敵性機械生命体を感じ。推奨、大型機械生命体の破壊」

とりあえず、砂漠に行くか。私は転送装置に入り砂漠に転送された。

「私に命令するな」

「否定、これは命令ではない。ヨルハ機体 A 2 の行動目的に対する支援情報であ。推奨、情報に不満がある場合、行動目的の更新」

「うるさい黙れ」

エージェント side

ヘリを操縦していると 16D が何か見つけたようだ。

「ラヴィさん！前方で誰か戦ってます！」

見ると前方で大きな球体は何個もつながったような機械生命体と誰かが戦闘しているのが見えた。

「あんなの見たことない」

「そうね。あんなのと一人で戦うなんて無謀もいい所・・・A 2？」

A 2 が下で戦闘していた。

「やっぱり生きてたのね。ラヴィ！もっと近づいて！私が降りるから」
「了解！」

私は戦闘しているA2に近づくこうとした時、珍しくウォッチが突然警告してきた。
「警告、強力な電磁波を検知。EMP攻撃の可能性あり」

その瞬間機械生命体がA2を取り囲み、その個体すべてがEMP攻撃をした。その一瞬の衝撃波により周囲の砂が巻き上がり、もともと風が強かったのもあり、そこに近づくことができなくなった。

「クソ！」

つい口が悪くなる。

「ラヴィさん、一旦ここを離れましょう」

「そうね。ごめんなさい」

私は砂漠から離れ、拠点に戻って来た。

「ラヴィさん、大丈夫です。A2さんを信じましょう」

「そうよ。結局あの崩壊からも生きてたんだし、私達もやることをしましょう」

「そうね。ありがとう2人共。それじゃ今回の成果を下ろすのを手伝って」

第105話

エージエントside

「そうね。ありがとう2人共。それじゃ今回の成果を下ろすのを手伝って」

「ラヴィ、これ今までの銃と違って大きいのね」

「使う弾薬も大きいんですね」

まあ、12.7mmだからね。比例して銃も大きくなるわよ。にしても流石にヨルハが重い物を持てるからと言ってこれは持ち運び出来ないわよね・・・それは後で考えましょうか。

CALL

「ラヴィ、どうしたの？」

「アネモネから聞いてない？今日、前みたいに武器を組もうと思ってるんだけど予定空いてる？」

「ラヴィさんすいません。私達今9Sさんの看病を任されてまして、離れられないんです。それにアネモネさんが私達に通達が無かったのは今アネモネさんバンカーの皆さんがこのキャンペーンを拠点にするので、その準備に忙しいんです」

「なるほど。ところでなんだけど、キャンプにこんな銃ないかしら？」

「これですね。ちよつと待ってください。デボル、ラヴィさんと話してて」

直後、ポポルらしき足音が離れていくのが聞こえた。

「9Sの様態はどう？」

「治療の方は上手く行ったわよ。ラヴィの方は大丈夫？」

「大丈夫よ。別にあれ位のケガ以前は日常茶飯事だったし」

「ごめんなさい。私達が下に行けばよかった。アンドロイドの方がケガした時に・・・」

「デボル」

ちよつとその発言は見逃せないわよ。

「ラヴィさん、確認したらありました。ってデボルどうしたの？」

「いや、なんでもない。じゃ、ラヴィ私達はいけないから。多分あの変人は空いてると思うわよ。それじゃ頑張ってるね」

デボルはいつもより早口だった。

「デボル、辛くなったら無理に立ち向かわなくていいからね」

返事はなかった。

C A L L

「ラヴィかい？この時を今か今かと待っていたよ！」

こっちは相変わらずね。

「そう。一応こっちもある程度銃の調達はできたの。それでお願いがあるんだけど、キャンプに行つてこれ持つてきて貰えない？」

「了解！行つてくる！」

ブチっ！突如として無線が切られた。ええ？私が後ろを向くとこの会話を聞いていた2人も苦笑いである。

数分後

「ラヴィ！来たよ！」

なんかジャツカスつて昔は良くも悪くも科学者だった気がするのだけど、段々子供に見えて来た。

「ありがとう」

「早速だがラヴィ、この銃はなんていう銃でなぜこれを選んだんだい？」

スイッチの切り替えが凄いわね。

「今回作るのはこれよ」

Brown ing Winchester Cal. 50 Heavy Mach
ine Gun

「偉大なブローニングが作った12.7mm機関銃よ」

私は弾丸を見せる。

「なるほど、この弾のデカさなら飛行ユニットの装甲もぶち抜けそうだ」

第106話

エージエントside

「なるほど、この弾のデカさなら飛行ユニットの装甲もぶち抜けそうだ」

「でしょ。それじゃこの中から使えそうな部品を抜き出して。使えそうな部品の中から組むわ」

「ラヴィの中にある兵器の知識が羨ましいよ。それじゃ始めよう」

私とジャツカスは大量の50・CALの中から使えそうな部品を抜き取って行った。今回に関しては当たりハズレが激しい。外に置いてあつた物でもある程度中は無事だったり、一切使い物にならないものだったり。因みに11B、16Bはお昼寝してまです。寝顔を見るなどは言われたけど、ホントヨルハって気持ちよさそうに眠るわね。

「ラヴィ、これでラストだ」

「ふう、こつちもこれでラスト」

1時間ぐらいで作業は完了した。目の前には部品が種類別に分けられていた。

「にしても誤算だったわ。正直こんなに数があるなら多くて5・6丁は組めると思ったのに」

「仕方ないさ。劣化が著しいものが多かったからね。雨に当たって手入れが無ければ金属は錆びる。私としても悔しいよ」

「とりあえず、組めるのは1丁だけね。余った部品は整備に回すしか今のところないからね」

「ぜひ見学させてくれ」

「分かっているとと思うけど、別に面白いものでもないわよ」

「わかっているさ。でも、知識は持っておいて損はないだろう」

私はジャッカスに手伝ってもらいながら50・CALを組み上げた。

「よし、完成。試射は明日にしましょうか」

「明日？今日じゃダメなのかい？」

「今日は別に頼みたいことがあるの」

「これの他にかい？」

私はジャッカスを連れ、2Bの義体の元へと連れていった。そして、被せていたシートを取った。

「この傷を治して欲しいの」

「どうしてだい？この傷が治ったところで彼女が生き返るわけじゃないだろう？ラヴィ、今度は一体何をするつもりだい」

「彼女やバンカーが感染した論理ウイルスからウイルスのパターンを調べたいの」
「バンカーの時にそれは出来なかったのかい？」

「あの時はとりあえず必要最低限のシステムを残して、バンカー自体を一度再起動したからね。それに、あの時は私達も大変だったでしょ」

「そうだった。だが、これ修理に数日はかかるぞ」

「貴方さえよければここに居ていいわよ」

「良いのかい!？」

「ええ」

「ラヴィのご飯は？」

「勿論」

「よし、乗った」

なんか、レジスタンスが不憫に思えて来た。それに、そんなに私のご飯が好きだななんて嬉しいわ。

「早速作業にかかるとよ」

「無理だけはしないで。後、夜はしっかり休んでね」

すると、ジャッカスは道具を持っていない片方の手を挙げた。了解ってことかな？

「わかってるよ」

「真面目な話、うるさいと寝れないからね。私人類だからノイズキャンセリング機能とかついてないからね」

私は寝ている2人を他所にご飯を作り始めた。よく2人は起きないわね。そして完成すると起き、「ラヴィご飯？」などと言うのだ。おかしくない？とりあえず、ご飯が出来たことを伝え、ジャツカスも含めて食事をした後、ジャツカスもその後しばらく作業をし、みんなで眠った。

第107話

9 S s i d e

「あ、気が着いたみたいよ。デボル」

「おはよう。良く寝たな9 S」

目を開け、体を起こし、ベットに腰掛ける。

「レジスタンス・・・キャンプ・・・」

「貴方、私達が見つけるのが遅かったら危なかったんだよ？」

「見つけて来た私達に感謝しろよ」

「2 Bは・・・?」

もしかしたら彼女もいっしょに、と言う淡い期待がこもった質問だった。

「・・・」

「お前の方が・・・良く知ってるだろ。ブラックボックス信号も・・・切れている」

「・・・そう」

浮ついた返事しかできない。

「デボル・ポポルタイプのアンドロイドは治療・メンテナンスに特化した希少なモデル。」

バンカー無き今、彼女たちが居なければ9Sの修復・補修は厳しいと予測。推奨、感謝の言葉」

「・・・ありがとう」

すると、デボルが何かを思い出したような表情をする。

「そのバンカーの件なんだが、バンカーの大半の機能は喪失したが、指令室と一部の区画は何とか間に合ったんだ。近いうちにこのキャンプに引越して来るぞ」

「否定、当ポッドの通信、他すべてのバンカーへのアクセスへの応答なし」

この言葉を聞いて困惑しているデボルにポボルがそつと耳打ちする。どうやらその内容に納得したらしい。待ちぼうけを食らっていると、ポボルが説明してくれた。

「とある人、まあ誰かは言えないんだけど、その人のプログラムを使ってバンカーのウイルスを除去してから必要最低限のシステムを残して再起動したの。だから、バンカーにアクセスできないんじゃないかな？」

「要請、推測による会話の中断」

「ポッドー！」

僕はポッドを捕まえようとするが、ポッドは僕の手をひらりと躲す。

「イヤ、別に私は・・・」

「ポボル、辞めとけ」

語彙が強まったポボルを、デボルが静止する。

「その・・・」

「良いんだ」

僕はレジスタンスキャンプを出た。そして、目の前にある巨大な建築物の調査を始めるのだった。

エージェント side

その頃ラヴィゴ一行は・・・

「ラヴィ準備はいいかい？」

「ええ」

私とジャツカスは50・CALの試射に砂漠に。11Bと16Dは郊外に行つてゐる。試射の方法はジャツカスが適当に引き連れて来た機械生命体を50・CALで鉄屑にするつてだけなんだけどね。そんな訳で私は今50・CALの設置を終えて、ジャツカスを待つてゐる。

「ラヴィ、ちよつと大きいのも付いてきてるが行けるだろう」

「Fire!

私はコッキングレバーを二回引き初弾を装填した後、押金式のトリガーを押し、弾を発射する。重厚な銃声が遅めの連射速度で響き渡る。

「よし」

最後の一体の大型の機械生命体が倒れたの確認して私は撃つのを辞めた。

「評価といこうか」

私達は機械生命体の残骸に近づき弾の当たった場所を確認する。

「凄いな。分かっではいたが見てみると弾痕の大きさにやはり驚くよ。それに、こつちの奴なんて一体目を弾が貫通してる。これならあの飛行ユニットの何処に当ててもダメージを与えられるだろう」

「問題は機動性ね」

「そつちは拠点で考えよう」

私とジャツカスは拠点へと歩み始めた。

第108話

エージエントside

私とジャツカスは50・CALの試射及び評価を終えた私達は拠点へと戻っていた。

CAL

「ラヴィ、今いいか？」

あら、8B久しぶりね。

「大丈夫よ。どうしたの？」

私は口に指をあてジャツカスに静かにしているようにお願いする。

「喜べ。やつとだ。小麦が収穫できそうだ」

「ホント!!」

自分でもびつくりするほどの声が出た。

「それで明日から収穫に入ろうと思うんだ。そこで収穫を手伝って貰えないかとおもつてな。別に、収穫が大変とかそう言うのではないんだが、一緒に喜びを分かち合えないかと思つてな」

すると、横からジャツカスが視界に入り、私に何かを頼むようなしぐさをしました。

ああ、一緒に行きたいのね。

「私としては大賛成なんだけどね、生憎今、11Bも16Dも近くにいないのよ。多分2人ならOKしてくれるだろうけど一応ね」

「ああ、大丈夫だ。別に連絡しなくていい。とりあえず、ラヴィは来るんだろ？」
「ええ」

「それさえ分かってくれば大丈夫だ」

「ありがとう。それじゃ、ラヴィアウト」

「ラヴィ？」

ジャツカスは自分の要望が通っていたかが気になるようだった。

「多分大丈夫よ」

「良かった！」

本当にジャツカスは元気ね。そんな事を話しているうちに拠点へと戻って来た私達。
「ラヴィ、お帰り」

「あれ？私にはないのかい？」

「先輩？」

先に11Bと16Dが戻ってきていた。

「2人共お帰り。異常はない？」

「強いていうなら、出歩いているレジスタンスの数が少ないくらいですかね」
恐らく、バンカーの皆様のお出迎え準備で忙しいんでしょうね。

「そう。ところで2人共一つ相談なんだけど、明日前に行ったパスカルの村に行かない？8Bから連絡があつてね、収穫に入れるからどうだつて」

2人の反応は・・・11Bは何で涎がつてきてはご飯の事考えてるな。16Dの方も悪くなさそうね。

「2人共大丈夫そうね。なら今日は明日に備えて寝ましようか。村に着いたら子供たちと走り回ることにしようだしね」

A 2 s i d e

「いっー」

「おはようございます。A 2」

「一体」

体を起こすと鈍い痛みがした。

「ヨルハ機体A 2は5分42秒前に再起動された。原因、大型機械生命体との戦闘による過負荷によるもの」

「くそつ・・・砂だらけで鬱陶しいな」

「報告、燃料用濾過フィルターが劣化。砂漠での戦闘時に微細な粒子が内部に入り込ん

だ模様。推奨、早急な当該部品の交換」

「交換って言われてもな」

「レジスタンスキャンプで使用された過去記録を確認」

「レジスタンスキャンプ」

とりあえず、行ってみるか。

第109話

A 2 s i d e

「レジスタンスキャンプ」

とりあえず行ってみるか。転送装置に乗り込み廃墟都市へ転送する。ログが流れ扉が開く。ここに来るのも久しぶりだ。あれがレジスタンスキャンプか。

「ひいひいっ！助けて……助けてください！」

「機械生命体同士の……争い？」

始めてみる光景に困惑しつつ、その機械生命体以外を倒す。

「大変ありがとうございます」

「貴様も機械生命体だろう……」

「いいえ！あなたと戦うつもりはありません。私の名前はパスカル。戦いを嫌う機械生命体です」

「……だからなんだ。機械生命体に魂なんか無い。ただの殺戮機械だ。私の仲間を何人も殺した罪を……償ってもらおう」

「そうですか。仕方ありませんね。それで、貴方……が救われるのなら」

何だコイツ。私は答えを出せなかった。

「殺さないのですか？」

「うるさい……気が変わらないうちにどこか行け」

「貴方は、……いえ、何でもありません」

そう言つてパスカルは飛び立って行つた。クソ、変な気分だ。レジスタンスキャンプに入る。そこでは久しぶりに感じるゆつたりとした雰囲気の流れていた。ん、あれはアネモネか？

「お前は、二号……生きてたのか」

「久しぶりだな、アネモネ」

「そうか……生きてたか。良かった。あの時一緒に戦つた奴ら皆死んだよ。二十一号は私がこの手で……」

「すまなかつたな」

「いや……」

「このキャンプは自由に使つてくれ。施設の説明は……」

「必要ない」

「分かつた。私がこのキャンプのリーダーをやつてるんだ。短い間になるだろうが皆に言つておく」

そろそろ本題に入るか。

「アネモネ、聞きたいことがあるんだが濾過フィルターを分けて貰えないか？燃料用のヤツだ」

「燃料用の濾過フィルター最近切らしてるんだ。パスカルが生産してるから、良ければ直接取りに行ってくれ」

「パスカルって・・・」

「ああ、知ってるのか？」

「機械生命体と取引してるのか？敵じゃないか!？」

「アイツの村は特別だ。我々に危害は加えない」

アイツは一体なんなんだ。

「目的のためなら手段を選んでは場合じゃない。それに白旗を上げてる連中を殺すほど私達は終わってない」

クソっ！まあ仕方ない。

「変わったな。二号口調も、性格も、あのころの君とは全く違う」

「お互い様だ。アネモネはリーダーらしくなった」

「私なんてローズに比べれば・・・まあ、最近やっと自分の役職に胸を張れるようになってきた」

「実は、あの時の記憶は、その外部記憶に保存しているんだ。私達が戦った、あの日のことや残しておかないといけないと思ってるね。そして君には知る権利がある」

「私達はだけは忘れちゃいけないんだ」

「ああ」

私はその装置に近づきファイルを選択する。この記録は私が真珠湾降下作戦に参加した時の物か。

「十六号、二十一号・・・四号・・・私はまだ生きてるんだごめんね。片がついたらすぐにそっちに行くから」

その時一瞬ラヴィイの言葉がよぎる。「もつと自分を大事にして。私はあなたの笑った顔が好きなのよ」

「・・・行くか」

第110話

A 2 side

「行くか」

正直気乗りしない。そんな雰囲気うるさい箱をポツドが感じ取つたらしい。

「推奨、燃料用濾過フィルターの早期の交換」

「わかってるよ」

「機械生命体パスカルを中心とするコロニーの座標を確認。マップにマーク完了」

「うるさいな」

遠回しに急かされる。しばらくすると明らかな境界線、入り口を見つけそこを潜る。

パスカルの村

「機械生命体だらけ・・・」

「ここはパスカルの管理する平和的な機械生命体のコロニー。機械生命体が多数存在するのは予測の範囲内。疑問、ヨルハ機体A2の予測力」

「そのうち、ブツ壊す」

その減らず口を黙らせてやる。梯子を上ると機械生命体に囲まれているパスカルが

いた。

「ああ、あの時の！助けていただきありがとうございます」

「……………」

「それで……………なんの御用でしょうか」

「……………」

「あの……………」

「説明、ヨルハ機体A2の燃料用濾過フィルターに不具合。経過、れじゅスタンスキャンプのリーダーアネモネより情報入手。目的、当地区のフィルターを入手するために来訪。要求、燃料用濾過フィルター」

「全部説明するな」

まあ、助かったがな。ブツ壊すのは後にしてやろう。

「報告、A2の発言不足によるコミュニケーション不足」

「うるさい」

いや、近いうちにブツ壊してやろう。

「ああ、なるほどそういう事ですか。ただ、今は材料が無くて……………フィルターを作るには『剛性植物の樹皮』がいるんですが採取エリアの近くに凶暴な機械生命体がいるんです。申し訳ありませんが、今は作ることが出来ません」

「了解、『剛性植物の樹皮』の確保と輸送」

「何勝手に了解してるんだ」

「『剛性植物の樹皮』の採取可能な場所をマーク」

「・・・クソっ」

何で私抜きで話が進むんだよ。行けば良いんだろ、行けば。クソっ。

8 B ・ 2 2 B ・ 6 4 B s i d e

「行つたか？」

私達3人は物陰からA2とパスカルのやり取りを見ていた。

「アイツがA2か？」

「そうらしいが、それならおかしいだろ」

「そうですね。脱走兵にポッドって随伴するのでしょうか？」

「普通ならない。私達には実感が無いがラヴィイから聞いたろ？バンカーの状況。もう私達の予想の出来る状況じゃないって事だ」

「もしかして、ラヴィイさんが何かしたとか・・・？」

ラヴィイの聞いてみるか・・・？いや、辞めとこう。

「ラヴィイがもう少しでくる。その時に聞けばいいさ。それにここでA2を追い返したら、この村のスタンスに反するしな」

22Bも64Bも納得してくれたようだった。

「最悪、私達3人で相手してやるさ」

「そうならないと良いんですが・・・」

第111話

エージエントside

A2がポッドとパスカルによつて決まつた依頼を洩々了承し村を出た頃・・・

「ジャツカスそろそろよ」

「分かつた。この部分が終わつたら行くよ」

次はあの2人ね。

「おくいお2人さん、そろそろ時間よ」

「今行きまーす」

恐らく下でイチャイチャしていたであろう2人を呼ぶ。私も軽く身だしなみを整え屋上に出る。今日もいい天気ね。ヘリのブルーシートを外し、3人を待つ。

「すまない遅れたかな？」

ジャツカスを先頭に3人が来た。

「いや、許容範囲内よ。行きま・・・」

「ラヴィー——！」

声かした方に振り向くとデボルが手を振っていた。後ろにはポポルも見える。

「どうしたの突然?」

「実はですね、最近9Sさんが目覚めたんです。それをアネモネさんに報告したらですね、休養も兼ねてラヴィの所にでも行って来いと暇を出されたんですよ」

「そういう事!後、ジャツカスに伝言を賜ったわよ」

「イヤな予感しかないよ」

ジャツカスが頭を抱えてるのを他所にデボルが言い放つ。

「そのまま伝えるわね。」「ジャツカス、バンカーのコンピューターとこちらのサーバーを接続する。その際、もしもに備えてキャンプに来て欲しい」とのことよ」

「これをアネモネの声真似をしながら伝えるデボル。」

「あああクソがー!何だもしもの時に備えてつて!なんか不具合があったら呼べばいいだろうがー!」

ジャツカス渾身の叫びである。さらにポボルが止めを刺した。

「後、こうも言っていましたね。」「いつも何かあった時に呼ぶとアイツこうなる前に呼べ!つてうるさくてな。それに今回の件は大掛かりな作業だ。アイツがいた方が都合が良い」とも」

これは・・・自業自得というか・・・何と言うか・・・

「ジャツカス?」

「おあああああああああ!!!!!! クソがー————!!!」
「ちよつとあんまり大きな声で喚かないでよ!」

「こつちの気持ちもわかるだろう! ああ、決めた。私はタイムマシンを開発して過去の自分を殴りに行く」

「でも、今日までに戻ればいいんでしょう?」

「そうだ! じゃあラヴィ早く行こう!」

「何処にいくの?」

「2人も来る? パスカルの村に小麦の収穫に」

「行く!!」

こうしてみんなで笑いながらパスカルの村についた。

「よく来てくれたなラヴィ・・・多いな」

8Bが私達の人数を見て驚いていた。

「ワー、オネエチャンタチアソンデー」

「ラヴィいいでしょ」

「いいわよ。2人共行つてらっしゃい」

何度が交友があつた11Bとそれに引つ張られて16Dが遊びに加わつた。

「久しぶりだ・・・多いな。てか11Bは?」

「遊びに行つたわよ」

「アイツ、ただ作業をやりたくないだけだろ」

「まあ、いいじゃないですか。22B」

談笑しつつ畑の方に進んでいった。

第112話

エージエント side

「おー実ってるねー」

3人に案内してもらい畑に着いた。以前見た時よりもかなり大きくなっていた。

「そうだな。さあ早い所収穫してしまおう」

私達は一つ一つの出来と8B達の頑張りを確認しながら収穫していった。そして、すべて収穫し終え私達は一息ついた。

「お疲れ様。ここまでの大変だったでしょ？ごめんなさいね。殆どあなた達に任せきりにしてしまつて」

「いいんだよ。アンタには脱走した時に世話になったからな。それに見ろ」

22Bが指さした方を見ると11Bと16Dが仲良く子供たちと遊んでいた。

「2人共楽しそうね」

「そうだな。アイツらを見てると心が癒される。こんな生活をするとは以前は考えたことも無かつたな。だが、アンタと出会つてここを紹介されてここで生活してる。こんな平和な日常を貰ったんだ。そうだな11Bの言葉を借りるなら恩返しつてやつさ」

あーもう可愛過ぎるこの子ー。私は無意識に22Bの頭を撫でていた。

「ツさわんな！」

「良かったですね64B」

「22Bに全部言われてしまったな」

「ラヴィは本当にお人好しね」

「全くだ」

3人と交友が無かった姉妹とジャッカスもすつかり打ち解けたようだ。

「さて、今後の話なんだがラヴィ小麦の加工はどうする？」

「問題はそこよね。どうにかして加工する機械を見つけてどうにか修理して使うか、それとも石臼でも製作するかなのよね。私としては出来れば前者をしたいわね」

「だが、あてはあるのかい？」

うーん？ 考えつつ11B達を見ていた。 あっ！

「何か策が？」

「前に農場の跡地を見つけたの。かなり大きい農場だったんでしようね。そこにもしかしたらって所かしらね」

「じゃ、明日行くの？」

「そうしましょうか」

「ジャツカスさん、今日戻ったらアネモネさんに伝えておいてください」

ポボル、無意識にジャツカスの心えぐるの辞めてあげなさい。

「畜生、畜生・・・」

珍しくデボルがポボルを叱るという珍しい展開になった。

「みなさん賑やかですね」

「パスカルさんお久しぶりです」

上からパスカルが降りて来た。

「どう？最近変わったことはある？」

「そうですね、最近下の広場に攻撃的な機械生命体が出て来るようになったんですね。以前出て来た時に8Bさん達に追い払って貰ったんですよ」

「幾らか逃してしまつてな」

この村も手放しで安全を名乗れる訳じゃなくなったのか。

「いいいえ、むしろこちらにも申し訳ない程です。私達は力があるものに抗うべきがありません。そのため、みなさんにすべて任せるといふような形になって・・・」

「いいんだよ。子供たちのためだ。だが、数が増えたと私達3人では辛くなるぞ」

確かにこの村の人数全員を3人でというのはキツイわね。

「ならもしもの時は連絡頂戴。ハイこれ」

私はM18を幾つか8Bに渡した。

「もしもの時は呼んで。火力支援のマークとか様々なことに使えるから」
「わかった。助かるよ」

「だが一番は何事も起こらないことが一番だろ」
「ジャツカス？それ別の意味も入ってない？」

第113話

エージエントside

「そういえばパスカル、先ほど話していたヨルハはA2だろうか？良ければ何を話したのか教えて貰えないか」

A2生きてたのね。良かった。

「いえ、別に何も特別な話はしていませんよ。A2さんの横にいたポットの方曰く燃料濾過フィルターが必要でしたので、材料がないことをお伝えすると調達と輸送を買って出てくださいましたよ」

「正直A2がよくこの村に入って大人しくしてたよな」

「失礼な話ですが22Bに同感です。最悪、3人で何とかしなきゃいけないと思ってたんです」

A2にポッドねえ。何があつたのかは知らないけど、元気そうでよかった。

「なるほど。ありがとうパスカル」

「ワッイ、オネエチャン達オハナシオワツタ？」

「終わったよ」

「ナラ、イツシヨニアソンデー」

話が一区切りついたころ、村の子供たちが寄ってきた。どうやら私たちが話し終わるのをずっと待っていたらしい。

「そうね。たまには何も考えずに走り回るのもいいか」

「ありがとうございます」

私たち全員時間を忘れて村の中で走り回った。

「ラヴィさん今日はありがとうございます」

「もうこんな時間なんです。ラヴィさん流石にそろそろ戻らないと」

手元の時計をみる。そうね。流石に帰らないとね。

「オネエチャン達カエツチャウノ？」

「ごめんね。そろそろ帰らないと。また来るからその時遊ぼうね。約束だよ」

「ヤクソク？」

「うん、約束」

「ヤクソク！」

その子と約束した後私達は村を出た。

「それじゃあ、ジャッカス頑張つて」

「はああああ、何もない事を願うとするよ」

私達とジャツカスが別れ、私と姉妹は拠点に戻った。そして走り回って疲れたせい
か、3人共すぐに眠りについた。

「朝……か。昨日は疲れすぎて寝ちやっただった。ほら2人共起きて」

2人を起こし身支度を整えまた今日も代わり映えのない1日を繰り返すのだとこの
時は思っていた。

A 2 side

よし、これで最後だな。やっとあの機械生命体に燃料濾過フィルターを作ってもらえ
る。

「あの機械生命体の所にもどるか……」

数分間走り、村のパスカルの所へと戻って来た。

「持ってきたぞ」

「ああ、A 2さん。ありがとうございます。今からフィルターを作ってきますので、待つ
ててください」

「飛んだ……」

文字どおり上に飛んで行った。

「パスカルの帰還を確認」

少し待たされるのかと思つたが、早かつたな。私は差し出される濾過フィルターを受

「け取った。そして、しばらくパスカルの前に立っていた。」

「ああ、A2さん。何か御用でしょうか？」

「・・・ファイルターをタダでもらったからな。借りを返さないと気が済まない」

「なんと、それは律儀な・・・」

おい、それはそれで複雑な気分だ。

「なにか手伝える事があれば手伝おう」

「・・・実は困っていることがあります」

第114話

A 2 s i d e

「なにか手伝える事があれば手伝おう」

「……実は困っていることがあります、凶悪なロボットが遊び場に表れては、子供たちを襲うようになったんです。不躰ですが、そのロボットを退治してはいただけませんか？村の者だけではどうしても完全に追い払う事ができないんです。どうか」

「わかった。その機械生命体を追い払えばいいんだな」

「ありがとうございます！きちんとお礼も致しますので、何卒よろしくお願いします」

私は梯子を使い広場に降りる。パスカルの言つてたのはコイツか。目の前には顔の部分が赤く塗られている四足歩行の動物のような機械生命体。ポッドが射撃し、私が数回攻撃しただけで撃破できた。狂暴と聞いてたが大したことなかつたな。とりあえず戻るか。

「ああ、ありがとうございます！あのロボットを退治してくださつたんですね。どうぞ謝礼をお受け取りください。さあ、遠慮なさらず」

強引に謝礼を渡される。借りを返すためにやったのにこれじゃ正直意味がない。

「私達は平和主義者です。戦うことが嫌でこの村を作りました。でも、武器を捨てた途端、チカラのある者に抗う術を失いました。村の中には、平和を守るために周囲の敵を滅ぼすべき、と主張する者もいます。A2さん・・・私はどうすべきでしょうか？」

「さあね。それを決めるのは、パスカル、お前だろ？」

「そう・・・ですね」

私にそんな質問しても満足いく答えは出せない。

「あと、私を襲うようなことがあつたら遠慮なくこの村を滅ぼすからな」

「はは・・・心得ました」

「A2さん」

立ち去ろうとするとパスカルに呼び止められた。

「良ければこの村を見て行ってください。貴方には、私達の事をもっと知ってもらいたいのです」

「・・・気が向いたらな」

そう言いながらも私の足は出口ではなく、村の中の方に向かっていった。

「ネーネー！お姉ちゃん！」

「お、おねえちゃん!？」

「アソンデー遊んでー！」

「機械生命体と遊ぶ趣味なんてない」

「ヤーダー！アソンデー！アソンデー！」

「私はお前たちの敵のアンドロイドだ。言う事聞かないとぶつ壊すぞ！」

「キヤー！タノシー！」

「何で喜ぶんだ・・・」

「ねえネエ、おねえチャン、オモチャ作ってー！」

「オモチャ！」

なんでコイツ等は私が怖くないんだ!?

「遊ぶには遊具が必要デシヨー！」

「必要デシヨー！」

面倒が増えた・・・

「いい加減にしろ！本当にぶつ壊すぞ！」

「キヤー！タノシー！」

本当になんで喜ぶんだ・・・

第115話

A 2 side

ええい！、コイツらに関わるだけ面倒だ。私は村を見て回る。

「ボクは本当にパスカルさんを尊敬シテルんだよネ」

すると、今度は飛行型のタイプの機械生命体に話掛けられる。

「はぐれ者の為にこんな村を作ってくれて。感謝してもらえないヨネ・・・アー！恩人のパスカルさんにお礼がしたいなあ・・・」

なんでわざわざ大声で言うんだ？

「お礼がしたいんだヨネ？（チラツ）」

何だそのチラツは。つたくなんでこの連中は遠回しに物事を言うんだ？

「何かいいたそうだな・・・」

「そうなんデスヨネ！パスカルさんへのお礼をプレゼントしたいキモチが存在するんデスヨ。パスカルさんが好きな哲学書がレジスタンスキャンプにあるらしいンデスケドネ・・・」

用は私にとって来いと言うんだろ。あと、そのいい加減チラツの視線を辞めろ。

「仕方ない……パスカルには世話になったから、その哲学書つてのを取ってきてやるよ」
「ホントありがたいですヨ！哲学書はレジスタンスキャンプの「アネモネ」つてヒトが貯めこんでるらしいから奪ってきて！」

「そんな物騒なことするか……」

まあ、パスカルが喜ぶならやってやるか。レジスタンスキャンプに行くか……

エージェント side

その頃のラヴィー一行は……

「このボロボロな建物が納屋かしらね？改めてみると大きな農場だったのね。今はもう荒れ放題だけど」

私たちは現在散会して農場の中を散策中。ほかのみんなには見たこともない植物や種があつたら教えるように言つてある。私のほうは以前11Bのダブルバレルシヨツトガンを入手した建物を散策している。

「え！やつたあ！」

以前は気づかなかつたが、棚を見ると、塩の他にコシヨウなどのスパイスが置かれていた。

「オエっ、これは駄目ね。さすがに腐ってる」

淡い期待を抱いて嗅いだバーベキューソースは案の定だったけどね。さらに棚を開

けてみるとコーヒー粉がストックされていた。確かコーヒー粉は未開封なら腐ることは無いはずよね。私は開封された形跡のものには放置し、未開封のものを回収する。思った以上の収穫にホクホクしつつ、早くここに来なかったことを少し後悔した。

「作業場はここかしら・・・？」

そこには幾らか錆ついている機械が置かれていた。

「これの中で小麦を加工できるのは・・・あつたこれね」

意外とあつさりと見つかった。なにせ、その機械には放置され、虫やカビが生えた小麦が入っていたからである。

CAL L

「ラヴィから11Bと16Dへ。お目当ての物があつたわ。運ぶのを手伝って欲しいの」

「了解しました」

「ラヴィ、こつちは因みに地下室？らしきものを見つけたから後で行ってみましょう」

CAL L

「ラヴィからデボル、ポボルへ。そつちは何かあつた？」

「ラヴィ！ジャガイモが生えてる！」

「何ですって！よし！2人共悪いけどもてるだけ収穫して！よし、今日のご飯は豪華

になるわよ〜」

「任せなさい!」

「ラヴィ来たわよ。大きな声が聞こえたけど大丈夫?」

「あらごめんなさい。ちよつと取り乱したわ」

「確かにしやぎすぎた気がする。でも仕方ないじゃない!だって主食となるものが今までなかったんだから!はあーもつと早く来るんだつた・・・」

「それじゃ、行きますよ。せーの」

16Dの掛け声で3人で持ち上げてへりまで運ぶ。

「よし、いいわよ。降ろして」

機械を固定し、一息つく。

「あ、ラヴィさーん」

ポポルから呼ばれ2人を見ると、麻袋に大量にジャガイモが詰まっていた。

「こんなに沢山!もう本当にもつと早く来るんだつた・・・」

麻袋をへりの中の日陰に置く。

「それじゃ、地下室のほうに行ってみましようか」

第116話

エージエントside

「それじゃ、地下室のほうに行ってみましょうか」

「こつちです」

16Dの案内でボロボロの廃墟に入る。その中には施錠がされたハッチがあった。

「鍵が掛かっているけど、どうするの?」

「どうするって壊すしかないでしょ?」

私は錠前にジャツカスに貫った爆薬を錠前に巻き付け、少し離れた所から起爆した。

爆音に続いて金属が転がる音が響いた。戻って確認すると、錠前はなくなり扉は歪んで

いた。

「錠前だけ吹っ飛ばすはずだったんだけど量を間違えたみたい」

「大丈夫。これくらいなら私達でもつ」

デボルとポボルがハッチを吹っ飛ばした。

「ラヴィ、どう?」

「どうって言われても・・・なんて言うか、可愛いわね2人共」

「ラヴィさん？その反応あつてます？」

「とりあえず、行きませんか？」

16Dが何とも言えない顔でこつちを見つつ急かす。

「そ、そうね」

私はとりあえず、姉妹の頭を撫でてあげることにした(?)

「でも中暗いですよ」

「目を凝らせば階段下まで位なら見えるけど・・・」

「ヨルハって暗視の機能つてついてないの？」

「付いてないですよ。それにライトとかの装備はすべてポッドがやってくれたので」

なるほどね。。。でも、暗視機能ぐらい付けてあげても問題ないと思うんだけど・・・

まあ、考えても仕方ないか。

「私が先に入るわ。みんな付いてきて」

私はライフルのフラッシュライトをつけ、階段を下りていく。私の後ろにヨルハの2人その後ろには姉妹、ぴったりとくっついて来ている。階段を降り、角を曲がるつた時だった。

「ラヴィ!!」

機械生命体が突然飛び出してきた。ダンッ！ダンッ！ダンッ！私はまず足の部分に一発、次に頭に一発、動かなくなったところで最後にもう一度頭に一発撃ちこんだ。

「なんで機械生命体が……」

「ラヴィ、先頭を代わりましょう。後ろからライトを照らして」

「イヤよ。たまにはいい所を見せないかね」

「ラヴィ、本当に大丈夫？」

みんなの私に対しての認識が気になるわ。とはいえ、暗い上に敵がいるとなると面倒ね。私はPlusスキャナーを起動する。8体ね。そのうち5体は奥の方の狭い部屋に固まっている。手前の部屋には3体。こっちは離れてるわね。

「よし、まずは手前の方から」

入り口に張り付く。4人も私の真似をして張り付く。

「いい？1、2、3」

部屋に入ると暗闇の中に機械生命体の赤い目が光る。私は素早く、3体の機械生命体に鉛玉をぶち込み、確認として頭部を撃つ。沈黙をしっかりと確認する。

「次行くわよ」

また同じようにドアに張り付く。狭い部屋に5体。流石に危険よね。よし、これを使いましょう。私はパイプ爆弾と、ライターを取り出す。そして、11Bに私の向かいに

張り付くようにジエスチャーする。11Bは最初は顔を捻ったが理解したようで静かに張り付いた。次に、11Bに対してドアをバツクキツクで蹴破って欲しいとジエスチャーする。良かった。今回はすぐに通じた。私はパイプ爆弾に点火し、頷くと、11Bはドアを蹴破った。すかさずパイプ爆弾を投げ込む。直後に爆発音が響く。私はすかさず突入する。

「クリア。みんな喋っていいわよー」

「ラヴィさんってON、OFFの切り替えが激しいですよね」

「でも、すっごい恰好良かった」

「一応、SEALsだからね。私」

「すいません。多分ここに居るみんながそのSEALsって物が良く分かって無いと思います」

ポールの指摘で気づいた。

「まあ、設立の経緯とかモットーとか色々あるんだけど、簡単に言えば特殊部隊にカウントされてた組織ね」

「ラヴィが特殊部隊?」

あれ?もうちよつといい反応を期待したんだけど・・・

第117話

エージェンツ side

「え、ラヴィが特殊部隊？え、ホント？」

「なら、さっきのテンションでずっと行きましょうか？」

「あ、いや大丈夫です」

みんなの私に対するイメージどうなってるの？まあ、いいや。私は一応その部屋を調べるが何も無い。まあ、爆発で吹っ飛んでるってのもあるんだけどね。

「ラヴィ！ラヴィ！見て見て！」

何やら興奮した様子のデボルに呼ばれ手前の部屋に戻る。

「こ、これは凄いわね」

私がライトを壁に向けるとそこには大量の酒が置かれていた。いくつかは下に落ち割れてしまっているが、ほとんどは無事なようだ。

「凄いですよね。これ、見る限りバーか何かだったんでしょうか？」

「そうみたいね。あ、そういえばみんなってお酒飲めるの？」

「私と先輩は飲んだこと無いですね」

「私達は・・・あることはあります。かなり昔ですけど」
「なんで2人共もじもじしてるの？」

「そ、それでですね。飲んだ時2人共記憶が飛んじやつてて・・・人から聞いた話ですけど・・・デボルは語尾に「にゃ」を私の方はぶつかつた壁を殴つて穴をあけたらしいんです」

中々凄いエピソードね。酒は本性が出るとは言うけどここまでとはね。これは近いうちに2人と酒をのんで見ましようかね。

「どうするの？これも全部回収する？」

「いや、ちよつと待つて。あーこの列のこれからこれまでと、この列のこの5本、後ワインは流星に劣化してるわよね。一応この一本だけ持つていきましようか」

アルコール度数が高い、ジン、ウォッカ、ラム、テキーラに料理酒用にワインを一本回収した。

「他の酒はどうするの？」

「どうするつてあれ全部多分飲めたもんじやないわよ」

「それを言うならそのお酒もそうじやない？」

「だとしても今は確かめようがないわよ」

「何ですか？」

「11B、分かんないのも無理ないわ。だってラヴィが選んでるの全部度数が高い酒ばかりだもの。そんなもの今飲んだら酔ってどうなるか・・・」

「デボル？私が酔った時の想像、誰かのイメージと被ってない？」

「ささ、さつさと運んで拠点でゆっくりしましょ」

「そうですね」

私達は積み込みを終えた。ヘリを離陸させる。思った以上の収穫で私はホクホクだ。後は拠点に帰って機械の状態を確認して、パスカルの村にもって行けば良いだけね。

C A L L

「ラヴィ！ラヴィ！聞こえるか！」

「ええ、どうしたのそんなに慌てて」

「突然、突然、一部の村人がっ！22B、64B子供たちに近づけるな！クソ！ラヴィ！すぐに村に来てくれ！」

「了解。直ちにそっちに向かうわ」

「8Bさん達大丈夫でしょうか？」

「ラヴィさん急ぎましょう！子供たちに何かあったら・・・」

「分かってるわよ」

私は急いでヘリをパスカルの村の上空へと向かわせた。

パスカルの村上空

「村が燃えてる……」

「昨日は何もなかったのに……」

「ああ、そんなつ、みつみなさんつ、おち、おちついて……」

「パスカル!!」

空を飛んでいるパスカルに声をかけるが取り乱して反応がない。

「ラヴィー!下!」

下を見ると8B達が村人達を必死に抑え込んでいる。抑え込まれている村人たちは目が赤い。汚染されているのか……。

CAL L

「ラヴィー!私達が見えてるか!」

「ええ」

「今私達が抑えてるのは全員汚染されてるんだ。子供たちを退避させたい。手を貸してくれ!」

「だけど、全員は乗せられないわよ!それに、あなた達はどうするの!?!」
「私達のことはいい!子供たちを!」

そんなことはさせない。ヘリの高度を上げパスカルの方へ近づく。

「操縦変わって！」

ポポルに操縦を代わる。私はGAU-17につく。

「ポポル！高度を上げてパスカルの所へ！」

へりは高度を上げパスカルに近づく。

「ラヴィさん！村の皆が！」

どうやら、正気を取り戻したらしい。

「知ってるわよ！で、何か策は！」

「と、とりあえず子供たちを廃工場跡地へ誘導してくださいお願いします」

「でも、そうなるにあの村人を突破しないと！」

「ラヴィさん！どうか村のみんなを助けることはできませんか」

パスカルが懇願するように言う。私は首を振る。

「ごめんなさい。それは不可能なの。子供たちを助けるなら村人たちを殺さない
」

「そんな・・・」

CALL

「ラヴィ！何やってる！」

8Bから催促が入る。

「パスカル！こつちを見て！見なさい！」

「ハ！ハイイイ！」

「貴方はどつちを取るの！？汚染された村人？それとも子供たち！？」

「子供たちです！子供たちを助けてください！」

「よし、高度を落として」

ポポルがへりの高度を下げる。

「パスカル、見ない方がいいわよ。3人は離れて」

「いいが何をするつもりだ？」

「いいから離れろ！」

3人が離れたのを確認する。私はGAU-17で汚染された村人に射撃を始めた。

第118話

エージエント side

私はGAU-17をつかって汚染された村人たちをなぎ倒していく。毎分2000発で発射される7.62mm弾に抗える術も装甲も無い。助けられなくてごめんなさい……

「ポボル高度を下げて。11B、16Bも一緒に降りて。デボルこれの使い方わかるわね」

「ええ、大丈夫よ。さっきのラヴィが使ってるのしつかり見てたから。それよりこれからどうするの?」

「それは下に降りた時に伝えるわ。それと見てたと思うけど誤射には注意して」

「了解」

そんな話をしているうちにへりが地面から数十メートルのところまで下がった。私
が飛び降りると2人も後に続いた。

「3人共大丈夫?っ!」

22Bに胸倉をつかまれる。

「アンタ一体何考えてるんだ！」

「22B！」

「おい！22Bやめろ！」

8Bの声で22Bは私の胸倉を離した。

「終わったら全部聞いてやる。急いで子供たちを避難させるぞ」

私の声に22B以外は軽く驚いていたがそんな事はどうでもいい。

「子供たちを全員工場跡地に避難させるわよ。この人数をへりで運ぶのは無理がある。そのため子供たちの移動の道中を私達で守るわよ。へり組の2人は敵を倒すことより報告を優先して」

全員が頷く。

「パスカル！あなたはどすするの!？」

「私はこの村の村長です。今A2さんに連絡しました。A2さんが来たらそちらに合流します」

「よし、作戦開始」

A2 side

CALL

「聞こえますか！A2さん！」

「ああ、丁度良かった。実はお前にプレゼントしたいと言う村の・・・」

「A2さんッ！村が・・・大変なんです！村人達が・・・ああっ!!」

その直後、無線からヴウヴウウウという独特な地鳴りのような音が聞こえて来た。

「おい！パスカル！どうした！一体・・・何が・・・!?」

私はレジスタンスキャンプから急いで村へと戻った。

パスカルの村

私が村に着いたときに、そこには衝撃的な光景があつた。

「なんだ・・・これ・・・機械生命体共が共食いをしている・・・!?」

「ああっ！A2さん・・・！」

「どうしたんだー！」

「わかりません。いきなり一部の村人達が暴走して・・・仲間を襲い始めたのです。子供たちはラヴィさん達に協力して別の場所に逃がしたのですが、他の村人は・・・」

「このままだとお前も食われるぞ！ここは何とかするから、先に逃げろッ！」

「A2さんは!？」

「こんな雑魚共にやられる訳ないだろう！さっさと行けッ！」

「は、はいっ」

クソ！あんなに穏やかだった村が・・・クソ！私は村の機械生命体に対処するため駆

けだした。

第119話

A 2 s i d e

ほんの数時間前は穏やかだった村に今は火が付き、汚染された機械生命体達が徘徊していた。その機械生命体を一体ずつ倒していく。

「これで、全部か……」

C A L L

「パスカル。聞こえるか？」

「ああつ……。A 2 さん。村は、村の皆はどうなりましたか？」

「すまない。……。ダメだった」

「そんな……」

「子供達は、大丈夫か？」

「ラヴィさん達の協力もあって廃工場跡地に避難させています」

「わかった。ひとまずそっちに行く」

私は移動中先ほどのパスカルの悲し気な声を忘れる事が出来なかった。

E ー ジ エ ン ト s i d e

その頃ラヴィゴ一行十村の子供たちは・・・

「この中でパスカルを待ちましょう」

道中、数体の機械生命体が襲ってくるだけで何事も無かった。

「ネーネー、パスカルおじチャンは来るノ？」

「ああ、大丈夫。パスカルは来るよ」

もう安全かしらね？ 私達は廃工場の入り口からすぐの所にいる。

CAL

「ラヴィから、デボル、ポボルへ。そっちの状況は？」

「上から見てるけど、何も以上はないわよ」

「了解。2人共ここは恐らく大丈夫。それに航空支援もここじゃ上手く利用できないわ。パスカルと合流してから指示するから、それまで拠点で待ってて」

「わかりました。みなさんお気をつけて」

「ありがとう。ラヴィアウト」

「おい、多分もう何もないんだろ？なら約束通り話を聞いてもらおうぞ」

「いいわよ。22B。約束だしね」

私達は奥の部屋に移動する。

「始める前にこれだけは言わせて。22B達には辛い事させてごめんなさい」

「そうかよ……」

「22B!」

その瞬間22Bが私の胸倉をつかみ上げ刃を首筋に当てた。

「ごめんなさい」

「そういうならアンタ今、村のみんなの仇として私に殺されても文句ないよな」

「おい!22B!バカな真似はよせ!」

11Bと16Dは武器に手をかけている。

「ええ、それで22Bや村の生き残った子供たちが前を向いて生きていけるなら」

22Bの武器を持つ手に力が掛かる。

「22B!落ち着いてください!」

「ちよつとバカな真似はよして!」

私は目を閉じる。首筋に当てられている刃が22Bの手の震えを伝える。

「目を開けてくれ。その悪かったな。私も頭に血が上った」

「村のみんなを助けられなくてごめんなさい」

「はあ、心臓が悪い。よし、みんな子供たちの所へ戻るぞ」

そうね。パスカルそろそろ来るかしら?

「どうした。殺さないのか」

響き渡る機械生命体特有の電子音に女性の声と微かに低い声。

「あ？何だお前」

そこには以前来た時に交戦したイカレ宗教の信者恰好をした機械生命体があった。

「私達は機械生命体のネットワークから生まれた概念人格」

第120話

EーJエージェント side

「私達は機械生命体のネットワークから生まれた概念人格」

「つまり人工知能、AIってことであつてる？」

「ふん、そのような死語で表せるものではない。それにお前たちは私と同じ概念人格の一つのあのお喋りのことを知っているはずだ」

AIって死語なんだ……。で、こいつに似たお喋り……？

「あ、あのクソガキ!？」

「そうだ。私と統合するときに記憶の中で呼ばれていたのだな」

「ちよつと待て、統合したつてどういう事だ？」

「私たちが概念人格は今まで沢山生まれてきた。その一つ一つをねじ伏せ、記憶を統合したのだ。その結果、私は概念人格の進化系の頂点にいるのだ」

「進化ね。ただのバトルロワイヤルで勝つただけの奴が進化だなんだと、勘違いもいい所だと私は思うけどね」

「そこのお前、いい考えだな」

概念人格様は私のことを指さす。なによその上から目線。

「だが、私が概念人格の中の頂点にいるのは事実なのだ。私たちに時間の概念はないがとある時、私に隠れてコソコソと力を付けていたものがいた。それがあのお喋りだ。そいつはバンカーへとハッキングを仕掛けた。結局は成功しなかったようだがな。だからその隙にハックし、人格を統合した」

「話が長い。概念人格様には時間って概念はないが、こつちにはあるのよ。もう少しコンパクトに話して」

私はエージェントウォッチを指さし急かす。

「すまないな。そのお喋りが汚染したヨルハの記憶の中から、平和主義者たちの村という物を見つけてな。長であるパスカル、あの個体に興味がわいた」

その瞬間、8B達の雰囲気が変わったのを肌で感じ取れた。

「だから襲ったつてののか?」

22Bは刃を向ける。

「そうだ。しかし、貴様たちがいる事が予想外だった。ヨルハ部隊の脱走兵どもめ」

「ふざけるな! 私達やパスカル、村のみんながお前に何をした!」

「逆だ。何もしないことが問題なのだ。弱肉強食の枠組みから外れれば進化を辞めたことになる。私はそれを私自身の進化へと役立てただけだ」

「何が役立てたのですか！自分の都合のいいように言い換えてるだけじゃないですか！」
「カミ！カミ！カミ！カミ！」

何処からか大きめの機械生命体2体が降って来た。

「話過ぎたな。そろそろイレギュラーには消えて貰おう」

そう言う概念人格が宿った(?)機械生命体が工場の奥へと進んで行く。

「あのクソ野郎！絶対に逃がさない！」

「ああ、追うぞ！」

22Bを先頭に8B・64Bが続く。

「ちよつと3人共！」

「不味いわよ。ここは機械生命体のオンパレードだつてのに」

「とりあえず、ある程度固まって動いた方が良くないですか」

「そうね。さっさと3人を連れ戻すわよ」

第121話

A 2 s i d e

「ここか・・・？」

パスカル達が避難しているという廃工場跡地。扉が開く。

「大丈夫か!」。パスカル」

「ああ・・・A 2さん」

先ほどの通信の時とは違い、声に生氣がない。

「いったい何があつたんだ？」

「わかりません・・・いきなり一部の村人たちが同じ村の仲間を食べ始めたのです。ラヴィさんとA 2さんが来てくださらなかつたら・・・」

「いや、いいんだ。それよりもここで籠城するにも、もう少し情報が必要だな・・・ラヴィはどこだ？」

「オネーちゃん達は奥に行ったヨー！」

子供たちの一人が扉を指さした。

「お姉ちゃん達？」

「ウン！8Bオネーチャン達と、エツト・・・」

「報告、ヨルハ機体8B・22B・64Bは脱走機体」

パスカルを見るとどこか目が泳いでいる。

「構わん。私だつて同じだ。とりあえずラヴィ達のことはいい。ここで籠城するにも、もう少し時間が必要だな」

「推奨、パスカル達の早急な安全確保」

「そんなに急がせるな・・・」

「各地のポッドネットワークから情報入手。本工場跡に多数の機械生命体が集結しているとの情報あり」

「なんだつて!？」

その瞬間、入ってきた扉が開き、機械生命体が2体侵入してくる。

「ああつ・・・A2さん！」

狼狽えるパスカルを他所に私はその2体を倒す。

「敵の増援部隊、本施設への侵入を開始」

「この部屋に入られる前に、叩き潰す！」

「わ、私も援護します!!あいつらを叩き潰して、ぶつ殺します!!」

私とパスカルは外に出る。外には機械生命体が大量にいる。

「一体どうして私達が狙われるんでしょう……」

「考えるのは後回しだ今はとりあえずこいつらを倒さないと」

私は何個鉄クズを作ろうが、数は減らない。こんな時にラヴィは一体どこにいるんだ。

エージエントside

パスカルとA2が合流する少し前……

「おい！3人とも止まれ！」

22Bを先頭に3人は概念人格を追いかけ工場の奥へと突っ込んでいく。

「周りが暗いですし、機械生命体の数も多いです。気を付けて！」

「帰りのことは後で考えましょ！まずは3人に追いつくわよ！」

私たち3人も11Bを先頭に奥へと進む。

「早く子供たちの所に戻らないといけないのに……」

「追いついたら引き摺ってでも連れ帰るわよ！」

あの3人目的を見失つていと良いんだけど……

「あ、いました！」

どうやら8B達に追いついたらしい。3人は部屋の中で戦闘をしていた。8Bがこっちに気づいた。

「ラヴィー！もう少してアイツに追いつけるぞ！」

3人はさらに奥に進もうとする。

「オイ！」

私は3人の前に立つ。

「オイ！上に残した子供たちはどうする気だ！今は敵討ちよりも大事なことがあるだろ
！」

3人がハットとした表情を浮かべる。

「全くなにやっつてんのよ」

「すまない」

「熱くなりすぎましたー」

「ほら、さっさと戻るわよ」

「了解・・・ん？」

戻ろうとするが、入ってきた扉が開かない。

「開きません！」

「なんだと？さつきは問題なく・・・」

「皆様たちは私の予想からよく外れるな」

部屋に響く概念人格の声。

「だが、私たちの進化には必要ない外れ方だ。面白くない。貴様らにもう用はない。死ね」

「な、なんだ!」

部屋が揺れる。

「震源は外だ。近いぞ」

「子供たちに何かあつたら!」

「カミ!カミ!カミ!!!」

部屋に機械生命体[!]が大量に降ってくる。

「ミンナ死んでカミになるのだ!」

その中には自爆タイプも混ざっている。

「全部片付けて子供達の所に戻るわよ!集中しろ!!」

全員が頷く。よし、やってやろうじゃない。

第122話

エーゼント side

「カミィ！カミィ！カミィ！カッ．．．」

私は突っ込んでくる自爆タイプの足を撃ち、すかさずコアに弾丸をぶち込んでいく。この方法で自爆を防いでいる。

「リロードする！」

まったく、きりが無いわ！

「ラヴィー！自爆タイプは任せた！」

「OK！」

「倒しまくってるけど減ってる気がしない！」

「大丈夫だ。ペースは落ちてない！」

「何がペースだよ。こっちは早く子供たちの所に戻らないといけないのに！」

「IIB！弾は足りてる？」

「あんまり残ってないわ！」

ハンドガン撃ちながらバックからショットガンの弾薬が入った包みをとります。

「16D、11Bに渡してあげて！」

「はい！先輩行きますよ！」

「ナイスコントロール！」

16Dが弾の入った包みを11Bに投げた。幾ら信頼してるからって、投げて渡すつて16Dつてかなり大胆だし、肝が据わってるわよね。まあいいわ。次は3人ね。

「3人共弾は大丈夫!?!」

「私はまだいい」

「私もまだ大丈夫です」

「ラヴィー！弾をくれ！」

22Bは刀を片手にMac10で弾をばらまいている。私はMac10のマガジンが大量に詰まっている包みをとります。

「行くわよ！うまくキャッチしてね！」

「ああ！」

私は包みを22Bに投げ渡す。自分で言うのもなんだけれどいいコントロールしてるわ。

「ナイスキャッチ！」

「よし！これで撃ちまくれる！」

リロード終えた22Bの口角が上がるのが見えた。

「みなさん！体感ですが数が減ってきた気がします！このまま一気に押し切りましょう！」

「了解!!」

これを機にさらにペースが上がった。確かに、数が減って来たわね。さあ、もうひと踏ん張り頑張りましょうか。

A2 side

「クソ！数が減らないな。キリがない。これじゃ押し切られるぞ」

パスカルの援護も多少あるが厳しい事には変わりない。だが、ここで押さえないと子供たちが殺される。

「ハアハア」

「A2さん、私に考えがあります。しばらく時間を稼いでいてください」

パスカルはそう言ってどこかに飛んで行った。時間は稼げるが、パスカルでできるだけ急いでくれよ。パスカルが消え援護が無くなったというのに機械生命体の数は衰えを知らない。私もポッドもそれを一つ一つ鉄屑へと変えていく。

「こんな大型兵器まで！」

戦車型の機械生命体が突如として降って来た。いつもならば相手にするなど造作も

ないのだがこうも数が多いと脅威になるな。だが、倒せないわけじゃない。

「ハアツ！」

Bモードになり戦車型に猛攻を浴びせる。

「これでどうだツ！」

戦車型の全体から火が出て爆散する。

「ハアハアまだ・・・来るのか・・・!!」

私の目の前には戦車型を含めた多数の機械生命体が飛行型につられこちらに向かって来ていた。

「A2さん！ここは私が！」

その瞬間私の目の前には巨大なロボットがいた。微かだが頂上にパスカルが見えた気がした。とりあえず、パスカルが操っているとみて問題ないだろう。

「殺してやる・・・殺してやる・・・」

ロボットが腕を振るうたびに機械生命体達は吹っ飛ばされていく。

「私達には守らなくちゃいけない子供たちが居るんだ！」

レーザーによりすべてを薙ぎ払った。その瞬間だった。奥から同じ巨大ロボットが出て来た。巨体同士の戦いはとてもゆっくりしている。殴り合いである。だが、パスカルが操作する方が動きが幾らかスムーズであった。最後にパスカルがひときわ大きく

振りかぶり、パンチを繰り出すと相手の巨大ロボは倒れ、水中に沈んでいった。

「大丈夫ですか？A2さん」

パスカルが目の前に降りて来る。

「ああ．．．助かった。子供たちが心配です．．．部屋に戻りましょう」

第123話

エージエントside

「お前でラスト!!」

22Bが最後の一体を鉄屑に変える。

「クリアー!」

「子供たちの所へと戻りましょう!」

だが、戻るための扉は開く気配がない。

「開けよ!クソ!」

ガンッ!

22Bが扉を殴りつけた。扉へこんでるし．．．でも、確かにこれをこじ開けないと子供たちの所に戻れない。

「ラヴィハッキングでどうにかできない?」

「無理ね。ハッキングするなら制御盤に直接接続しないと」

「じゃあ、どうすりゃいい!」

「22B、落ち着きましよう?」

「なら、64Bは何か策があるのか」

「無いですけど、怒鳴っても仕方ないですよ!」

怒鳴り散らす22Bを64Bがなだめる。私は周囲を部屋を見渡してみる。制御盤らしきものは見渡らないからハッキングは無理だし、周りにあるのは鉄屑機械生命体の死骸だけだし・・・自爆タイプの対処とか大変だったのに・・・あ!

「全員で自爆タイプの死骸を集めて扉の前に置いて!」

「おい!何する気だ!」

「早く子供たちの所へと戻るんでしょ急いで!」

私は自爆タイプの腕を引いて扉の前に置く。みんなも引きずったり22Bに至っては担ぎ上げて自爆タイプを扉の前に積み重ねていく。

「よし、そろそろ良いわよ!」

私は山積みになった自爆タイプの前に、遠隔式の爆薬を設置する。

「みんな部屋の隅に移動して!頭をしっかりと守ってね!」

「この扉を吹っ飛ばすのか!」

「そうよ。手持ちの爆薬と、自爆タイプに含まれてる火薬を連作爆発させるわ。下手すると死骸とかが吹っ飛んでくるから気を付けて!」

「ラヴィいいぞやれ!」

「Fire in the hole! Fire in the hole! Fire in the hole!」

起爆装置のスイッチを押す。

キーン!!

「fuck!!」

爆発音で耳鳴りがする。みんなが何か叫んでいるが聞こえない。

「
!!」

11Bが何かを叫びながら指をさす。指さした方を見ると扉が歪み人が余裕で通れるくらいの間が空いていた。

「ラヴィさん大丈夫ですか? 行きましょう!」

やつと耳鳴りがなったわ。

「そうね。早いところ戻らないと。時間が掛かりすぎてるわ」

「まったく誰かさん達のせいだね」

「本当に申しわあつ!」

突如大きく地面が揺れた。

「全く外はどうなってるんでしょうか? 急がないと」

私達は部屋を出て全速力で戻る。

「死んでこの恐怖を克服しよう」

「エ．．．？死又．．．？」

「そうだ。死ねば今感じている恐怖から救われるぞ」

「でも、死又の怖いヨ．．．」

「死んで神となるのだ」

「カミ．．．？」

「死とは神になる最後の試練なのだ。さあ、この試練をともに乗り切ろう!!」

そう高らかに宣言し、その機械生命体は刃を自信に突き立てた。

「ドウスル．．．？」

「パスカルおじちゃん待つ．．．？」

「でも、怖いヨ．．．」

「さつき言つてた事ホントなのかな」

「パスカルおじちゃんのお話だとカミは全てを作つてウンメイ?を決めてる髭の生えた

オジサンらしいよ」

「死んでボクたちカミになれるのなら．．．」

1人の子供が恐る恐る刃を自分自身に近づける。そして体の前に来た時、力を籠めようとした時、

「こらこら危ないから手を離して。ね？」
ラヴィが腕をつかんでいた。

第124話

エージエントside

「こらこら危ないから手を離して。ね？」

「オネーチャン・・・？」

「みんな大丈夫か？」

みんなで他の子供達の状態を確認する。1人を除いて子供たちは怪我も一切ない。ただ一人を除いて。そっちはみんなに任せて私はこの子ね。

「大丈夫だよ。とりあえず、一回これから手を離しましょう？」

「ウン・・・」

ゆつくりと武器をその子に置かせる。武器を置くとその子は力が抜けたかのように尻もちを着いた。

「パスカルはどうしたの？」

「パスカルおじちゃんの外でヨルハのオネエチャンと戦ってるよ！」

ヨルハのお姉ちゃんと言うとA2の事ね。

「わかったわ。みんなだけにしてごめんなさいね。怖くなかった？」

子供たちはみんな頷いてはいるものの視線が、先ほどの子に向いている。私は尻もちを着いて下を見ているその子に近づく。一緒の視線になる。

「大丈夫。ね。どうしたのか、ゆっくり言つてごらん?」

「ウン。さつきオネエチャン達が来る少し前にその子ガ、死ンだらカミになれるつて言つてテ……それで自分デ……それで、ボクはそれを信じて……」

私はがくがく震えるその子を抱いて、頭の辺りを撫でてあげる。

「大丈夫。大丈夫。君は悪くないよ。でも、私が止めた時君の手は凄く震えてたよ」

「だつテ、パスカルおじちゃんガ死ンだらダメだつて……」

「そつか。それで自分でしつかり考えて悩んだんだ。それが出来たら100点だよ。悪い機械生命体みたいにただ命令に従うだけじゃない。自分の意思を持ったの。ね?」

「怒らないノ?」

「怒らないわよ。それに、君たちを放つておいてどこかに言つちやつた私達が一番悪いわ。だから、もう泣かないの」

その子は、大きく頷いた後、立ち上がつてみんなの所に戻つて行つた。

「ん?ちよつと待つてください。数え間違えじゃないですよね」

「ああ、64B数え間違えてない。という事は……」

「何?どうしたの?」

「この子、恐らく村の子じゃないです」

64Bが自殺した機械生命体を指さして言う。

「だと、コイツどっから来たんだ？」

「元から工場に居たんだろう。恐らく、私達が追っていた概念人格だ」

「子供たちを自殺させようとするなんて、アイツただのヤバい奴なんじゃないの？」

「先輩、恐らくただのヤバい奴です」

その瞬間工場の扉が開く。

「アワワワ私です！パスカルです！」

「パスカルおじちゃん」

子供たちがみなパスカルに寄っていく。

「この子は……？」

「恐らく、どこかで混じった機械生命体だ。コイツがみんなに自殺をそそのかしていたようだ」

「なんと……」

「逃亡ヨルハ機体の8B・11B・22B・64Bを確認。また、状況を見るに16Bも脱走と判断。推奨、捕縛」

「おいっ！バカっ！」

「A2・・・？」

その瞬間A2と思われる人影が走り出した。

「A2！」

私もすぐさま後を追う。

「A2！お願い！待って！」

必死に走るが距離が徐々に離れていく。

「A2！」

完全に見失ってしまった。

「fuck!fuck!」

CALL

「ラヴィさん、大丈夫ですか」

「え、ええ。ごめんなさい。今からそっちに戻るわね」

第125話

デボル、ポポル side

CALL

「ラヴィから、デボル、ポポルへ。そつちの状況は？」

「上から見てるけど、何も以上はないわよ」

「了解。2人共ここは恐らく大丈夫。それに航空支援もここじゃ上手く利用できないわ。パスカルと合流してから指示するから、それまで拠点で待ってて」

「わかりました。みなさんお気をつけて」

「ありがとう。ラヴィアウト」

「じゃあ、私達はあつちで待ってよつか」

「そうね。にしても、最近は今までとは考えられない事ばかり起こるわよね」

「確かに、ここ一カ月だけでも、良くも悪くも、かなりの変化よね。ほら、そろそろ着くわよ」

ラヴィさんの拠点の屋上にへりを着陸させる。

「デボル、これの操縦かなりうまくなったわよね」

「ラヴィさんと比べたら全然だよ。それこそ、この前の飛行ユニットから逃げるとき
操縦とか」

「アレと比べるのは違うんじゃないの？」

「そうだけど・・・とりあえず、食材とお酒を下ろしておきましょう」

「そうね！今日のご飯は何かしら」

「美味しいのは間違いないでしょ」

そんな会話を繰り返しながら先ほど入手した食材とお酒をへりから降ろす。機械の
方は重すぎて私達2人ではどうにもならない。全部を下に置いて、私達は腰を下ろす。
ラヴィ達と別れてからすでにかなりの時間が経過していた。

「デボルどうする？ラヴィさんに連絡する？」

「いや、11B達もいるし問題ないでしょ。ポポルほら」

デボルがお湯を貰う。ラヴィさんを信じないとね。

C A L L

そう思った瞬間の通信だった。

「ジャツカスからよ」

「やあ！2人共！こちらは頑張ってお仕事してるぞ！そっちはどうかな！」

なんでこんなにヤケクソテンションなの？

「ジャツカス少しは静かにしろ！分かったから貸せ」

「アー2人共悪いが今日のうちでいいからキャンプに戻ってきてくれ」

「了解しました」

「よし、ほら」

「2人共ラヴィに今から帰ると伝えといてくれたまえ。それじゃ！」

あの人、本当嵐みたいね。

CALL

「2人共、遅れてごめんなさいね。出番よ」

「分かりました。すぐに廃工場跡地に向かえばいいですか？」

「ええ」

少し、ラヴィの声に疲れが見えた気がした。

「それじゃ、行きましようか」

「ジャツカスさんはどうするの？」

「とりあえず、大丈夫でしょ」

私達はヘリに乗り込んで廃工場跡地に向かった。

エージェントside

少し、戻りまして・・・

「ああ、ラヴィさんお話はお聞きしました。子供たちを助けてくださりありがとうございますございました」

「パスカル、さつき私が追いかけたヨルハは・・・」

「ええ、A2さんです」

「そう・・・この後はどうするの？」

「村に戻って片づけですかね」

「了解。2人を呼ぶから少し待ってね」

第126話

エージェント side

CALL

「2人共、遅れてごめんなさいね。出番よ」

「分かりました。すぐに廃工場跡地に向かえばいいですか?」

「ええ」

疲れからかつい手短になってしまった。今からヘリでここに来るまでに少し時間がある。その後適当に地面に腰を下ろす。

「ラヴィさん、お疲れの所申し訳ないんですか少し時間よろしいですか?」

パスカルから話しかけられる。その後ろでは11Bや8Bが子供たちの相手をして
いるようだった。

「パスカルその前に、私から一ついいかしら?」

「はい、分かりました」

「ごめんなさい」

私は頭を下げる。パスカルからは反応はない。だから、私は頭を下げ続けた。傍では

子供たちと11B達の元気な笑い声が響いている。距離はそこまで離れていないのに、私とパスカルのいる位置とはかなりの距離を感じる。そして、私はどの位頭を下げ続けたのだろうか。1分たらずなのか、5分以上なのかそれ位長く感じた。

「頭をあげてください」

パスカルに促され頭を上げる。パスカルの表情は何処か慈愛に満ちているような気がした。

「ラヴィさん、あなたは子供たちにとってはヒーローですよ。それがどうして頭をさげるんです?」

「だって、あなたの大切な大切な村の人々を私は殺したのよ。それこそ、あの子たちと親しい関係になっていた機械生命体もいたはずだわ。私が言うのもなんだけれど、貴方や、子供達、8B達には私を恨む権利がある。それこそ、仇うちだって出来るわよ」

「しませんよ。なら、私からのお願いを聞いて頂けますか」

「出来る事なら」

「ラヴィさん、私に戦い方を教えてください。村の子供たちを守っていけるように」

「パスカル・・・それはあなたの理想を否定することにならない?」

すると、パスカルは私のライフルを指さす。

「なら、ラヴィさんはどうなるんですか?」

私が再びパスカルを見ると先ほどの慈愛に満ちたパスカルの笑顔が、どこかしてやったりな笑顔に変わっていた。

「はあー、降参よ。降参。わかったわ。出来る限りのことはするわ。約束する」

「ありがとうございます」

それと同じく遠くからヘリの音が聞こえて来た。

「とりあえず、明日以降かしらね」

「そうですね」

そう言うとパスカルは子供たちの所へ。

「みんな村に帰りますよ」

「ハイ」

「ア、さつきも飛んでたヤツだ」

指をさされたのを気づいたのかデボルが手を振っていた。帰りは行き同様何事も無かった。

パスカルの村

「アア、オカーサン・・・」

予想はしていたが実際に子供たちの悲しい表情をみるのは辛い。

「みんなで一緒ナラ怖くないヨ！」

今日は子供達やパスカル8B達みんなで集まって寝るそうさ。私達は明日また来ることを伝え、拠点に戻って来た。

「みなさん着きましたよー」

「はー疲れた。美味しいもの食べて寝て、明日に備えましょう！」

「へえ、美味しいものねえ」

え？パスカル帰ってきてたんだ。連絡位してくれたらいいのに。

「連絡したさ。そこのピンククレディーズに」

おいコラ2人共、目を逸らさないの。

第127話

エージエント side

「す、すいませんでした」

姉妹2人がパスカルに謝る。しかし、まだ怒りは収まらないようだ。

「ラヴィー！今日の（ご）飯は飛び切り美味しいのにしてくれたまえ!!」

「仰せのままに」

これを聞いてジャツカスの顔が笑顔になる。さてと。疲れた体に活を入れてご飯の準備を始める。まず、ジャガイモの皮をむいて細切りに、それを肉と一緒に炒めて塩と、黒コショウで味付けする。うーん、こっちに來てから久しぶりに料理と呼べるものをした気がするわ。そんなことを思いながら調理を進めていると、

「あ、そうだ。2人共アネモネからだ。「突然で悪いが、明日の昼過ぎにバンカーの連中が来る。そのためキャンプに戻ってきて欲しい」だそうだ」

ジャツカスがアネモネの真似をして話す。相当根に持つてるのね。

「あ、今日中に戻ってくれば構わないぞ」

そう言うと、ジャツカスは2Bの修復作業に戻って行った。

「そういう事なので私達のご飯頂いたら帰りますね」

「2人共、折角の休みなのに働かせるだけになちやってごめんなさいね」

「別に良いわよ。それより、ついに来るのね」

「そうね……。ま、バレたらバレたなりに上手くやるわよ」

「そうしてくれると助かるわ」

そんなこんなでご飯が出来上がった。2人に休んでいたヨルハ組とジャツカスを呼んでご飯を机に並べる。

「ラヴィ！コレどうしたんだい!？」

とジャツカスは騒ぎ、

「これが料理……。ほんのり今まで嗅いだ事のない良いにおいがします！」

とにおいを吸い込み、

「これがあるから毎日頑張ろうと思えるのよね」

とヨルハ2人はおっさんのような事を言いだした。

「さて、食べましょうか」

その掛け声とともに、全員が一気に食べ始めた。私も料理を口に運ぶ。うーんこのコシヨウの味がするだけで、一気にグレードが上がった気がする。ふと、みんなの反応がない。

「みんな、お味の方は？」

「ふおつてもおいひいでふ」

「ハイハイ、焦らずに食べてね」

食後

私はこれまた今日入手したコーヒーを出す。なお、姉妹からはいらなと言われている。

「かなり苦いから気を付けてね」

「うーん私はこれ好きですけど、先輩どうです？」

「うーん苦い・・・」

「目がさえるな。これはいい」

反応は様々。

「あ、そうだ。ラヴィ2Bの件で話がある」

「何かしら？」

「実はだな・・・パーツが足りないんだ」

「足りない？」

「ああ。レジスタンスキャンプでストックしてるパーツは専ら戦闘で負傷した用のヤツだ。だが、2Bの損傷は墜落の衝撃によるものもあるんだ」

「だから、パーツが足りないんだ」

姉妹を見ると何処か納得がいつている様子だった。

「でも、落下事故が無いわけじゃないんでしょ？その時どうしてたの？」

デボルが質問する。

「ああ。まあ、あまりそんな間抜けはあまりいないが、ある程度まとまってパスカルに発注するんだ」

あゝ……私が見渡すと、みんな同じ顔をしていた。

「ん？どうかしたのかい？」

私は今日の出来事を姉妹が拠点で待機していた時の事も含めて話した。

「成程……ならお2人さん、戻ったらアネモネに言っといてくれ」

「分かったわ」

その後、私達がコーヒを飲み終わったのを見計らって姉妹が帰ると言った。私は拠点の入り口まで見送る。

「それじゃあ、またね」

「こちらからです」

「うわー！」

私は2人を抱き寄せて頭にキスをする。

「またね」

2人を見送った後、疲れからかコーヒーを飲んだのに案外眠たくなつた。私が寝る体制に入ると3人も横になり、そのまま寝た。

第128話

エージエントside

「ラヴィ、ラヴィ起きて」

う、うん？目を開けると11Bが私の事を揺すっていた。

「おはよう」

「珍しいわね。ラヴィよりも私の方が早起きなんて」

「そうね」

「まあ、そういう日もあるさ。さて、今日はパスカルの村へ行くんだらう？」

「そうね。それじゃ少ししたら行きましようか」

パスカルの村

「おーい、こつちだこつち！」

村の入ると8Bやパスカル、子供たちが手を振って出迎えてくれた。村を見渡してみると、火は消えているが、一部周りの木々に燃え移ったようで、木が黒くなっていた。

「よく眠れた？」

「まあな。にしても、なかなかの被害だ。無傷なのは私達の部屋と、畑だけだ」

これは、作業が大変になるわね。周りを見渡していると、パスカルが私の横に降りて来た。

「ラヴィさん、来ていただいております」

「ええ。それに一部は私のせいでもあるし」

視線の先には倒壊した部屋。床には一直線に銃弾が走っている。

「それで、何かプランは？」

「はい。見ての通りまずは、瓦礫を集めましょう。そして、思い切つて決めたのですが、燃えてしまった木は切り倒して村を広げようと思います。かなりの作業量だと思いますがお手伝いお願いします」

「ええ。任せて」

そして、パスカルに近づき耳元で

「約束の件は作業の合間の休憩時間にでも」

そう言う。パスカルは頷いた。

「さて、そろそろ始めよう」

ジャツカスの一言でみんなで作業を始めた。だが、始まって直ぐに作業は至る所で止まった。

「ウウウウウ」

瓦礫の中には村人たちの腕やボディなども含まれている。至る所で悲痛な泣き声が聞こえて来る。

「ラヴィさん、もうし、わけつないんですっ」

パスカルも泣いていた。そうよね。辛いわよね・・・一日ですべてが変わってしまった。つい昨日まで楽しく話していた相手が死んだのだ。

「ラヴィ、何かいい案もつてないだろうか」

ジャツカスから耳打ちする。私は目の前に倒れていた村人の残骸を回収し、広場にある木の根元の辺りの木に胴体部分を突き刺し、足を置いて、頭部を胴体の上に乗せる。そして静かに黙祷した。

「ラヴィさん」

気づけばパスカルが横にいた。

「村のみなさんの事を気遣っていただいております。今まで見たことのない方法ですね」

「私風のやり方だけどね」

すると、子供たちが続々とそこに集め出し、山が出来た。

「凄いな。しかし、これは流石に邪魔になつてしまいますね」

「そうですね。ラヴィさん何かいい方法知りませんか？」

「なら、パスカル」

パスカルを呼び、ナイフを渡す。

「ここに亡くなった者全員の名前を書いて行つて」

「ああ、本来機械生命体には名前はありません」

「なら、製造番号でも特徴でも何でもいいわ。これに生きていた証を残してあげて」

パスカルは小刻みに震える手で刻んでいった。

第129話

エージエントside

「これで・・・全員です」

「そう」

パスカルがナイフを返して来る。後ろには全員が集まって来た。

「じゃあ、みんな黙祷」

私がそう言っていると皆下を向いた。

「顔を上げて」

みんなが顔を上げる。

「それじゃあ、作業を再開しましょうか。みんなに綺麗な村見せてあげましょ」

みんなが一斉に散っていく。みんなにもう悲しんでいる様子はない。さらに私は景気づけも兼ねて音楽をかけてくれる事にした。

「何か適当に音楽かけてくれない？」

「再生 錨をあげて」

うわー！、懐かしい私が軍に入ったところを思い出すわ。軽快な音楽が流れ、みんなも楽

しそうだし、子供たちの数人はリズムに乗っているのが遠目でもわかる位だった。私も昔を懐かしみながら、瓦礫を片付けて集めていく。はあ、こっちに來てもちろん來た時はびつくりしたけど、今ではすっかり馴染んでしまった自分がちよつとばかり怖くなつた。

「ラヴィさん、ラヴィさん」

ん？64Bに肩を叩かれる。64Bを見ると、64B以外にもみんなから視線を集めている気がする。

「ラヴィさんその曲お気に入りですか」

「そうね。私が軍にいた頃から時折歌ってきた曲だからお気に入りなのかしらね？」

「へえー」

どこか64Bがニコニコしている。

「でも、どうして私のお気に入りだと分かったの」

すると、64Bの微笑みが深くなった。

「あー、もしかして口ずさんでた？」

「はい」

マジ？恐らく、みんなの視線の集まり用からそこそこ聞こえてたのよね。

「あー、ok。了解。えー、みなさま曲のお楽しみ中に雑音が入りまして申し訳ありません

ん」

「いえいえ、私はラヴィさんの以外な一面が見れた気がして悪い気はしませんね」
 パスカル、やめて。

「ラヴィ、私は好きだぞこの曲。例えば Roll out the T. N. T.
 Anchors を weigh 上 Sail on to victory 勝
 And sink their bones to Davy Jones, hooray!
奴等 の 骨 を デイ ヴィ ジョー ズ に 沈 め ろ!

黙ってる爆薬オタク。そもそもアンタデイヴィ・ジョーンズとかなんか知らないで
 しょ。まあ、慰めの気持ちだけ受けとつとくわ。

「ほらほら、みんな手が止まってるぞ」

ありがとう8B。その言葉でみんな再び散っていく。私も瓦礫を運んでいく。

2時間後、

「ふうー、そろそろ一回長めに休憩しましょう」

私のその一言で子供たちは一気に遊び始めた。

「パスカルちよつと」

「はい。あの件ですね」

「流石にここでやるのは不味いと思うから私の拠点の方でやりましょう。その間子供た

ちはヨルハ組とジャツカスに任せてもらっていいかしら？」

「わかりました。ラヴィさんにお任せします」

「おーい、子供たちと遊んであげてー」

「任せてー!!」

第130話

エージエントside

「ここよ。パスカル」

村の事はみんなに任せて私はパスカルを連れて拠点へと戻つてきていた。

「お邪魔します」

「それじゃあ、時間もないし早速始めるわよ」

「わかりました」

パスカルを射撃場へと案内する。

「始める前に、本当に最後の確認よ。パスカル、この選択に悔いはないわね」

「ありません。私は村の長として村の人たちを危険から守りたいんです」

「なら、約束して。今から教える技術を悪用しないで。向けるべき相手を考えて。いい？」

「はい。心に誓います」

「よし、じゃあまずはコレ」

私は Winchester Model 1897をパスカルに渡す。これなら機

械生命体のみならず、野生動物たちにも仕留めることが出来るでしょうね。私はパスカルの傍につき構え方、狙い方を丁寧に教える。何発か空撃ちさせた所でシエルを込める。そして傍を離れた。

「いきます」

ダンッ

「うわッ!!」

何とパスカルが凄い勢いで吹っ飛んで行つた。

「パスカル大丈夫?」

「ええ。大丈夫です」

私は落ちたショットガンを拾い上げる。これは無理ね。見ると、パスカルが落ち込んでいる。

「大丈夫大丈夫。次行ってみましょう。ハイ、コレ」

私はM45A1を手渡した。ポポールにあげたBerettaよりは45acpだから反動は大きいがこれ位が自衛にはいいのかもしれない。それにM1911のパーツも多くて残っているだろうし、整備もできる。また、構え方を教える。

「いきます」

パンッ

「おっとっと」

先ほどのショットガンよりは安定しているが、パスカルがバランスを崩した。

「ラヴィさん、私にはやはり・・・」

「大丈夫よ。気晴らしも兼ねてコレ撃ってみましようか」

私は屋上へとパスカルを案内し50・CALにかぶせてあったブルーシートを取る。

「ここに座って」

パスカルが50・CALの前に座る。

「っ／＼」

「どうかしました?」

「いや、別に」

だって、だって、パスカルがちよこんと座るんだもの。

「それじゃあ、これは引くんじゃなくて押してね」

「はい。いきます」

ドツドツドツ

重厚な銃声が響く。パスカルの腕も問題なそうだ。

「これは撃つことが出来ませんが、これを持ち運ぶのは・・・」

「分かっているわよ。まあ、気ままにやっていきますよ」

「はい。あ！ウワウワっ！」

突如パスカルの肩のあたりからオイルが漏れだした。

「反動で緩んでしまいましたかね？」

手早くパスカルが自らボルトを締めた。

「失礼しました」

「ねえ、パスカルそのオイルって可燃性あるの？」

「ありますが、それがどうかしました？」

「銃じゃなくなるけど、いい案を思いついた」

第131話

エージエントside

「銃じゃなくてですか？」

「ええ。とりあえず、村に戻りながら話しましょう。約束した時間に合わないからね」

パスカルと一緒に拠点を後にして村の道を歩き始めた。

「一応聞くけど、パスカルって物を投げられるわよね？」

「はい・・・？一応アンドロイドの皆さんには劣るかもしれませんが投げれますよ？」

「ok。パスカル。私が提案するのは武器はモロトフカクテルよ」

「モロトフカクテル？はて、私が以前読んだ本の中にカクテルと呼ばれる飲み物があつたと記憶しているのですが、それとは違うのですか？」

「この名前になった経緯を聞けばわかると思うわよ。大丈夫短いから」

私はモロトフカクテルについて、名前の由来と、効果を説明した。

パスカルの村へ

「なるほど。面白いお話でした。その材料なら村に大量に持て余していますし、私にも

扱えそうです」

「間違つて自分を燃やさないようにね」

村に近づくにつれ子供たちの笑い声が聞こえて来た。

「あ、ラヴィお帰りー！」

子供たちに囲まれた11Bと16Dが手を振ってくる。私とパスカルも手を振り返す。

「ラヴィさん、それでは」

パスカルが一足先に浮遊して広場に降りる。

「それじゃあ、みんな残りの作業も頑張りますよ」

「ハイ」

子供たちが一気に散っていく。

「さて、もうひと踏ん張りかな」

「そうですね」

「休めた？」

「ジャツカス以外は」

見るとジャツカスの顔に微かに疲労が見える。

「どうしたの？」

「いや、何。子供の知識欲は凄いなと思ったところさ」
質問攻めにでもあったのかしらね。

「ほら、立てよ」

22Bが手を貸す。

「もう少し、労わってくれたって良くないかい？」

「アンタはこれが終わったらラヴィの美味しい飯なんだろ？あれ、マジ美味しいよな。ほら、あと一息だ」

22Bがジャツカスに耳打ちする。

「よーし！後一息頑張るぞー！」

「これはジャツカスさんがアレなのか、それとも22Bさんが美味しいのか」

「お前の先輩も似た所がある気がするが・・・」

「そうですね」

ん？みんなコソコソと何話してるの？

「なら、みんな頑張りましよ」

みんな散っていく。なんか、ジャツカス元気になつてない？また、音楽かけてあげましようか。

「また、適当にかけてくれる？」

ウオツチから再び音楽流れる。それを合図にみんな再び働きだした。瓦礫を片付け、新たに住居を立てていく。木を切り倒し、広場や一部居住区も広げた。

ふく。大分すつきりしてきたわね。にしても、久しぶりに音楽こんなに聞いたわ。

次の曲は何かしらね？

「再生、The Star—Spangled Banner」

第132話

エージエントside

「再生、The Star—Spanpled Banner」

おい、ウオッチ、コラ、アンタ絶対わざとやってるでしょ。はあ。私も仕事にかかりましょう。

2時間後

「一応、これで終了ですかね」

「そうね。パスカルありがとう。私達の我儘にも付き合って貰って」

「大丈夫ですよ。私もラヴィさんに大切な物を教えていたただ来ましたから」

村は全体的に規模が拡大した。その際に私達がジャガイモを入手したことを話すと、

8B達の畑の拡大が決定された。

「よし、みんな遊ぶぞー!!」

11Bの掛け声でみんな一斉に広場に集まって行った。

「はあ、全くアイツは」

「いいじゃない。後は小麦用の機械を運び込むだけね。悪いんだけど8B達付いてきて

くれない?」

「わかった。さつきと終わらせよう。16D、11Bを見ておいてくれ」

「任せてください」

「ここに来るのも久しぶりだな」

「前はドタバタでしたからね」

私と8B達は拠点に戻ってきていた。

「みんな運ぶ前に少し待ってて」

私はキッチンに行き、蒸かしたジャガイモと肉を包つつんで3人に1個ずつ渡す。

「どうしたんだ?」

「なに、食べたくないの?」

「頂きます!!」

みんな一斉に包みをはがして食べ始める。

「前に美味しいご飯を食べさせてあげるとか言ってから間が空いちやつたし、村の件もあつてみんな頑張ってるし、これ位はいいでしょ?あ、みんなには内緒ね」

3人は口に頬張りながら親指を立ててくれた。

「それじゃあ、食べながら付いてきて」

屋上に上がる。そこでへりに積んである機械とジャガイモをさす。

「それじゃあ、食べ終わったらこれ運びましょうか？」

5分後

「ごちそうさまでした」

「やっぱアンタの飯が一番うまい」

本当、アンドロイドは美味しそうにご飯食べてくれるわよね。

「ほら、行くぞ！」

8Bの合図で8Bと22Bが機械を持ち上げる。64Bはジャガイモの入った麻袋を持っている。

「2人共大丈夫？辛くなったら変わるわよ」

「そうですよ。私も変わりますから」

「64B、お前は冗談で言ってるだろ」

「あ、バレました？」

「もう少しくまくなえよ」

3人共なかないわねえ。

デボル・ポボル side

私達は今、キャンプでバンカーの皆さんの到着を待っているところです。どうやら少し遅れているようで私達は特にやることもないので談笑しているところです。

「ねえ、ポポル。アレ」

デボルの視線の先を見ると片手を押しさえ、足を引きづっている9Sが居た。

「どうしたの？その傷」

「戦闘により負傷。NFCSが機能していない」

「よくそんな状態でここまで来れたな」

本当によくそれでここまで戻ってこれましたね。半分呆れの状態のデボルが修理をする。

「さあ、修理は終わったぞ」

「ありがとう」

9Sは再びキャンプを離れようとする。

「おい！9S。あともう少してバンカーの生き残りがこつちに・・・」

「要請、推測による会話の中断」

「ハイハイ」

デボルもうんざりしている。でも、9Sもポッドも自分の目で見れば納得せざるを得ないはず。だから私は9Sに声をかける。

「ねえ、9S約束して。1人で死のうとしないで」

「・・・」

「2Bもそれを望んじやないだろうしな」
「わかってる」

第133話

エージエントside

「2人共村まであともう少しですよー」

「これでやっと私達の苦勞が報われる」

「お疲れ様。本当にお疲れ様。これで、食のレベルがやっと文化的な水準に戻るわ」

「私達には本来食事は必要ないですけどね」

「いや、この味は忘れられん」

嬉しい事言ってくれるじゃないの。

「ん？あれA2さんじゃないです？」

64Bが指さす方向。降下作戦直後からできた謎の建造物。その中にA2らしき人

物が入って行った。

「ごめん、ちよつと先言つてて！」

「おい！ラヴィ！」

私は静止を聞かず走る。A2を一瞬してから見ていない。だから急がないと！見失ったらどうしようもない！

「入り口は……これ……？」

恐らく入り口と思われる場所にたどり着く。案外素直に開くのね。またハッキングしなきゃいけないかと思っただけだ。中に入るがA2の姿は見えない。

「なにこれ……」

内部に入ると、壁、床、天井、すべてが金属の部品で作れていた。進んで行くと金属でできたブロックが棒のように積み重なっている部屋へとたどり着いた。

「これは、機械生命体を作ったのかしら？ それともアンドロイド？ いや、でもなんか私の知らない人類の芸術家がデザインしたとかなのかしら……？」

私は異様な部屋の内装に困惑しつつエレベーターに乗り、次の階に進んだ。

「これどんなセンスの奴が設計したのよ」

内装は下の階とは少し違い、金属のブロックが積み木の様に積み重なった物が数個部屋にあった。これが一体どんな目的で作られたのか一向に理解できそうもない。それに先に行ったはずのA2の姿も見えない。

「はあ、進むしかないか」

エレベーターを呼び乗り込んで次の階へと進んで行く。

「アスレチック……？」

次の階には金属でできた十字のオブジェが中心で回っていた。

「え？これ本当に何の用途で作られたの……？私もはやり敏感ではないけれどこんな意味不明な物見たこと無いんだけど」

この建造物の設計者へのセンスの問いは深まるばかりである。そもそもこの建物何階まであるのかしら？A2も見当たらないし、まあ今の所1本道だからいずれは最上階で追いつけると思うけれど、本当にこれ何階まであるのかしら？エレベーターを呼び次の階へと進む。

「この部屋は今までよりもマシかしらね？」

この階には今までの意味不明なオブジェクトは無い。だが、私からするとこの建物自体が異様なのは変わらない。また、エレベーターを呼び次の階へと進む。一体いつになつたらA2に追いつけるのやら。

9 S s i d e

「モデル210……オペレーターさん……!？」

「ヴうううううあ、ああああああ」

オペレーターさんが叫びともうなり声とも取れる声を上げる。すると、後ろに大量のボールがつかつた物が2段まるでオペレーターさんを守るように出現した。

「そんな……オペレーターモデルが……どうして……」

ボールは激しく回転し円形状に激しい攻撃が放たれる。

「確認：オペレーター210。先の降下作戦時に本人希望によりB型に装備転換。21 Bとして戦線に投入され、4時間後に消息不明の記録」

本人の希望って・・・

回転するボールの中に一際輝くボールを見つけそれをポッドの攻撃で破壊する。その瞬間オペレーターさんを守るようにしていたボールは全てスイッチが切れたかのように地面に落ちる。

「ガアアアアアアッ！」

絶叫を上げる。だが、これでオペレーターさんに直接攻撃できるようになった。攻撃のたびにあげるうめき声に一撃一撃が辛くなる。

「オペレーターさん・・・・・・・・！！」

「場所・・・座標データを・・・転送・・・・・・・・」

微かに記憶が残こっているようだ。

「作戦・・・行動に関係ノ無イ発言・・・・・・・・控えてクダ・・・・・・・・」

これは僕の事・・・・・・・・？

「ハイは・・・・・・・・一回で・・・・・・・・イイデ・・・・・・・・」

「クソツ・・・・・・・・ウウウツ・・・・・・・・」

オペレーターさんっ！210は9Sの攻撃に飛ばされ地面に倒れた。

「クツ……」

つい地面に座り込む。

「ウツ……ウウツ……」

だが、210は立ち上がった。

「ウワア、アアアアアア」

手を広げ9Sに襲い掛かろうとする。9Sはつい顔を覆う。

「グハアツ」

オペレーターさんの胸に背中から刃が突き刺される。後ろにはA2。A2が刃を引き抜くと210は力なく倒れた。そのままA2は無表情で止めを刺そうとする。

「おい！2人共武器を捨てろ!!」

「ラヴィ!?!」

これにはA2も驚きを隠せないようだった。

エージェンツside

「うわツ眩しっ!」

エレベーターに乗っていると突然日の光が舞い込んでくる。扉が開く。

「A2!?!」

丁度そこではA2が金髪のアンドロイドの胸を突き刺しているところだった。そし

て止めまで刺そうしている。刺されたアンドロイドを見るとまだ少しピクピクと動いていた。

「おい！2人共武器を捨てろ!!」

私はライフルを交互に2人に向ける。

「ラヴィイ!!」

A2が驚いたような声を上げつつも刃先はまだ金髪のアンドロイドに向けている。

「聞こえなかった？武器を捨てろ!!」

A2が武器は捨てずともそっぽを向いて歩き始める。私は金髪のアンドロイドに近づきウオッチを装着させ強制的に一時的に活動を停止させる。こうすることで体内のオイルなんかの流出が防げるかもという仮定からの行動である。

「A2ツ!!」

9Sが突然怒りが籠ったような声でA2を呼ぶ。

「優しい人に・・・優しい人になって欲しいと、2Bは言っていたぞ」

やはり2Bは最期にA2に何かを託したのね。

「クツ・・・ウウ・・・オマエが・・・オマエが2Bの言葉を語るなツ!!」

その瞬間9SがA2に襲い掛かる。

「2人共武器を降ろせ!!」

再びライフルを2人に向けた。

「ア、アアアッアアア」

突如として建物が揺れ始める。そしてその瞬間9Sと私、A2に刺されたアンドロイ

ド私達3人は下に落下した。

第134話

エージエント side

「グハツ!!」

足場が崩れそのまま下の階に落下する。運よく下の階の足場に落ちたため落下のダメージは少ないがお腹の辺りに金髪のアンドロイドが降って来た。私は彼女をどかす。

「ハア、ハア、ハア」

体を起こすが幸いにも骨は折れていなさそうだった。9Sは？周囲を見渡すが見渡らない。もしかして私よりも下の階？

「おーい！9S！おーい！」

私の声は下の階へと響き渡るだけ。

「ラヴィー！大丈夫かー！」

A2の叫び声が聞こえる。

「大丈夫よA2！生きてるわー！」

A2からの返事がない。それに金属どうしがぶつかり合う音がする。とりあえず、上に戻らないと。そう思い、エレベータを見ると入り口が一部瓦礫で埋まってしまってい

た。

「クソっ」

私はアンドロイドを担ぎ入り口近くの手すりに寄りかからせる。そして、人力で瓦礫を一つ一つ下の階へと落としていく。

A 2 s i d e

「ア、アアアッアアア」

突然襲い掛かってくる9Sの刃を受け止める。9型機とは思えないほどの力だ。だが、力では上だ。

「ア、アアッ」

その瞬間9S、ラヴィ、210が居た床が抜け落ち3人が下へと落ちていく。その直後ドサツという音が聞こえた。

「ラヴィー！大丈夫かー！」

私が穴を覗き込んだ時だった

「ッ!!」

何処からともなく機械生命体が降って来た。そいつは腕に機械生命体の顔が何個もつながった奇妙な見た目をしていた。

「さっきの子は?」

「報告：ヨルハ機体9Sは現在も生存」

「ニイちゃん！」

「にい・・・ちゃん！」

「にいチャ・・・ん！」

攻撃するたびに異なる声で兄ちゃんと誰かが言う。もしかしてこの腕についてるやつが喋ってるのか!?

「兄・・・ちゃん！」

「フンツ！」

重めの一撃を与えた時突然腕が壊れ、顔が散らばる。そして、本体の方は胴体のみとなる。

「ハアツ!!」

何度も本体を切りつける。そして、何度切りつけたか忘れた頃。

「にいちゃん！にいちゃん！にいちゃん！」

そいつは倒れた。

「にいちゃん！にいちゃん！にいちゃん！」

だが、どこからか頭にバケツを乗せた機械生命体が現れる。

「にいちゃん！にいちゃん！にいちゃん！」

そして、倒れた本体を囲み心配そうにするヤツ、私に向かって頭を下げ続けるヤツ。どれも「にいちゃん！」と倒れたそいつを慕っているようだった。

「ハアーツ」

私は大きく息を吸い込むと薙ぎ払いすべてを鉄屑に変えた。

「ハア、ハア、ハア」

息を整えつつエレベーターに乗り込む。下の階へと降りる。

「A2！良かった！」

エージェント side

「A2！良かった！」

「ああ、ラヴィか」

エレベーターでA2が降りて来た。エレベーター自体は動いているのね。

「A2大丈夫？息も絶え絶えだけど・・・」

「ああ。問題ない」

私は瓦礫をどかし続ける。

「9Sは？」

「生きてるようだ」

「そう。本当に良かった」

「A2。少ししたらこれ片づけるの手伝ってくれない？その後でお茶でもいかが？私A2に話したいことも聞きたいこともあるし」

すると、A2の動きが止まる。そして、突然エレベーターの方へと歩き始めた。

「ちよつとA2？」

「すまんラヴィ。もう、私の事は忘れろ」

「どういう事よ。ちよつと！A2！A2！」

そのままA2はエレベーターに乗って行ってしまった。

「クソッ！」

結局一人で片づけないといけないといけないの？

数分後、

「畜生。やつと終わった」

これで、エレベーターに乗れる。

「遅れてごめんなさいね」

手すりにもたれ掛らせたアンドロイドを担いでエレベーターに乗る。下の階に着くとそこは私が上から落とした瓦礫が粉々になっていた。それ以外は行きと変わりなく外に出ることが出来た。アンドロイドにつけているウオッチで時間を見ると夕方に近くなっていた。だからだろうか、心地よい風が吹いている。

「ラヴィさん?」

少し歩いていると見慣れた3人が見えた。

「ちよつとラヴィどうしたのよ? 22BからA2を追いかけて行つたつて聞いた時は心配したんだからね! つて、なんでヨルハを背負つてるの?」

「ヨルハ? この子ヨルハなの? え? でもヨルハの制服は11Bや16Dが着てる・・・」
「そうなんですけど、今ラヴィさんが背負つてる方が着てるのはバトルスーツと呼ばれるものです。私も降下作戦の時着てたんですけど、逃げるときに脱いじやいました」
なるほどね。

「で、彼女はどうしたんだい? 負傷しているなら私が見よう」

私は彼女をゆつくりと地面へと降ろす。すぐにジャツカスが負傷の状態を確認する。私も彼女につけていたウオツチを外し、腕に装着する。すると11B、16Dの様子がどこか変だった。小声で何かを話している。

「どうしたの?」

「ねえラヴィ、コイツ一体何がどうなつて拾つてきたの?」

「話せば長いのだけれど・・・知り合い?」

「いや、知り合いと言いますか、先輩は知り合いというより・・・まあ、とにかく彼女はオペレーター210。バンカーで指示の伝達なんかの調整をする役割を担うオペレー

ター型です。でも、変ですね。これはどう見たってB型の兵装ですし……」

え？11Bと16Dと知り合いなの？これは治療した後面倒になるわね。私達の話聞いていたジャツカスが手を止める。

「それじゃあ、いつその事このまま殺すか？」

「イヤ、うーん……コイツの事嫌いだけどそれはなあ……」

「ジャツカス、治療してあげて。損傷を修理して、再起動したら考えましょう」

「なら、拠点に戻ろう」

「でも、8B達やパスカルに……」

今になって、制止をふりきった事を思い出してしまった。あー、みんな怒ってるだろうなー。

「大丈夫よ。ラヴィと別れた後3人が私達に状況を伝えてくれたの。それで早くラヴィの所に行ってやれって。で、遅くなるようだったらそのまま帰って構わないって」

「申し訳ないわ」

「そう思うなら帰ったら連絡したらいいかがです？」

16D ナイス アイディア！あ、でもパスカルとか怒ってるかしら？

「パスカルさんなら「あまり子供たちの教育に良くないので、次から気をつけてください」といってましたし、8Bさん達も別に怒ってませんでしたよ」

「どうやら顔に出てたらしい。」

「なら、ここに居る意味も無いだろう？ さっさと帰ろう」

「そう言うのとジャツカスが210を背負う。」

「おっと・・・結構このバトルスーツは重いな。良くここまで背負えたな」

「案外何とかなるものよ。別に死んでる訳じゃないし、関節も動く。ジャツカスが歩き出す。それに合わせて私達も歩きはじめ。」

「にしても、なんでこいつB型に転属なんかしてるんだ？」

「本人の希望なのか。それともバンカー放棄の際に司令官が決定したのか。わかりません」

「ごめんなさい。話の腰を折るようで悪いんだけど、その転属とかつてのは何なの？」「私も含めレジスタンスはヨルハの事に関しては殆ど知らない。私からも頼むよ」

第135話

エージエントside

「えーと、まずB型とかD型とかの話から。これは各々に与えられた役割というか、モデルを表すものです。例えば、BはBattler、DはDefenderの頭文字です。それで、今ラヴィさんやジャツカスさんが私達を呼ぶときに使う〇〇Bは略称です。私の場合はヨルハ16号Defender型となるわけです。このようにヨルハ〇号×型という命名規則で命名されて」

この辺りは一応聞いたことはある。でも、そうなるとなんでA2はA2なの？

「ですが例外がA2さんです。恐らくプロトタイプはヨルハ×型〇号つという命名規則だったのではないかと思います」

成程だからA2はA2なのね。

「なるほど。ここまでは分かったけど転属がどうのこうのつてのは・・・」

「あ、すいません。そっちが本命でしたね。大抵の人は生まれた時からのモデルのままなんですけど私や210をさんの様に本人の希望で転属が可能です。210さんに関してバンカー放棄時に司令官によって決定されたのかはわかりません」

「いや、ラヴィ待つて。不味いことになったわよ。コイツ恐らく本人の希望でB型に転属してる」

「先輩、なにか心辺りが？」

「16D、前に私とアンタでバンカーに行ったときコイツいた？」

「あー！」

「居なかつたわよね。もし、いたなら私に対して何かしら言うてくるはず。それにクソ真面目なコイツが作戦中に司令室を退室なんてしない！」

「つまり彼女はB型に転属してから降下作戦に参加したってことだね」

「そうです」

「これは・・・確かに不味いことになった。私はてつきりキャンプに到着したヨルハだと思つてたけど、ウイルス汚染されたなんて。だからA2はあの時・・・fuck!この現実が嫌になる。」

「だが、どうして彼女は転属なんてしたんだろうか」

「知らないわよ。コイツの考えなんて私にわかる訳ないでしょ！」

「先輩、落ち着きましようよ。つてラヴィさんどうしました」

「クソツたれな事になったわよ。あー、これに関しては拠点に戻つてから話すわ。それより、16Dってあなた転属したの？」

「はい。だからみなさんは16Dっていいですけど、本当は16Bですよ」
「なぜ転属を？」

あ、ジャツカスその質問は・・・

「どこかのヨルハが自分の死を偽装して脱走を試みて、結果的に優しい人に拾われたけど、偽装した死因を信じた純粹な後輩が仇を討とうと決意した結果ですよ」

ジャツカスはニヤニヤしながら11Bを見ている。

「その節は、大変申し訳ありませんでした」

「良いんですよ！その代わり2度と離れませんから」

「f o o！お熱いねえ」

そんな会話をしているうちに拠点へと着いた。

「ちよつと待っていてくれ、器具を取ってくる」

そう言うのとジャツカスが2Bが寝かせてある部屋に入って行った。

「それで良かったら2人は210とどんな関係だったの？」

「いやー私は普通にただオペレーターさんって感じでしたよ。問題なのは先輩の方ですて・・・」

「だって、コイツ真面目過ぎるんだもん！」

もん！って11B一体何があったのよ。

「はいはい少し退いてくれ」

ジャックカスが戻って来た。

「どの位かかりそう？」

「さつき粗方終わったんだが細かい所がな。あまり時間はかからないさ。それより、私も11Bと210の関係が気になるよ」

「聞いてたの」

3人の視線に負けたのか渋々話し出した。

「私がバンカーに居た時に公衆でイチヤ着くの辞めようって16Dに提案したって話覚えてる？その理由がコイツなのよね。いや、別にコイツが何か言ってきたって訳では無いんだけど・・・私の中では代表になってるのよね」

「それに、元から仲悪かったですよね」

「任務中に冗談言ったらすぐさま無線かけてきて注意されるのよ！それに、少し間違っただぐらいで数分小言言われるわで最悪よ」

「先輩脱走した時の作戦担当オペレーターが違うヤツだって言って喜んでましたよね」

「コイツじゃないからあの作戦で脱走を執行しようと思っただくらいだしね。まあ、それがあのザマなんだけども・・・」

11Bは天井を見る。すると、ジャックカスが修理が終わったのか工具を片付けだし

た。

「終わったぞ。だが大丈夫かい？再起動するんだろう？」

「何とかするわよ。ああ、憂鬱になって来た」

私は2110にウオッチを接続する。まずは、ウイルス除去をさせる。

「完了が明日になるわね。その後、ブラックボックスに細工してから再起動かしらね」

「それでいいだろう。よし！ラヴィ！ご飯！」

第136話

エーリエントside

「ジャッカス、悪いけど先にパスカルに連絡させて」

CALL

「こちらラヴィ、パスカル今大丈夫？」

「ハイ。大丈夫ですよ」

「まずはごめんなさい。連絡もなく勝手に動いちゃったし、それに小麦を育てたいと言
い始めたのも私なのに放り出すようにしてしまつてごめんなさい」

「いえいえ。責めたりしませんよ。それに私もA2さんにもう一度お会いしたいです
ね。この前の件のお礼が出来ていませんから。ですが、ラヴィさんあまり子供たちの教
育によくないので気を付けてくださいね」

「はい。すいません」

「8Bさん達には伝えておきますよ」

「お願いします」

「みんなーご飯よー」

「待つてました!!」

ジャツカスが物凄い速さで出て来た。

「ジャツカスあんたうるさいわよ」

2人も出て来た。

「頂きます」

みんな一斉に食べ始める。私も肉を噛みしめる。体に血が巡る感覚が分かる。味を噛みしめていると

「で、ラヴィあの建物の中で何があったんだい?」

「あ、食べながら聞いてもらって大丈夫よ。まずは・・・」

私は8B達を放り出して建物中に入った所からすべてを順序だててすべて話した。

「つまり、ラヴィとしては知らなかったとは言え結果的にA2との溝を深めてしまった」と

「悲しいけどそういう事になるわね。はあ、クソツ」

「アイツの不器用な所も事態の悪化に拍車をかけてしまっているんでしようね」

「それに、今キャンプにはバンカーの連中がいるはずだ。手を打たないと今後もつと事態は悪くなるかもね」

みんな一様にため息をつく。

「なら、明日になったら私の無線機でアネモネにバンカー連中の事も含めて聞けばいい」
「そうね」

「なら今日はもう早い所寝ましょう。先輩もジャツカスさんも作業に子供たちと遊んだりと疲れてますから」

「そうするでしょう」

その後、私達は横になった。すぐに睡魔が襲ってきて眠ってしまった。

デボル・ポポル side

ラヴィゴ一行が村の復興作業で汗を流している頃・・・

「9S本当に大丈夫かしら？心配だわ」

治療が終わるとすぐに9Sさんはキャンプを後にしてしまった。私達にはどうしようも無いとは言え心配になる。

「ポポルそろそろ約束の時間よ」

時間を確認するとバンカーのみなさんの到着予定時間だ。

「来るぞ」

誰かがそう言うのと転送装置の扉が開かれる。

「うわっ眩し！映像で見るよりも何倍も眩しい・・・」

なんとも珍しい発言である。キャンプ中のレジスタンスがこの発言に困惑している

と、ぞくぞくと転送装置からヨルハの人が出て来る。そして最後に他とは違う服装の人が出て来る。

「私で最後だ」

そう言うヨルハの誰かが「整列！」と号令をかける。バンカーのみなさんが整列する。そのぴりっつとしている空気感がキャンプ中に伝わる。

「久しぶりだな。アネモネ」

アネモネさんが奥から出て来た。

「そうだな。まずは我々の救援と場所の提供感謝する」

「礼には及ぼん。何私とお前の仲だ。この後すぐに情報を共有したい。構わないか？」

「ああ。なら、こちらも作業にかかろう。人類に栄光あれ！」

「人類に栄光あれ！」

ヨルハ式の敬礼をした後、みんな一斉に動き出した。

「あれラヴィが見たらどう思うかしらね？」

確かに。

「ほら、手伝うわよ」

デボルが動き出す。そのまま一日私達姉妹はヨルハ部隊のキャンプへの機能移設作業を手伝ったのだった。

エージエントside

「よし。ウイルスの除去は終わってる」

朝、それぞれ身支度を終わらせ昨日210につけたウォッチで作業の終了を確認する。

「どう？終わってる？」

「あら11B。終わったわよ。これからブラックボックス信号の周波数を変更するの」

「これでコイツも晴れて脱走兵ね」

「楽しそうね」

「そうね。真面目なコイツが脱走兵になったって知ったらどんな顔するか・・・」

うつわ凄い悪い顔してる。

「先輩。それは流石に興味が悪すぎませんか？」

16Dもドン引きである。

第137話

エージエントside

「先輩。それは流石に興味が悪すぎませんか？」

16Dもドン引きである。

「ラヴィさんの作業見てもいいですか？」

「いろんな人に行ってるけど見ても何も面白い物ないわよ」

「いや、ブラックボックスをに細工をするってかなりぶっ飛んでるからね!? 私もラヴィにやってもらった時怖かったんだよ!!」

なるほど。だから8B達も怖がってたのね。納得だわ。

「終わったわよ」

ブラックボックスの信号の周波数の変更を終えた。

「それじゃ、再起動するわよ。ジャッカスを呼んできて」

「もう居るよ」

「ラヴィ! お呼びかな!」

「こういう時のジャッカスの勘は鋭いわね。」

「210を再起動するわよ。一応気を付けて」

私はウオッチを操作して210のブラックボックスを起動する。

「さて、これが吉と出るか・・・」

210 side

現在、私たちの部隊はバンカーから降下後廃墟都市にて戦闘中です。しかし、いささか機械生命体の数が多く劣勢に立たされた居ます。

「おい！バンカーと連絡が取れないってどういう事だ!!」

「不明です。何か通信装置に不具合が・・・」

バンカーに増援を要請しましたが応答が無いのです。

「おい！新入り！喋ってないで手を動かせ!!」

そう。私はオペレーターとしては長いですが、B型としては新入りです。

「ダメだ！どの部隊も応答しない！」

「恐らくジャミングを・・・」

「いい加減にしろよ！新入り！手を動かせ！何度も言わせるな!!」

これは何も言わないのが得策ですね。

「ハアツ!!」

最後の一体を隊長が撃破しました。

「あれで最後でしよう」

私の一言でみんな一息つく。

「いやーヤバかったな。これはアイツらに自慢できるぞ」

「そこ、作戦に関係ない発言は控えてください」

「ああん？」

1人が私に詰めよってくる。

「オペレーター時代が長いからって調子乗るなよ。新入り。それを言って良いのは隊長

だけだ。お前じゃない」

「ちよつとやめなよ！」

もう片方の方が宥めてくれます。

「全員聞け。現在我々はバンカーへの通信も周囲の部隊への通信もできない。ジャミン

グを受けている可能性がある。とりあえず、予定どおり他の隊の援護にいくぞ」

これより他の隊の所へと向かいます。

移動

「おい・・・新入り、作戦だどこの辺りだよな。隊がいるの・・・」

「そうです」

しかし、何処を見渡しても誰もいません。近くで戦闘している様子もありません。そ

れどころか殆ど少し前まで激しく聞こえていた戦闘音が一切きこえません。

「どうなってる。他の隊は何処に行った？」

私も一緒になって周囲を見渡します。1人が周りより一階程度高いビルのでっぺんに居ます。

「おい！みんな来てくれ！」

彼のいる屋上に向かいます。

「そんな……」

私達の視線の先には合流する予定の部隊の無残な姿だった。

「クソッ！どうすればいい」

「撤退するのがいいと思う……」

「無断での撤退は許可されません」

「じゃあ、どうすれば司令官様は満足だ！お前ならわかるんだろ！新入り」

「このまま作戦どおり……」

すると隊のみなさんから大きなため息がでた。私は何か変な事を言っているのでしょうか？

「この際はずきり言ってやる。新入り。お前のB型への転属は間違いだな」

この発言は見逃すことが出来ません。私は彼と同じように戦うために転属を希望し

たのです。

「いい加減にしてください。一体、私のなにがあなたはそこまで気に入らないのですか？」

「そうだな。お前のその戦ったことも無いのに知った口を利くところ。幾ら司令室で戦闘を見ていたとしても実際やってみると大分違うだろ？」

・・・反論できません。早い段階で薄々分かっていました。私は自分が担当したどのヨルハよりも戦闘が得意ではない。それでも、少ない時間で努力したつもりでした。それでも、それでも、実際の戦場は辛く厳しい場所でした。

「どうした？早くいつもの様に言い返せよ」

隊のみなさんは私達の事を見ているだけ。

「作戦に関係のない発言は控えてください」

結局私の口から出た言葉はいつもの一言。

「ふん。そうかよ！」

彼女に押され、私の上半身は屋上の手すりから出てもう少し押されれば落ちてしまうでしょう。

「いい加減にしろ！お前はロボットか？少しは考えて会話をしろ！新入り！」

「ちよっと危ないって!!」

「2人共いい加減にしろ！」

「フン」

私は解放されました。

「わかった。新入りの言う通り前進しよう。進めば他の隊に出会えるかもしれない。何処かと合流したらそいつに司令部と通信して貰おう。それでいいな！」

隊長はそうまくし立てた。私達は作戦どおり前進しました。

「警戒を怠るな！何が出て来るかわからんぞ！」

周囲を警戒しつつ市街地を進んで行きます。

「!!」

突然、隊長が動きを止めました。

「囲まれてる」

全員が武器を構える。

「新入り！生き残れよ」

第138話

210side

「新入り！生き残れよ」

私は大きく頷きます。その瞬間機械生命体の攻撃が始まりました。先ほどの戦闘で疲れていた私たちには機械生命体の攻撃の一撃一撃がとても重い。それにとっても数が多くすぐに私たちは限界が来てしまいました。

「グッ！」

一人が倒れると徐々に崩れていきます。

「おい！新入り！残りは私とお前だけだ」

ついに私たち2人だけになってしまいました。機械生命体の数は増えるばかりです。

「これは生きて帰れるかわからないな」

「オラア!!」

彼女も私も機械生命体を何体殺したのかわからなくなっていました。もう疲労感も何も感じません。ですが機械生命体の数は減るところか増えているように感じます。

「新入り！」

突然彼女は私を突き飛ばし彼女は私の上に倒れこみました。背中には大きな傷が出
来ていました。

「だい．．丈夫か．．？」

「私よりあなたの方が．．」

私はこれ以上声が出せませんでした。大量の機械生命体と目が合ってしまった。

「新入り。逃げるんだ」

「できません！」

私は彼女を引きずろうとする。

「グハッ！」

背中に痛みが走りました。私も倒れてしまいました。

「逃げろと言っただろう．．」

「見捨てるなんて出来ません．．」

一体の機械生命体が彼女に刃を突き立てます。私も目を閉じます。申し訳ありませ
ん。私が前進するべきなどと知ったような口をきいたからみなさんは．．

「最後にもう一度顔を見たかった」

彼の柔らかい顔が浮かんだ時私の体に刃が突き立てられました。

「？」

私は突然の再起動に戸惑いました。

「モデル210・・・オペレーターさん・・・!?」

9・・・S?最後に会いたいと願った彼が目の前に居ます。ですが、彼の目には恐怖が見えました。

「ヴうううううあ、あああああ」

私の口から恐ろしい叫び声が発せられました。口を押さえようと思いますが、体は動きません。一瞬ですが視界が赤くなりました。嫌な予感がしました。突如私の周りに大量のボールのような物が現れました。

「9S!私は汚染されています!」

そう叫んでも口から言葉は発せられません。ボールからは大量の攻撃が彼に離れま

す。

「9S!容赦はいりません!私を殺さない!!」

私の体はウイルスに汚染されています。何故私の意識が存在しているかはわかりません。意識はありますがハッキングして自らのボディを止めることも出来ません。ただ彼に危害を加えようとする私をみるだけです。

「オペレーターさん・・・!」

「場所・・・座標データを・・・転送・・・」

乗っ取られたボディから言葉が発せられます。これは……私が彼に対して言った言葉？

「作戦……行動に関係ノ無イ発言……控えてクダ……」

「クソツ……ウウウツ……」

9S！これは私ではありません！ためらう必要はありません！殺しなさい！！

「ハイは……一回で……イイデ……」

黙れ!!それはお前の言葉じゃない!

「クソツ……ウウウツ……」

攻撃で飛ばされ私は地面に倒れました。

「クツ……」

9Sも座り込んでしまいます。しかし、私のボディは未だ活動可能です。

「9S！早く！私の体はまだ動きます！早く止めを！」

「ウワア、アアアアアア」

「誰か！早く！私を殺しなさい!!」

もう9Sを傷つけたくないのです。だから！だから！私を殺せ!!

「グハアツ」

直後私の背中から胸に刃が貫きます。刺したのは9Sではありません。でも、誰でも

いい。彼を傷つける私を殺してくれるなら。貫いた刃が抜かれます。私は倒れこみ刺してくれた相手の顔を見ることができました。

「2号あなたでしたか・・・」

ヨルハAttacker型2号。通称A2。脱走兵のあなたに感謝することになるとは・・・ですが、あなたのおかげで私はもう彼を傷つけることは出来ません。だって、少しずつ視界が暗くなってきたからです。

「おい！2人共武器を捨てろ!!」

「ラヴィ!？」

どうやらレジスタンスの方が来たようですね。

「聞こえなかった？武器を捨てろ!!」

レジスタンスの方違うんです。彼女は私の事を守ろうとして・・・しかし、話すことが出来ない。腕に何かされたような感触がした後私の意識は途絶えました。

「!!」

またこの感覚です。まだ、私は何かされるのでしょうか・・・

「ひさしぶりね。私の顔覚えてる？210?」

第139話

EーJエンツト side

「ひさしぶりね。私の顔覚えてる？210？」

「11B……？なるほどここはあの世ですか。アンドロイドもあの世に行けるのですね」
「残念ながら生きてるわよ。私もアンタも」

偶に11Bは死んだと思われていることを忘れるのよね。

「そうですか。あの……私は死んだのではないのですか？」

「それは私が説明した方がいいわよね？」

私は座り込んでいる210の前で屈み同じ目線になる。

「あなたは？」

「初めまして。210。お休みのところ叩き起こすような事してごめなさいね。私の名前はデリア・ミレッド・ハヴィランド。彼女たちからはラヴィと呼ばれてるわ。私がA2に刺されているあなたを運んでそこにいるジャツカスが治療したの」

私がジャツカスを指さすとジャツカスはエツヘンと胸を張った。うーんこれは頼もしい。

「本当、ラヴィに感謝しなさいよ。私だったらアンタの事助けなかったでしょうに」
「ちよつと先輩!!」

「16B いいんです。それよりも、9Sはどうなりましたか?」

「どうやら生きてはいるみたい。残念ながら行方は分からないけれど」

私は210にお湯を渡す。

「・・・?」

「どうぞ。ただのお湯だけけれど」

210は何故お湯を飲む必要があるのか分からない。といった感じでした。

「飲むと落ち着きますよ」

察した16Dが補足を入れてくれた。

「ふう。ありがとうございます。それで、何故11Bあなたは生きていますか?」

6B

彼女を拘束しなさい」

どうやら落ち着きを取り戻したようだけど、明らか口調変わってない?これは、11

B聞いてたけどかなり真面目な印象を受けるわね。

「残念!私もアンタも今は仲良く脱走兵だ!」

「馬鹿を言わないでください。さあ、早く16B」

私は210以外に目配する。ジャツカスは苦笑い、16Dは真顔、11Bは大きなため息をついた。恐らくこれは何を言っても通じないわよね。私はM45A1を抜いた。

「16B?聞いていますか!!」

私は210に銃口を突きつける。

「まあまあ、落ち着いて。ね?これから、あなたに何をしたのかを含めて話すから」

私は混乱している210を落ち着かせ、私の事、11Bの事、バンカーの事、あの後何をしたのか。210現状を話してあげた。途中、ありえません。と声を荒げたことがあったがジャツカスが落ち着かせていた。

「つ、つまりラヴィさん、あなたは人類であると・・・?」

「ええ。心音でも聞いてみる?」

そう言うくと210が私の心臓の音を聞く。

「少々納得ができない部分がありますが了解しました」

「そう。良かった。じゃあ次はそちらの番よ。あの塔で何があったの?」

210は少しの思考の後話始めた。

「これがあの塔で私が記憶している全てです。どうかしましたか?」

私は頭を抱えた。思った以上にマズイ事態になっていた。

「不味いな。ラヴィは9Sの仇うちを妨害したことになる。今後はラヴィの話すら聞か

ないぞ」

「やっちまった」

「それに私の何となくな勤ですが、9Sは2Bの仇を討つためだったら何だつてしますよ。あくまで勤ですが」

私は16Dと始めて会った時の事を思い出した。

「いやー、それ以上行くんじゃない？それこそ刺し違えてでもA2を殺すでしょうね」
そんなことになったら意味が無い。

「どうする？アネモネにこの事を頼んでもヨルハ司令官に知られたら意味が無いぜ」

「あのクソ司令の事よ。私達が先に捕まるわ」

「その発言は見逃せませんよ11B？」

「210さん。前線勤務のヨルハの認識なんて私も含めて全員変わりませんよ」

何処に行つても上に居る人間が恨まれるのは変わらないのね。

「それじゃ210今後あなたはどうしたいの？私達の身に危険が及ぶ以外なら何をしても構わないわよ」

「なら、」

決断が速いわね。

「なら、なら一緒に戦わせてください！」

なるほど覚悟は決まっているわけね。

「わかっ……」

「ちよつと待つて」

11Bから止められる。

「私から一つだけ良い？ アンタそれなりに戦闘できるんでしょね。私は別に戦いたいって事には反対しない。でも、最近まで後方にいたアンタが戦えると思わないのよね」

210の表情が変わる。どうやら痛い所を突かれたらしい。そこに16Dが追加する。

「私もこの作戦に参加したので分かりますけど、機械生命体が弱体化してる。そういう見立てで実施された作戦ですからね」

「つまり、初陣としては丁度いいわけかい？」

「そうです」

もうやめてあげて。

「で、ですが、このまま何もしないなんて事できません！」

しかし、悠長に210訓練している暇などない。うくん何かいい手は？ ここで私は一つの提案をすることにした。

「ねえ、210? 銃に興味はない？」

第140話

エージエントside

「銃・・・ですか」

「そう。銃なら操作を一式覚えてしまえば一応使えるし、普段から11Bと16Dと一緒に行動すればまず問題ないわよ」

「ちよつとラヴィー！私達がコイツの面倒みるの!？」

「そうですね。私は以前あなたにキツく注意したりしてしまいましたし、そうですね。私の事嫌いですね。恨んでますよね」

210彼女かなりの名演技ね。

「おい、幾ら嫌いでも泣かせる事ないだろう」

「先輩！」

「え!?!これ私が悪い訳!?!」

11Bが私を見るも私の笑顔で察したらしい。

「畜生！見方がいねえ！」

「元氣いいわね、」

「わかったわよ」

よし、11Bの了承も得られたわね。私は210を手招きして下の射撃レンジへと案内した。

「それじゃこれから一通り教えるわよ」

こうして私は210に技術を教えていった。そこでわかった。彼女ポボルと同じでかなり容量がいい。教えたことはすぐに覚えられるし、リロードなどの操作は数回行っただけで覚えてしまった。そこからは実際に射撃とリロードを幾度と練習した。

「よし、こんな物かしらね」

「ありがとうございます」

「これであなたも無力ではないわ。でも、これはあくまでも訓練。実戦は今やつと事とは状況も何もかも異なる。あなたならよくわかるわね」

「はい」

「そんな状況でも訓練を思い出して行動できればあなたが生き残れる確率は上がる。2人との連携は難しいかもしれないけど、あなたなら大丈夫。自信を持って」

私は210の背中を強めに叩く。しかし、アンドロイドの装甲にはダメージは無いし、かえって私の手の方が痛くなった。叩くんじゃなかったわ。

「結構長い時間指導していたようだね。ほらお2人さん」

ジャツカスが水を渡してきた。はー生き返る。ジャツカスに言われて時計をみればかなりの時間が経っていた。そりや喉もからからになるわね。自分の熱中度合いに驚いていると

「どうしたんだい210。飲まないのかい？」

「我々アンドロイドは別に水を飲む必要はありませんよ？それを当然のように差し出されても・・・」

この流れもう幾度となく見て来たわね。それにジャツカスあなた、冗談抜きで素で渡してきたでしょ。私が^^この顔でみんなを見ると全員顔を伏せる。

「アンタ貰ったものに文句言わずに飲みなさいよww」

3人の様子に困惑しつつ210は水を飲み干す。

「おいしいです」

そうよかったわ。

「うっわあラヴィの笑顔が可愛い」

「また1人犠牲者が・・・」

「電子ドラックよりもドラックしてる気がするよ」

私はそんなみんなを他所にご飯の準備をする。今日は特に動いてないし、お肉とジャガイモでジャーマンポテト風な奴でも作りましょうか。

「どうしてラヴィさんはあんなにノリノリで作業しているのでしょうか？」

「これは何も言わない方が幸せですよね」

「多分、行っても私の時の様に耐えられるのは一瞬だろう」

「そっちの方が面白いわね。よし、210よく聞きなさい。ラヴィは今料理を作ってるの。私達の料理のイメージはレジスタンスのもの好きが焼すぎて黒焦げになったりしてる物だけど、ラヴィは人類。そう本物のおいしい奴が出て来るの。因みに私達はすでにこれの虜。さあ、アンタはどうなるかしらね」

11B だったら私の料理はドラックかなにか・・・

「ですが、先ほどの通りアンドロイドに食事は必要ありません。耐えるも何もありません」

「あの時のデボルも今の私と同じことを思ったに違いない」

みんなの話に突っ込んでいるうちに準備ができた。

「それじゃ、いただきます」

「いただきます」

210以外が声を揃える。そして、一斉に食べ始める。私も食べる。うん、味付けも問題ないかな？

「くっ！」

なぜか唾を飲みこむ音がした。発生源を見ると210だった。

「人間の食べものというのは興味があります。あ、あくまで研究のためですからね!!」

「別に誰も責めたりしませんよ」

「案外陥落まで早かったな」

210は一口食べると目を見開いて他の3人と同じ速さで食べた。

「味の感想は？」

「出た、降伏勧告」

「と、とてもおいしいです」

その後、食後に11B以外がコーヒーを飲んでいると210も興味を持ったので16

Dが試しに飲ませた。

「私は苦手です」

「よかったわね。11B。なかまが増えたわよ」

「ラヴィ」

そんなくだらない会話して就寝となった。

第14話

エージエントside

CALL

「おはようございます。64Bです。今大丈夫ですか？」

「ええ。大丈夫よ」

「丁度身支度を終えた私達に珍しく64Bから通信が入った。

「大丈夫よ。それより珍しいわね。64Bからなんて」

「隊長と22Bはちよつと作業してます。それで要件なんですけど、以前運んだ小麦の生成が終わりました」

「ああ、その件は本当にごめんなさいね」

「いいいいえ。それとどちらかと言うところちが本件なんですけど、パスカルさんのモロトフ？カクテルの製作が進んでいないそうなんです」

「材料が足りないとか？」

「いえ、子供たちのいるところでは製作しづらいとかで以前のように一度そちらの拠点で制作できないかと」

「という事は全員で行ってあげた方が子供達とも遊んで上げれるし、いずれ210を連れていかないとと思ってたし丁度いいわ。」

「わかったわ。それじゃ少ししたら出発するとパスカルに伝えておいて」

「了解しました」

「それじゃあまた後でね」

「という訳で全員集合」

みんなを集める。そして、先ほどの通信内容を伝えてこれからパスカルの村に向かう事を伝える。

「その村には8B達がいるのですよね？なら同じ脱走兵して挨拶したいです」

「前回もみくちやにされたし、今回は210くんの傍に就くとするよ」

「ジャツカス、コイツの面倒頼んだわよ」

そう言われると何となく210と8B達の会話が想像できるから不思議である。

「11B？私はただ8B達とあいさつするだけですよ」

「ジャツカスさん私からもよろしくおねがいします」

2人が自分の為に頭を下げているのを210は不思議そうに見ていた。

「それじゃ出発」

パスカルの村へ

「隊長ーラヴィさん達きましたよー」

入り口を抜けた私達を見つけた64Bが8Bを呼びに行った。

「ラヴィさんを信じない訳ではありませんが実際に脱走兵が生きているのは驚きですね」

すると11Bが自信を指さして「私は？」と言わんばかりである。

「ラヴィよく来たな!？」

戻って来た3人が210を見て身構える。

「落ち着いてください。私はもうヨルハではありません」

「どういふことだ」

「それを含めた今から彼女が話すよ。それじゃラヴィはパスカルに用があるんだろう?？」

「そうね。それじゃ頼んだわよ」

ジャツカスが210や8B達を連れて行った。

「それじゃ私達も失礼しますね」

「ええ。行ってらっしゃい」

11B・16Dも子供達の所へと遊びに行った。さて、パスカルの所へ行かないと。

「おやラヴィさん、突然の連絡申し訳ありません」

「いいのよ。それじゃ行きましようか」

「ラヴィ待ってくれ」

奥に行つたジャツカスが戻つて来た。

「あら？ 210は大丈夫なの？」

「あの様子なら大丈夫だろう。それにモロトフ製作だろう。私も手を貸そう」

「ありがとうございます」

それじゃ拠点に戻りましようか。

デボル・ポボル side

「なに！ 9Sが生きているだ!!」

私達は9Sがキャンプに戻つてこないのではないか？と思ひヨルハのオペレーターさんに伝えると、そのオペレーターさんは急いでアネモネさんとヨルハの司令官が談笑しているところに報告に行きました。そしたらアネモネさんから手招きでよばれました。お2人の所へ行くとヨルハの司令官の方からバンカー壊滅の所から話せと言われました。そして最近治療に戻つてきたことも話したらこの反応です。

「なぜ！ 止めなかつたんだ！」

「ポッドが憶測での会話を辞めるようにと言つてみなさんが生きてる事を信じなかつたんです」

「それにラヴィと一緒に見つけて運んだ!? そのラヴィとかいうヤツは11Bも言った! そいつとどんな関係だ!」

「関係も何も知り合いよ」

なんでわざわざ声を張るのよ。目立つじやない。

「知り合いなら連絡先も知ってるだろう。ラヴィと話をさせろ」

私達はアネモネさんを見ます。首を微かに横に振っているので知らないふりをします。

「連絡先は知らないんです」

「どうして」

「あの方はたまにしかキャンプにいらっしやらないので」

「アネモネは知らないのか?」

アネモネさんは首を振るだけです。

「はあ、全く・・・これは人類も滅びるわけだ」

「それとこれとは関係・・・」

「あるぞ。お前たちの同型機のせいで人類は滅りエイリアンの侵攻に対抗できなかつた。なんとか持ちこたえてきたが、ついにはバンカーも失ってしまう始末。これではない機械生命体を駆逐し、地球を奪還できるか分かった物ではない」

私達は何も言えなくなっていました。後半は八つ当たりだったとしても私達とは違うデボルとポポルが原因で人類が滅びたのは事実です。私達姉妹は忘れていました。幾ら人類であるラヴィさんに許されてもアンドロイドからの扱いが変わるわけはありません。所詮私達の勘違いなのです。

「おい・・・ホワイトそれ以上うちの仲間に八つ当たりするな」

「八つ当たりだと？これはアンドロイドとして誰しもが一度は思う事だろう。無論貴様もだ」

アネモネさんは下を向いてしまいます。そうでしょう。私達は黙ってお2人の所から離れました。久しぶりの感覚です。ラヴィさんと接することで忘れていた感覚。

「ねえ、ポポル？」

「なに？」

「罪は一生ついて回るのね」

私達はもう互いを励ますこともできません。

第142話

9 S s i d e

「ボデイユニットチェック完了。メモリーユニットチェック完了。メンテナンスモード終了。ヨルハ部隊9 S 起動。おはようございます。9 S」

何とか体を起こす。冷たい風が吹いているのを感じる。

「僕は……」

「敵大型ユニット内部での戦闘時にユニット構造物が崩落。落下したヨルハ機体9 Sはダメージを受けたため緊急サスペンドモードに移行。墜落地点付近は危険と判断し、現地点まで搬送。現段階ですべてのチェック及び再起動を完了」

「オペレーターさん……」

「遭遇したモデル210は行方不明。しかし、直前ブラックボックス信号停止を確認したため恐らく死亡したと思われる」

「……そう」

あれで……あれで良かったですね。オペレーターさん。

「現状報告」

「塔にアクセスするための認証キーを入手。規定数のアクセス認証キーの入手を確認。塔の調査が可能な状態」

「わかった」

僕は塔へと向かう。

デボル・ポポル side

「おい。2人共来てくれ」

あの後、すぐく疲れた様子のアネモネさんがやって来ました。私達が離れた後何があつたのかは何となくわかります。アネモネさんと一緒にホワイトさんの所へと向かいます。

「先ほどは怒鳴ってしまつてわろかったな」

「いえ・・・」

「2人に9S捜索を頼みたいそうだ」

私の疲れに気を使ったのかアネモネさんが要件を説明してくれる。

「わかりました。用件は以上でしょうか？」

デボルは何も言わない。

「以上だ」

「わかりました。それでは失礼します」

「責任もって頼んだぞ」

「はい……」

実際私もホワイトさんの激励に答えられるほどの気力などありません。

「失礼します」

2人で敬礼して退出する。その後私達は一言も交わすことなくキャンプを後にする。気持ちは一緒だ。一刻も早くこのキャンプから出たいのだ。この空気が嫌いなのだ。キャンプを出てしばらく私はデボルの後ろをただ歩きます。デボルが口を開く気配はありません。

「デボル……どうするの?」

私から話しかけます。

「ああ、9Sは今、塔に入ろうとアクセスキーを集めてる。なら最終的には塔にやってくる。ならそこで待つて来たら説得すればいい」

「説得できると思う?」

「わからない……」

もう、何でもいいや。

エージェントside

「本当、ラヴィの知識の多さが羨ましいよ」

「別にこんな危ない物レシピなんて好きで覚えたんじゃないわよ」

「お手伝い頂きありがとうございます」

私達は談笑しながらモロトフカクテルを製作中です。私が言うのもなんだけど談笑しながらモロトフ作りつて中々ぶっ飛んだことやってるわね。

「これ位で大丈夫です。では村に戻りましょう」

第143話

9 S s i d e

「塔サブユニットへのアクセスが可能になりました」

チツ鬱陶しいな。サブユニットの周りは大量の機械生命体がうろついている。それらの相手をしながらもサブユニットをハッキングしていく。

「おめでとうございます！すべてのサブユニットのロックが解除されました。景品のファイナルワン賞は塔内部にご用意しております。ご来場お待ちしております」

アクセスの為にハッキングしようとするが侵入すらもままならない。

「敵の警戒レベルが上昇中。9 S による塔への侵入を警戒している為と推測」

「邪魔するなッ!!」

ハッキングする手を止め機械生命体共の相手をする。

「クソッ！キリが無いッ・・・!!」

倒しても倒してもすぐに増援の機械生命体を送り込まれてくる。

「友軍の反応アリ」

「友軍!?!」

「君達は……!?!」

デボルとポボルが僕の目の前に姿を現した。

「9 S……」

2人は腰に下げている武器を抜き僕に対して向けて来る。

「来ると思っていたよ」

「くッ!」

2人は身構えた僕を通り過ぎ周囲を囲んでいた機械生命体を攻撃し始めた。

デボル・ポボルの side

「9 S……来たね」

「そうだな」

私達が塔が見渡せる位置で休んでいると9 Sがやって来た。

「どうしたの? 行かないの?」

私が下に降りようと立ち上がるがデボルはじつと9 Sを見たまま動かない。

「ポボル少しだけ待つてあげない?」

「待つ?」

「このままだと9 Sは後悔するだろう? だから少し待とう」

「そうね」

私達は待つてあげることにした。塔の周囲に機械生命体が多少いるが別に苦戦して
るわけではないし問題ないでしょう。

「おめでとうございます！すべてのサブユニットのロックが解除されました」
どうやら塔の周りのハッキングを終了させたようだ。

「敵の警戒レベルが上昇中。9Sによる塔への侵入を警戒している為と推測」
空から大量の機械生命体が投入されていた。デボルが立ち上がる。

「ポボルいくぞ」

私も覚悟を決めた。

「9S……」

「来ると思っていたよ」

私達は何故か身構える9Sを通り過ぎ機械生命体へ攻撃する。

「ここは私達がなんとかする」

「君は塔への扉を開いて」

9Sがハッキングを再開する。

「デボル……ポボル……どうしてここに!？」

「約束しただろう!」

「は?……何言ってるんだ!？」

「9S!今のうちにハッキングして!」

「訳が分からない!」

「詳しい事は塔に入ってから説明するから!」

「クソツ!」

9Sがハッキングを再開してくれた。これを私達が守り抜けばいい。襲ってくる機械生命体は増え続ける。だけど、9Sには触れさせない!!

「侵入は出来たみたいね」

「ああ。だがここからだぞ」

私達は攻撃に一層力を込める。私達をすり抜けて9Sに攻撃できた機械生命体は今のところ一体もない。このまま守り切れる。だけど、ハッキングが始まってしばらくの事だった。

「なんだ・・・この防壁・・・」

「警告、閉鎖系防壁システム」

「どうやったら壊せるんだ!?!」

「予測当該自我データを暴走させる。その自爆エネルギーで防壁を維持的に麻痺させる事が可能」

「それじゃあ入れないのと一緒だ」

私はデボルと一瞬顔を合わせる。デボルは私の覚悟を見て一瞬迷うような表情をみせたが覚悟を決めてくれた。

「うわッ！」

9 Sが防壁へのハッキング失敗で弾き飛ばされる。

「どうした!?!」

デボルが9 Sに駆け寄る。9 Sをデボルに任せて私は防壁へアクセスする。

「この防壁は……」

「ああああああああつ!!」

私が回路に触れた途端すさまじい衝撃が襲ってくる。

「ポポルツ!?!」

デボルの呼ぶ声が聞こえる。私は何とか意識を保たせハッキングを再開する。

「ダメだッ! その防壁は自己閉鎖系アルゴリズムで侵入は……」

「うるさいッ!!! 私達は、私達が犯した罪を償うんだッ!!!」

私達について回る決して決して消えない罪。

「そんな事したら、君の回路が……」

「デボルツ!!!」

「……ああッ!!」

デボルが座り込む9Sを立たせる。

「今だあああああああああッ!!!」

「ぬあああああああッ!!!」

微かに開いた入り口に9Sを放り込む。

「デボルッ!?!」

「オマエは……後悔するなよ……」

「アアアアアアアアアッ!!」

私が倒れて手を放してしまったことにより塔の入り口が閉じられた。

「ポポル!大丈夫か!?!」

「デボルが私の事を支えてくれた。」

「ごめん……少し休ませて……」

「ああ。よく頑張ったな。私の活躍そこで見ててくれ」

「デボルが優しく私を壁に寄りかかせてくれる。そしてデボルは再び大量の機械生命体と対峙するのだった。」

第144話

デボル・ポポル side

さて、私も頑張らないとな。

「はあッ!!」

私は1人で機械生命体に立ち向かう。ポポルには指一本触れさせない! 機械生命体を何体も鉄屑に変える。幾らなんでも多すぎでしょ!?

「クッ!?!」

デカイタイプの機械生命体に押し負けしりもちをつく。目の前に機械生命体の拳が迫る。

「デボルッ!」

パンッ!

ポポルは息が絶え絶えになっている。しかし、手には Beretta M9 が握られていた。どうやらポポルが助けてくれたみたいね。

「ポポル?」

武器を拾って急いでポポルの所へ戻る。

「デボル……ライフルを……貸して」

「でも……」

「いいから……貸して……茶っちいのじゃ……頼りない」

私は渋々ラヴィイから貰ったAKを渡す。

「あっ」

腰から無線機が落ちた。無線機を見つめる。

「デボル……?」

ポポルが顔を覗き込んでくる。ポポルと無線機に何度も視線を移す。私は無線を手取る。

CALL

「デボルどうした?」

私が連絡したのはアネモネさんだった。キャンプではヨルハの司令官がラヴィイを探しているのに連絡は出来ない。

「至急……増援を要請します」

「何だつて?無線の調子がよくないな。もう少しはつきり喋ってくれ」

なんでこんな時に……

「こちら……デボル!現在戦闘中……至急……増……」

「デボルツ!!」

私が振り返るとその瞬間機械生命体の攻撃が来た。咄嗟に私は無線機で攻撃を防いでしまった。そいつはポポルのAK連射で倒された。

「やっちゃった……」

「デボルツたら……」

ポポルから乾いた笑みが出る。

「どうするの?」

使い物にならなくなった無線機を放り投げる。私はもう一度ポポルの顔を今度はじっと見つめた。

「多分いずれ増援は来てくれると思う。ただ9Sを保護させるなら塔に入れるようにしない」と

「なら……」

「私が開ける。ポポルはそこで援護してくれ」

ポポル、私達はいつまでも一緒だよ。

A 2 s i d e

「報告、大型構造物、通称塔ゲートの開放を確認」

「行ってみるか……」

アネモネ side

CALL

「デボルどうした？」

私はその後、ホワイトとの会話を雑に終わらした。そして、ひとりで猛省した。そして、帰ってきたら姉妹に謝ろうと思っていた所だった。姉妹はジャッカスと違い普段はあまり通信してこない。

「至・ユ……ぞ……を要請します」

無線機の不調か……？雑音が入る。

「何だつて？無線の調子がよくないな。もう少しはつきり喋ってくれ」

「こちら……デボル！現在戦闘中……至急……増……」

「デボル!?デボル!?応答しろ！クソツ……」

大声を出したことにより、何かとレジスタンスとヨルハからの視線があつまる。

「どうした？なにかあつたのか？」

ホワイトが出て来る。

「あの姉妹から増援要請だ」

「場所は？」

「不明だ」

「なら、我々も協力しようか？」

考えを巡らせキャンプを見渡す。助けてやりたいが姉妹はホワイトに貸しを作ったとなればいい気はしないだろう。それに私も今後とも考えて一度姉妹はこのキャンプから離すべきだ。

「いや、大丈夫だ。こういうのが得意な奴がうちにはいるんだ」

実際は得意かどうかは分からないだが……

「ほう。ならこちらは戻るとしよう」

ホワイト含むヨルハが戻っていく。

「ちよつと司令官さん、本当にそんな当てであるの？」

キャンプのみんなのお悩みなんかを聞いている通称相談員が話しかけてきた。そんな彼女に私は笑みを浮かべた。

「ジャツカスに頼む」

「ああ、確かに彼女ならなんとかできるわね」

「だろう」

「なんか安心した」

そう言うのと彼女は戻って行つた。実際、ジャツカスに物事を頼むのかと言うとそうではない。あんな爆弾オタクだれが頼るか。では何故ジャツカスに連絡するのか。それ

はジャツカスに頼むではなく、ラヴィに頼むという隠語である。以前ラヴィがキャンプを救った後ヨルハがこのキャンプに来る事が発表された頃どこからともなく出来た隠語だ。ま、私がラヴィとどんな形であれ繋がっているとホワイトが知ったら面倒な事になるだろうな。その時は私もラヴィに頼もう。

「さて、今から連絡して姉妹をラヴィが見つけて助け出せるか。まあ、アイツなら大丈夫だろう」

そんな独り言を言いつつ私は無線機を手を取った。

第145話

エージエントside

CALL

「アネモネか。珍しいなお前から通信なんて」

ジャツカスの無線が珍しくなった。しかも相手はアネモネとはね。

「はあ、分かったラヴィに変わるよ。ただし、次その隠語使ったら殴るからな」

え？ 私に用があるの？ 後、ジャツカスを虐めないであげて・・・ジャツカスから無線が渡される。

「アネモネ、あんまりジャツカスを虐めないであげて。それで何の用？」

「ラヴィ不味いことになった」

アネモネの声のトーンから余程の事態であることが何となく分かってしまった。

「何があつたの？」

「姉妹が増援を要請している」

「だから？ 増援を送ってあげたら？」

何故アネモネが私にわざわざ連絡してきたのかが分からないのだけれど・・・

「送ろうにも位置が分からない。それともう一つ、私からの個人的な頼みだ。しばらく姉妹をラヴィの所で預かって欲しい」

は？突然すぎて理解が追いつかないわ。とりあえず、姉妹を見つけ出せばいいのね。

「ラヴィやって・・・」

「ちよつと待つてろ」

無線機から視線を離すとパスカルが微笑んでいた。

「あー、パスカル申し訳ないんだけど・・・」

「聞かせて頂いてましたよ。わかりました。それでは私は村に戻り11Bさん達にこの事をお伝えいたします」

「ありがとう。本当にありがとう。ほらジャツカスも」

「あ、ああ、パスカルありがとう」

「いえいえ。その変わりかならず助けてあげてください。村の子供達もあのお2人とまた遊びたいといっていましたので。あ、長話が過ぎましたね。それでは」

そう言うたパスカルはジェットを噴射して村へと戻って行つた。パスカル本当にありがとう。私は再び無線機に目を向ける。

「ああ、それで？」

「ラヴィやって・・・」

「やるわよ。それで情報は？」

遮って悪いけど時間が無いのも事実でしょ？

「ああ。2人は9Sの捜索に行ったんだ」

「ミイラ取りがミイラになったのか」

「違う！いいか、これから何があったのか話す」

「手短にな」

アネモネがキャンプで何があったのか掻い摘んで話してくれた。

「9Sは恐らくいろんな所にできたあの建築物を調査してたんでしょね。クソ。あれは各地に散らばってるしそこに姉妹がいるとは限らないし、それに今から全部みるの間に合わないわよ」

「いや、あの姉妹がそんな面倒するわけない。どうせあの一番デカイ塔で9Sを待つてるや」

「なるほどね。それに賭けましょうか。ジャッカス行くぞ」

「それじゃラヴィ頼んだぞ」

「待て」

私がアネモネに聞いたのは掻い摘んだ話だ。それにこの話は詳しく聞かないとな。

「さっきの話詳しくはなせ。動きながら話は聞く。まさか話したらマズイことがあるの

「はあ、頑張つてよお姉ちゃん」

ポポルもずつと呼吸が荒い。急がないと。私は再び扉に手をかざす。

「ハア、アアアアアアアア!!」

「デボル頑張つて!!」

「オラアア!!」

何とか無理やり侵入する。よし、本番はここからね。ハッキングの難易度はかなり高い。でもここまで来たんだ。やってやる!

エージエントside

「これがこの話の全容だ。なあ、ラヴィ私は本当に司令官に向いているのだろうか。私は反省と共に自信が無くなってしまった。前に話した時の内容覚えてるか? また同じように命令してしまった。また、私の命令で死人が出る・・・」

「チツ」

ジャツカスが舌打ちをしたことによりアネモネが押し黙る。ジャツカスを見るとうんざりしたような顔をしている。2人でため息をついた。

「なあ、そつちこそ前に話した時の内容覚えてるか?」

「え?」

「え? じゃない。私のあの時言ったわよね。自分の役職に誇りを持って。アネモネ自

身がどう思つてようが知つた事じゃない。お前は司令官だ。どんな奴であろうとな。悲觀的に考えずどうするか考えてろいいな！」

「だが、私は許されるべきでは……」

「チツ。分かつたわ。次キャンプに行つた時殴つてやるよ」

「殴る？」

「そんなに罰がほしいなら私が思いつきり殴つてやる。それでいいだろ」

「うわー、ラヴィのパンチかなり痛いぞー。アネモネはバカだなー（棒読み）」

「わかつた！覚悟しておこう！それじゃ頼んだぞ！」

「任せろ。ラヴィアウト」

通信を終え隣にいるジャツカスに無線を投げて互いにまた大きなため息をつく。

「そろそろつくな」

デボル・ポポル side

「これで終わりだつア。アアアアア」

何とか無理やりハツキングを終了させる。

「デボル！」

すぐさまポポルが駆け寄ってくる。

「格好よかつたよ。立てる？」

突然の奇声と銃声。目を開ける。

「やっぱり弾を撃ちまくるのは最高だよ！そう思わないかい？」
「ジャツカスさんうるさいです」

ポポルに同意。うるさいわよ。爆薬オタク。

第146話

エージエントside

ジャツカスが姉妹の前に登場をする少し前・・・

「そろそろつくな」

塔に近づくにつれ微かに銃声が聞こえ始めた。

「急いだほうがよさそうだ」

速度をあげた。

「あそこだ」

塔がある陥没たどり着いた。下を見るとどちらかがAKを撃っている。

「さてどうするんだい？」

「ジャツカス急いで大回りで姉妹側の方に回って」

「私だけかい？」

私はジャツカスが片手で軽々持っているM240を指さす。

「そいつを効果的に撃ちまくりたいなら指示に従って」

「了解した。それじゃ移動するでしょう」

「急いでね」

ジャツカスが走って行った。アレを持ってあんなに早く走れるなんてやっぱアンドロイドって凄いわ。

CAL L

「それで向こう側に着いたらどうするんだ？」

走りながらの通信なので呼吸の音が結構入ってる。

「合図したら姉妹の傍にいてあげて。私はここからスナイパーで援護する」

「了解」

通信終了。ライフルを地面に置きM700を置くための土を盛る。寝そべってスコープを覗き安定性を確認する。スコープを覗き姉妹の状態を確認する。ポボルは負傷しているの？それにデボルは一体何をしているの？ジャツカスとかが見れば何をしているのか分かるのだろうけど、私には本当にさっぱりだわ。

「ア、アアアアアア」

デボルが叫び声を上げ吹き飛ぶ。それを負傷したポボルが駆け寄る。2人共もうポロボロじゃない。そうして塔の入り口に2人で支え合いながら移動して壁に2人で寄りかかって座り込んだ。AKの射撃音がやんだことにより微かに2人の会話が聞こえる。

「デボル大丈夫？」

「ええ。それを言うならポボルも」

「でも、いい顔してるわよ」

「お互いだね」

微笑ましいわね。周り機械生命体が居なかつたらどれほどすばらしかつたか。

最後にラヴィさんに会いたかつたね」

「デボルそれは贅沢すぎない」

「そうかもね」

何が最後よ。私に会うことになんて贅沢でも何でもないでしょ。ジャツカス流石に早くして。

「ラヴィ位置に着いた」

待つてました。

「それじゃ攻撃開始」

ジャツカスが坂を滑り降り姉妹の元に降りる。

「fooooooooooooooooo!!」

ジャツカスが奇声を上げて弾をばらまき続ける。それを合図に私もM700を使って機械生命体のコアを打ち抜いて行く。それに大型の少し面倒な奴を優先的に撃つて

いく。

「リロード!!」

ジャツカスがリロードに入る。

「foooooooooooooooooooo!!」

その数秒後にはまた奇声を発しながら弾をばらまき始めた。どうやらリロードはかなり練習してみたみたいね。それに残りの機械生命体ももう少しね。

デボル・ポポルside

「foooooooooooooooooooo!!」

はあ、静かに眠ろうにも奇声がうるさすぎて眠れそうもない。

「よし。2人共大丈夫かい?」

ジャツカスが私達の顔を覗き込んでくる。

「ほら2人共飲むんだ」

回復を渡される。それを一気に飲み干す。うええ……やつぱりこの苦み私嫌いだわ。ポポルも同じ顔をしている。

「ジャツカスさんありがとうございます。助かりました。この件はラヴィさんには内密にお願いします」

「内密に? どういう事だい?」

「私達は罪深いから。ラヴィさんは本来私達に優しくするべきじゃないの。だって私達の同型機が人類を滅ぼしたのよ！」

「そんなに熱くならなくてもいいだろう？それに逆に聞くが私が誰の援護も無くこんな事すると思うかい？」

その瞬間立ち上がるようにした機械生命体が銃弾を受け再び倒れた。視線の先には真顔だが、どこか怒っているようなラヴィがいた。

第147話

エージエント side

「あ．．．．えーと．．．ラヴィ？」

無言で2人に詰め寄る。

「ラヴィさん？怒ってますよね？あのー何か言ってください!!」

私は2人を力強く抱きしめた。

「ラヴィ．．．？」

私は泣いていた。

「ごめんなさい。あなたが思ってた事に気づけなかった。そんなに罪の意識に苛まれるなんて知らなかった。本当に、本当にごめんなさい」

さらに力強くぎゅーと抱きしめる。

「ラヴィ？辞めてよ．．．．聞いてたんでしょ？私達は．．．．」

「なあ、その私達って具体的に誰を指すんだ？」

語気を強める。

「誰って同型機の私達よ。前にも話した通りね」

「そう。なら人類滅亡の要因にあなた達は関わってるの？」

「それも以前お話しした通り同型機の……」

「いい加減にしろ！」

姉妹がビクツツと震え上がる。

「あのね。罅が明かないからこうするわね。今、私に抱かれてるデボル」

「私？」

「そう。あなたをデボルAとする。そして今、私に抱かれてるポボルを」

「ポボルAですか？」

「ええ。それを踏まえてもう一度質問するわね。人類滅亡の原因にあなた達デボルAポ

ボルAは関わっているの？」

「い……いえ私達は関わっていません」

「それならあなた達に罪はない。それどころか謝る必要すらない。これが理解できない方が問題だ。そうよねジャツカス？」

ジャツカスの方を見る。唐突に振られたせいかえっ？みたいな声が出てたけどね。

「私もラヴィに同感だ。幾ら同型機でも環境によつて性格や考え方に多少あれ違いが出るものだよ。つまりだ、デボル・ポボルというアンドロイドが世界に何体居ようと環境が違えば同じにはならないってことだ」

やっぱり理論的な話はジャツカスに任せるのが一番ね。

「さてジャツカス先生のお話を聞いて反論があればどうぞ」

「ない……ないから離してください……」

流石にずっと抱かれていると恥ずかしくなってくるらしい。最後に撫でてあげてから2人を離す。立ち替わるようにジャツカスが傷の手当てを開始した。

「終始一部始終を見ていたから分かるが君達無茶をしすぎだ。自分たちで分かっているね？ 少しの間ここから動かないように。本当に数十分休んでくれるだけでいい。だから素直に聞いてくれたまえよ。いいね」

ジャツカスの口調がかなり強い。まあ、私も同じような事言つたらうし医者が患者を叱りつけるというのは何処でも見られるものね。さて、世間話でもして時間を潰そうかしらね。そんな事を考えていた時だった。

「これは……？」

そこにはポッドを連れたA2がいた。

第148話

エージエントside

「これは・・・？」

そこにはポッドを連れたA2が立っていた。

「やあ、2号久しぶりだな」

ジャツカス、私達の前ではA2って言ってたけど、2号が良いわね。じゃなくて、なんでポッドを連れてるのかしら？

「ジャツカスカひさしぶりだな」

あら、私には挨拶してくれないのね。ふふ。微笑みながらA2を見ているが目をあわせてくれない。

「アネモネから聞いたぞ？少し前にキャンプに来たんだろ？声かけてくれよ」

「いやお前は面倒くさいから・・・」

ジャツカスが露骨にシヨックを受けてる。

「2人はどうしたんだ？」

「ああ・・・入り口をあけようとしてな」

私はただの世間会話のようなものだと思っていた。

「9Sが、先に進んでる」

その瞬間A2の目つきが変わったのを私は見逃さなかった。

「A2? 何する気?」

A2は答えない。まあ、目を合わせてくれない時点で何となく察してはいたんだけどね。

「私も気になるね。2号、塔に入って何をやる気だい?」

ジャツカスがA2の目の前に立ちはだかる。A2は答えない。どうにも嫌な予感がある。私の勘がA2を塔にいれてはいけないと危険信号を発している。私はそつとライフルに手をかける。

「2号もう一度質問しよう。君は塔に入って何をやる気だい?」

沈黙。ジャツカスと目配せすると少し頷いた。

「A2!これが最後よ!答えなさい!」

ライフルをA2に向ける。姉妹は自体が読み込めていないようだ。

「デボル・ポボルありがとう。私はハッキングができないからな。役に立ったよ」

「あ、ああ」

「ありがとうございます?」

姉妹が困惑しつつお礼を言う。しかし、私やジャツカスはA2に対しての敵意を解いてはいない。

「2号、いいかげん・・・うおっ！」

しびれを切らしたジャツカスがA2に詰め寄るとA2はジャツカスを突き飛ばし、塔の中へと入って行ってしまった。

「ラヴィさん？ 私達がキャンプにいる間に何があつたんですか？」

「かなり濃いわよ？」

私はそこから謎の建築物であつた事。そこで210を拾つたこと。そして、なぜ今あなた達の事を助けに来たのか話した。最初の方は普通な顔して聞いてたけど、後半になるにつれ顔が青くなり始めた。止めを刺したのは210を拾つた後の対応を話していた時だったかな？

「なるほど。ならすぐに追いかけないと」

「いや、もう少しゆっくりしましょう。どうせ、時間的に9SにA2が追いつくのは最上階でしょうし、今から追いかけてもA2には追いつけない。ならヘリを使って最上階まで上つた方が早いでしょ。ポポール操縦をお願いね。嫌とは言わせないわよ」

2人は顔を見合わせ微笑んだ。

「了解」

「了解しました」

「それで何をして時間をつぶすんだい？」

「とりあえず、アネモネに連絡しましょうか」

第149話

エージエントside

「とりあえず、アネモネに連絡しましょうか」

「あ、ラヴィ連絡する時は私の無線機を使ってくれ」

ジャツカスが無線機を投げてよこす。

「どうやら腹立たしい事だがキャンプ内での隠語として私に連絡する＝ラヴィに連絡する」という隠語があるらしい」

「あー、OK。次アネモネに会ったら私に直接連絡するように言っておいてあげるわ」

「いや、それじゃ足りない。ラヴィがアネモネが殴る時、私のこの思いをラヴィの拳にのせてくれ！頼む！」

「嫌よ。それこそあなた達仲良いんだから2人で正々堂々殴り合えばいいじゃない」

何で私があなただの思いまで背負わないといけないのよ。ジャツカスとアネモネの関係性に苦笑いしつつ私はアネモネに連絡を取る。

CALL

「ラヴィから司令官へ」

「ジャツカスカか。どうだ。姉妹は無事か?」

先ほどは普通に私の名前を呼んでくれてたのに今はジャツカスカって呼んでる。まあ、あつちにも何か事情があるんでしょう。きつと。

「ええ。姉妹は無事に救助したわ。今は、ジャツカスカが治療してる。あと、もう少ししたら動けるようになるとの事よ」

「そうか。良かった。ところでさっきの口調は……?」

あら、もしかしてアネモネの中で一種のトラウマみたいになっちゃったかしら? 何となく、アネモネ声震えてない?

「あれね。私つい集中するとあの口調が出るのよ。司令官殿に対して失礼な態度。申し訳ありませんでした」

「いや、構わない。それに貴様あまり申し訳ないと思つてないな?」

「あら、どうして?」

「お前が司令官殿つていうのはふざけてる時だけだからな」

あちやくバレてたか。

「元を言えばキャンプにいるお前の知り合いが発端だろ。私にとやかく言う前に知り合いの口の利き方を注意した方がいいんじゃないか?」

わざとあの口調にしてみる。

「あ、ああ。大丈夫だ。あの後私がキツク言っておいた」
やっぱり若干声が震えている気がするのよね。

「それと、これからヘリを使ってそっちの近くを飛ぶからよろしくね」
「ちよつと待て。そんな突然言われても！ラヴィが関係してる事は全てヨルハ側には伏せてるんだ。突然言つて変に詮索されたらどうする」

あら、伏せられてるのね。てつきり前に話した内容が何から何までヨルハ側に筒抜けなのかと思つてたけど、案外アネモネも義理堅いのね。

「アネモネ悪いわね。この件はA2と9Sが絡んでる。下手をすればどっちも死ぬし、上手くやればどっちも笑つてハッピーエンドなの。アネモネお願い」

少しの沈黙。

「わかった。だが詳しく説明してもらおうぞ」

「了解。これから拠点に戻るから歩きながらでいい？」

「構わん」

「よし2人共立つてみてくれ」

ジャッカスに促され姉妹が立ち上がる。

「どうだい？不調はないかい？」

「ないわよ」

「私も大丈夫です」

私は姉妹の前に立つ。

「それじゃ、これからヘリを取りに拠点に戻るわよ」

「了解しました。でも、ラヴィさん。先ほどのお話を聞いてアネモネさんの事を殴るとか気になる点がいくつかあるんですが．．．」

「その件についても歩きながら説明するわよ」

第150話

エージエントside

「えーつとそれでアネモネさんを殴る事になったと」

へりを取りに拠点へ戻る道中、私が姉妹がキャンプに戻ってから何があったのかを話した。最初はアネモネも姉妹もうんうんと頷いていたが210を保護した時を話した辺りから頷く頻度がかなり減った。「またですか・・・」あんなポポルの諦めが感じられる声始めて聞いた。その後は、アネモネから連絡を貰って姉妹を救援に行くまでをアネモネの補足を含めつつ説明した。

「どう？なつとくでできた？」

「納得したかと言われればしたわよ？でも話が無茶苦茶じゃない？」

まあ、無茶苦茶ね。

「2人共良いんだ。これは私が今までお前たち姉妹に対する非礼を咎めなかつた分も含まれているんだ。これは一種の自己満足だ。お前達姉妹が望むなら私の事を殴っても構わない」

「い、いえ！いつもアネモネさんからは良くしていただいていますし、それにアネモネさん

のキャンペーンの皆さんは優しくしてくださいます！」

「アネモネさん！」

デボルがポボルから無線機を奪い吠える。

「アネモネさん！ 私達2人はアネモネさんを尊敬しています！ だから！ 胸を張ってください！ 司令官！！」

デボルが吠えた後生き絶え絶えにジャツカスに無線機を返していた。

「アネモネ聞いたかい？ 愛されてるねえ。さて、本題にもどそう。それでアネモネへの使用は認めてくれるのかい？」

「分かった。認めよう、それにヨルハの連中に関しても私が何とかしよう。ただし、ラヴィー！ 頼んだぞ」

「イエツサーー！」

丁度、拠点の前に戻って来た所で通信が終了した。

「さて、急ごう。さすがにそろそろA2が塔の頂上で9Sと鉢合わせてるだろうさ」

私がヘリに覆いかぶさったシートを取るとすぐにポボルが操縦席に乗り込み、流れるようにヘルメットを装着し、出力を上げ始める。デボルもすぐにドアを開けミニガンの傍に座る。

「以前見た時よりもかなり作業がスムーズになってないかい？」

ジャツカスが乗り込みながら言う。

「確かに。私から見ても2人の成長は著しいわよ」

姉妹の顔が満面の笑みになったのが見えた。ほら、やっぱり笑った顔が一番かわいい。

「離陸します」

機体が徐々に高度を上げ始める。さて、ハッピーエンドにしてやろうぜ。

A 2 side

「……この塔は人類の月面サーバーを狙った巨大砲台だ。このままだと人類の残存データは破壊されるだろう」

9 S、さつきお前とあのデカイ機械生命体をぶつ壊した時一瞬だがこのまま殺し合わずに済むかと思つたがやはり無理だよな。

「はははっ……ははははは！ どうでもいい……もう、どうでもいいだよ。そんな事知つてた？ ……僕らはこの世界に必要ないんだ。人類はもう滅んでる。アンドロイドが戦う意味を持つ為に作られた月面の偽装サーバー。その嘘を守るために用意されたヨルハ部隊は……証拠隠滅の為に、最初から全滅するように計画されていた。パソコンに仕掛けられたバツクドアは一定時間で起動。司令官も、僕も2 Bも……全部、捨て駒だったんだよ？ オカシイよね？ 笑えるよねえ？」

「9S……私達は……」

ラヴィの顔が浮かぶ。例えば捨て駒として作られたとしても生きる権利はある。お前
といると何となくそう思えたんだ。

「うるさいッ!!……君は2Bを殺したじゃないか。それだけで十分だよ。僕たちが殺
し合う理由なんて」

「……」

咄嗟に否定の言葉がでないのが悔しいな。

「2Bは苦しんでいたよ。君を、殺し続けることを」

「……くッ!!」

「高機能モデルの9Sタイプが真実に到達することは予見されていた。彼女の『2B』と
いうモデル名は偽装だ。正式名称は2E……2号機E型。本当は気づいていたんだ
ろう……9S」

「うるさい……うるさいッ!」

9Sが私に刃を向ける。

「オマエに一体、僕たちの何が判るって言うんだッ!!」

「推奨、停戦。ここで彼女と争う事は非合理的で……」

「ポッド153に命令ッ! 貴様の独断の倫理思考と発言を禁止する!! この命令は、A2

か僕のどちらかの生命活動の停止が確認されるまで維持しろ！」

ポッド153が離れていく。私は横目でポッド見る。最初はコイツをどう黙らせようかと悩んだがまあ、今考えると悪くは無かったな。結局私も、9Sも復讐を糧に生きる者だ。気持ちも分かる。さて、もしかしたら最後になるかもしれないんだ。出し惜しみはしないぞ。9S!!

第151話

E—J—E—N—T—s—i—d—e

「クソツ。どうやら2人共始めたみたいだな。出来れば始まる前に到着したかったが仕方ないか」

ヘリからスコープを使って塔の頂上の様子を見る。倍率が低い為に何となくでしかわからないがアレはどう考えても仲良く談笑って訳では無いわよね。

「で、どうするんだい？ 始まる前だったら何とかなつたらうがこうなつたら止めるのはかなり大変だぞ」

流石にゆっくりしすぎたわね。

「ラヴィさん、そろそろ塔に着きますけどどうします？。」

「アレを見る限り話し合いで解決は無理じゃない？ 2人は2Bが生きてるなんて信じると思う？ それに言ったところで『要請、推測による会話の中断』って横のポッドがうるさく騒ぐわよ」

デボルそれ一体誰の真似？

「とりあえず、乗り込むしかないだろ。間に入って話し合いで解決できるならそれでい

いが、まあ恐らく実力行使になるだろうが・・・」

「私もそれで賛成だ。ところで一つ質問をいいかい？もし、そうなった場合勝てる勝算はあるのかい？9Sも中々だが2号は同じかそれ以上の実力があるが・・・」

「ああジャツカスさん、恐らくラヴィさんなら大丈夫だと思います」

「ポボルに同感。多分ラヴィはこの辺りのアンドロイドよりも実力はあると思う」

「その根拠は？」

「なんかジャツカスが大学のウザイ教授みたいなこと言い出したんだけど・・・」

「ラヴィが特殊部隊員だから！」

「デボルはデボルでなんでドヤ顔なの？」

「みなさんそろそろです！」

ポボルが叫ぶ。

「ポボル！ロープで降下するね！」

ポボルが操縦席からグツと親指を立てる。頼もしいわね。デボルがロープの束を下に投げる。

「GO！GO！GO！」

デボルが私の背中をたたき叫ぶ。素早く降下する。

「邪魔するな!!」

「fuck!」

ロープから手を放し飛び降りる。9Sの横にいたポッドが降下中の私に向かって撃つて来た。幸運なことに弾は当たらなかつたけど状況は最悪ね。

CALL

「ラヴィさん大丈夫ですか!？」

上で見ていたポポルが通信してくる。

「ポポル! 離脱しろ!」

「ですが、まだジャツカスさんが・・・」

「ここに居たらあなた達も危ない! いいからさつさと離脱しろ!!」

「だが、君1人で2人を相手にするのは流石に・・・」

「黙れ! ポポルさつさと離脱しろ! 私に構うな! やれ!!」

「ご武運を!」

へりが離れていく。

「ラヴィ!?! お前大丈夫か? 一体なにしにここに来た!？」

A2が駆け寄ってくる。

「殺し合っているバカどもを止めるためだよ」

「アハハハハハ!!」

そんなやり取りを見ていた9Sが狂った笑い声をあげる。

「なるほどお！久しぶりですねラヴィさん？」

「久しぶりね」

「最後にあなたを見たのは8Bを捕縛しようとした時ですね」

私は右腕についているウォッチを見る。

「そうね。あの時はお仕事の邪魔して悪かったわね」

「ラヴィ一体何のことだ？」

「後でゆっくり話してあげるからね」

「そいつに後でなんてありませんよ。そいつは今僕がここで殺します」

9SがA2に刃を向ける。A2も刃を向けようとするが私がA2の手を掴む。

「離せ。なんのつもりだ」

「さつき言ったわよね。私はお前らバカの殺し合いを止めに来たと」

「邪魔しないでください。そいつは2Bを殺した。それだけで十分なんですよ」

「ならどうして2Bのデータ送信履歴の最後がA2になってるのかしらね」

「え・・・？」

9Sの動きが止まる。

「私の技術があれば彼女を生き返らせられるのに」

「黙れ！それは2Bであって2Bじゃない!! 紛い物だ！」

「いや、紛い物じゃない。A2が持つてるデータとあなたが持つてるメンテナンス時のデータこれを使ってブラックボックスを再起動する。まあ、あんまり死者をいじるつてのはやりたくないだけどね」

「否定、ヨルハ部隊のブラックボックスへの外部からの干渉は不可能」

A2の横にいたポッドが突つかかかってきた。どうやら我慢が出来なくなつたみたい。「出来るわよ。お前らアンドロイドやヨルハなんかの末期の技術が幾らか前とは言え当時の最新技術を突っ込んだコイツに勝てるかよ」

私はウオッチを見せつける。

「ハッキングを検知」

どうやら9Sがしれつとウオッチへのハッキングを試みて弾かれたらしい。

「どうゆう事だ？」

「やっぱり。どうやらそれ機械生命体専用みたいね」

塔の入り口を姉妹がハッキングできて9Sが出来ないのはこれが理由だ。実際は侵入された側の防衛装置もあるが、人類が現存していた時代に作られた姉妹の2人は人類の技術を応用してできたあの防衛装置に少なくとも挑むことはできた。しかし、ヨルハが出来た頃にはすでにその技術はロストテクノロジーの一種だ。それに、9Sの言う通

り機械生命体さえハッキングが出来れば上出来なヨルハにそんな物をわざわざ搭載するバカはいない。

「クソツ！なんであなたがそんなものを！」

「え、私人類だもん」

□を開けた固まる9S。

「冗談だと思うなら私をハッキングしてみればいいんじゃない？」

まあ、人体にハッキングもクソもないのだが……

「ふっアハハハハハハハハハハ!!」

突然9Sが狂ったように笑い声をあげる。

「何がおかしい」

A2の声が心なしか怒りを含んでいる。

「だって最高じゃないですか。A2だけじゃなく、人類も殺せるなんて!!」

「9S落ち着け！ラヴィは本当に人類でお前も心音を聞けば……」

「黙れツ！黙れツ！僕の邪魔をする奴はみんな殺す!!」

「2B……見ててねえ」

「はあ、後で2Bになんて言われても知らないからな。さあ、9S！私を殺せるもんなら殺してみろよ」

第152話

エーゼントside

私は銃剣をライフルにつける。正直な所私がどこまでヨルハやアンドロイドに通用するのかわからない。アンドロイドのボディを幾ら殴った所で体制崩すことは出来てもダメージにはならないだろう。それに比べ私の方は一見非力そうな9Sやデボル・ポルに本気で殴られれば骨折は免れない。全く、私からすればアンドロイドの方がよっぽど優秀だと思うのだけれど……

「まあ、上手くやらなきや死ぬだけか」

「ハアツ!!」

A2が先に9Sに向かって行った。互いに刃と刃をぶつけ合い斬ったり斬られたりの激しい戦闘だ。

「オラア!!」

私も2人の間に飛び込んだ。少しは9Sの不意を突けたかと思ったが私の刺突はあっけなく躲される。9Sの標的がこちらに向いた。振り下ろされる刃を体を捻ったり、姿勢を低くしたりして躲す。

「9 S!」

態勢を整えたA2が再び9 Sの背後を突く形で攻撃した。再び9 Sの興味がA2に向く。私はローリングして一旦2人から少し離れる。

「警告、ハッキングによる機能低下。推奨ヨルハ機体9 Sの破壊」

「クソツ!」

確かに私の目から見ても分かるほどハッキングを受けたA2の動きはどこかぎこちなさのような物があった。

「A2!」

咄嗟に彼女の名前を呼ぶ。ハッキングで混乱しているA2の背中に9 Sが回り込み、背中を斬った。

「shit!!」

倒れこんだA2に追い打ちをかけようとしているポッドを撃つ。撃たれたポッドに一見損傷はない。9 Sがこちらを見る。私はもう一度銃剣を強く押し込む。

「ラヴィさん。あなたから先に殺します。止めを刺すのを邪魔されちゃ溜まりませんか
らね」

「私も理想は捨てるわ」

「理想ですか?」

「ええ。改めて人間とアンドロイドの差を思い知ったわ。それにかなり頑丈だつてことも改めて思い出した。だから、無傷でこの殺し合いを止めるなんて理想はすてるわ」

「くッアハハハハ!!だから、止めるなんて無理だと言つたじゃないですか!」

「ええ。だから私も!!」

9 Sに肉薄しストックで彼の腹を殴りつける。

「ぐッ・・・がはッ!」

苦しむ9 Sの首根っこを掴み目線を合わせる。

「私もこの殺し合いに参加することにしたわ。どうせ、死んでも生き返らせるし。生き返つてから恨むなよ」

多分、私はイカレてる。私を睨みつける彼を蹴り吹っ飛ばす。9 Sは刀を杖にして立ち上がる。

「ア、アアアアアア」

刃を銃剣で受け止める。ぐッ正直想像していた以上に重い。これに手ごたえを占めた9 Sは手数で勝負してくる。回避を交えつつ向かってくる刃を受け流す。

「・・・あつぶね」

私は自分の頬を触る。少し顔が切れていた。

「fuck。乙女の顔に傷つけやがって」

避けたつもりだったが刺突した刃先が当たったみたいね。占めた。9Sはどこか決定的なタイミングで刺突してくるはず。それを待って……

「ハアツ!!」

「フンツ!」

ついに来た刺突を私は受け流すように見せて力任せに刀を吹っ飛ばす。武器を失った9Sは後退する。だが、私はほぼゼロ距離まで肉薄する。これで9Sはポッドを使えない。

「なッ……」

最後に気絶させようとストックで顔めがけて殴ろうとした。だが、9Sは咄嗟に腕を出しストックと9Sの腕がぶつかり衝撃で私はライフルを落としてしまう。

「ガハッ」

9Sがこの隙を見落とすはずも無くタツクルされる。無理な姿勢からのタツクルだったがそこそこの威力だった。危なかった。タツクルされた場所が防弾チョッキじゃなかったら骨折れてたぞ。しかし、痛みは耐えられたが私は倒れこんでしまった。

「ハア……ハア……」

倒れこんだ私の上に生きも絶え絶えな9Sが馬乗りの体制になる。そして、私の首に手をあて力強く首を絞め始める……息は絶え絶えだが力は変わっていない。視界が徐々

に暗く狭くなる。マズイこのまま力を強められると窒息以前に首の骨が折れかねない。

「2B・・・ごめんね」

「・・・!! 黙れッ!! ラヴィさんも2Bも! 僕たちの何が判るって言うんだ!!」

9Sはどうやら私の謝罪をこうなった事への謝罪だと勘違いしてるようだった。これからする事への謝罪だつてのに。

「なッ・・・」

ダンッダンッダンッ

私は腰からM45A1を抜き銃口を9Sの横腹に押し当て発射した。刀傷と違い銃創は治療が面倒だから本当は一発も撃ちたくなかつたが、一発だけでは隙を作るのに不足な気がしたからだ。喰らった9Sは首を絞める力を緩める。

「オッッラァア!!」

すかさず全力で9Sの腹を蹴り上げる。9Sの手が私の首から離れる。視界が広がる。

「ゴホッゴホッゴホッ・・・fuck・・・ったく今され出てくんのかよ」

首を絞められるさなな懐かしい奴が見えた気がした。

「アッアアッ」

一方の9Sの横腹からは出血が確認できた。天下の45acpだ。ゼロ距離で喰ら

えば流石にタダではすまない。

「ハッ！」

回復したA2が9Sの右手を斬り跳ね飛ばす。

「ウッ アッ アッ アッ アッ アッ」

「ポッド！ハッキング!!」

「了解」

苦しむ9Sの顔をA2がつかみ押し倒す。どうやらポッドを使って9Sに侵入したようだ。私は飛んだ9Sの腕を見る。

「これ……どつかで……」

「ラヴィー——!!」

3人を乗せたヘリが戻って来た。ヘリは着陸しようと高度を下げる。地面と後1メートル程になった時デボルとジャツカスが飛び降りて来た。

「ラヴィー！ってその傷どうしたの!?!」

「デボル落ち着け。で、2人はどうなった」

「ん？あれ」

私が指さした先には9Sの顔を手で押さえ、押し倒す形で倒れている2人だった。

「ごめん、見てもさっぱり分かんないんだけど……」

「簡潔に言うとなA2がポツドの力を借りてハッキングしてる。なんでポツドがA2の傍に居るのは知らなん。それより、これ9Sの腕なんだけどなんか変じゃない？」

「これ、部品が違うわよ。まるで別タイプの腕を継ぎ接ぎしてみたみたいな．．．でもこれ誰の腕？ジャツカス？爆薬オタク．．．？」

ジャツカスの顔が何かを悟ったような顔になっている。

「この腕の持ち主．．．恐らく2Bだぞ．．．修理した身が言うんだ間違いない。まさかここまで拗らせていたとは．．．」

「いや、それこそ後で9Sさんに聞くべきでしょう。変な憶測は辞めた方がいいですよ。ジャツカスさん？」

パイロットヘルメットを手にしたポボルがやって来た。

「ラヴィさん、遅くなりました。どうやらこの建造物信じられないですけど、大砲みたいですよ。それに稼働してるっぽくて．．．建物の形状が変化してなかなか近づけなかったんですよ。遅れてしまって申し訳ありませんでした」

「いいのよ。それより、稼働してるなら今この場所もいずれどうなるか分からないわね。了解。それならA2のハッキングが終わり次第離脱するわよ」

「了解です（した）」

第153話

A 2 side

「……!!」

これが9Sの回路か。私はアタッカータイプだからな。ポッドがないとハツキングは出来ない。こんな状況ではあるがやはり物珍しさはあるよな。

「ポッド……9Sの論理回路を修復する」

「了解」

「9Sを汚染している汚染している場所を教えてください」

「了解。ヨルハ機体A2。この先に9Sのコアデータが格納されている。報告、ウイルス汚染が深刻で除去は困難」

「……いや、一つだけ方法があるはずだ」

「……その方法は推奨できない。私はヨルハ部隊支援随行ユニット。支援しているヨルハ機体A2に害をなす行動には賛同できない」

「意外と……イイ奴だな。お前は」

21号、お前があの時この方法を使った理由が分かったよ。私もあの時お前の正気を

疑ったな：．．まあ、横にいるコイツは普段は勝手に物事をすすめる鬱陶しい奴だが、大事な所は私に委ねてくれる．．．いい仕事ぶりだ。入り組んだ道を進み階段で上り下りを繰り返す。そして、ひととき長い階段の上に光がさす。多分、アレだな。私は階段を駆け上がる。そして、眠っている9Sの方に手を添える。

「私が．．．．．全部．．．．．ポッド．．．．．9Sを頼む」

エージェンツ side

A2の横で停止していたポッドが動き出し、よくわからない力で9Sを持ち上げる。あんな小さいの何処にそんな力が？

「A2、君は？」

「私は、まだ、やることがあるから．．．先に行つてくれ」

「了解」

ポッドが9Sを持ち上げ動き出す。

「9Sさんを早くこちらに」

ポポルの誘導で9Sの体をヘリにのせる。

「ラヴィー！悪いがウオッチ貸してくれないか？」

ヘリに居るジャツカスにウオッチを投げてやる。ナイスキャッチ！ジャツカスはさすが9Sに装着して応急手当を開始した。すると9Sに随伴していたポッドが現れ

9Sに寄り添うようにしてへりに乗る。二体とも9Sの傍にいるのかと思っておもむろにこちらに寄って来た。

「要請、これからする質疑に対する応答」

「どうぞで」

「貴殿の高い技術をしようすればA2を生き返らせることは可能か」

「できるわよ。それじゃ私からも一つA2は今何しようとしてるの？」

「回答。この塔を破壊しようとしている」

「それでどうして生き返らせる云々になるか分からないんだけど・・・」

「A2がこれから行う行動によって塔が倒壊する可能性がある」

ん？これが？私が指を地面を指さす。

「肯定。そのため、A2は倒壊から脱出できない可能性が高い。そのために・・・」

「ちよつと待てよ。なんだ？お前さつき害をなす行動には賛成できないとか言つときながらこれには何もしないのか？」

「これは彼女の意思」

「は～お前はアレか？うまい事抜け穴ついたつもりか？それに私はその案に反対。もしそれでA2が倒壊した瓦礫に巻き込まれてバラバラになったなんてなれば、生き返らせるもクソもあるか。そんな事になって見る。ハッピーエンドは絶対がない。私が思い

描くやつも、お前が叶えたいやつもな」

矢継ぎ早にまくし立てると、ポッドからの反応が無くなった。

「疑問、ラヴィが思い描くハッピーエンドでA2は笑っているだろうか？」

「あら、ずいぶんと抽象的な質問ね。まあ、そうね。笑ってるさ」

「要請、ラヴィが思い描くハッピーエンドの実施。そのためなら当ポッドは協力を惜しまない」

「いいねえ。そうこなきや。よし、とりあえず塔を崩そうとしているA2を止めないとね」

「ラヴィ、何か方法は？」

「ウオッチは今使ってるし・・・ちよつと手荒になるけどA2なら大丈夫か」

私はハッキングをして動かないA2の背後に立つ。そして少し後ろにポッドがいる。なんか不思議な感覚。

「それじゃA2・・・良い夢を。フツ!!」

動かないA2の後頭部を思いつきライフルのストックで殴りつける。するとA2の体が倒れこむ。

「それじゃあへりに運びましょうか」

A 2 s i d e

流石に見慣れたな。私は塔のシステムに侵入しこれを壊す。進入した途端に子供の笑い声が聞こえる不思議な場所だった。

「コイツだな」

光に触れようと近づくと、手を伸ばせば届く。そんな時だった。

「それじゃA2・・・良い夢を」

その瞬間私の視界は真っ暗になった。

第154話

エージェントside

気絶させたA2をポッドが持つてへりに戻る。A2をへりのシートに座らせベルトを装着させる。

「ラヴィ、9Sへの処置はうまくいった。あ、これ返すよ」

ジャツカスからウォッチを受け取る。

「それでラヴィさん何か策があるようですが、具体的にお願います」

「それなんだけど、ポッド、この建物が何なのか教えて貰えない?」

「解説、この建物は通称『塔』建造者、年度ともに不明。入場の際にはまず塔サブユニットのアクセス解除。その後、塔への侵入が可能となる。この建造物の目的は月面にある人類サーバーを標的とした大砲である」

解説を終えたポッドが私の後ろへと戻った。

「月面サーバーの破壊?それなら撃たせてやれば?」

「まあ、一理あるけど月面サーバーが破壊された場合の影響が想定できないから却下ね。それで止めようにもこの砲台のシステムを止めると塔が崩れる可能性があるらしいの」

「一見なんともなさそうに見えるけど？」

周りを見渡していたデボルがそんな事を言う。確かに、ぶっちゃけ私もそう思う。

「いや、先ほどラヴィさんにも言いましたが、この建物形状が変化してます。さつき近くを飛んだ時軋むような音がしました。ヘリのローター音がしてるのに割と聞こえたので見た目は何ともなくても、内部は結構ガタが来てるのかもしれない」

私も周りを見渡す。こんなに外見奇麗なのになあ。

「ヘリのローターとヘルメットをしたポボルが聞こえた。そうすると、かなり軋む音が大きかったってことね。なおさら塔のシステム停止は辞めましょう」

「だがどうする？今こうしている間にもこれは発射準備を進めているんだろう？」

「そうね。でも、発射を止めることは出来なくても着弾地点をずらすことは可能だと思う。だからこれから私はコイツのシステムをハッキングするから。みんなはヘリで一旦この塔から離れて」

「どうしてですか！」

ポボルが声を張り上げた。

「ポボルの言う通りこの建造物はかなりガタがきてる。発射した拍子に崩れるかもしれない。みんな仲良く瓦礫の下敷きになる訳にはいかないでしょ？ホラホラ急いだ急いだ」

納得がいかない様子の3人をへりに押し込む。

「大丈夫！もしもに備えてだから。何もなかったらすぐに戻って来て」

へりの出力が上がっていく。

「あら？あつちの子みたいにA2の傍に居なくていいの？」

「当ポッドはラヴィがこれから行う行為のサポートを行う。これは命令ではなく、自らの意思である」

「それじゃラヴィさんご武運を！」

へりが離陸し徐々に塔から離れていく。そこそこへりの姿が小さくなった。

「さて、始めますか」

「了解。ハッキング支援開始」

ウオッチを操作してハッキングを開始する。塔の防壁が何枚もあるが、それを一枚一枚確実に破っていく。

「良いぞ。よし侵入成功。ここからどうするの？」

「データベースの中から照準に関するファイルを見える。マーク完了」

画面上に一つのファイルが表示される。その中の一つを選択する。

「今これがさしてる座標が月面サーバーの位置なのね。で？どつちにずらせばいいわけ？」

「不明」

「は？」

「データベースの中に月面サーバーの位置や規模の情報はない。推奨、発射された砲弾が月を避けるように修正」

「こんなに極秘まみれで良く今まで秘密を隠し通せてたわね」

ポッドの返事が無い。ホントこれアンドロイドが純粹だから成り立った事よね。

「よし、修正完了。これで発射されても問題ないはず」

すると、何処かで動作音がしたと思えばゆっくりと塔の壁の一部が動き始めた。

「凄い。子供の頃もつてたカラクリのおもちゃ・・・おつと？」

どこか1か所で金属が軋む音が聞こえる。さらに連鎖するようにあちこちで軋む音がする。しかもどれもそこそこの大きさなので複数重なるとかなり耳障りな音になる。

「これは相当ガタがきてるわね。その上にこの大規模稼働・・・こんな音もなるか。どうも不安が高まる音ね」

「照準の修正完了。任意のタイミングで発射完了」

「OK。それにしてもこれかなりのデータ量ね。たかが大砲にここまで膨大なデータ必要になるものなの？」

「この建物は一部の記録を保存している。現にA2と共に塔に侵入した際には図書館を

もしたデータベースが存在」

「なるほどね。ねえ発射は私が決められるんだよね？」

「発射に関しては現在開いている項目より可能」

「了解。ならこのデータ貰えるだけ貰っていきましょうか。片っ端からコピーしていきましよう」

「了解」

砲に関するデータはいらないわね。こんなデカイ砲なんて運用のしようがないし、月を砲撃することなんて今後無いでしょうからね。そこから私はデータベースにあるデータを粗方コピーした。

「よし、コピー完了ね。さ、あとは仕上げだ」

私は何もない事を祈りつつウオツチに表示されている発射ボタンを押した。再び当たり一体に動作音と軋む音が響きわたる。

「は？ちよつと待つて？ロケット？大砲じゃなくて？どうなってるの？」

重い動作の後天高くそびえる方針から飛び出したのはロケットだった。だが、方針から出た時点で天高く上っていくロケットに何も出来るわけもなく私とポッドはただ茫然とその光景を眺めていた。

「え？あれ大丈夫なの？」

「ロケットの軌道から月面に衝突することは無いと考える」

「ならとりあえず良いか。お、来た来た」

遠くからヘリがやってくるのが見える。

「よし、これで家に帰れる。帰ったらうまい飯を・・・うおッ!!」

突然塔が激しく揺れ始めた。

「嫌な予感は何となくしてたのよ。何となく・・・あつぶねッ!!」

直ぐ近くに瓦礫が落ちてくる!

「畜生!ポッドどうしたに降りればいい!?!」

「ラヴィ私を掴め」

「え!?!」

「落下のダメージの軽減の為に滑空機能が搭載されている。推奨、速やかなる決断」

「ああもう!どうにでもなれ!」

私はポッドのアームの部分を掴んで塔から飛び降りた。ポッドの言う通りまるでパラシュートで降下しているかのような滑らかな滑空だった。だが・・・

「ねえ!これもうちよつと距離かせげないの?このままじゃ下手すれば巻き込まれる」

「不可能」

「fuck!」

「ここまで来て神頼みかよ・・・後ろを振り返る。マズイマズイマズイ！」
「あっ」

呆気ないものだった。ポツドに捕まっていた私に飛んできた瓦礫が直撃した。痛みと衝撃で手が離れた。

「~~~~!!」

自分でわからない叫び声が出た。そして急速に地面が近づいてくる。この高さはずからない。私はとてつもない痛みを覚悟し目を閉じた。

「・・・?」

なにか鈍い衝撃がした。だが痛みが一向に來ない。恐る恐る目を開けた。するとそこには

「良かった。このまま出遅れたまま3人共出番ないんじゃないかと心配したわ」

「ナイスタイミングね。3人が天使に見えるわ」

11B達ヨルハの3人だった。

第15話

エージエント side

「ラヴィー——」

座り込む私とヨルハ組の3人の所にヘリが着陸した。

「ラヴィー！大丈夫？生きてる？」

「生きてるわよ。ここに居る天使様3人のおかげでね。にしても良く場所が分かったわね」

「それはですね。パスカルさんからラヴィーさんが姉妹の2人の捜索に行かれたという情報を貰った時点では全く分からなかったんです」

「それに、無線に連絡しても誰も応答してくれないし。で、途方に暮れてたらヘリが飛んでるのが見えたから急いで来たって訳。本当間に合って良かった」

私もそう思う。どうやら今回は天使様の他に幸運の女神さまも微笑んで下さったみたいね。

「ラヴィーさんは姉妹の捜索が目的でしたよね？それが何がどうなればこんな大惨事になるんですか？」

私は無残に崩れ去った塔の残骸を振り返る。本当どうしてこんな大惨事になったんだか……

「だが、努力しただけはあつたと思うぞ。2号と9Sの殺し合いを止めたんだ」

「なツ！彼は……彼は……今どこにいますか？」

デボルが手招きする。ポポル扉を開ける。

「9S！こんなボロボロになつて……」

9Sの少し汚れた頬を210は優しく触る。

「あとで、しっかりと治療したら再起動する。大丈夫。彼は生きてるよ。この様子だと不安だろうが問題ない。だって君もつい数日前までこれだったんだから」

「なるほど。ジャツカスさん」

210はジャツカスと向き合う。

「9Sの事よろしくお願ひします」

「任せたまえ」

「微笑ましいわね」

「そうですね。ラヴィさん立ってますか？」

11Bと16Dが手を差し出して来る。

「……ツ!!」

立ち上がるうとした時、横腹に痛みが走った。見ると、棒状の金属が横腹に突き刺さっていた。興奮していて気が付かなかった。

「大丈夫ですか!?! すすすぐに治療を!?!」

「16D落ち着いて。とりあえず、拠点に戻って治療しましょう。ごめん肩貸して」

11Bと16Dの肩を借りてへりに乗る。A2と9Sが寝ている所に私が乗ると他のみんなが乗る場所が無い。

「ラヴィ、私達の事は気にしないで。走って帰るから。デボルしつかり操縦しなさいよ」
「任せて。それじゃラヴィさん」

へりが離陸する。

数分後

「ラヴィさん着きましたよ。歩けます?」

ポポルが肩を貸してくれた。歩けないわけではないけど、歩くたびにクソ痛い。

「ありがとう。ポポルここで良いわ。ちよつとみんなが戻ってくるまで休ませて。あと水貰える?」

「どうぞ。ラヴィさんゆっくり休んでください。9Sさん運んできます」

そう言うとポポルは再び屋上へと戻っていった。貰った水を一口飲む。疲れた体に染み入る。残りを一気に飲む。さて、腹に刺さってるコイツどうするかなあ。

「ラヴィ……さん9Sさんここがいい……ですか？」

「ちよつとポポル大丈夫!？」

生き絶え絶えに9Sを背負ったポポルが戻つて来た。

「え……ええ。大丈夫?少し休んでから行つたら?」

「でも……放置するのは……ハアハア……」

「9S背負つてその状態じゃA2なんて背負えないわよ。みんな来るまでましょ?あ、ごめんもう一杯貰える?」

ポポルに水をもう一杯貰い、となりに座ったポポルと一緒に飲んだ。なにか話を振つてあげようと思つたけど、あまりにもポポルがハアハア言うから遠慮した。

「ラヴィくただいま〜」

しばらくするとみんなが戻つて来た。

「おかえりなさい。11B、16D。ヘリの所にA2が寝たままだから悪いけど運んできて貰える?」

「わかりました」

2人がA2の元へと向かった。

「それでラヴィそれどうするの?」

デボルが横腹を指さして言う。

「抜くわよ。放置するわけにはいかないんだけど……一応聞くけど……キャンプに人類の治療できる人つていたりする？」

「流石に人類の治療は……」

「ですよー。自分でやるしかないか。さて、みんな悪いんだけど手を貸して。えーとまずは、デボルその棚からウオッカ取つて。で、16Dは沸騰したお湯作つてくれる？」

「いいけど、何？お酒飲んで痛みごまかすの？」

「そんな事しないわよ。あージャツカスそこにある私の服。あーローブでいいやこれ使つて細く長く切つてくれない？」

私は腰に付けたナイフを渡す。これはみんな何をするか分かったみたいだった。

「包帯を作るんだろう？分かった。出来る限り長く切ろう」

「ラヴィ、この酒であつてる？」

「合つてるわよ。それとデボルにお願いなんだけど、これがどんな風に刺さつてるか教えてくれる？位置的にどうも見えなくて」

私は着ていたシャツを捲りあげる。ポボルがのぞき込むと横に居たポッドが明かりで傷元を照らしてくれた。

「どんなかんじ？」

「うーん。この金属自体は曲がつてるけど、先の方は真っ直ぐ刺さってるみたい。それに今分かるのはあの建物が凄く古いってことくらい」

「どうして？」

「だってこの金属すっごい錆びてる」

「ありがとう。とりあえず、引つ張れば何とかかなりそうね」

「ラヴィさんお湯湧きました」

「それじゃその切った古着茹でてくれる？」

鍋に古着が放り込まれる。これで5分くらい待つて乾かせば完了だ。

「A2さん寝かせて置きますね」

2人がA2を運んできてくれた。A2を9Sの隣に寝かせる。

「それでラヴィ話して貰える？ 一体なにがあったの？」

「準備が一通り終わったらコレ抜くから途中になるかもだけどいい？」

5分後

「ラヴィさん5分経ちました」

「乾いてる？」

「はい！」

「それじゃ悪いんだけど、もう一度沸かすところからもう一度お願いできる？ ジャツカ

ス、ナイフ返して」

ポポルにナイフを渡す。

「あれ？引き抜くんじやないの？ナイフなんて何に使うの？」

「抜けなかつたら腹開いて取り出すしかないでしょ。その時は誰かよろしくね」

その一言にみんなの笑みが消えた。冗談だったんだけどな・・・

第156話

エージエントside

「ラヴィさんナイフも乾きました」

「分かったわ。ありがとう。はあ、緊張するわ。あークソが。fuck」
　　つい口が悪くなる。

「それじゃ始めるわよ。一応だけど、血が出るから気を付けてね」
　　そう言うとはウォツカを口いっぱい含む。そして、

ブー——ツ!!!

傷口に向けて思いきり吹き出す。

「ちよつとちよつと何してんの!?!」

それを無視してもう一度口に含む。そして、

ブー——ツ!!!

傷口に向け吹きかける。

「ハア、この位でいいか。フツ!!」

刺さった金属を両手で掴む。そして、思いっきり引つ張る。

「・・・ガッ!・・・ア、アアッ・・・ハアハア。fuck・・・」

抜けない。横腹に刺さっているせいでどうも力が出せない。私はナイフを持つ。そして、金属が刺さった傷口を開いて傷口を広げていく。

「ハア・・・ハア・・・これで行けるはずッ・・・ごめん誰か引き抜いて!」

私の言葉にみんなの動きが止まる。

「嫌ならいいわ。ポッド!悪いけどお願いでき・・・」

「私がやろう」

ジャツカスが手を上げた。こう言う時のジャツカスは頼もしい。

「いくぞ」

大きく頷く。

「・・・ガッ・・・ツツ!!」

「恐らく次で抜ける。頑張ってくれ」

「いいねえ。一気に頼むわよ」

ジャツカスが大きく頷く。

「・・・ガアッ!!」

「抜けた!」

だが、傷口からかなりの出血がある。

「ねえ・・・誰か・・・包帯を」

「包帯ですね」

デボルとポポルが包帯を巻いてくれる。

「結構キツメにお願い」

2人は私の指示通り、かなりキツメに包帯を巻いてくれる。

「この位の強さでどうですか」

「ありがとう。ごめんなさいね。グロいもの見せちゃって」

「良くも悪くも見慣れたわよ。それよりラヴィはこれで死んじやったりしないの?」

「正直な所なんとも言えないわね。もし、感染症にでもなったら無理ね。手術なんかの医療技術は全てロストテクノロジー扱いだろうし。幸運の女神さまが微笑んでくれるのを願いますよ」

「ラヴィ死じやだよ?」

デボルが目には涙を浮かべる。

「はあ、デボル、ポポルおいで」

2人を呼んで抱き寄せて頭を撫でる。

「大丈夫。こんな可愛い女神さまが微笑んでくれたのよ?簡単には死なないわよ」

「ラヴィさん、約束ですよ?」

「こつちのセリフよ。良いわね？2人共。あなた達がどんなに辛い目に遭つても私がいるから。絶対に無理しちや駄目だからね」

さらに頭を激しく撫でる。

「ちよつとラヴィイ！分かったからそんなに撫でないで！私人形じゃない！」

「ハイハイ。悪いけど少し寝るわね。ジャツカス11B達に今回の件の経緯を話しておいてくれない？塔が崩れた原因についてはご飯の時に話すから」

「了解した」

「おやすみラヴィイ」

「おやすみなさい」

「おやすみ」

数時間後

目を開ける。今となつては見慣れた天井が視界に入る。ウオツチを使って今の時間を確認する。あれから3時間ほどたったのね。良かった。もしかしたら2度とこの世界を見れないんじゃないかと怖くなった。

「ラヴィイおはよう？よく眠れた？」

バサッ

とりあえず、目の前の11Bを抱きしめる。

「!?え!?は!?ラヴィ!?」

「先輩?どうしたん・・・」

次にしかいに入った16Dに抱き着く。

「え!?ちよつとラヴィさん!?どうしたんですか!?放してください!?私には先輩が・・・」
騒ぎを聞きつけたみんなが集まってきた。のでとりあえず、視界に入ったのから片っ端に抱きしめた。

第157話

エージエントside

「ふう、みんなありがとう。よし！元氣出た。今日のご飯は豪華よ！楽しみにしてなさいー！」

私はウツキウキでご飯の準備を始めた。

「まあ、ラヴィが元氣になったのならいいか」

誰かがそうつぶやいた。

「さあ、出来たわよ！」

私の声にみんな集まってくる。それにみんな今日のご飯の多さに驚いているようだった。

「ラヴィどうしたの？今日はいつにも増してご飯の料理が多いわね」

「だってあんなに血をだしたのよ。しっかり食わないと血が足らなくなるわ！」

みんなが座りいつも通りの争奪戦が起こっていたが、今回の争奪戦にラヴィが参戦したことよってさらに激しさを極めた。結果、机いっぱいに置かれていた料理は一瞬で無くなった。

「ふうごちそうさまでした」

アフターコーヒーを飲みつつ自分の食べっぷりを振り返る。

「あ、そうだった。塔が崩れた理由話してなかったわよね」

「その件に関しては問題ありません。ラヴィさんが寝ている間にポッド042が話してくれました。ラヴィさん、本当に9Sの為にここまでしていただきありがとうございます」

210が頭を下げる。

「ラヴィさん私達の為にここまでしていただきありがとうございます」

姉妹が頭を下げる。

「ラヴィ（さん） 私達も同じ気持ちです。ありがとうございます」

ヨルハ組の3人も頭を下げて来る。

「やめろ。やめろ。頭上げて！いい？私はね、感謝されるのは好きだけどへりくだられるのは好きじゃないの。それに、まだ終わってない。祝杯を挙げるのはくそうね。11B達がヨルハから狙われなくなったならにしましょう」

「先が長くない？」

「目標はデカくないとね！」

「それは意味合いが変わって来るんじゃない？」

「まあまあ、それより明日以降の方針を決めよう」

ジャツカスがコーヒーを飲みつつ話を変える。なんだろう、すっごい絵になる。

「そうね・・・とりあえずA2と9Sのデータを2Bに移植しましょう」

「その件についてなんだが、9Sから先に頼めるかい？」

「構わないけど・・・」

「ありがとう。実はだね、9Sの修復は殆ど完了しているんだ」

「9Sの腕ですよね」

210はずっとそばに居るから分かるらしい。

「そうだ。私と姉妹の分を含めても、部品が足りない。それに、9Sは応急的にだろうが、2Bの腕を使っていたらどうか？アレは良くない。汚染されて義体から取った事もそうだが、単純に大きさが違いすぎる。できれば、同じS型機の腕を付けてやりたい。となれば、レジスタンスキャンプに戻るしかないんだ」

「ですが、レジスタンスキャンプは今やヨルハの本拠地ですよ！もし、何かあったら・・・」
「やっぱり、私達が戻るべきなんじゃ・・・元は私達が命令されたことですし・・・」
「私が戻ります」

210が手を上げた。

「私が戻ります。みなさんご存じの通り私は元オペレータータイプです。司令官とも面

識があります。それに、ジャッカスさんには9Sさんを修復して頂いた恩があります。その方を1人で行かせる訳には行きません」

「わかった。ならへりを使って私も行きましようか。どうせ正体がバレるなら派手にやってやろうぜ！」

「それいいわね！乗った！」

「先輩が行くなら私も！」

ヨルハ組が全員手を上げた。

「よし。とりあえず、その方向で。他になるかある人？」

「要請、ヨルハ機体9Sのブラックボックスの一時的停止」

「ポッド042ということですか？彼を一回殺せと？」

「今9Sの傍にいるポッド153は彼の命令により発言を禁止されている。解除の条件が9S・A2どちらかの生体信号の停止」

「だから先にいじる9Sのブラックボックスを止めればいいのね。分かったわ」

「感謝」

「本来ポッドは支援対象の命令は順守するはずです。何故、あなたはそれを解除させようとするのですか？」

「いいじゃない。アンタみたいなクソ真面目より」

「こういう性格な物で・・・」

そういう210もかなり発言が毒気づいて来たような気がするけど・・・そんなこんなで話もまとまり、各々寝る体制に入る。初めて姉妹に会った時の様に2人の間に入り、2人が眠るまで頭を撫でてあげた。

第158話

エージエントside

「両手の感覚がない……」

目を開け両手左右を見ると、右にデボル、左にポボルが乗っていた。どうやら私も撫でてる間に寝ちゃったみたいね。時間を確認するために右腕を動かそうとするが、微動だにしない。

「デボル、デボル起きて」

必死に下敷きになっている右腕を動かす。

「ん〜」

その揺れに気づいたデボルが動きポボルに当たる。2人が互いにもぞもぞ動き体が当たる。

「ん〜あ、ラヴィおはよう」

「おはよう。で、悪いんだけど、腕から退けてくれない?」

「あ、ごめんごめん。重くなかった?」

「感覚がない」

ウオッチを確認するといつもより2時間程遅かった。

「そろそろ起きないと。ポポル起きて」

2人でポポルの体を揺する。

「ん〜何よデボル。まだ、寝たい」

「いい加減に起きろっ」

デボルがポポルの頭を叩く。パコンっ！と軽快な音が響いた。

「あ〜ラヴィさんおはようございます。あ、すぐに退けますね」

ポポルが私の腕の上から移動する。感覚が戻ってくる。

「みなさんを起こしてきます」

「頼んだ」

私は体を起こす。まだ、傷が痛いが問題ない。顔を洗って屋上の上って風にあたる。

冷たい風にあたり一気に眠気が吹き飛ぶ。

「おはようございます」

「おはよう」

「ラヴィおはよう」

アンドロイドにも寝起きの良し悪しってあるのね。

「さて、みんないい？」

「問題ありません」

数分すれば、みんなそれなりに身だしなみを整えて集合する。

「それじゃ、昨日の通りに。何かあつたら連絡頂戴」

私は9Sの義体のそばに座る。

「ねえ、あなた一晩中彼についてたの?」

ポッド153から返事はない。だが、昨日の事を含めて話は聞いてるはずよね。私が9Sのブラックボックスに侵入する。ポッドは侵入に気づいてるだろうけど、それすら反応がない。膨大なデータの中から該当するデータを探す。

「改めて凄いわね。この膨大なデータやソースコード。これを全て手動で打ち込むの骨が折れるでしょうに」

データのの中を見てみるとブラックボックス信号の項目が出て来る。他のみんなにもやったように信号の周波数を変更する。

「それじゃ一度死んでもらうわよ」

ブラックボックスを停止させる。パソコンのシャットダウンの様に静かにブラックボックスが停止した。

「ヨルハ機体9Sの生体反応途絶。ポッド153。君は独断思考や、発言が可能になった」

ポッド042が言うがポッド153は反応しない。ポッドには目が無いけど、じつと9Sを見つめている気がした。再びウォッチを接続し、ブラックボックスを再起動する。

「システム再起動。ボディユニットチェック完了。ヨルハ機体9Sの再起動に成功」

「よし。上手く行った」

すると、9Sの傍を離れなかったポッド153が私の目の前に来た。

「ラヴィ、貴殿の働き大変感謝する」

頭を下げるような動作をする。

「へえ、ならそんな小難しい言葉使うなよ。なんて言うか、形式的な感じがする」

私の言葉に困惑するポッド153。何となく見て分かるようになってきた。私が微笑んで待っていると

「9Sを救ってくれてありがとう」

「どういたしまして。それじゃ、このデータの山から2Bのメンテナンスログを見つけ出すのを手伝って」

「了解。該当ファイルを発見」

仕事早い。そのデータを一つ一つ確認してウォッチにダウンロードする。

「よし。それじゃ聞いてたと思うけど、目を覚まさせるのはこの腕が治ってからね」

「了解。その件について。当ポッドもレジスタンスキャンプに同行する。また、一部ヨルハ部隊の情報を逐次提供する」

「だが、それは・・・」

「これは私の意思。それにヨルハはもうない。私は9Sを助けてくれたラヴィを守りたい。ポッド042、分かってくれ」

「了解」

「さて、話は纏まった？次はA2の方よ。今日のうちに9Sをキャンプに送り届けたいの。もたもたしてる時間は無いわよ」

A2のブラックボックスに接続する。

「A2の内に移行された2Bのデータを発見」

「これはこれは、結構な量ね」

そのファイルに保存されていたデータは一つ一つが大きかった。確認してからダウンロードするのも一苦勞ね。

「目が疲れて来た。よし、休憩がてら9Sをキャンプに届けるわよ。ジャッカス、210準備して。ポポル、ヘリの操縦お願い」

さて、一体何が待ってるやら。

第159話

エージェントside

キャンプに行くにあたってもしもに備え、ライフルを軽く点検した。

「ん？ キャンプに行くのかい？ 少し待ってくれ。今、アネモネに連絡を入れる」
「私がやるわ。無線機を貸して」

CALL

「こちらアネモネ。ジャツカス今度は何をやらかした」

「そうね。これからやらかすから事前申告ってとこね」

「ラヴィか。ちよつと待て」

アネモネと思われる足音が聞こえる。

「すまん待たせたな。で、事前申告とはどういうことだ？」

「これからヘリでそつちのキャンプに行くから」

「一応聞くが状況はキャンプの状況は分かっているな？」

「もちろん。だからこそ大胆に行くのよ」

「わかった。レジスタンスは私がいるから問題ないが、ヨルハに関して、ホワイトに

従ってる。何かあるかわからんぞ」

「用心しとくわ。あと余談なんだけど、包帯に使えるような布切れってあったりする？」

「あるぞ。わかった。それも用意しておこう」

「お願いね。それと、前に行ったこと覚えてるな」

「ああ」

「震えて待つてろ」

「行きましようか」

屋上に出ると、210が9Sをへりに乗せようとしているところだった。

「しっかり固定してください。突風にあおられたりすると危険ですから。それじゃ、離

陸しますね」

レジスタンスキャンプ上空

「おー慌ただしく動いてる動いてる。下にいるのはアネモネに……ヨルハの司令官様だぞ」

「諸悪の根源ね」

「全くですね。先輩」

あれ？16Dあなた前まで、司令官の肩持つてなかった？へりの高度が地面に近づくとつれ、銀髪の長い髪の女が私達の事を睨みつけるように見ているのが良く分かった。

「ポポル、エンジンは止めないで」

「了解しました」

ヘリから降りるとアネモネが近づいてくる。

「ほら、包帯だぞ。それで、見て分かると思うがホワイトがお前と話をしたいと言ってる。構わないか」

アネモネはホワイトの事を親指で指さした。顔が物凄い面倒くさそうだった。

「ええ。それと担架をお願いできる？」

アネモネが担架を取りにキャンプに戻って行った。それとすれ違うように

「どうも。テリア・ミレット・ハヴィランドだ。よろしく」

握手の為に手を差し出す。

「ああ。ホワイトだ」

互いに握手をする。

「お話の前によろしいですか」

「構わん」

私は戻って来たアネモネに担架を受け取るとヘリに戻ってジャツカスに渡した。ジャツカスが頭の方、210が足の方を持って9Sを運び出す傍にはポッド153。ホワイトは210を見て驚いているようだった。すれ違いざまに担架が止まる。

「アネモネこの2人用の部屋のベット借りるよ」

「わかった」

「司令官、何故私がこちら側に居るのかは後で落ち着いたらお話しします」

「良いだろう。60にも挨拶しておけ」

2人はキャンプへ入って行った。

「うちの9Sが世話になったな」

「いえいえ」

「それでだ。お前の後ろにいるのは11B・16Dで間違いないか」

「ええ」

「引き渡す気はないんだろう？」

「もちろん」

「お前の事は後で210に聞くとする。9Sの事は感謝する」

そう言うのとキャンプへと戻って行ってしまった。1人で話すだけ話して行っちゃった。その場に残ったのは私とアネモネだけだった。

「何というか、アイツは悪い奴では無い・・・と思う。ハア」

「アネモネも大変ね。さて、約束は覚えてるわよね？」

アネモネの体がビクツと震えた。

「なくには私は人類よ。幾ら本気で殴ってもアンドロイドには敵わないわよ。下手したら私の手の方が負けるかもね」

「何の気休めにもなっていないんだが・・・」

「ま、とりあえず、口閉じて歯を食いしばれ」

アネモネが目を閉じる。

ガゴンツ!!

辺り一带に金属が殴る音が響き渡る。拳にジーンと痛みが響く。

「ほら立てよ。もう一発いくぞ」

「え!? ラヴィちよっ!!」

アネモネの手を引いて立たせる。

ガゴンツ!!

もう一度一带に金属が殴る音が響き渡る。

「あー痛って・・・アネモネ大丈夫?」

「今まで殴られた中で一番痛かった気がする」

私の拳も今までで一番の痛みを経験してるけどね。

「そういえば、降下作戦の時に次あったらお茶の約束したの覚えてる? 今度こそできると良いわね」

「そうだな。畜生まだ痛む」

アネモネが頬を撫でながら言う。

「それじゃ」

私はへりに乗り込むのだった。

「それじゃ帰りますか」

第160話

エージエントside

「みなさーん着きましたよ」

扉を開けると日光が一番に差し込んできて少しまぶしい。

「ふくなんとか終わった」

「ちよつと拍子抜けね」

「かつこよく決めようと思ってたのに残念」

「先輩はいつ見てもかつこいいですよ」

こつちはいつまでも惚けあつてるわね。さていい休憩になった。さすがにそろそろA2のデータ移動も終わってるでしょうし今日中には作業終わらせたいのよね。頑張らないと。

アネモネside

ラヴィたちが乗ったヘリが飛んでいく。私はそれを頬を抑えながら見送った。あんなパンチ今まで初めて食らった。殴られた瞬間視界が歪んだ気がした。確かに、ジャツカスの言う通りかなり痛い。

「お〜いアネモネ。このキャンプってヨルハ用の部品って前はもつとあったろ？どこにあるんだ？」

「ヨルハ用の部品？ああ。それならレジスタンスとしては在庫切れだよ」

「在庫切れ？ヨルハ用の部品を使うなんてソイツは私以上のもの好きだな！」

「いや、ここ2カ月でどうやら瀕死のヨルハを修理したらしい。それも1体じゃなく、複数体」

私の視線が210に向いているのにジャッカスは気づいたようだ。

「あ〜・・・」

「アイツや16Dを修理したのは一体誰なんだろうな」

「ソウダネ・・・」

「まあ、在庫切れなのはレジスタンスとしてストックしてた分だ。ヨルハ側なら持つてらるだろう」

「え〜ヨルハかあ・・・ラヴィの所の2人を見てるとね・・・どうも以前の様に良い印象にはならないんだよな。とりあえず、話してみようか。おーい210」

「お呼びでしょうか？」

「すまないが、君の所の司令官殿と話をすることになった。少し付き合ってくれ」

「了解しました」

ま、暇だし私もついて行ってやろう。3人でキャンブ内のヨルハ側のエリアに向かう。ホワイトがいるのはそのエリアの一番奥なのだが、進めば進むほどヨルハからの視線が集まる。

「こう見られると落ち着かんな」

「210、君は随分と人気があるみたいだね」

「殆どが敵をみるような視線ですけどね」

ホワイトがいる部屋の前、そこにはヨルハ側から持ち込まれたサーバーと乱雑にまとめられた配線があり、オペレータータイプのヨルハが忙しそうに働いていた。

「210さん!？」

すると1人の金髪のオペレーターが210に飛びついた。

「210さん!?!ですよね・・・? ブラックボックス反応がしませんけど、210さんですよね?」

先ほどの視線とは違い彼女の表情は凄くうれしそうだ。一方の210は・・・なんでそこまで面倒くさそうな顔をする?

「いえ・・・私は21Bです」

「それ否定になつて無いです!!210!210さんです!!」

「はい。少し意地悪でしたね。元氣でしたか60」

「うわああああんよ」がっだああああ」

60が泣き始める。周りを気にせず大声で。それほど再開が嬉しかったのだろう。「ちよつと60泣き止んでください。みなさん見てますから!!」

「でもお!」

あーこれは長引くな。

「ジャツカス行こう。60、ホワイトはこの部屋だな?」

「はい!司令官さんはこの部屋にいらつしやいます!」

「ありがとう」

「60!あなたいい加減に・・・私もついて行かなきゃいけないのに」

「210、君の数少ないファンだ。大事にするんだよ!」

私は後ろで響き渡る60のうれし泣きを他所にホワイトのいる部屋をノックする。

「入れ」

「ホワイト話がある」

第161話

アネモネ side

「ホワイト話がある」

「失礼するよ」

ホワイトはジャツカスを見た途端険しい表情を見せた。その視線にジャツカスも気づいたようだ。

「そんな目を向けなくてくれよ。9Sの修理の件についてなんだが・・・」
「フンッ」

ジャツカス建前でいいから少しくらい申し訳なきそうに言わないからだぞ。

「ところでさつき一瞬誰かの泣き声が聞こえたが・・・」

「ああ。210と60が感動の再会を喜んでるところだよ」

「泣くほどか？まあいい。で、9Sの修復の件とは」

「そうだったね。詳しい事は210から聞いて欲しいんだけど、私達が9Sを確保した時、彼どういう訳か自らの腕を2Bの物に交換していたんだ」

「なんだと？」

9S・・・そこまで2Bの事を・・・いや、2Bの腕・・・!?自分の右手にか!?

「待て。待つんだ2人共。一旦思考を止める。その9Sに対する考えを止める」

その声には私はハツとする。

「詳しい話は210からとさつき言ったが、この件に関しては我々も知らない。つまり本人の口から聞くしかないという訳だ。で、横道にそれだな。本題に戻ろう。確保したと言ってもA2が9Sのその腕を切り落としていたんだ。2人を保護した私達は治療を施した。だが、腕の部品が無くてな。このまま2Bの腕を再び・・・とはしたくなかった。せつかくなら自分に合う物を使うべきだ。そこで、ここに戻って来たんだ」

「なるほど。ちよつと待てA2だと!？」

「一々横道にそれないでくれ」

「すまない」

ジャツカス、本題に入れなくてイライラするのは分かる。だがこんなに濃い話があるなんて私ですら予想外だぞ。

「もういい。早く本題に入らない私も悪かった。ホワイト殿、S型機の腕のパーツを提供して頂けないだろうか」

「分かった。案内させよう。誰か手が空いてる者は・・・?本人には申し訳ないが60にやってもらおう」

すると、ホワイトは無線機で60に命令しているようだった。

「よし、60の見た目は分かるな。外にいるだろうから案内して貰ってくれ」

「わかった。失礼する」

ジャックが部屋を退室する。

「失礼します」

すると、ジャックと入れ違うように210が入って来た。

「60と一緒にいなかったのか？」

「お話と同席しなければと思って引きずってきました」

「引きずったという・・・？」

「抱き着いて来たのでそのまま歩きました。外に出ればその後がありますよ」

私は扉の外にできているそのまま歩きました。外に出ればその後がありますよ。

「それで、何処まで進みました？」

「ああ。本題は終わったよ」

「そんな・・・」

「そう悲しむな。君のやることはまだある。さあ、ラヴィ達から聞いている内容を全部話

すんだ」

「わかりました」

そこからの話は私は以前聞いた彼女の出身の話。210自身に何があつたか。塔で何があつたか。何故私が殴られたのか。そこからこの世界に残る恐らく最後の人類であること。これは私も初めて聞いた内容があつた。

「人類は・・・もうラヴィさんと言うイレギュラーを残していません」

それを聞いた時、私は何とも思わなかつた。恐らく、ラヴィは私が混乱すればレジスタンス全体が危ういと判断して話さなかつたのだろう。確かに、あの頃の私は使命に従順だつたし、人類の存在など疑うという事すらしなかつた。だが、今の私は多少物事を落ち着いて、達観できるようになったと自負している。

「おい・・・アネモネ大丈夫か？」

「ああ。何、今更驚かん」

実際、地上のレジスタンスは一度は考える事だ。だが、私の反応を見たホワイトは少し、動揺している気がした。

「それで、ホワイトどうするつもりだ」

「その、なんだ、210彼女が人類だというのは確かなのか？」

「ええ。もちろん」

「分かつた。少し、考えさせてくれ」

「おい、1つだけ答えろ。ヨルハとしてはラヴィ達の存在をどう扱うつもりだ」

ここでコイツが殺すなどと言うなら私は全てを捨ててラヴィ側に就こう。

「ああ・・・とりあえず、レジスタンスと同じ方針でいい。あーできれば近いうちに彼女と話がしたい。だが、とりあえず考える時間がほしい。1人にしてくれ」

私は210と一緒に部屋を出る。うわ・・・本当に跡がある。

「で、どうします?」

「ジャツカスの所に戻って、ラヴィに報告しよう」

さて、ラヴィ貴様これからどう立ち回るつもりだ?

第162話

エージェント side

「よし。データ移行で何かエラーは出てないわね」

にしても骨が折れる。データを一つ一つスキャンする。データの総量が膨大なうえに、一つのデータのソースコードですらそれだけで分厚い本になるレベル。それを一人でチェックしているのだ。レジスタンスキャンペーンから帰ってきた段階で確認しても、全体の4分の1しか終わっていないなかった。

「これは今日一日で終わらせるのは流石に無理ね。今日はこれくらいにしましょうか」
そういう私の額には夕日が差し込んでいた。

「みんな〜ごはんよ〜」

私が呼ぶとヨルハの2人とデボルの2人が下から上がってきた。

「今日は少し手抜きだけど勘弁してね・・・」

「良いんですよ。ラヴィさんも偶には楽しないと」

「そうよ。それにあの鬱陶しい210が居なくなつて取り分が増えたしね」

11Bはいい加減に210と仲直りしなさいよ・・・

「にしても一気に静かになった気がしますね」

「居ないのは210とあの爆薬オタクだけなのにね。つたくあの変人今思えば毎度うるさすぎるのよ」

「その割には、懐かしそうな口調で言うわね」

「あつ、いやつそのお・・・とにかくあるの!」

もう素直じゃないわね。

「「ごちそうさまでした」

「お粗末様でした」

食器を洗いつつお湯を沸かして、それぞれのコップに入れていく。私とジャツカスはアフターコーヒーだ。

「それで、作業の進捗状況はどうだい?」

「やつと折り返しかな。データ一つ一つが膨大なのよ。そういえば、あなた達アンドロイドも同じようなデータ・プログラムが組まれてるって事よね」

「そうですね」

「ひゃー、精密機器の塊ね。それで、衝撃注意では無いとは・・・技術の進歩って凄いわね」

「そうだな。ラヴィが人類じゃなければ君の脳のデータを抽出したいよ」

抽出って怖い事言うわね。

「でも、ラヴィって私達の知らない事知ってるし私達アンドロイド特にヨルハはS型機以外は戦闘以外とりえないからなあ……」

「でも、今の先輩はバンカーで一緒だった時よりも自我のような物があると思いますよ」
「自我ですか」

「自我っていうのは、環境によつて形成されていくものだからね。まあ、みんな個性があつて大変結構。さて、そろそろ寝ましょうか」

コップを軽く水洗いしたのち逆さにする。そして、みんな徐々に横になる。

朝

「ほら、みんな起きて」

みんな、むくりと体を起こし、準備を始める。私は包帯を取り換える。傷を見るが流石にこの短時間でふさがったりはしないわよね。包帯を巻き終える。

「さて、折り返しは過ぎたし頑張らないと」

私はA2にウオッチを接続して作業を開始する。傍にはポッド042。やはり、ヨルハの事を聞くのはポッドが一番いい。だが、ポッドと私、この体制でも時間はかかる。これ、開発した人類に会ってみたいわ。さぞ、頭がいいんでしょね。

「ラヴィ、アネモネより通信」

「どうして直接かけてこないのかしら？」

「先ほどから連絡はあったがラヴィが無視していた」

なんてこった。あまりの作業量に無心になっていたのがマズかった。

「ごめん。すぐに繋いでもらえる？」

「了解」

「ラヴィ。今、時間いいか？」

「ええ」

「本当に大丈夫か？無理なら少し間を開けるが・・・」

すいません。さっきまで連絡に気付かなかっただけなんです。

「大丈夫。本当に大丈夫だから」

「わかった。これを見てくれ」

ポッドの画面に大量の文字が映し出される。

「なにこれ？」

「これは、私とA2が出会った頃、そして真珠湾降下作戦の私なりの記録だ」

真珠湾降下作戦。初めて会った時に教えて貰った作戦。A2がヨルハを裏切る理由になった作戦。前に聞いたのは掻い摘んだ話だ。それに、アネモネとA2の関係も気になる。

「読んでも？」

「勿論だ。別途質問は受け付ける」

第163話

エージエントside

アネモネから送られてきた記録を読む。A2のデータほどではないが、なかなか量が多く、そして小さく読みづらい。気休めになるかと思っただけ、追い打ちをかけている。私は時折目頭を押さえながら文章を読み進める。時折、アネモネに質問する。この記録最初こそ、アネモネのかつての仲間達とA2を含めたヨルハ部隊の初遭遇、ほほえましいエピソードなのが書かれていたが、後半になるにつれ戦闘の描写が増えていく。それに表現は生々しく、悲惨な戦いだったことが見ただけで分かった。

「ふう」

「読み終わったか」

「私もアネモネも変わらないくらい修羅場をくぐっているのね」

「・・・そうだな。それに残ったのは私とA2だけだしな」

「わざわざ質問にまで答えてくれてありがとうね」

「なに、少し懐かしくなっただけだ」

そういうアネモネの声は震えていた。この記録ではアネモネの仲間たちの様子は殆

ど記録されないが、互いに信頼しあっていた。いいチームだったんでしようね。

「あいつ等今の私を見てどう思うだろうな。私も随分と昇進した。私の姿、ローズ辺りが見たら、「皆を束ねる者の姿じゃない!」とか怒られるかな?」

「どうでしょうね? 案外、アネモネらしいと天国で笑ってるんじゃないかしら?」

「死んだら天国に行けるんだろうか?」

「さあね。私にもわからない。でも、あるって思っ生きてほうが頑張る意味があつていいじゃない」

「そういうものか・・・」

「そういうものよ」

確かに、アンドロイドに死後や、魂と言うものがあるのかはわからない。まあ、そもそも死後の世界があるのかしらね? 実際私も行けるかわかんないし。

「ま、それこそ神のみぞ知る・・・か」

「そうね。ありがとう。休憩にもなったしね」

「ならよかった。あと、恐らくだが近いうちにホワイトか210から連絡がいくと思う。ホワイトがお前との話をしたいと言ってた。ま、それ以外は未定だ。それじゃ、A2の事よろしく頼むよ。それと、姉妹によろしく言っておいてくれ」

「(ちら)そ。ジャツカスと210によろしくね」

「了解。それじゃあな」

さて、そこそこの時間休めたし残りも3分の1くらいだし終わらせよう。

数時間後

「あー終わったー！」

地面に大の字になって目を閉じる。長時間の作業によって疲労していた目をやすませる。目からジーンと涙が出てくる。

「ラヴィ、終わったの？」

「終わったわよー！」

寝転ぶとちようど柔らかい光が体全体に当たり、ポカポカして気持ち良かった。

「お疲れさまでした。これどうぞ」

目を開けポポルから水を貰う。一気に飲み干すと深いため息と脳が冴える感覚がする。

「やーめた。A2の事再起動するの明日にしよ」

今の疲れた状態でA2と再開なんて楽しめない。それにあんな記録見ちゃったら生半可な事は出来ない。私はその後疲れからかいつの間にか眠ってしまった。

第164話

EーJエンツside

「・・・体が痛い」

昨日は・・・A2の再起動の準備を整えてから、ポポルに水を貰って、飲み干して：あつそのまま寝ちゃったのか。時間を確認すると、いつも私が目を覚ます時間帯だった。生活リズムに感謝ね。体を起こす。

「あれ？私A2の横で・・・」

どうやら放置はされなかったらしい。いつも私が寝ている位置だ。隣ではデボルとポポルが手を繋いで寝ていた。この姉妹はいつ見ても可愛いわね。その奥では、16Dが11Bにバックハグされていた。この2人はいつ見てもラブラブね。起こさないようにしてA2のところに向かう。

「ラヴィ、おはようございます」

A2と2Bの間にいたポッド042が私に気づいた。

「おはよう。ところで少し聞きたいんだけどあの後私どうなったの？」

「ラヴィは作業終了後疲労から睡眠状態に入り、それに気づいた11Bがラヴィを運ん

でしばらく4人で談笑後、全員就寝した模様」

「運ばれてるのに起きなかつたなんて。自分のことながら信じられないわ。どんな風に運ばれてたの？」

「11Bが横抱きの状態で運送した」

「・・・？横抱きっていうと・・・」

「同行為の別名称として、お姫様抱っこが存在」

Wow。本当によくそれで寝てられたわね。

「よくわかつたわ。ありがとう。さて、今日はA2を再起動させるわよ」

「了解」

みんなを起こさないと。上に戻る。

「ふあくラヴィさんおはようございます。よく眠れました？」

「お陰様で」

「それはよかつた。デボルなんて死んじやつたなんて焦ってましたよ」

たかが寝落ちでそこまで言われるのか・・・

「ご自分で気づけないほど疲れていたのかもしれないませんよ」

そこには、幸せそうな顔をした16Dがいた。昨晚はお楽しみでしたね。

「2人とも、早く準備しなさいよー」

先に準備を終えたデボルに発破をかけられ人は身支度をしに行った。

「昨日はありがとうございました」

全員が身支度を終えて集合した。

「まあ、驚いたけどラヴィさんが元気になってよかったです」

「さて、A2を起こしましょうか」

みんなでA2が横たわっている所に行き、A2のブラックボックスにウォッチを接続する。

「再起動シーケンス開始」

CAL

「ラヴィ、昨日の今日ですまん。時間あるか？」

「アネモネ？こんな頻度で連絡が来ると言う事は何かあるのだろうか？とりあえず、A2の事はみんなに任せて下の階に降りる。」

「どうしたの？」

「ラヴィ、これから私はあまりにも突拍子のない事を言うと思う。それに、私自身も混乱してるんだ。それを了承してくれ」

「うん・・・分かったけど・・・」

「一体どんな話が出て来るの？」

「今日、ホワイトがヨルハに向けていった事を何と無しに聞いてたんだ。どうやらホワイトもお前が人類だと言う事を納得したようだな、それを人類会議に報告したんだそうだ。正直わざわざそんなウソ言う必要があるのかと思つたさ」

私もそう思う。報告したところで別に期待するような回答が来るわけではないでしょうに・・・そう思つていた。

「それに対して人類会議の回答だそうだな。ホワイトの言葉をそのまま言うぞ。「もし、ラヴィが人類ならば彼女こそ我々の希望だ！だが、我々には彼女を月面に送り届ける事は出来ない。彼女の為には地上を奪還しよう！そして、彼女に安心して子供を産んでもらえる環境を作ろう！人類に栄光あれ!!」

「は？ちよつと待つて？え？はあ？」

後半の勢いに私は開いた口が塞がらなかつた。え？子供？環境？

「ラヴィ、ラヴィ混乱するのも分かる。まだ話は終わらないんだ」

ええ・・・？

「その後ホワイトに呼ばれてな。聞かれたんだ。「ラヴィは子供産みたいと思つているのだろうか？」つて」

それ言つてから聞く？もう・・・色々滅茶苦茶

「わからんと答えた。そしたらな、「一応、種は準備できるから、必要な時は連絡するよ

うに」とラヴィに伝えろと言われてな。まあ、一応。だが私としてはラヴィの意思に任せたいし、今連絡したのも私の心を落ち着かせるためだし……」

「A2！待ちなさいよ！！ちよつと！」

「ごめん。どうやら面倒事みたい」

「分かった。殆ど話は終わりみたいだな物だし、わざわざ連絡しなくていいからな」

「どうも！」

通信を終了して急いで上の階へと戻る。

「どうしたの？」

「A2のバカの再起動が終わったから状況説明してたら突然走り出したの！」

「で、A2は？」

「屋上に！」

屋上へ

「おはよう。A2」

「何で生かした」

そこには、怒りとも悲しみともとれる表情のA2がいた。

第165話

エージエント side

「何で生かした」

そこには、怒りとも悲しみともとれる表情のA2がいた。

「アンタねえ・・・助けてもらってその言い方は・・・」

「あそこで死ぬはずだった」

デボル言葉を遮るようにA2は言葉を発する。

「質問に質問で返すように悪いけどならA2は何で死ぬつもりだったの？機械生命体を全て殺しきれてないし、司令部に対しての復讐も出来てないのに」

「そんなもの建前だ。死に遅れた私が、自分を許せない私が、自殺する勇気がない私が、逃げるために作り上げたものだ。余りの長さで私自身忘れていたがな。さあ、こつちの質問に答えて貰おうか」

「目的は、2Bがあなたに託したデータを使って2Bを再起動する。そして、2Bやバンカーが感染したウイルスを解析してそれと引き換えに11B達脱走兵の自由をヨルハ側に認めさせる」

「猶更だ。何故生かした。何故邪魔した。あのまま待つていてくれれば、私は死んで死体からデータを抜き取れば良かっただろう」

チツ、だんだん私自身イライラしてきている。こちら辺の連中、いやアンドロイドはどうもネガティブ志向が強いうえに、本人の意思を無視を曲解して物事を進めるのかしら？それに、ストレートに言わないと全く伝わらない。勘弁してほしいわ。

「A2、人の話は最後まで聞けよ。今言ったのは建前よ。建前。本当はね、A2あなたに生きて欲しかった。笑って欲しかった」

「くだらんな」

すると、ポッド042がA2の前に移動する。

「挨拶が遅れました。おはようございます。A2」

「おい、お前は私の覚悟を踏みにじるのか？」

「謝罪。私はヨルハ機体の支援という役目を放棄した。私は願ってしまった。誰もが後悔しない選択を。誰も悲しまない選択を。A2君が生きて笑っているという選択を」

A2は何も言わない。どうやらポッドも囁んでいるとは思わなかったらしい。

「ねえ、黙ってないで何か言ったら？」

デボルが捲し立てる。A2の顔が徐々に変わっていく。

「A2？とりあえず、下に戻って話しましょう？色々積もる話もあるんだし」

手をA2に向け差し出す。

「ラヴィ!!」

手を咄嗟に引つ込める。A2は武器を私に向ける。

「アンタいい加減にしなさいよ!」

「みんな落ち着いて!大丈夫だから」

武器を構え睨み合う双方を宥める。

「でも……」

「でもじゃない!武器を仕舞え!」

私の怒鳴った事で11B達は武器を仕舞う。一方、A2は武器を下ろす気配すらない。

「わかったわ。A2。2人で話しましょうか。それじゃ、みんなパスカルの村にでも遊びに行つておいで」

「ちよつとラヴィ正気!?!」

「勿論」

「ラヴィさん。こればかりは私も……」

私は無線機を取り出して8Bへと通信をつなげる。

CALL

「ラヴィイか？どうした？」

「突然で悪いんだけど、私を除いた4人そっちに遊びに行かせてもいい？」

「ああ構わんぞ。その代わり少しだけ仕事を頼みたいんだがいいか？」

「ありがとう。多分大丈夫だと思う。それじゃ、お願いね」

「という訳で話は付けたからいつてらっしやい」

私はみんなを信じてる。だから、みんなも私の事を信じて欲しい。流れる無言の間。

「分かったわ。ラヴィイ、私はラヴィイの事信じてるからね。上手くやってね!!」

ありがとうデボル。デボルに押されみんな出発する。拠点の屋上からみんなが見えなくなるまでA2は何もしなかった。

「さて、待ってくれてありがとうね」

「お前はよく武器を向けてくれる相手に1人になれるな」

「止められるでしょうからね。こんな事しようとしたら」

「何をするんだ？」

一息つくくと私は腰に下げた銃剣をライフルに取り付ける。

「殺し合いよ」

「ラヴィイ、お前はイカレてる」

「イカレてるどころじゃ済まないわよ。いい？私の事殺すなり戦闘不能にすればあなたは何処へ行こうと自由よ。ま、私はあなたを殺さないけどね」

「勝つ自信があるみたいない方だな」

「半々って所かしらね。GSとあそこまでやり合えたんだしいけるかなって。危ない所あつたけどね」

「私も舐められたものだな。ラヴィ、その調子じゃいつか死ぬぞ」

「今じゃないならどうでもいいわ。あら？さつき一触即発までなつたのにね？アレは脅かしら？それとも……」

私はこの一言でA2が本気になつてくれることを期待しつつ溜めてその言葉を発した。

「怖いのか？この臆病者？」

A2の鋭い目が見つめ刃先がようやくやくこちらを向いた。

「おい……その言葉、撤回は受け付けないぞ」

「ええ。さて、始める前に一つアドバイス」

私は親指で首を斬る動作をして、

「あなたが勝つたときは私をしつかりと殺すことをお勧めするわよ」

A2が構えの体制に入る。私も一息ついてA2を見つめる。A2が突っ込んでくる。

さて、
お互い楽しもうぜ!!

第166話

エージエントside

A2の攻撃を私は回避し続ける。9Sと戦って分かった。やはり人類とアンドロイドでは力の差がありすぎる。特にヨルハは一見小柄な9Sでも私の首を折りかけた。つまり、A2の力はそれ以上。刃を受け止められたとしても手が持たない。この私の不利に気づいているだろうA2は攻撃は重く、それでいて手数も多い。だからこそ、避けるしかないのだ。決定的瞬間まで。

「A2!どうした!さっさと私をやってみろ!」

A2を意図的に煽る。

「黙れ。その手には乗らんで」

A2はこれを機にさらに警戒してか、私との距離に注意するようになった。畜生。私としては近づかないといけなのに・・・仕方ない。無謀だが攻撃に転じないと。

「ツツ!!クソツツ!」

攻撃に転じた矢先A2の重い一撃を貰う。やはり9Sとは比べ物にならない程重たい。何とか受け流す。その際に無理な姿勢になってしまう。それをA2は見過ごさな

い。攻撃がさらに激しく重い攻撃が来る。無理な姿勢により、耐えることも徐々に辛くなる。押し返そうにも体勢的にどうしようもできない。ついに倒れこむ。冷たい瞳で私を見下すA2。刃を私に振り下ろそうとする。素早く腰のM45A1を引き抜きA2に向ける。この動きもある程度予想していたであろうA2は素早く距離を取る。よし！仕掛けるのはこのタイミング！！

「なっ！」

素早く立ち上がるとライフルを拾わずにA2に肉薄する。

「オラア!!!」

慌てて防御の姿勢になるA2の右手を思いきり蹴飛ばす。過去一番の強さで放たれた蹴りはA2の右手に握られていた武器を思いきり吹っ飛ばした。

「クソっ!!」

自棄になったようにパンチを繰り返してくるA2。それを躲し、咄嗟にパンチをして腕をつかみ私のほうに引き寄せる。バランスを崩したA2をがっちりとホールドする。

「離せ!!」

A2が私の腕の中で精一杯の抵抗を試みている。A2そのバカ力で抜けられるもんならやってみなさい。

「A2、私の勝ちでいいわね？」

「まだだっ！」

「いいわよ。好きただけ暴れるといいわ。私は付き合うわよ」

「ラヴィ離せ！どうして私のことを気に掛ける。私みたいな奴どこでどう死のうと勝手だろうが!!」

「黙れ」

私はA2の耳を私の左胸。心臓のあたりに持つてこさせる。A2の抵抗が弱まってきたことで私も息を整え心臓のペースも落ち着いたものになってきた。それと比例するようにA2も徐々に大人しくなっていく。

「A2、流石に私の勝ちでいいわよね？」

「・・・ああ」

A2はどこか不貞腐れたように答えた。

「ラヴィ・・・教えてくれ。どうして私を助けてくれた。いや、どうして私にかかわろうとする」

「そうね・・・ちよつとこの映像でも見て貰おうかしら」

ウオッチをA2の顔の前に持つていく。

「おいラヴィ、拘束を解いてくれ」

「嫌よ」

「もう勝負は付いてるだろうが!」

「敗者は勝者の言うことを聞くものよ」

「勘弁しろ・・・」

とは言いつ少し拘束している力を弱めてやる。確かに、A2は抵抗しなかった。

「今から見るのは、まあ、昔の私かな?」

歯切れの悪い私の顔をA2がのぞき込む。つい、昔の自分を思い起こす。そして、私の顔を見ているA2を覗き込む。この顔がああの映像を見たらどんな表情になっしまうか・・・正直見せたくない。だが、多分今の私が何を言ってもA2の心には響かないでしょうね。

「A2・・・すこし、私の昔話、いや懺悔に付き合ってくれる?」

第167話

エージエント side

私は保存されている映像の中から2番目に古い映像を再生する。

「突入する」

目の前の髭がいい感じの男がこっちに向かって言う。カメラというより、カメラを頭につけてる奴に向かってか。カメラが上下に揺れる。頷いたようだ。

「・・・1・2・3ッ」

男を先頭に目の前の部屋に入っていく。

「おい！床に伏せ・・・」

カメラに映るのは頭を撃ちぬかれて死んだアウトキャスト。彼らの大量の血で床の殆どが真っ赤になっていた。2人は奥へと進んで行く。

「おい！両手を頭の後ろに組んで跪け!!」

男の半身に隠れて見えなかった相手がカメラに映る。

「ラヴィ・・・」

映像を見ていたA2が絞り出すような声を上げる。そう。今、映像に映っている、両

手は血に染まり、顔には血しびきが飛んでいるこの不気味な女が私なのだ。

「・・・拘束しろ」

カメラが上下に揺れた後、カメラを持った方が後ろを向いた私に近づき、腕を後ろに組ませそれを結束バンドで縛る。そして、ついにカメラに近距離で私の顔が映る。

「ハハっ・・・我ながら酷い顔」

ついつい出る自虐。返り血でついた私の顔のドアップで映像は終わる。

「・・・A2どうだったかしらね？」

「ああ。あれは・・・ラヴィだよな？」

「そうね。あの映像のあの酷い面女は私よ」

「何があったんだ？今のラヴィからは想像すらできないが・・・」

私は保存されている映像の一番古い映像を再生する。

「これを見たら説明するわ」

カチャ

映像には麻袋をかぶせられた人物に拳銃が突きつけられている様子だった。すると、後ろから別の人物が近づき、麻袋を取った。袋を取られた人物は部屋の光を一瞬まぶしそうにした後自分のこれからの運命に気づいたようだった。そして、銃を突き付けている人物の顔があるのであろう方向を一瞬見てから正面を向く。

「ラヴィすまない。先に逝くことになってしまったよ。だが、君は強い女性だ。俺のことは偶に思い出してくれればいい。それじゃあな」

パンっ

銃声と同時に私は映像を終了させた。

「ごめんなさい。私もこの後は何度見ても耐えられないの。で、説明するって約束だったわね」

私は胸元からネックレスを取り出す。これは彼からもらった指輪をネックレスした物。

「私ね、彼と婚約してたの。私が任務でDCに召集されない限りこの映像が撮られた頃に式を挙げる予定だった」

今、自分の声は震えていると思うわ。

「それでね。私はこの映像を見た後のことを正直よく覚えてない。人から聞いた話だと冷酷で感情が見えなかったと言われたわ。敵を殺して、虐殺しつくして彼の仇をとった時がああ映像なのね」

「私と似ているな」

「そうね。今、A2に偉そうな事を言ってるけど私も同じだった。でも、だから分かる。一度でも感情を殺してしまう取り返しがつかなくなるわ」

「なら、私はすでに手遅れだな」

「そうじゃない。ねえ、A2あなた昔のこと思い出せる？あなたが司令部に裏切られる前、まだバンカーにいた時の楽しかった思い出、思い出せる？」

「少しくらいなら・・・」

「そうね。私の場合、彼と過ごした時間のほとんどが思い出せないの」
再び、ネックレスを取り出す。

「この指輪をもらった時のことも思い出せない・・・写真も残ってない。残ってるのはさっきの映像だけ・・・だからね、A2？あなたは手遅れじゃない。まだ、何とかなる。久しぶりに思い出してみたら」

「・・・ああ」

A2は私に体を預け目を閉じた。そろそろ体勢を解いてあげてもいいわよね？という訳で回していた腕を抜いて、後ろから彼女を抱擁する。

数十分後

「・・・ラヴィ」

「楽しい思い出あつ・・・A2!？」

振り返ったA2は涙を流していた。

「あ。いやっ何でもなッ」

涙を拭おうとする彼女の手を掴む。

「いいじゃない。誰にだってそういう思い出はあるわ。大丈夫。誰にも言わないから」

「ラヴィ・・・ラヴィ・・・」

私の胸に顔を埋めて子供のように泣きじやくるA2。頭を撫でてあげる。彼女の前方もなく長い間こらえていた物が一気に溢れ出ているようだった。

30分後

「あらあら寝ちゃった。まったくかわいい寝顔」

私の胸の中でA2は泣きつかれたようで寝落ちしてしまった。寝顔を見ているけど、やっぱりキリツとした表情も素敵だけど、私はやっぱり笑ったり、リラックスした表情が好きだな。

「ふあ〜」

私も眠くなってきた。最近、忙しくて疲れてたし私も寝ようつと。彼女を後ろから抱擁したまま壁に寄りかかって目を閉じる。夕方になればさすがにIIB達も戻ってくるでしょ。それじゃ、おやすみ〜

第168話

エージエント side

「ラヴィ、起きるんだ。起きたまえ」

誰かに体を揺さぶられ目を覚ます。

「ふわあく・・・ジャツカス？」

びっくりして目がさえた。体勢を変えようとして時、A2がいた事を思い出し、動きを止める。

「ラヴィおはよう」

「あ、おはよう。A2が起きちゃうからあまり大きな声出さないでね」

ジャツカスの声は寝ているA2に一切の配慮がない。

「大丈夫さ。彼女はこれくらいで起きないよ。何せ、先程揺らしてみたり、耳元で話しかけたりしたが一切反応がなくてね。諦めて君を起こした次第だ」

「成程ね。それで、一体どうしたの？」

するとジャツカスはポーズを決め、溜めて

「キャンプの居心地が悪いから戻ってきてしまったのだ!!」

なんでそれをドヤ顔で言うの。

「安心したまえ。それに、これを提案してきたのは210君だ。アネモネにも話はしてあるし、9Sの事を私たちの判断無しにヨルハ側に渡さない事を約束させた！」

うーん・・・まあ、一応筋は通っているけど・・・

「なんだうるさいぞ」

目を覚ましたA2が私の腕の中でモゾモゾ動く。

「ようやくお目覚めかい？ どう？ ラヴィの腕に抱かれた状態での睡眠は？」

ジャツカスに言われてA2は自分の状態を思い出したらしい。耳が赤い。

「あっ／＼／いやっその何でもない!!」

A2は私の腕の中から出てしまった。クソ。もう少しあの体勢でいたかった。

「それで、何の用だ」

A2は恥ずかしさからジャツカスを睨みつけている。

「そうだったね。本題に戻る、いやまだ本題に入っていなかったね。居心地が悪くなった原因なんだがね・・・」

ジャツカス side

「進捗はどうですか？」

210が修復状況を聞きに来たようだ。まったく、こんな面白味のない作業見て何が

楽しいんだか。なんて、思ったが口に出すのは辞めておこう。ふと、ラヴィもこんな事を言っていたことを思い出す。

「大方終わつたよ。これから最後の仕上げに入るよ。これを丁寧にしなないと違和感が残ることになるからね」

「成程。大切な作業なんですね」

「そんな事より君はあれに参加しなくていいのかい？」

私は顎でキャンプのヨルハ側を指す。そこではヨルハ達が起立して司令官の激励と指示を待っているようだった。

「参加しませんよ。私はもうヨルハではありませんしそれに……私も彼女達と同じように司令官を信じることはできません……」

彼女はどこか昔を懐かしんでいるようだった。さて、おしゃべりはこの位にして作業に集中しないとね。

「~~~~~!!」

かすかに司令官殿の声がかえる。よく声を通るものだ。そんな風に他人事に思つてた時だ。

「司令官！昨日送信されてきた人類会議の命令についての言及は無いのですか！」

全く、ウソを信じるというのは正直者の良いところであり、悪いところだねえ。 21

〇の表情は複雑そのままだった。そとでは司令官と正直者君が言い争っているようだった。

「なら、貴様はここに書かれたとおりにすべきだと?」

「そうです! デリア・ミレッド・ハヴィランドを拘束すべきです!!!」

「は? このバカは一体何を言っているんだ? 激しい怒りを覚え、私は気づけば、ヨルハ側に乗り込んでいた。私らしくないことは自覚してたさ。」

「おい。てつきり正直者だと思っていたがただのバカとは恐れ入ったよ」

私の突然の乱入で状況がさらに混乱したのは詫びよう。

「なあ、司令官殿申し訳ないがその命令とやらを見せてくれないか?」

「あ、ああ」

彼女からタブレットをひったくる。そこに書かれた命令を私はレジスタンスの仲間に見せるように読み上げる。

「デリア・ミレッド・ハヴィランドを拘束せよ。その後検査し、人類でないと判断された場合は殺害せよ」

随分と物騒な命令だね。

「デリア・ミレッド・ハヴィランドは人類を偽る罪深きアンドロイドです! これを野放しにすれば人類の名誉を傷つけます。それに! 人類は全員月に避難しているはずです!

地球に人類がいるなどありえませんか!!」

あくそうだった。私は頭を抱える。これを見てあのバカは勝ち誇ったような顔をしているが、私が悩んでる理由はそうじゃないぞ。

ガンツ!

悩んでいる私の頭に衝撃が走る。

「お前はトラブルを起こさないと生きていけないのか。すまないホワイト。邪魔したな。それに君もこんな奴に絡まれて災難だったな。ほら、さつさと来い」

「あゝれゝ」

アネモネにズルズルと引きずられていく。

「まったくお前は。はあ・・・全くなんでお前はラヴィみたいに上手くやれないんだ」

「本当だよ・・・」

「まあ、気持ちはわかる。それにこれでヨルハ側の極秘で進むことはない。その点では良くやった。それで9Sの修復はどうだ」

「どうしたんだい?今回は随分と軽いね」

「なんだ?さつききのげんこつじゃ足りないか?」

「いや、十分痛かった」

私は殴られた頭をさする。

「そうだろうあ。ラヴィに殴られた時のを参考にしたんだ」

なるほど。だから今までで一番痛いわけだ。まあ、いいだろう。

「それで、9S君の件だが、殆ど終わったよ」

「そうか。なら終わったらラヴィの所に戻れ。そして、この事を伝えろ。大丈夫だ。210は私が面倒を見る。なに、お前かラヴィの許可がない限りヨルハに9Sは渡したりしない」

エージエントside

「という訳で戻ってきた！」

「あゝok」

ジャツカスの話を整理しつつ脳を起こす。

「とりあえず、私の為にわざわざやってくれてありがとう。それで、私はこの後どうしたらいいの？」

「特には何も無いよ。君の好きにすればいい。だが、私の希望としては2Bを再起動させないかい？」

そうね。9Sの修復も終わったところだしポッド042も待ってるし・・・

「おい、だがいいのか？このままホワイトが押される形でヨルハが動き出したら危ないだろ」

うくん・・・よし!!この際だ!今後も考えて問題を一気に片付けてしまおう!

「で、ラヴィどうだい?なにかいい考えは浮かんだかい?」

「ちよつとの間旅行にでも行こうかしら」

第169話

エージエントside

「ちよつとの間旅行にでも行こうかしら」

「旅行？詳しくせ……」

「ただいまー!!」

ジャツカスの言葉が11B達の元気な声に遮られる。

「お帰り。どうだった？楽しめた見たいね」

11B達の顔には土がかなりついていていた。かなり激しかったみたいね。

「ちよつと!!なんで帰ってきてるのよ！爆薬オタク!!」

「はあ……記憶が正しかつたら私は死にかけの君たちを救った気がするんだがねえ。ま

あいい。それより、また一から説明するのか。面倒くさい」

ジャツカス、チラチラこつちを見ないで。

「なら、ご飯にしましょうか。それならジャツカスも話せるでしょ」

「ラヴィー！待ってました！」

みんな苦笑いで下の階に降りていく。

「ラヴィ、お前も大変だな」

「多分、そういう性分なんでしょうね。私は」

A2に慰められつつ私も下の階に降りる。

「あ、そうだ。ラヴィさんこれどうぞ」

ポポールから大きな袋を渡される。開けて中を見てみると、真っ白な小麦粉だった。

「いいわね。今日は無理だけど、近いうちに久しぶりに焼きたてのパンが食べられるわよ」

「楽しみにしてます」

ポポールから受け取った袋を傍に置くと私はご飯の準備を開始した。

「さあ、召し上がれ」

「いただきます」

「・・・いただきます」

みんな勢いよく食べ始める。今日は人数が多いのでそこそこの量を用意したつもりだけど・・・みんなよく食べるわね。見るとA2もおいしそうにご飯を頬張ってくれている。結局、食卓は戦場になるためみんなほとんど会話がない。私としては嬉しいんだけどさ・・・

「お腹一杯になった？ハイどうぞ」

みんなに食後のコーヒーやお湯を渡す。

「それじゃ、聞きましようか。まず、ラヴィさん、A2さん、あの後どうなったのか教えて貰えますか？」

なんだろう心なしか16Dの私の見る目に圧がある気がするんだけど・・・

「ん？私が来る前に何かあったのかい？」

「はあ、ジャツカスの話しもあるし、手短にかいつまんで話すと・・・」

ラヴィさん説明中

「ラヴィ・・・あのさあ・・・」

「ラヴィさん・・・人のこと言えないじゃないですか!!」

はい・・・ごもつともなご指摘でございます。私は終始彼女たちの攻撃に耐えるのだった。

「あくそろそろ私の話しいいかい？」

ジャツカスのこの一言でようやく私は解放されたのだった。

ジャツカス説明中

「はあ、やはり司令部は信用ならんな」

「A2さんが言うと言得力が違いますね。まあ、私も先輩もとつくに愛想つかしましたけどね」

「それで、どうするの？また前みたいに乗り込むの？」

「いや、私とA2で数日旅に出ようと思って」

「はっ？」

いや、ちよつと待て、ジャッカスとA2はさっき言ったでしょうが。

「待て、私も行くなんて聞いてないぞ」

「少数精鋭で行くならA2さん以上の適任はいないでしょうね」

「火力が高いのはコイツだしね」

「おい！お前らは何で誰もラヴィのこと止めないんだ!？」

あの～そんな言われ方するとこっちも傷つくんですけど・・・

「別に止める要素ないじゃないですか」

「それに何かあったとしてもA2の事見捨てたりしないでしょ」

「A2・・・私と一緒にイヤ？」

姿勢を低くして上目遣いでA2を見上げる。

「・・・わかったよ。クソっ／＼／＼」

「それでラヴィとA2が一緒に行くとして残った我々に何か指示はあるかね？」

「残ったみんなで2Bを再起動させて。それから彼女の面倒を見てあげて」

「え!?!ラヴィさん抜きですか!？」

「私が居ない時にヨルハが何か仕掛けてきた時に備えてね」

私が言わんとした事がみんなに伝わったようだ。

「わかった。2Bの件は私達が責任を持つ。2人は楽しんでおいで」

「ありがとうね。それとみんな、特に16D、ヘリを使いたいから移動は徒歩で」

「わかりました。それに状況が状況ですし、歩き回るのは控えますよ」

「さて、話もまとまったし寝ましようか」

みんな各々それとなく決まっている定位置で横になる。唯一定位置のないA2が私の横に来た。真似をして目を閉じているA2の頭を撫でる。最初は払いのけられたいたが、ついに抵抗が無くなった。そして、暫くするとスースと静かに寝息らしきものが聞こえてきた。ふふっ。寝顔も可愛らしいわね。

第170話

エージエント side

「うん・・・？」

右手を動かすとサラサラとした感覚がする。初めて触る不思議な感触が気になった。ゆっくりと目を開けると、私の右手はA2の頭に置かれていた。

「・・・起きたか」

やっべ

「ええ。おはようA2」

「おはよう。さつさと手をどけろ」

「その前に、寝心地はどうだった？」

「・・・悪くなかった」

「そう。よかった」

満足したので惜しみつつ手を放した。体を起こして髪を手ですいたり身だしなみを整える。

「それじゃみんなを起ここしましょうか」

「ああ」

「デボル・ポポル2人とも起きて」

「おい、起きろ」

A2と一緒にみんなを起こしていく。

数分後、

「改めておはよう」

「ラヴィ、お願いだから次からコイツにこの役任せないで」

「悪いんですけど、私からも同感です」

「私からも強くお願いするよ。2号は優しさってもものがない」

「そんなものあって何の役に立つ」

「ラヴィに撫でられて誰よりも早く眠ってた奴がよく言うわ」

A2がサツと顔を伏せる。私の位置からは一切見えないけど、顔真っ赤になってるんでしょね。

「それじゃ、2Bの所に行くわよ」

私達が2Bの所に行くと、ポッド042が出迎えてくれた。

「全く、ここまで来るまで長かった。とりあえず、これでひと段落になってくれるといいんだけど・・・」

正直、不安がないといえればウソになる。だけど、ここまで来たんだ。立ち止まれない。待たせてごめんなさいね」

私は2Bの義体にウオッチを接続する。

「再起動完了まで約30時間」

「30!?!」

「まあ、9SとA2のデータをインストールするからね。再起動するから時間はかかるのは仕方ないさ」

「それじゃ、みんな2Bの事よろしくね」

「ラヴィ、ありがとう。そして、道中気を付けてくれ」

「ねえ、16D?ポッドってこんなに感情豊かだったっけ?」

「いや・・・多分ラヴィさんの影響でしょうね」

「君達もそう思うかい?」

「ちよつと、割って入ってこないでよ」

「すまないね。だが、ラヴィと話していると何と言うか、語彙が増えると言うか・・・官能的な言い回しが増えると言うか・・・何と言うかわかるだろう?」

「あく分かります」

「私達も、アンタも今までが殺伐としすぎてただけよ」

ん？3人で何話してるのかしら？まあ、仲いいならもう私は言う事ないわね。

「さあて、いい加減出発かしらね」

「ラヴィさん、送りますよ」

という訳で、屋上にみんなが見送りに来てくれた。へりにかけていたブルーシートを外す。快晴の空の下。熱いほど照り付ける太陽の日は、ピカピカのへりのボディに反射している。私が操縦席に乗り込む。

「A2さん、適当なところに座って一応捕まってください。それと、飛んでる最中は上のローターがうるさくて、何も聞こえないので無線を使ってください」

ポポルが初めてのへりに戸惑っているA2に色々教えてくれている。

「ポポルこれでいいのか？」

「ええ。ラヴィさんそれじゃ」

ポポルが機体を降り、屋上の隅のほうにいるみんなの所へと戻る。そして、親指を立てる。

「それじゃいつてきまゝす」

機体が浮いて、高度が高くなり、みんなの顔が少しずつ小さくなっていく。もう、見えなくなっちゃった。

「ボンボヤ〜ジュ」

ジャツカスね。いったいどこでそんな言い回し覚えたんだか。

「で、これから何処に行くんだ？」

「よくぞ聞いてくれました。今回の旅の目的地は首都ワシントンDCです」

「なんだそのテンション。で、ここからどれ位かかるんだ？」

「そうですね。約20時間といったところでしょいか」

「ハツ!? 20時間!?!」

「はい。そこから現地の観光などを含ますと4泊5日の旅となります。機長を務めますはデリア・ミレッド・ハヴィランドでございます。長旅となりますがよろしくお願いいたします」

機長挨拶がうまくできた。そうして、しばらく飛んでいると

「おおくA2! 右見て右」

私に促されてA2が右側を見る。近くで鳥の群れが飛んでいたのだ。どうやら、数千年人類が地球からいなくなり、機械生命体があふれるこの世界で鳥たちは人工物に対しての恐怖が一切なくなってしまうようだった。あまり近づいてしまうと、ローターで鳥のミンチが出来上がる危険性があるのであまり近づけないのが残念だった。

「奇麗だな」

「そうね」

「前までの私は、この鳥たちを奇麗に思えたことは無かった。だが、どこから狂ったんだろうな。今の私はこれがすごく美しく見えるよ」

「いいじゃない。私の時代よりも自然が活き活きしてて、私としても新鮮な気分。あら、バイバイ」

鳥たちは私たちの機体から離れて行ってしまった。その後も私たちは荒廃した文明と違いさらに活き活きしている自然の美しさに感動しつつ飛行を続けた。

「ラヴィ見ろ。地平線に日が沈んでいく」

「幻想的ね。日が沈んだということは段々暗くなっていくわね。夜の飛行は危険だし、私も疲れたし、どこか着陸できそうな場所はない？」

「なら、あそこはどうだ？」

A2が指さした方向にはちやうど開けた草原があった。しばらく旋回してみたが、機械生命体は見当たらないので着陸することにした。

「あゝ腰痛い」

操縦席から降りて腰を伸ばす。大きく息を吸い込む。冷たくておいしい。

「軽く見たが、機械生命体は見当たらない。ひとまずは安全だろう」

「ありがとう。それじゃ寝ましようか」

私達は明日に備えて狭いヘリの中だが寝ることにした。

第171話

Eージエントside

「んつまぶしっ」

汗が滴る感覚で目を開ける・・・が余りの眩しさにすぐに目を閉じる。手で太陽の光を遮り再び目を開ける。ウオッチを見ると時間は今までとさほど変わらない。誤差の範囲だ。にしても、熱い。隣で寝ているA2の表情も苦し気である。

「A2、A2起きて」

「んああ・・・あつつい」

「飲む?」

私は一口水を飲んでからA2に渡す。幸いにも直射日光から外れていたため比較的冷たかった。

「すまん。助かった」

「とりあえず出発しましょうか。ここで留まってるよりは空にいるほうが涼しいですよ」

エンジン出力を上げてヘルメットを被る。クソ熱チイ。高度をとってコンパスを頼

りにDCを目指す。私もA2も暑さと眠気によって口数が少ない。
「・・・うわあ」

完全に廃墟と化した都市部が見えてきた。現在ハイウェイの上を飛んでいるが、大量の車の残骸がすし詰め状態になっているのが見える。

徐々にビル群が近くなっている。

「はあ、いくら遠い未来だからってここまで廃墟になると、心に來るものがあるわ」
そのDCに文明の影はなく、昔は日の光を反射していたビルのガラスは全て割れ、窓の一つ一つからは植物たちが日の光を求めて枝を伸ばしている。

「・・・ホワイトどころか真っ黒ね」

真下にあるホワイトハウスの有様を時間の流れと文明の滅亡の象徴のように感じられた。

「さて、あれが旅の目的兼、今日止まるホテルよ」

「ホテルにするには貧相な見た目だな」

「いや、最高の贅沢ね」

「??」

へりをホワイトハウス前の噴水後に着陸させる。

「はあ・・・」

建物正面に立って見上げる。今までの思い出が浮かび上がってくる。

「大変だったけど、守れた笑顔もあった。毎日がなんだかんだ楽しかったな・・・」

「おい。行くぞ」

A2に急かされ正面から中に入っていく。

「ラヴィ、私の後ろを離れるなよ」

「後ろは任せて」

中は全体的に薄暗いが、所々窓のある場所や壁が壊れて日が差し込んでいる。

「コンタクト!!」

一階部分は何もいなかったが二階には機械生命体が大勢いた。

「クリア!!さて、ドンドン進むわよ」旅の目標はまだ先の部屋だからね」

次のドアに耳を当てる。

ガシャン、ガシャンと金属が当たる音がする。

「大量にいるわね」

「こんなのが続くのか・・・」

「ドアに張り付いて。それじゃ、今回は私先頭ね」

パイプ爆弾に火を付け、それを少し開けたドアから中へと投げ込む。

「クリア」

爆発を確認してから突入すると、部屋のすべての機械生命体が倒れていた。

「こうすれば楽でしょ」

「そうだな。日が暮れる前に終わらせよ」

数時間後、

「クリア!!これでラストよ。お疲れ様」

「随分、ひどいことになった部屋だが・・・ここがラヴィの目的か?」

「そう」

私は、ボロボロになった椅子の上に落ちた枯れ葉を退け座って足を組んで偉そうにしてみる。

「人生でこの椅子に座ることなんてないと思ってたid e

「んつまぶしっ」

汗が滴る感覚で目を開ける・・・が余りの眩しさにすぐに目を閉じる。手で太陽の光を遮り再び目を開ける。ウオツチを見ると時間は今までとさほど変わらない。誤差の範囲だ。にしても、熱い。隣で寝ているA2の表情も苦し気である。

「A2、A2起きて」

「んああ・・・あつつい」

「飲む?」

私は一口水を飲んでからA2に渡す。幸いにも直射日光から外れていたため比較的冷たかった。

「すまん。助かった」

「とりあえず出発しましょうか。ここで留まつてるよりは空にいるほうが涼しいですよ」

エンジン出力を上げてヘルメットを被る。クソ熱チイ。高度をとってコンパスを頼りにDCを目指す。私もA2も暑さと眠気によつて口数が少ない。

「・・・うわぁ」

完全に廃墟と化した都市部が見えてきた。現在ハイウェイの上を飛んでいるが、大量の車の残骸がすし詰め状態になっているのが見える。

徐々にビル群が近くなつていく。

「はあ、いくら遠い未来だからつてここまで廃墟になつてると、心に来るものがあるわ」
そのDCに文明の影はなく、昔は日の光を反射していたビルのガラスは全て割れ、窓の一つ一つからは植物たちが日の光を求めて枝を伸ばしている。

「・・・ホワイトどころか真つ黒ね」

真下にあるホワイトハウスの有様を時間の流れと文明の滅亡の象徴のように感じられた。

「さて、あれが旅の目的兼、今日止まるホテルよ」

「ホテルにするには貧相な見た目だな」

「いや、最高の贅沢ね」

「??」

へりをホワイトハウス前の噴水後に着陸させる。

「はあ・・・」

建物正面に立って見上げる。今までの思い出が浮かび上がってくる。

「大変だったけど、守れた笑顔もあった。毎日がなんだかんだ楽しかったな・・・」

「おい。行くぞ」

A2に急かされ正面から中に入っていく。

「ラヴィ、私の後ろを離れるなよ」

「後ろは任せて」

中は全体的に薄暗いが、所々窓のある場所や壁が壊れて日が差し込んでいる。

「コンタクト!!」

一階部分は何もいなかったが二階には機械生命体が大勢いた。

「クリア!!さて、ドンドン進むわよく旅の目標はまだ先の部屋だからね」

次のドアに耳を当てる。

ガシャン、ガシャンと金属が当たる音がする。

「大量にいるわね」

「こんなのが続くのか・・・」

「ドアに張り付いて。それじゃ、今回は私先頭ね」

パイプ爆弾に火を付け、それを少し開けたドアから中へと投げ込む。

「クリア」

爆発を確認してから突入すると、部屋のすべての機械生命体が倒れていた。

「こうすれば楽でしょ」

「そうだな。日が暮れる前に終わらせよ」

数時間後

「クリア!!これでラストよ。お疲れ様」

「随分、ひどいことになった部屋だが・・・ここがラヴィの目的か?」

「そう」

私は、ボロボロになった椅子の上に落ちた枯れ葉を退け座って足を組んで偉そうにしてみる。

「人生のうちでこの椅子に座れるなんてね」

「ふくん」

あのA2・・・あからさまに興味ないみたいなの辞めて・・・

第172話

エージエント side

「さてと」

大統領の椅子を堪能した私は立ち上がって、執務室の4分の1を占領している、サーバーの前に立つ。

「流石に……動いてはないわよね……?」

軽く間から中を覗むが中は特に傷んでいる様子は無い。

「……よかった傷んでなくて」

ウオッチを繋いで電源を復旧させる。

「で、ラヴィいい加減教えてくれ。この旅の目的はなんだ」

「月面の人類サーバをぶっ壊す」

「……正気か?」

「当時、どのような思惑で作られたにせよ、今となつてはあれが諸悪の根源よ」

私は割れた執務室の窓からうつすらと見える月を睨みつけた。

「そうか。で、どうするんだ? こればかりは私も本当に分からないからな。おそろく、

ホワイトも知らんだろう」

「でしようね。だからここに来たのよ。勘だけど、ここにはまだデータが残ってるんじゃないかと思ってね。結果は予想した通り。サーバーが残ってた。しかも無傷で。これから可能な限りの情報収集って感じかしらね」

「で、私のやることは？」

「雑用で申し訳ないんだけど、枝とか枯れ葉とか集めてくれない？」

「分かった」

「それじゃ、A2気を付けてね」

「ああ」

A2の足音が遠ざかっていく。さて、やりですか。情報の一覧からそれらしい情報を探すが、なかなか出てこない。

「警告、このファイルは権限がある者のみ閲覧可能です」

権限？月面サーバーの情報が閲覧可能なセキュリティレベルは確認すると最高レベルだった。

「最高レベルか・・・もう今となつてはこのセキュリティレベルをパス出来る奴がどれほど残っているのかしら？」

ふと、先ほど座った椅子が目に入った。そして、荒れ果てた執務室全体を見渡す。

「ふふっ……昔は見るたびに憧れてたのに今となっては、ファイルを開けるためのパスに成り下がるとわね」

懐かしき過去を思い浮かべ、先ほどのファイルへと戻った。

「多分、いけるわよね？」

「承認。第■■■■代大統領エリア・ミレッド・ハヴィランド」

これでどんなセキュリティレベルでも問題なく通り抜けられるわね。

「さて、分厚いカーテンの中はどうかしら？」

そこにあつたのは月面サーバーが出来た経緯や、運用方法などが事細かく記されていた。しかしながら、その詳細の位置は残っていなかった。履歴を見ると削除された項目があつた。

「チツ……何とか復元できないかしら」

履歴からデータの復元を試みる。

「ええ……？復元してこれ？」

復元されたデータで施設全体の位置は分かったがサーバーの位置が分からなかった。

ピンポイントでやれないとなると……うくんどうしたものか……私の当初の計画では見せかけの資料運搬用のロケットの起動を変更して、サーバーに激突させる予定だった。しかし、データを見るとそれも厳しい。うくんどうしたものか……大統領の

権限でも……ん？あれ？私って今大統領？

「位置が分かんないなら全部吹っ飛ばせばいいのか！」

その時に私に電撃走る！直ぐに軍のデータにアクセスする。

「近くの……ええ？この位置にあるってことは座礁してるわよね……」

「戻ったぞ」

枝や枯葉を抱えたA2が戻ってきた。

「おかえりなさい」

「ラヴィ、こここの発射場にはいかないのか？」

「明日行くわ」

「さて、まだ明るいうちにご飯食べちゃいましょ」

噴水広場に戻り、A2が集めてきてくれた枝に持ってきた肉を刺して、焚火近づける。

肉が焼けるのを2人で待つ。

「偶にはこんな風にワールドなものもいいでしょ」

「そうなのか？私には分からん。それで、何か分かったか」

「一通りはね。これを食べ終わったら説明するわ。その後は、ここで物資調達とみんな

へのお土産ね」

「良いものがあるといいな」

「ええ。お、焼けたわよ」

地面にさしていた枝の一つをA2に渡す。肉汁が滴るそれにA2は思い切り齧り付いた。やっぱりA2の幸せそうな顔が好きだな。

「おい、あまりジロジロ見るな」

「あ、ごめんね。でも私やっぱりA2の幸せそうな顔が好き。そんな顔が守れたならこの傷も無駄じゃなかったかな」

「／／／／早く食べる。冷めるぞ」

「そうね」

私も目の前のウマそうな肉塊に齧り付くことにした。

数分後、

「ごちそうさまでした」

持ち手になっていた木の枝を焚火に突っ込んで燃やす。燃えていく様子を私たちはボーっと眺めていた。焚火がすべての燃料を燃やしつくし、徐々に火が弱くなってきたところで上から踏んで消化した。

「さて、ドキドキの夜のホワイトハウス探検と行こうじゃない」

銃の先についたフラッシュライトで照らしながら進んでいく。昼間のうちに機械生命体は片づけたので問題はない。

「武器庫はこれね」

電子ロックの扉は電力不足で開かない。そこで、扉に爆薬を仕掛ける。

「fire in the hole! fire in the hole! fire in the hole!」

爆破した扉は入り口の一部分が歪んだ程度だった。

「A2お願い」

「ふんっ」

扉はA2が一捻りで開いた。

「おっこれは宝の山ね」

扉が開かなかったことによって機械生命体も入れなかつたおかげで、数は少ないが、状態の良い武器が保管されていた。

P90

AR—15

SR—25

「明日の出発の時に運びだすようにしましょう。それで明日の目的地を説明するわよ」

執務室に戻ってきた。そして、上からプロジェクタースクリーンを降ろす。そして、プロジェクターの電源を入れウォッチを接続し、地図を表示する。

「座って」

「なんだか、ワクワクするな」

「これも、お土産に持って帰るわよ」

第173話

エージエントside

「それじゃ、始めるわよ」

プロジェクトターの映像が切り替わり、ホワイトハウスを中心とした地図が表示される。

「明日の動きとしては、朝起きてへりに物資を積み込んだら出発ね。まずはこの川岸に向かう」

「地図には何も建物は無いように見えるが?」

「調べたらここに理由はわからなけど、原子力潜水艦が座礁してるのが確認されたの。そこで調査とある物資を回収してから、さつきA2が見つけたロケットの発射場に向かう」

「・・・フツ／＼」

「A2どうかした?」

「いや、ラヴィの顔に地図が映ったんでな」

あープロジェクトターだからね・・・

「ああ、それと一ついいか？なんでわざわざ潜水艦で物資を回収するんだ？そこに何か欲しいものでもあるのか？」

「ええ。それも結構危ないのをね」

「危ないものか・・・楽しみにしておこう」

互いに不敵な笑みを浮かべた後、プロジェクターの電源を落とし、ヘリのところに戻って仲良く眠りについた。

朝

「・・・ああクソ」

今日もクソまぶしい日差しが顔に当たってまぶしさに嫌でも目が覚めた。

「今日も最高に晴れてるわね」

軽い身支度を済ませ、A2を起こす。

「ラヴィ、準備できたぞ。それじゃ、最初は物資の回収だったな」

役割分担をして、私は最初に昨日使ったプロジェクター一式をヘリに詰め込んだ後、A2を手伝って、銃をヘリに積み込むんだ。

「それじゃ、離陸するわよー」

こうして、私たちは今日の目的地へと飛行を始めた。

l l B s i d e

「ヨルハ機体2B、再起動の準備完了」

「ようやくですか。正直待ちくたびれました。」

「ほんと。20時間なんてどころじやないわ」

最初の予想では20時間で完了するはずだった2Bの再起動は、途中の小さな遅延が積み重なり、35時間程度に膨れ上がった。

「ジャツカスさん呼んできますね」

そう言うのと、姉妹の2人は屋上で涼んでいるジャツカスを呼びに行った。

「遂に起動できるんだね!!ああこの時待ちわびたよ。君たちもそうだろうか?」

「ハイハイそうね」

私たちが横たわっている2Bのところに集まると、どこにいたのかポッドも2Bの傍に寄り添った。

「それじゃ、眠れる美女を目覚めさせてあげようじゃないか」

「その言葉をジャツカスさんが言うとし違和感がありますね・・・」

「ラヴィさんという、語彙が豊かになりますよね」

「肯定。会話の内容を解析すると、日に表現の幅が広がっていることを確認」

会話内容を分析ってポッドも案外暇なのね。

「ボデイユニットチェック完了。メモリーユニットチェック完了。メンテナンスモード

終了。2B起動」

2Bの上半身がゆっくり起き上がる。

私は困惑気味の2Bの前に立つ。

「久しぶり2B」

「(´▽´)は・・・あの世?」

第174話

11B side

「ここは……あの世？」

ちよつと、久しぶりの仲間の顔見た第一声がそれってどうなの？

「変わって」

突然デボルに首根っこを掴まれ後ろに引かれる。

「おはよう2B。悪いわね。寝起きに死人の顔が目の前であれば混乱するわよね」

あつそつか。私、2Bの目の前で撃墜されたんだった。

「先輩、自分が死を偽装したこと定期的に忘れてますよね」

「つついね」

「つたく、アンタのせいで二度手間よ」

「すいませんねえ」

「まあデボルその辺にして。2Bさんが置いてけぼりになってるよ」

見ると、2Bが真顔の表情で座っていた。表情からは感情を読み取れないが、機能性だろうか。目線が遠くを見ている気がする。

「ごめん2B。それで、確認だけどアナタの最後の記憶はA2に刺された所まででしょ」
「そう。あの時・・・9S!9S!9Sは!?!」

「2B落ち着いて。それも含めて話すから。大丈夫死んではないわよ」

「そう・・・」

「それじゃ、時系列順に話して行くけど、長いから分からない所があったら遠慮なく質問してね?」

「わかった」

アンドロイド説明中

「2Bさん理解できました?」

「うん・・・でも、私のせいでA2と9Sが・・・」

話す前まで表情から感情は読み取れなかったのに、今は目に見えて落ち込んでいる様子がわかる。

16Dが2Bに寄り添う。

「2Bさんは悪くありませんよ。ただ状況が悪かっただけです。それに、結果論ですけど、A2さんに9Sを任せただけで結果的に良い方に進みましたし」

「でも・・・」

「ふむ・・・もしかしたらヨルハというのは感情が重いのかもしいね」

「それはないでしょ。9Sが重いつてだけで……」
すかさず意味は無いが、口を押える。

「私が……私がしつかり思いを伝えていれば……」
「アンタねえ」

ハイ……すいません。

「先輩、人の事言えませんか。私の事を置いて脱走した癖に」

ハイ……深く反省しております。

「それ言うなら16Dさんも言えませんか」

「私ですか?」

「忘れたとは言わせませんよ。あの時の狂ったような笑みはトラウマ級ですよ」

見事なK。0だった。やっぱり……ヨルハって感情重いのかな?

「まあ、でも今はこうして仲良くやってるんだ。それでいいじゃないか」

「そ・そうですね。2Bさん!」

「あ・・うん。それで、11B私はこれからどうしたらいい?」

「2Bはどうしたいんだい?」

「9Sに会いたい。会ってしつかりと思いを伝えたい。A2に9Sの事に関してお礼を
言いたい」

「推奨、このままラヴィとA2の帰還を待つべき」

「でも、9Sが・・・」

「今、2Bが独自に動いても出来ることは少ない。それに余計に場を混乱させてしまう」

「また・・・私は何もできないの？」

「私初めてだ。2Bのこんな悲しそうな表情を見たの。」

「少し待ってくれ」

「そういうジャツカスの手には無線機が握られている。」

「ああ。アネモネ少しいかい？」

「」

「そう。そっちの状況は分かってる。頼んだよ」

「」

「多分、いいんじゃないか？」

「」

「それじゃ、2Bに変わるぞ」

「ジャツカスが2Bに無線機を投げ渡す。」

「9S!!」

ポッドに現在の9Sの様子が映っている。

「おい……あまり大きな声を出すな。ホワイトに聞かれると面倒だ」
「あ……ごめん」

「まあいい。久しぶりだな。2B」

「うん……」

「気分はどうだ？」

「変な感じ」

「そうか。悪いが今の9Sに対して私達レジスタンスは何もできない。それが、ラヴィとの約束だ」

「そう……」

さらに、2Bの悲壮感が増してきた。その様子を無線越しのアネモネさんも感じ取れてるでしょうね。

「あ、ならお前ら全員でパスカルの村に行ったらどうだ？あの村の連中はいつも忙しそうにしてる。何か手伝って来たらどうだ？」

「……わかった」

「いいですね。パスカルさんも2Bさんに会いたがつてるでしょうし」

「久しぶりに、村の子供たちの相手でもしてやるか」

「そういう先輩もいっつも楽しそうじゃないですか」

村の子供達と一緒に遊んであげれば2Bも少しは元氣を出してくれるでしょ。

「さあ、そうと決まれば行きましよう」

ラヴィがヘリを使ってるからヘリは使えない。拠点から出ると、直射日光が顔に差し込んで眩しい。私達はパスカルの村に向けて歩き出した。

エージエント side

「見えてきたわよ」

「ああ。ここからでもデカいな」

まるで海岸に打ちあがったクジラね。まあ、ただ座礁してるだけなんだけどね。それも川で。その近くに降りて全体を見上げる。

「さて、ハッチは上にある。これをどう上ったものか？」

「おい、私は空を飛べないぞ」

別に何も言っていないんだけど・・・空を飛べたらそれこそ苦労しないわよ。ん？

「ねえA2、私の体って持ち上げられる？」

「ん？余裕だが」

カッコいいかよ。ライフルとスナイパーを地面に置く。

「A2、そこにいて。これから助走つけて飛ぶから私のこと持ち上げて」

「わかった」

A2から10メートルくらい距離を取る。

「いくわよー」

「ああ」

助走つけ、歩幅をそろえA2に向かう。

「今!!」

その瞬間私の体は一瞬中に浮いた。飛び上がったというより、本当に宙に浮いた。なんとか着地できた。もう少し勢いがつきすぎたら通り過ぎてた。手すりにロープを掛けA2のところへ投げる。

「すまん。ラヴィ強くやり過ぎた」

あの体が浮く感じ楽しかった。

「ほらさっさと行くぞ」

ハッチから中に入る。中は案外きれいだった。どうやら座礁した際に放棄されたようだ。

「何もないな。もともと期待はしてなかったがな」

船内を部色してるA2が残念そうに言う。私は、コンソールを操作して、核のロックを解除する。

「さて、弾頭を取り出すわよ。扱いに気を付けてね。もし爆発すればこの辺一带草の根

すら残らないわよ。

「わかった。十分気を付けよう」

コンソールを操作して、ミサイルの弾頭を一つ取り外して、へりに積み込む。

「じゃ、出発するわよ」

「操縦は、丁寧に頼んだぞ」

分かつてる。

〜数十分後〜

「この町の荒れようから予想はしていたが、やはり誰もいないわね」

「ああ。本当に、良く出来た見せかけだ。レジスタンスも私達も誰も気が付かなかったんだからな」

「だけど、これでこの見せかけを崩せる」

コンソールを操作して、資材運搬口を開く。中身は空っぽ。しかもゴミ一つない。本当に、ただ飛ばしてだけなんだろうね。

「せーの」

もしも爆発しないように、慎重にロケットにのせる。そして、保険として時限装置を作動させる。月までは約5日。

「さて、発射と行きましょうか」

コンソールを操作し、ロケットの資材搬入口を閉じる。そして、発射シーケンスを開始させる。ブザーが流れ、離れるようにアナウンスが流れる。

「さて、離れた所で見守りましょうか」

へりを使ってホテルの屋上に着陸する。

「さて、これで一つ片付くな」

私達の目線の先でロケットが天高く空へと飛んで行った。

第175話

エージェント side

「お〜」

飛んでいくロケットの様子を写真にとる。町の中にあるロケット発射場。昔の頃だったら絶対にありえない光景。SF映画を見てみたい。空の彼方へと飛んでいくロケットを眺めていると、ホテルの屋上から下に降りる方法を調べていたA2が戻ってきた。

「エレベーターはもちろん動いてなかった。どうする?」

「エレベーターシャフトから降りましょう。そして、中を調べる。つて言っても全部は無理だからほんの一部だけだね」

動いていないエレベーターへ向かう。ホテルということもあり、豪華な装飾されたドアが、歪んだ形で空いていた。多分A2がこじ開けたんでしようね。エレベーターシャフトの下をライトをつけてのぞき込むが底はもちろん見えない。

「A2、私が先に降りるわ。暗いから落ちないようにくれぐれも注意して」

ライフルをかけ、エレベーター用のワイヤーに手をかけ、慎重に降りていく。数メー

トル降りたところで、目の前にドアが見えた。手探りで足場を探し、慎重に降りる。落ちてしまわないように気を付けながらドアの前に立つ。精一杯の力でドアを動かすが、びくともしない。これはA2の助けがいるわね。

「A2!」

「なんだ?」

上にいるA2の傍をライトで照らす。

「このドアが開かないの。ライトで照らしてるから慎重に降りてきて」

「いや、よく見える」

そういうと、A2はすごい速さで降りてきた。

「待たせたな」

「A2・・・あなたねえ・・・まあいいわ」

私の反対側のドアにA2が付き、ドアの隙間に指を入れる。

「行くわよ。1・2・3!!」

ドアがゆつくりと開いていく。とりあえず、落ちたくないから急いで先に進む。中は以外にも窓からの日の光がさしていて明るかった。手前の部屋に入る。

「最上階だから予想はしてたけど、この部屋スイートルームよね? 荒れ果てるけど・・・」
部屋の鏡やベットの微かに残る装飾、テレビの大ききで何となくわかる。何と無し

に、テレビの下を開けてみた。

「何だこれ？」

A2が何かの箱をそこから出した。それはBlue-ray Discだった。見ると内容は映画らしい。パッケージを数個取り出してみると、映画を見ない私でもわかる作品が結構あった。

「これも持つて帰りましょうか」

「これが一体何の役に立つんだ？」

「上手く行けばプロジェクターで映画が見れるかも。大丈夫私も見たことある奴があるから、面白いと思う」

「別にそこは気にしてない」

あ・・・っそうすか。一通り部屋の物色を終えた。

「それじゃ、帰りましょうか。どうせ、全部の部屋見るなんて出来ないし、めんどくさいだけでしょ」

「そうだな」

私達は、再び暗いエレベーターシャフトを上って屋上に戻る。へりに乗り込み、離陸する。

「さて、お土産もいっぱいあるしみんな喜んでくれるといいわね」

「アイツらはラヴィが居れば何でもいいんじゃないか？」

「A2さん嬉しい事言ってくれますなあ。本当に可愛い。助けてよかった」

「・・・そうか／＼」

赤らむA2の顔。私は内心サムズアップした。さーて帰りの飛行も頑張るぞー。

11B side

村に近づくとつれて、賑やかな声が響く。

「ア、オネエチャーン！」

子供達の姿見えたと思ったら、すぐにこつちに気付いて寄つて来た。私達、村に入つてから一言も話してないんだけど・・・

「オネエチャーン、遊ボ！遊ボ！」

あつという間に、周りを取り囲まれてしまった。身動きが取れない。

「コラコラ。11Bさん達が動けなくなっていますよ」

64Bが出迎えてくれた。子供たちを注意する姿、上手く言えないけど様になつてるわよ。

「村の構造が変わってる？」

2Bが村を見渡しながら呟く。

「ああ。2Bさん初めまして。64Bです。覚えていますか？」

「脱走兵!?ポット司令部に連絡」

「2B、忘れているようだが、君もヨルハから見れば脱走兵だ。それに、彼女たちはこの村の発展に大きく貢献している。恐らく、彼女たちを失ったら子供たちは悲しむと思う」

「・・・わかった」

2Bが納得してくれたてよかった。ここで、争いになったら止めるのも大変だし、ラヴィが居ないのに後始末ができる訳がないからね。こう言うところはラヴィに絶対勝てない気がする。

「それで、今日はどのようなご用件で？」

「なに、ただ暇になったから遊びに来ただけさ」

「そうですか。それじゃ、子供たちをお願いしますね」

それを合図に子供たちがはしゃぎだす。さて、何をして遊ぼうか・・・

「2Bさんと・・・誰かもう一人ついていただけませんか？」

「私が行こう」

ジャツカスが手を挙げた。まあ、前回のジャツカス先生のお勉強会（笑）は質問攻めにあつて、大変だったものね。

「それじゃ、ついてきてください」

2人は64Bに案内され、村の奥に入っていった。確か、あそこは64Bの畑と家があるところだったはず。戻ってきたらなにを話したか聞いてみよ。

数分後、

8B達と一緒に2Bとジャッカス戻って来た。あれ？長引くと思つたのにな。にしても、2Bが持つてる袋あれ何がはいってるの？パンパンに膨れてるし、2B、前見えでないし……

「案外早かつたね。何話したの？」

「別に大した話はしてねーよ。私達なんて、脱走した時に追っかけられた位しか無いんだぞ」

「あ、それもそうか。それで、2Bが持つてる袋の中身はなんなの？」

2Bが袋の入り口を開けて中身を見せてくれる。それには、真っ白な粉が入っていた。何かわからず反応が出来ずにいると、

「まあ、これを理解して喜べるのはラヴィくらいだろうな。解説すると、これは粉にした小麦だ」

「私もさつき見た時は驚いたさ。小麦があんなに真っ白になるんだな」

これを使ってラヴィがパンを作ってくれるのか。たのしみだな」

CAL L

そんな事を考えていると無線がなった。

「11B、あなた今何処に居ますか!？」

「うるっさいわね。今、アネモネさんからの勧めでパスカルの村にいるけど……」

「はあ、マズイことになりました。アネモネさん。はい、村に居ると……え？あ、はい
変わります」

すると、ガサゴソと音がしたあと、誰かの咳払いが聞こえた。

「おい！11B、勧めた上で悪いが全員連れて村を離れろ！今、そっちにホワイトたちが
向かってる！」

「え？ちよつと落ち着いてよ。どういうことか簡潔に説明して」

「簡潔に説明するとだな。私がお前たちと通信して、暫くしてからホワイトがいない気
づいてな。周りに聞いたらパスカルの村に向かったらしい。これでわかったろ！さつ
さと離れろ！お前らが鉢合わせるだけで面倒事だ！」

最後の一言はちよつとどうかと思うんだけど。って言ったってみんな子供たちと遊
んでるし、子供たちが可哀そうだし……そんな事を考えていた時だった。

「おい！8B達に加え、なんでお前らまでいる!!」

村の入り口の方で、騒ぐうるさい銀髪が見えた。

「ごめん。もう手遅れみたい……」

「ああ・・・クソツたれ。こうなったら、頼むから問題を起こすなよ。こつちが持たん」
「大丈夫だ。任せたまえ。アネモネは私達の事を信頼しなすぎじゃないか？」

「お前が！それを！言うな！！」

荒い息遣いと共に通信が切られる。なんか・・・アネモネさんの気持ちがかかった気がした。すると、私の肩に8Bの手が乗せられる。

「とりあえず、お前らは何もしなくていいからな」

その方が楽でいいわ。

第176話

l l B s i d e

「おい」

入り口で騒いでいるバカ司令を眺めていると、22Bが声をかけて来た。

「なに？」

「悪いが、子供たちを見ていてくれ。なんなら遊んでやってくれ。私達が話し終わるまででいい」

「分かったわ。で、そっちはどうすんの？」

「とりあえず、パスカルを呼んでくる」

そう言つて22Bはパスカルの家の方に走つて行つた。

「私はどうすればいい？」

小麦の入つた袋を持つて喚くバカ司令の方を見ている2B。

「8B達との話が片付くまで私達から離れない方がいい。君が今行つたところで話が進まないどころか、ややこしくなるだろう。それに、ここにきた理由は君の慰問を込めているんだから子供たちと遊んでみるといい」

「わかった」

広場に降りて、子供たちに声をかけ広場から上がり上の方で集まった。

「ネーネーあのヒトはなににに来たノー」

「彼女は、パスカルや8B達に用があつたんだらう」

「オネーチャンなにして遊ぶの？」

さて、集まったは良い物の何をしましょうか・・・

「仕方ないか・・・よし、今日は私が授業をしよう」

まさかジャツカスが自ら苦境に飛び込んでいくなんて。見直したわよ。

「さて、今日は何をしようか。なにか、気になる事がある子はいるかな」

すると、子供たちは我先にと元気よく手を上げる。

「元気がいいねえ。それじゃ、その君」

「ヤッタ!!」

使命された子は嬉しそうに立ち上がった。子供っていいわねえ。

「ネエ、アカチャンはどうやってできるノ？」

その瞬間ジャツカスの顔が凄いいことになった。何あの表情。どうい感情から出た表情なのそれ。

「いや・・・その手の情報はそのピンクの髪のお姉ちゃんたちの方が知識や見解が・・・」

え？・そんなの？

「おい！・なんで君達目を逸らす！・ただの事実だろうが！」

「イヤーワタシタチシマイハ、ソウイウノワカンナイデス。カシコイジャツカスサンオシエテクダサーイ」

「声を揃えて言うんじやねえ!!」

今日は元氣ねジャツカス。かくしてジャツカス先生の授業が始まったのだった。

約1時間後へ

「だから・・・これで赤ちゃんができてからお母さんがすることだ。わかった・・・かい？」

ジャツカスが凄いくったりしてる。確かに子供の知識欲というのは凄いわね。ジャツカスが一つ話すたびに平均5個から6個質問が出るだもん。話が長引く訳だ。にしても、かなり小難しい話だったけど子供達分かってるのかしら？

「アリガトウ。オネエチャン」

小さく首を縦に振ったジャツカス。すると、私の耳元で小さく囁いた。

「嘘つけ。かなり専門用語を使って話してる。理解できてる訳がない」

「ちよつと・・・そんな事していいの？」

「こんな子供達にこんな事教えられるか。その様子だと君も分かってないね」

「ええ」

「まあ、君さえよければ後で解説しよう」

すると、1人の子供がジャツカスに寄つて来た。

「アリガトウ。オネーチャン」

「どういたしまして」

ジャツカスも、子供相手だとあんなに優しくなれるのね。

「話ハよく分かんなかったケド、オネエチャンの困つてる様子ガオモシロかった」その瞬間、ジャツカスの顔が真顔になった。

「あー・・・ジャツカスさん・・・？」

「すまないが、話しかけないでくれ。すこし・・・頭を冷やしてくる」

そう言つてジャツカスは奥へトボトボ歩いて行つた。

「さすがに私でも同情するわ。変なこと教えないように頑張つてたのが裏目に出たわね」

ジャツカスが本当に可哀そうになつてきた。

「ん？デボルあなたあの話わかつたの？」

「・・・つすゝゝ」

つまり、ポポルも・・・

「……………つす〜」

「姉妹なだけありますね。反応まったく一緒ですよ」

「なんか、本当に姉妹なんだなって改めて認識した。」

「おい」

後ろから声かして振り返ると、そこにはバカ司令がいた。その後ろには60と8B。

「な…………」

私が声を出そうした瞬間16Dから手で制される。

「先輩、ここは私が」

16Dが私の前に立つ。

「司令官さんこんにちは。お話は終わったんですか？」

「ああ？見てわからんか？」

「なんで、コイツは一々腹立つような言い回ししかできないの？」

「出過ぎた真似を失礼しました」

「ちよつと！なんで謝るのよ16D！」

「フンツ」

「テメエ…………一回殴らせろ。その真つ白な衣装ぐつちやぐちやにしてやらあ…………」

ガシツ

!!私が左右を見ると、デボルとポボルが私の腕を凄いい力で抑えている。あ．．．ポボルさん．．．ちよつと力を弱めて頂けませんか。食い込んでですけど．．．

「それで、何か御用ですか？」

「一つ聞きたい。後ろにいるヨルハは2Bだな」

「はい。司令官。私は2Bです」

2Bが前に出る。

「コイツらにすべて聞いたか？」

「はい」

「私が憎いか？」

．．．．．重苦しい沈黙が流れる。

「私には．．．わかりません」

「そうか。なら．．．再びヨルハに戻ってくるか？」

「それは．．．」

「否定」

突然、2Bの後ろに控えていたポッドが2人の間に入る。

「ポッド？」

「私としては2Bはヨルハ部隊に復帰すべきでないと考えている。さらに、それを強く

2 Bに推奨する」

「お前には聞いてない。決めるのは2 Bだ」

すかさず、クソ司令が言い返すが少し驚いているのが誰の目からみても明らかだった。

「そう。答え、決断するのは2 Bだ。だが、ポッドはその決断をサポートする役割を持っている。今、司令官によって提示された提案は2 Bの身の安全が保障されていない」

「私が部下を手にかけると?」

「そこまでは言っていない。だが、2 Bを人質に取られるとラヴィの交渉に影響する恐れがある」

おー! 2 Bのヨルハ復帰を人質と言いつけるとわ。

「どういうことだ? ラヴィの目的は1 BやA 2だろうか? それに、ずいぶんと口を挟むな。お前色々おかしいぞ。一度検査を受けたらどうだ?」

「否定。当ぼつどの任務は2 Bのサポート。自己診断の結果異常は見られない。それに……」

ポッドが少し間をあける。まるで、大きく息を吸い込むように。

「ラヴィはかなりのお人好しだ」

「ハハハハハハ!!」

静寂を打ち破るようにジャッカスが大笑いしだした。

「突然うるっさいわね！何がおかしいのよ！」

「ヒーヒーだって、だって、ラヴィがお人好しって理由になつてないし、そこまで溜めていうものでもないだろう。今の一連の流れをポッドがやつてるといふのが可笑しくて可笑しくて」

早口で説明するジャッカスはまだヒーヒー言つてる。

「そうか。なら、ラヴィが帰つてきたら連絡してくれ。予定を調整したい」

そういうと、クソ司令と60が村を出て行つた。60が去り際何でも後ろを振り返り、2Bさんのことを見ていて少し切なくなつた。

「終わったな」

「そうですね。先輩」

「ポッド。よく言つたぞ。私たちも見ててスッキリした」

64Bがポッドを撫でていた。

「無事に終わりましたが、大変疲れました」

ジャッカスが空気に圧倒されていたようで、疲れた様子だった。

「みんな。おつかれ」

私たちは、互いに疲労を労いあつた後、子供たちと少しお喋りして拠点に戻つた。に

しても、ラヴェイはいつ帰ってくるんだらう？その日の終わりにそんなことを考えながら眠りにつく。翌日、私たちはヘリのローター音で目覚めるのだった。

第177話

Eージエントside

ロケットの発射を見送った後、ぶっ続けてへりを操縦して前と同じ場所で休んだ。次の日、雨と強い風が吹いたのでその日はそこで待機した。次の日、雨が止んだことを確認して朝一で離陸して昼近くになってやっと、廃墟都市上空に戻って来た。

「はー・・・帰って来たわね〜」

「なんだかんだで、長旅だったからな」

見慣れた景色に安堵しつつ拠点の建物の屋上にへりを着陸させる。

「は〜」

体を伸ばすとゴキッゴキッという音と共に気持ち良い感触が伝わってきた。

「とりあえず、連中に帰ってきたことを伝えたらどうだ。土産は量がそこそこ多いからアイツらにも手伝ってもらおう」

「そうね。でも、なんか静かな雰囲気がない？もしかして、みんなでどこかに行ってるんじゃない？」

階段を下りて、部屋に行くと何とみんなスヤスヤと寝息を立てていた。

「A2・・・?」

すると、奥から2Bが出て来た。

「ああ・・・あく久しぶりだな?」

ギョツ

「!」

2BがA2に抱き着いた。突然の行動にA2の動きが止まった。

「おゝ微笑ましいわね。ポッド」

「肯定」

気のせいだろうか?ポッドのアームがクロスしている気がする。それ、腕組のつもり?お前は、2Bのお父さんか。

「2B／／／おい／／／離せ／／／」

「良かった・・・良かった・・・本当に・・・本当に・・・」

今、2Bの顔はA2に埋もれて見えない。だけど声が震えている。そして、A2こつちを見るな。自分で考えなさい。という訳で、私とポッドはここで微笑んでるから。大丈夫。余計な口出しはしないわよ。

A2 side

クツツがラヴィの奴・・・ポッドの奴もなんで見てるんだよ!んでコイツの抱き着く

力強いな！クソ！どうする？とりあえず2Bを落ち着けないと。何か・・・何かないか・・・？私は2Bの頭に手を置いた。手が置かれたA2はピタつと動きを止める。優しく頭を撫でてやる。コイツの髪、私の髪と違ってサラサラしてるな。私の髪は・・・

「おい。落ち着いたか？」

「うん」

そうか。なら悪いが離れてくれ。

「ヤダ」

「ならせめて力を緩めてくれ」

「ヤダ」

コイツ・・・!!いいよ。やってやるよ！

ギョツ

「!!」

私も2Bに抱き着いてやった。2Bと同じ強さかそれ以上に。ふとラヴィのほうを見るが、そのほほ笑みは変わらない。

「A2痛い」

「そっくりそのまま返す」

自分がどれくらいのかで抱き着いていたかやと理解した2Bはゆっくりと力を緩

めた。

「・・・ごめん」

「やっと話ができる。だが、まずはお前に謝らないとな。私はあの時お前から頼まれた9Sを正しい方向に導いてやれなかった。それどころか、殺し合う始末だ。本当にすまなかった」

「私が悪いの！私がつと上手くやれていれば2人が殺し合わなくて済んだのに・・・私・・・過信してた。9Sは思考回路が優秀だから私の思いを分かってくれると思ってた。本当に・・・本当に・・・ごめんなさい」

「私もかなり不器用だ。アイツのお前に対する思いを理解できなかった。いや、しようとすらしなかった。私にも落ち度はある。それより、考えるべきは9Sのことだ」

「・・・わかった」

エージエントside
2人が互いに傷を癒し、慰め合い、ともに前に進んでいこうとしている。うん！実に素晴らしい光景ね。ポッドと顔を見合わせる。

「でも、9Sが悪くないわけじゃないけどね」

耳元で聞こえたささやき声に驚いて後ろを振りむくと、そこには16D、デボル・ポル姉妹、ジャツカスが立っていた。

「びっくりしたあ。ただいまみんな」

「ラヴィー！お帰り！」

突然、デボルに抱き着かれバランスを崩して垂れ込んだ。

「あ」

倒れ、視界が逆さまになる。そして、2人と目があった。

「あ、A2もお帰り」

「あ、ああただいま」

あの〜デボルさんどけて欲しいんですけど・・・

「おい、どこから聞いてた？」

「ああ〜久しぶりだなの辺りから」

「つまりほぼ最初からさ！」

ジャツカスのトドメの一撃！

「もういい・・・全部聞いてたんだろ。それでせっかく帰ってきたのに出迎えが無しとはどういうことだ？」

「いや〜ね。昨日2Bの慰問を兼ねてパスカルの村に行つてそこで遊び回ったからね」
なるほど。それでみんな寝てた訳だ。ん？みんな？

「あれ？11Bは？」

全員いると思ったら11Bの姿が見えなかった。

「先輩ならまだ寝てますよ」

あらあら。随分な寝坊助さんね。

「チツ。叩き起こしてやる」

A2がスタスタと11Bの所へと歩いていく。ここでやつとデボルが退いてくれた。よっこらせ。私もみんなの後を追いかけて11Bの所へ行く。

「スヤスヤ寝やがって」

11BはA2が言う通り本当にスヤスヤ寝ていた。

「先輩。先輩。朝ですよ。ラヴィさん戻ってきましたよ」

16Dが揺すつても起きる気配がない。

「先輩!」

全く起きない。

「いい加減起きろ」

ガンッ

A2が寝ている11Bのお尻を蹴り上げる。今の音・・・本気じゃないわよね・・・?

「痛つった!え?何?何?敵襲?」

「おはよう」

「……」

キヨロキヨロと周りを見渡す11B。全員に囲まれている事と、何となく状況を察したらしい。

「あくお帰り。ラヴィ、A2」

「ああ。ただいま」

「それじゃ、先輩起きて身支度しましょう。私達もまだですから」

16Dに手を引かれのっしりと起き上がり、みんなで身支度のために奥に消えていった。

数分後

「それじゃ、改めて。おかえりなさいラヴィさん」

「ただいま」

「当初の予定よりだいぶ長旅だったね」

「そうね。でも、たくさんお土産があるのよ。量が多いから運ぶのを手伝ってくれる？」
という訳で、ヘリからみんなでお土産を運んだ。

「凄いなだね。それに……見たことも無い銃や見たことも無い機械。うくん実に興味深い」

「それじゃ、これの解説を含めて私達が何をしてきたのか話していきましようか。あゝ

「長話にもなるし飲み物片手に聞いてね」

私はそこから数時間。なんやかんやで昼まで話続けたのだった。

第178話

エージエントside

「これで私の話は終わり。あー喉乾いた」

私はコップの水を全て飲み干した。喉に潤いが戻ってくる。

「お疲れ。次は私達の話ね。って言ってもそっちと違ってそんな濃くないよ」

「いいからいいから」

「喉も乾かないよ」

そこまで、長くないみたいで結構。

「本当に短いですよ？」

数分後

「なるほど。2Bの存在がバレちゃったのか」

「何かマズかったでしょうか」

「別に。バレて無かったらサプライズしようぐらいしか考えて無かったし」

「ならよかったです」

「おい、2B。村の連中の様子はどうだった？」

「楽しそうだった。8B達も私の事笑顔で迎えてくれた」

「そうか。よかったな」

そう言つてA2は2Bの頭を撫でていた。

「A2さんは2Bさんのお母さんみたいですねえ」

「「わかる（ます）」」

「お前らなあ……」

「おい、君達忘れてないかい？村に行つたときホワイトがラヴィが帰つたら連絡を寄越すように言われただろう」

チツ

「なんで覚えてんのよ」

「11B？あなた私と出会つた時と比べて確実に性格悪くなつてない？私のせいかな？」

CALL

久しぶりに腰の無線機がなる。この周波数はアネモネからか。

「ラヴィ、この無線が通じてる事は戻つたんだな」

「ええ。ただいま」

「ああ。お帰り」

「ごめんなさいね。連絡が遅れて」

ヘリのローター音で絶対気づいてたでしょうからね。

「ああ。私は問題ないぞ」

「私は？」

「ああ。私はこの件に関わってないからな。その・・・分かるだろう？」

ああ・・・もう・・・これから交渉しなきゃいけない事が山ほどあるのに・・・会って話す前から印象最悪よ。はあ・・・

「あー・・・アイツを呼んでいいか？イヤなら私が何とかするが・・・」

アネモネ。それをイヤそうに言ったら意味ないわよ。ま、そんな事しないけど。

「やってやるわよ」

「それでこそラヴィだ！」

分かりやすいとかそんなレベルじゃないわよ。

「それじゃ少し待ってくれ」

足音が遠ざかっていくのが聞こえる。ホワイトが出るまでに覚悟を決めなきゃいけないのか。チクシヨウ・・・やってやるよクソが。足音が2つ近づいてくるのが聞こえた。

「おい。聞こえてるか？」

「ええ。どうも。まずは最初に。連絡が遅れたこと大変申し訳ない」

「ああ。どうせ、アイツらの特に思い当たるのは11Bあたりが言わなかったんだろ」

微かに後ろで「バレてる。なんで？ 気持ちわるっ」って聞こえたんだけど・・・

「え、ええま、まあね。それで、用件は何かしら？」

「2Bもよみがえらせたんだろ？ 前も話した通り、会って話をしようじゃないか。こつ

ちはいつでも用意が出来ているが？」

「分かったわ。それじゃ2日頂戴？」

「構わん。それじゃあ2日後に会おう。当日、21Bと60を案内に寄越す」

「OK。それじゃ、2日後に。ラヴィアウト」

「さて、ご飯食べて寝ましようか」

「ちよつとラヴィ2日しか間ないのに、悠長なことしてて良いの？」

「うん。どうせ、2日間大したことしないし。それより、ご飯にするからみんな座って

座って」

みんなそんな私の様子に首をかしげていた。訂正1人そうでも無い奴がいた。

「ラヴィのご飯。久しぶりだなあ！ 楽しみだ！」

このキッチンに立つのも久しぶりね。横には11B達の話にあった小麦粉が置かれていた。中を開けて見て見ると真っ白の小麦粉が入っていた。

「明日は長らく待った。パン作りね」

だが、今日は話疲れたし、がつつり肉を食べたい。という訳で、かなりの量の肉を焼いた。

「「いただきます」」

それを全員で食べ、そして私はすぐに眠り着いた。食べてすぐに寝るのは体にはよくないけど、精神の健康的には間違っていないね。おやすみ。

朝

太陽の光が顔に当たり眩しきで目が覚めた。目を開けると見慣れた天井。今日からまた日常が始まるんだなあ。上半身を起こして体を伸ばす。屋上に上がって顔を洗って風を浴びる。

「ふう。さて、みんなを起こしますか」

下に戻ってまずポポルを起こす。その次に16D、11B順々に起こしていく。そして、みんなが身支度を終えて下に戻って来た。

「さて、今日はみなさん待望のパンを作りたいと思います!!」

「「イエーイー！」」

「また食い物か？おいラヴィなら私はパ・・・」

「ごめんねえA2。この作業、力使うしそれにね」

私は大きく一呼吸置く。

「あなた達食いしん坊アンドロイド達が毎回の食事で満足するまで食べたら一体何日で無くなるのかしら？」

私達の拠点に冷蔵庫という物はないから持って数日。だけど、みんなの食いつぶりからその数日すら持たない。正直勘弁してほしいのだ。毎日パン生地をこねるなんて。

「という訳だから手を洗ってきてねー」

「ハイー」

A2も観念したように手を洗いに行く。そんなA2の肩をジャツカスが叩く。

「そういえば、私も最近科学者っぽい事何もしてないんだ。まあ何も決められた役割だけを果たす必要もないさ」

「ジャツカス知ってるー？料理も一種の科学なのよー」

「すまん。二号。今免罪符が出来た」

「勝手にしろ・・・」

ジャツカスはウキウキでA2は渋々手を洗ってラヴィの所に戻るのだった。

第179話

エージエントside

しばらく待っていると渋々手を洗いに行っていたA2も戻って来た。という訳で調理を始める。まず初めに小麦やら砂糖やらをぶち込む。それを混ぜる。それに牛乳と水を加えて混ぜる。そして、纏まってきたら形を整えて見た目につやが出来たら布をかぶせて発酵させる。因みにそのパン生地が入っているのはパスカルの村から貰った廃材の中に入っていたボウル。多分、ボールではない。けど、丁度良さそうだったので煮沸消毒を念入りに行つたうえで行っております。

「ラヴィ?」

「あ、ごめん。それじゃ、これを一次発酵します。具体的に言うと6時間待ちます」

「6時間だ?!」

「そんなに」

A2と2Bが驚きの声を上げる。

「別にそんなに驚くことじゃないでしょ。私達だってアンタ達の再起動に合わせて60時間以上待つてるし」

「それに、私達夕方にしか食事しないじゃないですか。今から6時間後はまだお昼過ぎですよ」

「そうだよ。ん？さては2人共く私たち以上にラヴィのご飯を楽しみにしてるな」

「なッ！」

あゝ2人共そういう事だったのね。なくんだそれならそうと言ってくれれば良かったのに。

「A2、2B、2人の心拍数の上昇を確認」

「おい。ポッド。鉄屑にするぞ」

「ポッド。うるさい」

ポットが私の方を見て少し手を動かす。それ、親指立ててるつもり？だけど、いい仕事してるわ。私も親指を上げる。

「それで、それまでの間何するの？」

私は説明をする為に設計図を机に広げる。

「なんだいこれ」

早速ジャツカスが興味を示す。流石、科学者兼技術者ね。

「待っている間に石窯を作るわよ。私もこれに関しては素人だからそれなりに時間が掛かかると思うの。早いうちに初めて損はないと思う」

まずは、最初にレンガを屋上に運びあげる。これが私的にはかなりの重労働なんだけど、アンドロイドからするとそうでもないみたいで1時間もかからずに運び上げることが出来た。まず、粘土を盛ってドーム型を作る。もうここから躓いた。綺麗なドーム型を粘土を作るのはとても繊細な作業だ。悲しい事にこういつた作業が得意なのはこの中だと私とジャツカスだけ。私とジャツカスが何度も何度も作り直し形を整えた。しかもこの炎天下の下だ。長時間集中した作業をすると熱中症になりかける。私とジャツカスは数回頭の上から水を被って作業した。なんやかんやで2時間弱かかった。やっと納得できる綺麗なドーム型が出来上がった。次の作業はみんなで作れるからそんなに時間がかからない。そう思ったがこれが甘かった。レンガを積み上げていると何故か隙間ができる。みると、レンガの表面が平らじゃない物が多い。基準を決め、レンガ同士を力任せに何とか加工していく。そして、すべてのレンガを揃えるまでに1時間半を要した。

「ここまでやったんだ！美味しい物ができるんだろうな！」

「大丈夫よ。A2だから頑張ってる」

「ちよつと喋ってないで手を動かさないよ」

「クソツたれ!!」

後半みんなヤケクソだった。あの2Bですらもヤケクソだった。そこから約2時間

かけて丁寧に組み上げた。

「完成しましたよね・・・?」

「ええ。みんなお疲れ様」

時計を見ると、1次発酵が丁度終わるところだった。

「一旦下に戻って生地の様子を見て見ましようか」

下に降りる。

「見て。膨らんでる!」

2Bも興味深々みたいね。その容器をもって私は屋上に戻る。

「次はあつたかい所で30〜40分ね」

「まだかかるの!」

「待つのはこれでお終い。これが終わったら形を整えて焼くだけよ」

「わざわざここで待つ必要もない。下で涼みませんか?」

「賛成だ」

みんなで下に降りて水を飲んで涼む。私に關しては汗をかきすぎて着替えた。そうこうしているうちに時間は過ぎ私達は屋上に戻った。

「さつきより膨らんでる」

形を細長く整えて耐熱トレーいざ石窯の中に入れる。みんなには休んでもらって私

は火の番をすることになった。いぎ！まず、一通り確認してしつかり焼けているかの確認。火が端の方にしつかり火が通っているか確認する。多分これで大丈夫よね……？

ワクワクしつつか窯の中のパンを見る。正直かなり熱いけどパンが食べたくてワクワクが止まらないのだ。昔、可愛い人形を見つけておもちゃ屋のガラスをジツと眺めていたのを思い出す。

10分後

窯からパンを取り出すと薄っすらときつね色になっていた。思わずガッツポーズしちゃった。ここまではレシピどおり。表面に火はだいたい通ったから次は中に火を通す。トレーの下にレンガを置いて火加減を調整。10分位でレンガを縦にしてもう少し火を通す。

「多分もうここまで来たら大丈夫よね……？」

上手く行くことを祈って下に降りる。

「みんなそろそろ出来るわよ」

「わかりました。今行きま……ってラヴィさん汗凄いですよ！顔も真っ赤！」

「ほら」

A2が水筒を投げてよこす。水を飲んで残りを頭からかぶる。冷たくて気持ちいい。下手すると熱中症なるところだったかも。危ない危ない。コップに水を貰って汗を拭

きつつ肉を焼き始める。付け合わせにジャガイモを蒸かそうかとも考えたけど、蒸かすのには時間がかかる。パンがもう少しで焼ける。焼きたてが食べたい！という訳で今回の肉の焼き加減はレアだ。異論は認めん。

「ちよつと今回は肉の量が多くないかい？」

「ここまで苦労したのよ？ いっぱい食べたくない？」

「賛成!!」

そんなこんなで続々と肉が焼き上がっていく。塊を皿にのせて片手に塩・コシヨウをもつて屋上に上がる。

「いい匂い!!」

「お腹がすきますね。先輩」

「私知ってるわ。コレ絶対美味しい」

窯に近づいて中を覗き込む。

「うん。初めてにしてはかなり上手く行った」

薪を抜いて火加減を弱める。さあ、ご対面。

「いでよー!」

窯から出すと同時に香ばしい匂いがした。鼻の中をスーッと通り抜ける匂い。久しぶりに嗅いだ匂い。

トレーを置いて一つ手に取り、ちぎって断面を見る。火は問題なく通ってそう。ゴクリ

誰かの喉がなった。意を決して一口放り込む。

「へへへへへへへへへへ」

「ラ、ラヴィ・・・？どうだい？」

「これはかなり美味いぞ。ほい」

茫然と眺めていたジャツカスの口にちぎって放ってやる。ジャツカスはゆっくりと咀嚼する。そして、私と同じようにニンマリと笑う。

「どう？」

「これは・・・革命だな」

そんな大袈裟な。

「ラヴィ！ラヴィ！私も！」

そういうデボルとしれつと横で私に視線を向ける2人にちぎってあげる。2人はそれを口に入れると一瞬目を見開き幸せそうな表情になる。言葉なんて必要ない。と言わんばかりだ。次は私達だと言わんばかりにヨルハ組が集まって来た。先頭と2番目は意外にもA2と2B。全員の口に放り込んでやる。まったく、全員幸せそうな顔。A2ですらだらしなく笑ってる。あ、私もか。

「美味しい！すっごい美味しいよ！ラヴィー！」

「柔らかくて口触りがふんわりしてるね。それに、味付けしてないのに凄く美味しい」
すると、A2がパンをもう一つ取って豪快に齧り付こうとする。

「A2、ストツプ」

「なんだ。私だつて腹が減ってるんだ」

「そんなに焦らないの。ほらちよつと貸して？」

A2は疑問を呈しながらも私にパンを渡してくれる。そして、A2から貰ったパンと他すべてのパンの真ん中にナイフで切り込みを入れる。

「ねえ、ラヴィーは何してるの？」

「私にもさっぱりさ2B。だが、ハズレじゃない」

次にレアの肉塊を大胆に大きくカットする。それを間に挟み、塩・コシヨウを振りかける」

コツペパンサンドの出来上がりだ。

ゴクリ

全員の喉がなった。出来上がったサンドをA2に渡す。

「どう？かなりの威力でしょ？」

「そうだな」

「貴方のBモード以上？」

「降参だ」

その後は全員分サンドを作って私も豪快に齧り付いた。ハア→最っ高。全員サンドを二つ以上食べ、肉も全て食い尽くした。

「ラヴィ。ご飯っておいしいね」

「お口に合って良かったわ。2B」

下に戻って片づけをすると、みんな疲れからかすぐに寝る体制に入っていた。私も本当はすぐに寝たかったのだがやりたいことがもう一つあった。無線機を手を取った。

第180話

Eージエントside

CALL

「ラヴィさんですか。お久しぶりですね」

「久しぶり。村の調子はどう？」

「変わらずみんな元気ですし、村も平和ですよ」

「そう。ならよかった。少し聞きたいんだけどみんなって夜何してるの？」

「夜ですか？」

実はずっと気になってたのよね。パスカル達ってどういうライフサイクルで動いてるのか。今、その謎が明かされる！

「暗くなったらみんな寝ますよ。たまに起きてお喋りしている子もいますね。それでも、少しすれば静かになりますね。私は少し本を読んで寝てますよ。8Bさん達も少し談笑なさってからだそうですよ。私よりも遅いぐらいですかね」

めっちゃ健康的な生活だった。まあそうよね。町の明かりなんて物も無いんだから。暗くなったら危ないから体を休めるわよね。今の時代だとこれが常識まであるわよ

ね……あの頃の世界のライフサイクルから随分と退化したわよね。いや、健康的になつたからむしろ進化したのかしら？

「それで、それがどうかしましたか？」

「明日、みんなで夜更かししない？」

「夜更かし？夜遅くまで起きているのは子供達の成長に悪いと本に書いてあつたのですが。大丈夫でしょうか？」

「偶にやるぐらいなら問題ないわよ」

「そうですか。それで、何をするんですか？」

「映画鑑賞」

「映画ですか！あの本の中でよく出て来る映画館と呼ばれる施設で見る映画ですか！」

「ええ。そう……そうよ」

「凄いいつつきつぷりね。確かに、小説の中に映画館で何かする描写つて結構出て来る気がするわ。」

「それじゃ、明日の夕方ごろそつちに行くわ」

「何か用意しておく物がありますか？」

「そうねえ？雨が降らないように祈つてて」

「わかりました。それでは」

「おやすみ前にごめんなさいね。おやすみ」

「いえいえ。おやすみなさい」

通信終了

ふう。みんなはもう夢の中。かくいう私の方は少し目が覚めてしまった。お湯を沸かしてコップに入れてぶつからないように慎重に間を通って屋上に出る。空を見上げて星を眺める。

「はあ・・・」

お湯を飲んで一息ついてポーツと空を眺める。ふと、胸から指輪を取り出す。

「そつちに逝つたら私の土産話に付き合つてね。現世こっちには辛い事に上手い酒が無いの

よ」久しぶりにビールを飲みたいなあ。ふあゝ。あくびが自然とでた。

「寝よ」

下に戻つてA2の隣に横になる。

「おやすみ」

朝ゝ

「ふあゝ」

いつも通り身支度を整えた後、寝ていたみんなを起こす。姉妹の2人は同時にあくびをして体を伸ばして身支度を整えに屋上に行く。

「おはようラヴィ」

なお、寝起きの良い11Bはすぐに戻ってくる。

「さて、今日は夕方にパスカルの所に行くから早めに戻って帰ってきてね」

「はい」

「あと、トラブルには気をつけて。特にヨルハ関係」

「向こうから仕掛けて来た場合は？」

「回れ右して全力疾走」

「だってさA2」

「11B、お前の中の私はどうなってるんだ？」

「口数少ないバーサーカー」

間違つてはないわね。しかも簡潔にまとまつてる。

「的確な表現だね」

「黙れジャツカス」

「ここでケンカしても始まりませんよ」

「仲良くね。それじゃ、解散。何かあったら連絡頂戴」

11B、16D、2Bが一緒に出発した。最近、体が動かして無かったのと戦闘の感覚を戻しに行くらしい。ジャツカスは久しぶりに砂漠に戻るらしい。昔隣にいたお兄

さんによるとキャンプに撤退する際に置いてきたらしい。姉妹は私の手伝いをしてくれることになった。

「さてと・・・」

A2が日が当たっている壁に寄りかかって目を閉じた。

「おやすみ」

「いいんですか?」

「別に良いわよ。あ、2人も無理しなくても良いからね?」

「大丈夫。それで何をするの?」

肝心の私の方は正直暇である。

「とりあえず、持ち帰って来た銃を分けましようか」

下の射撃場に降りる。部屋の角に並べて置いた銃を一つ一つ拭いて行く。と言っても嚴重に保管されていただけあってそこまで汚れていたわけでは無かった。動作確認をしてスコープなどを調整する。

「この銃変な形してますね」

ポポルがP90を不思議そうに眺めている。

「その銃、人体構造を研究して作られた銃だから反動はかなり小さいのよ。2人位の小さな子でも問題なく使えるわ」

すると、他の銃を触っていたデボルもジツとこっちを見て来た。どうやら小さな子と言ったのが気に障ってしまつたらしい。

「あゝ・・・そのおゝ」

「ラヴィさん？ 私達アンドロイドは身長は変わらないですよ」

「ラヴィは大きい子が好きなの？ A2みたいにな？」

何故そこでA2の名前が・・・

「どうなんですか!!」

2人に詰められる・・・とりあえず、頭撫でるか。互いに無言で私は2人の頭を撫でる。すると、次第に2人の顔がとろくんとしてくる。そこで喉を撫でてやるとゴロゴロと喉を鳴らし始める。時間を忘れて撫でていると突然パッと腕を掴まれる。

「ラヴィさん？ いい加減に」

「すいませんでした」

上手くあしらわられて納得がいかない様子の姉妹。

「あゝ一応言っておくと私は身長や見た目で人を判断したりはしないわよ？」

「もういいです」

後で、おいしい物をあげよう。それに、明日ホワイトとの会談が終わつた後レジスタンスに銃を売ろう。性能面では優れた銃だが、弾薬が特殊で補給が出来ない。良い銃な

んだけどね……その後はスコープの調整をしたり、弾薬の不備が無いか

確認したりした。ふと、外を見ると夕日がさし始めていた。

「ふく……それじゃ、私ご飯作ってくるわ」

「了解こつちももう少して終わるわ」

という訳でご飯の準備。今日もパンを使う。正直もうあの食事に戻れない気がする。そんな事を考えつつ肉を焼いたりジャガイモを蒸かしたりする。そして今回は村にいる8B達の為にコッペサンドとジャガイモを蒸かした物を包む。

「お〜い2人共〜」

「何ですか?」

「はい。アーン」

2人の口に肉の切れ端を放り込む。

「ラヴィこれで許して貰おうって魂胆?」

「ダメ?」

「いいですよ」

「ただいま〜」

「……ただいま」

下から11Bと16Dの元気のいい声と2Bの声が聞こえて来た。

「ただいまラヴィ！」

「爆薬オタクうるさい」

ジャツカスの丁度帰って来た。

「おいA2？」

「呼んだか？」

上で寝ていたA2が降りて来た。日焼けしないっていいなあ。

「それじゃ早めに食べて村に行きましょうか」

数分後

「ごちそうさまでした」

一息つく。

「さて、それじゃ村に行きましょうか。A2これお願い。慎重に扱ってね」

「わかった」

A2にプロジェクトを預ける。Blurray Discの山から子供達向けの作

品を探す。

「お・・・これがいいかしらね？懐かしいなあ。名作よね」

美女と野獣

私達の頃から絶対的な人気を誇って来た名作。

「ラヴィどうしたのー？何かあったー？」
いけない。思いでにふけっちゃった。急いで下に降りてみんなで村に出発する。

第181話

エージエントside

拠点を出たころは高かった日が、村に着くころには沈みかかっていた。村の近くの森に入ると夕日が遮られて暗さがさらに増していた。村の入り口が見えてきた。それに加えて子供たちの声が聞こえて来る。初めての夜更かしという事でみんな興奮しているらしい。

「ア！オネエチャーン!!」

私達の到着に気付いた子供たちが一気に寄って来た。あつという間に取り囲まれる私達。

「ほら、お姉ちゃんたち準備ができるまで遊んでらっしゃい」

許しが出たと分かった子供たちが11B達の手を引いて引つ張って行った。なんと2BとA2も手を引かれている。振り払う事も出来ずあたふたしている。

「2人のあんな姿昔だったら想像もできないことだったろうね」

「そうね。それに、明日にはこれが当たり前になる。ヨルハに隠れる必要も無くなる。少なくとも私の周りの脱走したヨルハわね」

「まったく、アンタには感謝しないとな」

後ろを振り返ると8B達3人とパスカルが立っていた。

「みんなが自由に楽しそうにしてくれればそれで私は満足よ」

「それを抜いてもラヴィさんには余りある恩がありますよ」

「そう。なら好きなタイミミングで返してくれていいわよ。金利もなしの親切制度だしね」

??

ああ……そっかももう金利って制度が無いからみんな分かんないのか。どうしよう。この滑ったみたいな空気。

「あくとりあえず、準備しましょうか……」

「なんだかよくわからないがラヴィ元気出して」

「ウーラ……」

みんなの優しさが心に刺さるわ。準備……しましょうかね。広場の木にスクリーンをかけてつるす。少し離れた所にプロジェクターを設置して電源をONにする。映像がスクリーンに映る。

「オネエチャンそれナに！」

後ろを見るとこっちの様子を気になった子供たちが後ろに集まってきていた。

「ハイハイみんな落ち着いて。少し離れて座ってね」

「「ハニー」」

みんなの声に交じって1ー1B達の声も聞こえて来る。他にも聞こえるA2や2Bの声になごみながら再生の準備を進めていく。プロジェクトターを動かして高さと幅を調節する。

「みんなー見えてる？」

「ミエナイヨー」

「背の大きい子はしゃがんでね」

「ハニー」

「それじゃ再生するわよー」

久しぶりのデイズニーのロゴが流れ物語が始まった。私は邪魔にならないように後ろにいるパスカルと8B達の方に回る。

「これが映画ですか。かわいらしい絵が動くというのは面白いですね」

「アニメ映画だけだね。それと3人にハイこれ」

持ってきたコッペサンドとジャガイモを渡す。

「あなた達が頑張って作った小麦から作ったパンよ。良かったら見ながらでも食べて」
受け取ったパンを3人は一気に頬張る。

「んっー」

22Bが余程美味しかったのか一瞬声を出しそうになる。他の2人も目を見開いてガツガツ頬張る。幸いみんなが映画に夢中になってくれていたお陰で3人の食いつぶりに誰も気が付いてない。凄まじい速さで食べ終わった3人のごみを回収する。そして、私は久しぶりの映画を楽しむのだった。

数時間後

「それじゃお終い。みんな面白かったかな？」

「オモシロカッター!!」

「それじゃあ夜も遅いですしみなさん寝ましようか」

「ハイ」

「お話しするのは明日にしような」

パスカルや8Bの声掛けで子供たちが続々と寝る体制に入る。夜遅いつてまだ10時なんだけど……

「ラヴィ片づけ手伝うよ」

「私も手伝います。準備の時は子供達と一緒にいて何も出来ませんでしたから」

みんなでプロジェクトを片付ける。準備の時と違って大人数だから作業が早く終わった。

「それじゃ私達も退散しましょうか」

「ああ。お疲れ様。私も子供達も楽しめたよ。それに、飯も滅茶苦茶美味かった。ありがとな」

「満足いただけで良かったわ。それじゃまた」

「ああ」

22Bが村の近くの森の終わりまで見送ってくれた。森から一歩抜けると月明かりがさしていた。

「さて、帰って明日に備えますか」

「今更だけどラヴィ大丈夫なの？」

「やってやるわよ。さて、さっさと寝ましょ」

月明かりを頼りに拠点に戻った私達はすぐに寝る体制に入った。しばらくすると誰かの寝息が聞こえて来た。

「ねえみんな。改めて今までありがとうね。おやすみ」

明日の交渉が有益な物になるように。そして、何か大きな物の決着になるように。

第182話

エージェンツ side

一通りのルーティーンをこなしてからみんなを起こす。この見慣れた光景が今日はどこか違うように感じた。多分私も緊張してる。

CALL

「あら、おはよう」

「ああ。そろそろ起きてるかと思ってな」

「みんな起きてるわよ」

「そうか。もう少しで60と210が迎えに出発するぞ。ボチボチ準備しておいてくれ」

「了解。わざわざ悪いわね」

「構わんさ。それじゃあな。健闘を祈ってる」

「ありがとう」

通信終了

それじゃ、準備しないとね。まず、銃をすべて点検する。そして構えるモーションを

してもしにも備えて素早く武器を抜ける位置にポケットをずらす。そして、リュックにはA2との旅行で回収してきた武器を全てとこつペサンドをバックに詰め込む。

「ラヴィ・・・もしかしてその銃全部使うつもり？それとも威嚇でもするの？」

「いや、交渉が終わったならアネモネとお茶しようと思ってるね。その時ついでにこれ売ってこようかなって」

「凶太すぎませんかね？」

その後も他愛の会話をしながら準備を進めていると

「ラヴィさんお迎えにあがりましたよー」

下の階から210の声が聞こえてくる。リュックサックを背負って下に降りる。後ろからみんながついてくる。

「おはようございます」

「お・おはようございます」

210と同じ金髪の子が緊張した様子で挨拶してくれた。

「210久しぶり。そして、となりの方は・・・」

「初めまして60です！お迎えに上がりました！」

「初めまして。それじゃエスコートお願いね」

「わかりました」

「それとラヴィさん以外は同席できません」

私以外の空気が凍った。

「おい、クソ真面目どういう事？勿論、説明できるわよね？」

「喋らないならホワイトの命令を聞く義理もないぞ」

「2人とも落ち着いて。ステイ。ステイ」

A2と11Bが2人に詰め寄った。2人はヨルハ絡みになると途端にケンカ早くなるのよねえ。

「うう……先輩怖いです……」

すっかりA2の視線に怯えてしまった60が210の背中に隠した。

「60しっかりしてください」

その割に随分うれしそうね。210。後ろにいる2Bと16Dが小さな声で「え??」って言ったのを私は聞き逃さなかった。

「ゴホン。これで分かったでしょう。あなた達を連れて行って刀傷沙汰にならない確率のほうが低いと私は考えますが？」

……チツ

ぐうの音も出ない2人。せめても抵抗なのかA2の舌打ちが静かに響き渡った。

「そういう訳ならみんな仲良くお留守番してて」

2人を含めたみんなの頭を軽くなでてあげてから出発した。歩き始めてしばらくして60が話しかけてきた。

「先ほどはありがとうございました」

「どういたしまして。こちらこそ2人がごめんね。」

「正直、文句を言われるのは覚悟していました。特に喧嘩早い11Bは絶対噛みついてくると思ってました」

さすが、長い間オペレーターやってただけはあるわね。

「でも、司令官の言ってることは滅茶苦茶ですよ。私も先輩も聞いたとき耳を疑いましたし……」

「恐らくラヴィさんだけなら危険は無いと考えたんでしょうね。まあ大誤算もいい所ですが……」

「あら？褒めてくれたの？ありがとう」

そんなこんなでレジスタンスキャンプがある建物が見えてきた。それと、その前の広場に見慣れないものが見えた。

「ねえ会場ってまさかあそこ？」

「はい」

60ちゃん？そんないい笑顔で返事しないで……目の前の広場にポツンと置かれた

イスとテーブル。そして、周りは一見何も無い。どうせ、隠れてる奴はいるでしょうけど。私。私は人質をとった凶悪犯か。

「ラヴィさん。言いたいことはわかります。もし、何かあれば命をかけて助けます。ラヴィさんも遠慮はしないでください」

「了解」

レジスタンスキャンプの人達の動きが見えるようになってきた頃、入り口から見慣れた人影がこちらに向かってきた。

「アネモネさんですね。それじゃあ我々はこれで。幸運を祈ります。60行きますよ」
「はい。それじゃあ失礼します」

2人と別れ私はアネモネのほうへと向かっていく。

「驚いた。本当に一人で来るとはな」

「ひと悶着あつたけどね・・・」

「だろいな」

すれ違いざまに背中を軽く叩かれる。視線を前に戻すとホワイトさんが歩いてくるのが見えた。腰には大きな刀をぶら下げている。

「今日はお招きいただきありがとうございます」

「お互い有意義な話ができるといいな」

互いに手を差し出し固い握手を交わした。

「歩いてきた疲れただろう。その荷物とライフルは預かってもおう。アネモネ！悪いが預かってくれ」

レジスタンスが2人やってきた。その2人に私はリュックとライフルを預ける。2人は離れたところにいるアネモネの所に荷物を置いた。下手にいじられたりはしないだろう。こうして私とホワイトさんが向かい合って椅子に座った。

「それじゃ始めるでしょう。まず、私が要求したいのは第一に我々にあのウイルスのデータ、できれば解析済みの物が欲しい。次に9Sの再起動。第三に11Bを含めた脱走兵一同の身柄の引き渡し。以上だ」

「分かったわ。とりあえず、こちらも要求を伝えないとね。第一に11Bたちの無罪。脱走した罪は問わない。次、あなたを含めた全てのヨルハ部隊員の選択の自由。この二つね。どう？これでもかなり譲歩したほうなんだけど？」

まあこのまま合意することは絶対にならないからね。ここからが交渉の本番。

「まず、ウイルスの提供の件だけど、2Bの義体に残ってたウイルスを解析したものがあ
るからそれを渡す。それでいいわね？」

「ああ。これで対策できる」

「次に9Sの件だけどジャツカスや210から話は聞いてるわ。義体の修理も完了して

るみたいだし、一応最後に汚染の確認をした後再起動するわ」

「そうか。感謝する」

ホワイトの顔から少し力が抜けた気がする。冷酷な人だとばかり思ってた。少しイメージ変わるわね。

「さて、本題に入るとしよう。11B達の処遇のことだ」

やっぱりここが交渉の天王山よね。気合を入れないと。あの子たちがずっと無邪気に笑って言られるように。

第183話

エージエントside

「さて、本題に入るとしよう。11B達の処遇のことだ」

「寛大な判断を期待したいけど？そもそもどうしてそんなに彼女たちに拘るの？」

「ずっと気になってたことだ。別に11Bは機密を盗んだわけでもなければ、仲間を殺したわけでもない。ヨルハ側に危害を加えるわけでもない。ただ脱走しただけ。まあ罪を犯したことに変わりはないけど、そんなに躍起になって捕まえようとする理由がずっとわからなかった。私も2人からヨルハに関する話を聞いてたけど、それでもまともな仮説すら立てられなかった。」

「私たちヨルハは地球を機械生命体から奪還するため日々戦っている。最近、以前のように一筋縄では行かなくなってるな。対策を考えてはいるが、更なる連携を深めることにも力を入れていな。そんな中脱走が連続して起きた。それをお咎め無しは示しがつかない。軍人だったのならわかるだろ？」

「ふくん。それで？それっぽい理由を並べれば通るとでも？言っておくけどね、私達は8Bたちが脱走した原因となったデータの事聞いてるわよ。月面サーバの指示。ただ

それだけなんでしょ」

そう。私に下手なウソは通じない。それに、月面サーバーが示す人類の生存もウソ。なんなら今の状況に本当の事を見つけ出すほうが難しい。

「……………」

ホワイトは完全に黙ってしまった。

「ねえホワイト？少し聞きたいことがあるの」

「……………なんだ」

「あなたは11B達の事、A2の事どうしたいの？」

「も、もちろん厳しっ」

人差し指を彼女口に押し当てる。

「違う。ヨルハ部隊の司令官には聞いてない。ホワイト、あなた個人の意見を聞いているの。11BやA2達以外にも今、あなたについて来ている子達をあなたはどうしたいの？」

「私は……………私は……………」

ホワイトが振り絞るように声を出す。それは、先ほどの自分を奮い立たせていた彼女ではない。

「私……………は……………みんなを死なせたくない……………生きていけばそれでいい……………」

震える彼女の手をそつと握る。

「だが……だが……どうすればいい？ 私はどうすればいいんだ？ どうするのが正解だった？ 誰も教えてくれない……何度か行動を起こそうとしたことがあった。だが、奴らは直ぐに感ずいて釘を刺してきた。脱走兵が出れば一応の対応として追跡部隊を派遣した。だが、少数だ」

驚いた。追跡部隊の派遣が一応の対応とわね。確かに、11Bの時も16Dだけだったし……8B達の時も2Bと9Sの2人だけ……

「だがな、地上に派遣されるヨルハ部隊は戦闘には長けているが戦術的行動がとれない。オペレータータイプやポッドが必要なんだ。だか追跡部隊に必ず補足され……」

なるほど。最低限の対応で対処できてしまったと。

「だからA2や11B達がお前のような優しい奴に拾ってもらえた事……私は実は嬉しく思っている。本人には言うなよ」

「悪いが手遅れだぞ」

「!？」

後ろからA2の声がした。ホワイトは先程の姿と変わって飛び上がり距離をとる。そして、私の後ろに在るであろうA2を睨みつけている。

はあゝ

私も深いため息の後後ろを振り返ると、真顔のA2とその後ろに11Bやジャツカスが苦笑いで立っていた。

「何しに来た!!」

「ほんと。何しに来たの?」

「ホワイトの本音を聞いていてもたってもいられなくなっただけ」

「聞いていただと!? ラヴィ どういう事だ!」

「あー……もしもに備えて無線機をONにしたのよね」

「それは……つまり」

「ああ。もちろん聞いてたぞ」

A2が口角を上げる。

「さて、それなら話が早いな。色々決着をつけよう」

A2は武器を抜く。それに反応してホワイトも武器を抜く。

「A2!ここは交渉の場なの。武器を下ろして」

こんなことで交渉が決裂するなんて冗談じゃない。2人の間に入る。

「ラヴィ安心しろ。私は死ぬつもりはない。ただ、アイツと話をするだけだ」

「なんでそれで武器を抜くわけ?」

「どうせ一筋縄ではいかないだろうからな」

「なおさらダメ」

お前らは腐れ縁の幼馴染か。

「ラヴィ、私を信じろ」

A2は笑顔で力強く、そしてしつかりとした目で私を見つめる。

「まったく私ってホントちよろい。それじゃ、少し目を瞑って」

「??構わんが」

チュツ

「!!!」

「ラヴィ!おまつ・・・お前つ・・・い、今っ!」

「んー?大丈夫?顔真っ赤よ?」

「誰のせいだと思ってるんだ!」

すごくいい反応するわね。もうちよつとイジメてみましょうか。A2の耳元に近づく。

「上手く終わらせられたら、もっと良いコトしましょうか?」

ゾクリと体を震わせたA2が私を睨んだ後、ゆっくりとホワイトの元へと歩いていく。

2人を見ていると、顔を真っ赤にした11Bと16D。2Bと姉妹は手で顔を隠して

いる。ジャツカスも顔真つ赤。へえ。

「なんでジャツカスも赤くなってるのよ。他はわかるんだけどさ」

「ちよつとラヴィわかるってどういうことよ」

「そうですよ!」

「うくん? 2人もしてほしかった?」

デボル、ポボル撃沈。ヨルハの2人は防御態勢に入っていた。

「アンドロイドって案外弱いんだ」

いい事知っちゃった。

A 2 side

まったくラヴィめ! あー顔が熱い。先ほどのことを考えないように目の前のホワイ
トに集中する。風のお陰で徐々に熱が下がってきた。そして互いの顔が見える距離に
なった。

「顔が赤いぞ。大丈夫か?」

「お前も真つ赤だぞ」

互いに顔は赤いのに澄まし顔。傍から見えれば笑えたらうな。

「ラヴィには悪いが自分でケリをつけたくてな」

「ほう。いいのか? 今から貴様がやろうとすることはラヴィの行いを無駄にすること

だぞ」

「ふん。問題ない。恐らくこれも見透かされてるさ」

「そうか。なら来い！」

私はラヴィと違って力で押し切ってきた。今更そのスタンスを変えたりはしない。それに長く戦つてると疲れるし迷惑だしな。

「ハアアアアアア!!」

Bモード。ホワイトは予想通り守りに入っている。それを力の限り強く攻める。激しいラツシユ。徐々に武器の形が変わってくる。ホワイトの使っている物の方が良いからな。だがなホワイト、私はただ力押ししてる訳じゃないんだ。ラヴィを見習って上手くやらないとな！

第184話

A 2 s i d e

「どうしたA 2? 疲れてきたのか!？」

私が打ち付ける度に激しい音と火花が飛び散る。

「そうだな。だが、そろそろケリがつく」

最後の一太刀を全力で叩きつける。

ぐにやり

まさにそんな感覚。見ると私の刀がホワイトの武器に食い込むようにして曲がっていった。

「勝負ついたな」

ホワイトが勝ち誇った表情で言う。私は使い物にならなくなった刀を投げ捨てる。そして、深く息を吸ってホワイトへ向かっていく。

「まだ来るのか」

ホワイトのつぶやきが聞こえた。ホワイトも息を整え武器を構える。距離は縮まっていた。私もホワイトも余裕はとつくに無い。互いにこの一回に勝敗をかけた。

「もらった!」

刃が突き出された瞬間、私は体をのけぞり回避した。この一撃にすべてをにかけていたホワイトはバランスを崩しつつあった。その突き出された右手を掴みこちら側へ引き寄せる。バランスも崩していたホワイトが行える手立てではなくそのまま私と一緒に倒れこむ。倒れる際にホワイトの上に乗るようにする。

カラン

倒れこむと同時にホワイトの手から離れた刃がむなしく音を立てた。

「クソっ離せ!」

なおも暴れるホワイト。それを力任せに押さえつける。上に乗られているのに暴れるのをやめない。私も相当な力で押さえつけている。ラヴィにホールドされてた時と同じくらいの強さ。抵抗は無駄だと観念したホワイトが抵抗をやめる。

「全くこの馬鹿力め」

恨めしそうな視線。

「全く、どうしてこれ以上の力を出してた私をホールドできたんだ?」

「?」

「なんでもない」

「それとどめを刺すんだろう? ほら、さっさと首を絞めろ」

「いや、」

「なら首を撥ねるか？ならさっさとどけ。醜い真似はしない。さっさとその私の武器で首を撥ねろ」

「いや、アンタは殺さない」

ああ・・・私の口からこんな言葉がでるなんてな。少し前の私だったら信じられん。「どういう風の吹き回しだ？」

「アンタ、私と同じだったんだな」

「どういう意味だ!? 情けをかけるくらいなら早く殺せ！」

「そう言つて、自分の大きすぎる使命に押しつぶされて自分を自分で鼓舞して、本当の自分を失う」

「・・・・・・」

沈黙が流れる。

「アンタはまだ間に合う。私みたいになるな。素直になれ」

「素直になつたとして部下は従つてくれるだろうか？」

「心配するな。お前が良ければ私やIIBやラヴィが手を貸してやる」

「そうか・・・よし！ラヴィと話がしたい。どういてくれ」

「ここで私は初めて力を緩めてホワイトを解放した。そして弾き飛ばした武器を手渡

す。

「ここにいてくれ。ラヴィを呼んでくる」

「2号！」

「なんだ」

「すまなかつたな」

「謝るどころじゃ済まないだろ」

エージエントside

「話をついた？」

「ああ」

話の中身は一切聞こえなかった。帰ってきたA2も一見すると変わらないように見える。

「あら？上手くいったみたいね」

「そうだな。後はラヴィに任せる」

なにか憑き物が取れたようなそんな顔だった。

「え？ラヴィなんで分かったの？いつもの顔じゃない」

「バカね11B。付き合いが長いとわかることもあるのよ」

「そういうデボルは分かるんですか？」

「私にもさっぱり」

「駄目じゃないか」

「アハハハ」

あなた達達ねえ・・・まあ緊張はほぐれたみたいだしいつか。

「ごめんなさい。待たせて」

「ああ。それでは仕切り直させて貰おう。まず、」

さて、どうなるかな？

「まず、そちらの要求をすべて呑もう。ただし、頼みがある」

あら、随分な心変わりね。

「私たちにできることなら」

「ああ。私たちヨルハ部隊を解放してほしい」

「解放・・・ね」

「そうだ。私は自分の部下をこれ以上死なせたくない。だが、人類サーバーはそれを許さない。それをどうにかしてほしい」

ホワイトは薄っすら見える月を見上げる。

「なら派手に吹っ飛ばそうぜ！」

「おおう。テンションどうした？まあいい。聞こうか」

という訳でA2との楽しい旅行の思い出を話してあげました。

「全く恐ろしいこと考えるな。だがいいだろう。ただ、一つだけ」

「月面基地に10Hというヨルハがいる。そいつを救い出してほしい」
すると、ポッドがそばにやってきた。

「報告。月面基地にいるポッド006とコンタクト成功。現在地球に向かっている。ロケットの着陸予想地点の座標をマーク」

ホログラムが映し出される。

「これは・・・ワシントンDCのロケット発射場よ。今から来るなら単純計算で5日はかかるわね。ねえそのポッドと連絡とって近くなってきたら着陸予想時間を伝えるように行ってくれる?」

「了解」

「それじゃあ、ホワイト。交渉は成立ってことで」

互いに席を立ち握手する。

「良い関係を気づけますように」

「ああ。頼むぞ」

改めてホワイトの手を握る。

「全く、一時はどうなるかとヒヤヒヤしたぞ」

「まあ互いに無事だったんだし良かったんじゃない。私はどうでもいいけど」

「先輩？ いい加減素直になつたらいいじゃないですか？」

「あなたはこういう時いつも水をさして・・・」

「ハイハイ小言は結構デース」

「全くあなたは・・・」

これは60のお説教コースに入っちゃうかしら？ 仕方ない助け舟出してあげようかしら。

「きれいな夕焼けね」

予定だと昼に終わるはずだった交渉は長引き夕方になっていた。沈んでいく夕日を眺めて感傷に浸る。

「ところでラヴィあの禍々しいバックはどうする？」

「アレよければレジスタンスキャンプで買い取ってくれない？ その話をしようと思ってきたんだけど・・・もう遅い時間だし明日にする？」

「悪いがそうしてもらえると助かる」

「今日は9Sの再起動だけさせて。再起動プログラムはただでさえ時間がかかるから」

「分かった。60案内してやってくれ」

「こつちです」

2 Bを手招きする。一緒についてくる2 Bに6 Oは何も言わない。

「9 S!!」

部屋に横たわる9 Sに2 Bが駆け寄る。眠っている9 Sを不安そうに眺める2 B。
9 Sにウォッチを接続して再起動コマンドを入力する。

「再起動まで120時間」

「ヨルハ機体9 Sの再起動完了まで約120時間」

ウォッチとポッド153の音が響く。

「2 Bどうする?このまま9 Sの傍にいてもいいが」

「傍に居たい。ありがとうアネモネ」

「分かったわ。とりあえずまた明日」

レジスタンスキャンプを後にする。

「はあー。やり切ったわね」

「お疲れ様」

「今日は帰って休むといい」

「アンタがラヴィにご飯を要求しないなんて珍しいわね」

「本当に君の中の私はどうなっているんだい?」

「爆薬好きのマッドサイエンティスト」

「悪化してませんか？」

どうやら私達の日常は変わらなそう。良かった良かった。

第185話

エージエントside

「ラヴィさくん見えてきましたよ」

「ちよつとなんで何もしてないポポルが疲れてるのよ」

「A2さんと司令官との戦闘は手に汗握りましたよ」

「16D、アンタは心配症すぎるのよ。A2もアイツにもうちよつとダメージ与えてやればよかったのよ」

A2? その可哀そうな奴を見るような目を向けないの。コラ、ジャツカスも同調しない。

そんなこんなで拠点の前に入る。

グチャ。

「うわ！ なんか踏んだ！」

銃に付いているライトで足元を照らす。

「これは・・・恐らくイノシシの足跡だね。それがどうしてこんなところ？」

ライトで足跡を辿っていく。それは階段に続いていた。

「珍しいこともあるものですね。イノシシが建物の中に入ってくるなんて」

「そうね。こんな廃墟に入ったって食べ物があるわけ・・・あ」

「マズイ！小麦やジャガイモの袋をひっくり返されたら堪ったものではない。急いで会談を駆け上がる。」

「お願いどうか無事でいて！」

袋のあつたほうを照らすと袋が破けて床には食べかけのジャガイモが散らばっていた。もう一方の袋をチエックする。

「ラヴィ突然どうしたのよ!? あああ!!」

追いかけてきたデボルが惨状を見て声を上げる。その声を聞いてみんな走ってくる。

「油断した・・・この辺り全然動物がいらないから大丈夫だと思った・・・」

「そんな・・・大切なジャガイモが・・・」

「ラヴィ・・・ちよつといいかい？」

「どうしたの？」

「ジャツカスは地図を広げている。」

「イノシシが来たのはこの辺りだろう。数は多い。だが爆薬や11Bや2号それに逃げた奴をラヴィとデボル、ポボル姉妹が排除する」

「待て、待て待って！ストップ！もしかしてこの付近のイノシシを全て狩るつもり!?!」

「それ以外に何かあるんだい？」

疑う余地なくマッドサイエンティストじゃない。

「バカ言つてないで早く寝ろ。ジャツカ・・・爆薬オタク」

「2号！どうして言い直したんだ!?!それに君も私をそう呼ぶのかい!?!」

「うるさい。寝ろ」

納得がいつていない様子のジャツカス。自分が何言ってるかわかってないのか。驚愕だわ。だが、そんなジャツカスに構うことなくみんなは横になる。

「ジャツカスさんも一回寝て落ち着きましようよ」

「こんな事があつた後なのにえらく君たち落ち着いてるね！そのほうが信じられないよ」

ジャツカスの中ではA2<ご飯なのね。作る身としては嬉しいけど・・・

「ラヴィは何とも思わないのかい!?!」

え？そこで私に振つてどうするつもりなのよ。まあいいわ。

「まったく・・・ジャツカスそんなに興奮したつてしょうがないわよ。過ぎたことだしね。それに悪いけど私も疲れちゃつたわ。だから寝ましよう?」

「でも・・・」

「あ！いけない！寝る前のキス忘れたわね!?!ごめんね」

手でジャツカスの顔を抑えて正面を向かせる。私も目を閉じる。

「ラヴィ、ストップ！」

無理やり手をどけられる。

「わ、悪かった。寝るよ。今すぐに！」

ジャツカスが横になる。それを確認して私もA2の位置に横になる。

「おい」

A2が話しかけてくる。小声で話しているせいかしら？ドスが効いてるような気がするのはいのせいかしら？

「おい。ラヴィ。あんな事を言うのは辞めたほうがいいぞ。私達なら問題ないが勘違いするようなお調子モノもいる。気をつける？」

「あら？妬いてくれるの？嬉しいわね」

「誰が妬くか！」

A2やジャツカス、姉妹の反応を見ていると彼女たちってチェリーガールよね。ホントと可愛い。イタズラしたくなる。そっぽを向いてしまったA2の耳元で囁く。

「あの時のご褒美もう少し待ってね」

「ラヴィおまッ！」

人差し指をA2の口に添える。

「しー。みんな起きちゃうわよ。いいの？」

また囁くとたまらないように体を震わせる。

「あ、わかったよ。クソ・・・だが、みんな寝られないと思うぞ」

「そうかしら？ま、私は疲れたしお先に失礼」

目を閉じる。自分で言った通り疲れていたせいですぐに意識が落ちた。

「まったく、アンタのせいで全員寝不足だ」

朝

「もう朝・・・？凄いい瞬に感じたわ」

軽く身支度を整えて昨日の食べられたジャガイモを窓から捨てる。

「んっ？」

耳を澄ますと獣の鼻息が聞こえる。

「さては戻ってきたわね」

恐らく昨日のイノシシが味を占めてやってきたのね。申し訳ないが何度も来る以上駆除するしかないわね。ライフルだけを持って拠点を出る。少し歩いていると鳴き声はさらに大きくなった。おおよその方向が見えそうな建物の3階に上った。そこには鼻を忙しく動かしゆつくりと拠点の方向へと歩いて来ていた。ライフルを構えて息を整える。

ダンッ

1発の銃声が辺りに響く。

ブヒッ!

そんな情けない鳴き声と共にイノシシが倒れる。

「さてと。運びますか」

イノシシを背負って拠点に戻る。大き目の個体だからかなりの重さね。短い距離でもかなり疲れる。やつとの思いで拠点の階段を上った。さすがにみんな起きたかな?

「ラヴィー!どこに行つてたんだ!」

階段を上がつて開口一番怒ったA2。

「え?鳴き声が聞こえたからコイツを狩りにね」

「銃声が聞こえたから私達飛び起きたのよ!」

同じように少し怒っているデボル。

「全く・・・ラヴィーさん。私達にとつてあなたは大切な人なんですよ。これ以上どうこう言いませんから次から気を付けてください」

そう言つて16Dは身支度のために行つてしまった。

「ラヴィー。わかつた?」

「はい。少し軽率だったわね。それに・・・」

「それに？」

「11B、カツコイイ彼女さんね」

「なあッ!!」

一気に顔が赤くなる11B。

「今それ関係ないでしょ!」

「先輩そんなに顔赤くしてどうかしたんですか？」

ある意味最悪なタイミング戻ってくる16D。

「いや・・・何でもない!」

「どうしたんですか先輩。ほら、こっちに顔見せてください」

「ストップ16D。なんともないから!」

「ウソです。ほらしっかり見せてください」

そんな様子を微笑みながら見ていると隣にジャッカスが寄ってきた。

「ねえ一つ聞いていい？」

「なんだい？」

「昨日の貴方の反応といい、目の前の光景といいアンドロイドって耐性無いの？」

「昨日のアレは忘れてくれ。そうだなあ。少なくとも私は悔しいが耐性は無いね。昨日

みたいなことをされたのも初めてだ」

「ふうくん」

「これは更なる検証が必要ね。」

「もう赤くないわよね?」

「大丈夫です。先輩」

11Bの火照りが収まり16Dのイケメンムーブも終了した。

「ねえ2人はさ、付き合ってるのよね?」

「そうですよ」

さくらつと答える16D。

「ならそういう事も知ってるわよね?どこまで行ったの?」

「そういう事って?」

「そういう事よ」

「ねえデボル。そういう事って何?」

「イヤーワタシ・・・」

「誤魔化さないことだ。君たち姉妹が読んでる本にそういう描写が少しは出てくる作品があることを私は知ってるんだよ」

「黙って!爆薬オタク!」

「何で私まで!!」

「うるさい。以前君たちの代わりに村の子供たちに説明したの忘れたとは言わせないぞ」

「どうやら私とA2が旅行に行っていたときに何かあったらしい。」

「知ってるんじゃない。教えてよ」

「イヤ（です）！」

「私が言うわよ。悪いけど隠さないでね。ハグは？」

「あります」

「あるわよ」

「キスは？」

「ないわよ！」

「ないです」

「一応聞くとディープな深いのは？」

「あるわけないでしょ！それにキスに深いつか浅いつかあるの!？」

「ない／＼／＼です・・・」

徐々に声が大きくなっていくIIBと反比例するように声が小さくなるI6D。

「それじゃあ最後。これは人類がいた頃にあった一つのカップルの関係としてもあったものだから一応聞くけどS○xは？」

「ラヴィイ!!!」

「もう／＼／許してください．．．．．」

「ここが限界か。A2なんてきつきから一言も話していない。アンドロイド組も下を向いて一言も発しない。やりすぎたかな？」

「ねえジャツカス．．．?」

「．．．．．なんだい?」

「他のアンドロイドも同じくらい．．．．．」

コクコクコクコクコク

あり得ない速度でうなずいている。

「これ以上はアネモネに聞いてくれ!!」

周囲を見渡す。アンドロイド、ヨルハ撃沈。やったぜ!じゃなかった。

「あー．．．みんなごめんね?と、とりあえず!臨時で肉が手に入ったから特別に朝も食べちゃいましょうか」

「ラヴィさんそれで手を打ちましょう。ですがもう1回謝ってもらっていいですか?」

「大変、申し訳ございませんでした」

「さーて!食べるぞー!」

途端に元気になったジャツカスを筆頭に下に動き出す。さて、やりますか。

数分後

調理が終わった肉を皿に盛り付ける。量が多いと盛り付けだけで一苦労だ。

「そうだ」

パンに肉を挟んで紙で紙でくるみ、ジャガイモも同じようにくるむ。これを4つ用意。3つはアネモネ、2B、210に。もう一つは私のお昼ご飯。

「お待たせしましたー。さあ召し上がれ。もったいない精神とお詫びを兼ねていっぱい調理したからたくさん食べてね」

いつものことだがものの数分で食べつくされた。

「腹ごしらえもすんだし行こうかラヴィー！」

どことなくみんなも元気が有り余っている様子だった。そうね。流石に行きますか。

第186話

エージエントside

「おはよう。よく来たな」

キャンプにつくと早速アネモネが出てきた。

「おはよう。それじゃあこれから時間はある？」

「大丈夫だ。余程のことが無ければ忙しくはならんさ。それより11B達はどうかするんだ？ここにいても何も無いが、問題だけは起こすなよ」

「名指しされてわよ。気をつけなさいね」

「わかってるわよ。お姉ちゃん」

11Bと絡んでるデボルもたいがいだと思っただけだ・・・

「なあ、アネモネあそこの屋上には行けるか？」

「問題ないが何をするんだ？」

「寝る」

「私も起きてると誰かさん達と揉めそうだし日向ぼっこしようっと」

「それじゃあ、先輩がそうするなら私も」

アンドロイドは日焼けその他諸々気にしなくていいの羨ましいわ。

「ねえデボル私たちはどうする？」

「久しぶりに話したい相手が数人いるからその人たちと話すかな。ポポールもそういう相手いるでしょ？」

「いいねそれ。暇になったら私たちも日向ぼっこですね」

「私は一応9Sの所に行ってくるよ。そこに2Bもいるだろうしね。210もそこかい？」

アネモネが頷く。

「あ、ジャツカスそれじゃこれ持って行って」

リュックから先ほど作った包みを2つ出す。まだ微かに暖かい。匂いもまだする。

「これを2人に渡してあげて。途中で食べちゃダメよ」

「そのくらい出来る！」

ジャツカスは行ってしまった。

「アイツもしかしたらやったんじゃないか？」

「流石にないでしょう。先ほどあんなに食べてきましたし今お腹鳴らす人はいませんよ」

しかし、この時誰も気づいていなかった。アンドロイドだからお腹が鳴ることはな

かったが、嗅いだことがない香ばしい良い匂いに鼻をくくんさせられている者がいたことを。

「それじゃあラヴィ向こうで話そう」

「アネモネ、お前はある意味これから地獄をみるぞ」

誰だ？ボソツと後ろで呟いたの。おそらくA2ね。困っちゃうわ。まるで人を悪魔みたいに言つて。

「そこにかけてくれ」

個室に入る。そこは一応机と椅子が置かれた簡素な部屋だった。

「それじゃあ、商談ということだったが商品はなんだ？」

リュックサックを机の上に置く。

P90

AR—15

SR—25

「3種類、P90とAR—15は2本ずつ、SR—25は1本だけ。それに弾薬も加えてこちらの希望値は合わせて18万つてところかしら。内訳はいる？」

「頼む」

「まず、P90は特殊な弾薬を使ってるから調達が難しいと思うの。今ある分を渡した

あと弾が切れたらただのガラクタになっちゃうでしょ。そういうリスクがあるから安くしてる。次にAR―15。これは私が使ってるやつと操作系統が同じ。弾薬もある程度入手しやすいと思うわ。それにこれは一般兵に配るようなものじゃなくて、中身はある程度カスタムされてる。高級品。精度も問題なし。次のSR―25は正確には違うんだけどさっきのAR―15のマークスマン使用と考えてもらっていいわ。高性能なスコープとバイポット、チークパッド色々ついてるわ。精度に関しては折り紙付き。それと各種弾薬。これでどう?」

「うーん銃か。知ってると思うが銃はアンドロイドは主力として使ってないんだ。それをこの値段……もう少し」

「17万」

「16万はダメか?」

「16万5000」

「サービスは?」

「どうやら値段は了承してもらえたみたい。サービスかあ……」

「あーと……えーサービスとしまして、レジスタンスのみなさんへの娯楽の提供と銃の使い方のレクチャーを約束します」

「いいだろう。乗った」

互いに握手をして交渉成立。いやあ手ごわい相手だった。武器と弾薬をアネモネと一緒に運ぶ。

「ハイハイ」

商品をすべて運び終わり机に並べる。すると頭に機械生命体の部品を被ったおかしなアンドロイドが近づいてきた。

「はじめましてラヴィさん」

「は、はじめまして」

骨格を見ている感じ女性というのは分かるけど・・・

「怖がらなくていいわよ。みんなからは相談員と呼ばれてるの。ところで2人から特にラヴィさんから嗅いだことのないいい匂いがする」

「そうだーさっきのジャツカスに渡した包みはなんだ？まさか！あれか！アイツが美味しい美味しいと言っていたやつだろ！そうだろ！」

アネモネの剣幕がすさまじい。さてはジャツカスかなり自慢してたな。

「アネモネ落ち着いて。はい。これ」

包みを1組手渡す。受け取るや否や包みを開ける。匂いが当たり一面に広がり、ほかのアンドロイドが集まってくる。集まってきたアンドロイドの熱い視線さらされる。

「あげないからな!!」

アネモネえ・・・司令官直々の宣言によりほかのみんなの視線は必然的に私の手に集まる。

「えーつとそのお・・・ここは・・・公平性を保つためにじゃんけんでどうです？」

さあ始まりました!!私の昼ご飯をかけたじゃんけん大会!!

「私に負けた人は座って。勝った人だけが立って残ってね」

「おう!!」

なんでこんな目がガチなんですかねえ。さあ運命の一回目。

「最初はグー、ジャンケンポン！」

さて勝利の女神は誰に微笑んでくれるのかしら？

勝者決定!!

「うふふ。それじゃあみんなの分まで味わうわねえ」

最終的に勝利したのはあの相談員さんだった。

「それじゃあ司令官さんも一緒に」

律儀に待っているアネモネもアネモネだろう。2人の動きに全員が注目している。

「ん~~~~」

2人のなんとも幸せそうな顔。対象的なみんなの恨めしそうな顔。ヤバい。飯一つで暴動に発展するなんて冗談じゃないわ。そんなことつい知らず美味しそうに頬張る

2人。

「こんな美味しいのを毎日食べられるなんてジャツカスさんは羨ましいわね」

あ、ヘイトがすべてジャツカスに向いた。

「……………」

沈黙。頑張つて。頑張つてジャツカス。視線が怖いのはわかつてる。あーダメそう。お願い。お願いだからこつち見ないで。私にどうしろって言うのよ。頼みの綱のアネモネは……

「ん〜」

お前らいつまで食つてんだよ！。作つた側からすると嬉しいけどさ。よし、分かつた。

「ハイ、注目〜。みんなコレ食べたい？」

全員が頷く。

「分かつたわ。それじゃあ、明日の夜ここで映画の上映会をしましょう。その時、何も食べるものがないというのも面白くないわよね？」

全員がわかつてない。そもそもアンドロイドに映画を見ながら何かを食べるという行為はしない。私たちの青春が詰まった映画ですら人類文化を研究するための貴重な資料だ。こうなつたら勢いだ。

「美味しいもの片手に楽しい思いしてみたいよな!!」

「「オウ!!」」

「あの2人みたいになりたいか!」

「「オウ!!」」

「オウ!じゃない!返事はSir. yes. sir!だ。わかったか!」

「「Sir. Yes. sir!」」

「声が小さい!!」

「「Sir. Yes. Sir!!!」」

「解散!!」

一斉に散らばっていく。

「さて、2人ともお話ししましょうか」

しれつと逃げようとしている2人にの肩をに手をのせて商談会場へと戻る。

「さて、丁度いいわ。2人には聞きたいことがあるの」

先ほどの事態に少しは責任を感じているんだろう。アネモネに関しては頬つぺたをいじってる。殴ったりなんかしないわよ。

「2人は男性経験つてあるの?」

「えっ・・・あー答えられなくてごめんなさいね」

相談員さん？アネモネも反応的に初心なのね。それじゃ早速戻って準備しないかね。

「それじゃあ私たちはそれで失礼するわ。2人とも・・・」

2人の肩を抱き寄せて耳元でささやく。

「明日を楽しみにね」

屋上にて日向ぼっこ中だったみんなと合流して拠点に戻る。

「さーて、何がいいかしらね」

Blu-rayディスクが入った箱から作品を選ぶ。今回は恋愛もの。それでかつ、少し過激な奴で作品としてちゃんと見れるものは・・・

『タイタニック』

「古いけどやっぱり名作は名作。いつまでたっても色あせないわよね」

作品をただ選んでるだけでも楽しい。色々な思い出がよみがえってきちゃう。みんなにも楽しんでもらいたいな。ちよつと刺激強いかもだけど。

「え?!もうこんな時間!?!」

思った以上に時間かけてしまっていたらしい。昼を余裕で過ぎてしまっていた。

「お、ラヴィ終わったの?」

「もう、少しくらい声かけてくれもよくないかしら?」

「いや、ずっと独り言ブツブツ言ってるから邪魔しちゃ悪いかなって？」
ウソ……どうやらだいぶ回りが見えてなかったみたい。

「それじゃあ夕方までお休み。夕方になったらパン生地を仕込みましょう。明日の分も考えると凄いい量になるわよ。ヨルハ組とジャツカスね。ジャツカス指揮をお願いね」

「任せてくれたまえ」

「それじゃあ姉妹と私は肉の解体と血抜きね。これもかなりの量になるからね。大仕事になるわよ。というわけで私は一旦寝るわよ。おやすみ」

数時間後

顔が西日に照らされて目が覚める。私の周りに寝ていたみんなを起こす。

「やりますかあ」

私自身もやる気が起きないと言えばそうだが、言ってしまった以上やるしかない。

数時間後

「終わり……お疲れ様。あークソが。体中が血生臭い」

私と姉妹の体からは鼻をつまみたくなるほどの血の生臭い匂いがした。

「疲れたし、いつそのことみんなでシャワー浴びませんか？」

「ナイスアイデア！ポポルいいわね」

「そうと決まれば私したの連中呼んでくるわ！おーい！爆薬オタクー!!」

デボルがものすごい速さで行ってしまった。とりあえず、こっちも準備しましょうか。お湯を沸かす。そして、小さな穴をいくつも開けた缶に調節したお湯をいれればシャワーの完成だ。

「はあ疲れたよ。こちらでも大変だった。それにしても3人ともひどい匂いだね」

「私たち3人は鼻が慣れてしまってますからね。多分私たちが嗅いでる以上に匂いがヒドイことになってますよ」

準備もできたし、みんな集まった。

「じゃあ、デボルから行きましょうか」

お湯と水が混ざりすぎないように慎重に缶に入れていく。血の汚れやその他の汚れがだいたい落ちてきた。

「ふう〜さっぱりした」

「それはよかった。それじゃあみんな一人ずつ入って。次の方」

そのあとには一人一人汚れを落としていった。あ、でもA2が頭とかの洗い方がわからなくてただ立ってるだけだったのは面白かったな。教えてあげるとなれない手付きでぎこちなく洗うのが可愛かった。うん。可愛かった!!

「ほら、ラヴィ入って入って。あ、16D悪いけど手伝ってもらっていい?」

「どうやらデボルと16Dがやってくれるらしい。」

「それじゃあ行きますよ」

うん、いい感じの温度だ。まずは頭を洗って・・・

「アツツ!!!」

「あ、すいませんっ!」

「いいわよ。気にしないで!」

こういった初々しいのもまた愛おしい。やけどに少し気をつけつつ頭と体、最後の方は水の割合が多かったけど手を洗うだけだったから問題ない。

「それじゃあ改めてみんなお疲れ様。明日起きたらパンを焼くからついでに朝ごはんとして食べましょう。今日はお疲れ様」

疲れからみんなあまり会話せず横になっていく。私の位置は変わらずA2の後ろだ。へへへ、最近ハマってるんだ。A2にイタズラするの。今日は何かしらねくまは・・・

「／／／つ!!／／」

抱きしめて背中に顔を埋めて匂いを嗅ぐ。アンドロイドに体臭って概念があるのかはわからないけど、A2っていい匂いする。背中から徐々に位置を上げて行きうなじまで到達する。

「ラヴィ・・・おいしい／／／ひやつぁ」

A 2から妖艶な声が漏れる。これ以上はみんな起きちやうかな？

ドンッ

「うっ！」

A 2から強烈な肘が来た。しかもそこそこ強いヤツが。だが、ここで引くわけにはいかん！

「んっ／＼／＼」

ドンッドンッ

最後に右の耳にキスをする。意味は……まあどう捉えてもらってもいいわよ。そしてA 2から愛の籠もった肘が飛んでくる。だけど、来るとわかっていればなんてことはない。

「おやすみ」

耳ともで囁いてA 2から離れて逆を向く。目を閉じて耳を済ますとA 2の荒く、そして息を殺そうとしているようすが聞こえてくる。

「おやすみ」

A 2に聞こえるか聞こえないかの声でそう言つて私の意識は落ちた。

A 2 side

「／＼／＼／ラヴィめ！散々弄んで。はあ興奮が／＼／＼抑えろ抑えろ」

私はこの暑さと動揺を鎮めるのに必死だった。体中が暑い。アイツの鼻が当たって通った場所の感覚がまだ残っている。そして改めて自分の耳を触る。暑い。アイツの口が／＼／＼やめろ！さらに熱くなる。どうしてこんなに暑いのに冷却モードに入らないんだ・・・結局、私が寝たのはそれからかなりの時間が立ったときであった。

第187話

エージェント side

目を覚まして隣りを見るとA2は逆の方を向いて寝ていた。今日を踏まえてどうなるかしら。身支度をしつつ一応パン生地を確認する。

「問題なし」と

みんなを起こして身支度が終わるのを待つ。ぶっちゃけるとボーっとしてるわ。

「おはよう」

A2やジャツカスが眠そうな表情をしつつ頷く。

「さて、今日はキャンプでの上映会なんかがあるから、昼過ぎには戻って来てね。それまでは各自自由にどうぞ」

みんなそれぞれ動き出す。昨日仕込んだパン生地を石窯へ入れドンドン焼いていく。初めて数分と経たずに汗が吹き出してきた。

「まあ頑張りますか」

数時間後

「おかえり」

「ああ。私が最初か？」

最初に帰ってこたのはA2だった。A2ってこんな風に余裕を持って動いてくれたり、案外丁寧なのよね。

「ただいまー」

次に姉妹。

「ただいまー」

「戻りましたー」

直後に11B・16D。最後に

「ラヴィくただいまー」

ジャツカスだった。しかも妙に疲れてる。

「どうしたの？」

「いやあね。さつきまで私用でレジスタンスキャンプに居たんだが、そこで話した相手が全員が飯の話を私にするんだ。味の感想なんか聞かれる位なら問題ないんだが、時折私に対しての怨嗟が入って来てね。逃げたかったけど逃げられなかった。結局準備があるからとやつと逃げて戻れた訳だ」

「これは気合いを入れて行かないといけないわね。」

「そういう訳らしいからみんな気合い入れて行くわよ！」

「了解！」

大変良い返事だ。さて、材料や調理器具を持って拠点を出発する。何気に重いから到着には時間がかかりそうだ。

1時間後

「やつと・・・やつと・・・」

「あー!!重い!!」

阿鼻叫喚であった。キャンプが見えてくるとアネモネと数名がこつちに走ってきてくれた。「どうも」

持つのを手伝ってもらってとりあえず、キャンプの入り口に道具や食材を置く。

「わざわざ悪いな」

「いいのよ。こちらの言い値で買ってもらったし。それで場所の指定はある？」

「ああ。こつちだ」

キャンプのみんなに手伝ってもらいながら道具を移動させていく。

「A2、それはそこに。ジャツカスそれちゃんと使えるかチェックして。食材はここに」
道具や食材のセッティングが終わり、第一段の調理を始める。調理と言ってもただ肉をやるだけなのだが・・・視線が凄い。鉄板が熱くなったのを確認して肉を置いていく。

ジュー

肉の焼ける良い音。圧倒的火力で表面を焼いていく。焼色を確認して裏返す。途端にいい匂いが広がり始める。裏面も1、2分焼いて塩、胡椒を振る。ジャツカスが半分に切って切り込みを入れたパンに挟む。完成！

「はい、焼き立てをどうぞ」

出来上がり第一号をアンドロイドに手渡す。

「ありがとうございます」

しれっと一番目にいるお姉さんにはツツコまない方針で。そこからの勢いがすごかった。私は肉を焼きまくり、みんなでパンに挟んだ。単純作業だが数が多すぎた。集団が途切れて一段落したと思ったときさらに追い打ちをかけられた。

「おかわり」

「アイアイサー」

最初にならんだお姉さんがいい笑顔で立っていた。それを先頭に再び長蛇の列ができた。

「味はどうだった？」

「とーっても美味しかった」

「そう。それは良かった」

後ろのみんなと顔を合わせる。みんなの覚悟はもう決まっていた。

「はい。もう少しで映画が始まるから食べすぎないでね」

釘を指したけど、どこまで通じるかな？

「ラヴィさんそろそろ暗くなつて来ましたよ」

空を見ると日が沈みきる所だった。釘を刺したのが功をそうしたのか勢いは収まっていた。お姉さんやアネモネを含めた数名が3回目に並んでいたがまあそこは慣れた。

「お疲れ様」

私を含めてみんな暑さで顔が真っ赤だった。頭から水をかぶる。

「ラヴィ・・・大丈夫か？」

心配するくらいなら3回も並ばないですよ・・・疲れた体に鞭打ってプロジェクトを設置する。ディスプレイをセットして再生の準備は完了だ。感想を話していたアンドロイド達も続々と床だったり椅子に座る。後ろにはA2達が立っている。私の分はちゃんと確保されてるみたいだ。確保されてるよね・・・？ジャツカスの取り分じゃないよね？全員が席に着いたのを確認する。ん？

「ごめん、ちよつと待って」

「だれ？」

「入るわよ。2B」

部屋には私と2Bとポッドそして再起動待ちの9S。

「ラヴィどうしたの？みんなが待っている戻ったほうがいい」

「ええ。あなたも一緒にね」

「大丈夫。私のことはいい」

「ねえ2B」

「なっ……」

ぶにゆ

2Bのほっぺに押し当てられる私の人差し指。一瞬の出来事に驚いた様子の2B
だったがすぐに表情が戻る。

「構ってほしいの？」

「自覚無いの？」

「何が？」

「アナタの顔今、すごい疲れた顔してるわよ」

「アンドロイドに休息は必要ない」

「悪いけどその顔で言われたら説得力無いわよ」

鏡をだして2Bの顔の前に出す。

「……」

「わかった？」

2Bの顔はすこしやつれたように見えた。顔の一部が汚れていたり、泣いたりしたのだろうか。涙の跡が見えた。

「9Sのことが心配なのはわかるけどあなたもすっかりしなきや。それに再起動は3日後よ。それまでは絶対に起きない」

「うん・・・」

「それともこの疲れた顔で9Sを迎えるの？」

「・・・違う」

「それに起きた所で誤解は解けるの？」

「・・・無理」

「ハイハイ。それじゃあ一旦リフレッシュしましょうね」

「・・・うん」

「あと、ポッド。一丁前に保護対象だなんだと言うなら止めてあげなさい。みなさいよ。かわいい女の子の顔が台無しじゃない」

2Bを部屋から連れ出し、A2の横に連れていく。

「よろしく」

「任せろ」

再びアンドロイド達の前に立つ。

「取り直して。お待たせしました。それでは上映開始です」

適当にお辞儀をして後ろのみんなのところに戻る。再生を開始する。はじめはどこかみんな力が入っていた。彼らにとつては人類の生活が映つたものはすべて歴史的に価値のあるもの。ストーリーを楽しむのではなく、私たちが博物館でものをみるようなそんな楽しみ方をしていた。しかし、さすが名作といったところだろう。展開や俳優たちの演技に引き込まれている。

トントン

肩をたたかれる。後ろを振り向くとポッドの2体だった。とりあえず、ここから離れる。

「どうしたの？ 話なら終わつたらでもいいわよ？ それにここじや音は聞こえるけど、映像見えないでしょ」

「問題ない。我々ポッドはアンドロイド以上に視野が広くそしてそれを処理できる」

「便利ですこと」

「ポッド153。一応聞くけど再起動処理を開始してから9Sに何か異変はあつた？」

「問題はない」

「よかった。それで？ 一体何の用？」

「お願いがある」

どこか改まった様子のポッド153。

「9Sが目覚めたら極力2人の関係には関わらないでほしい」

「ふうん。理由は？」

「2人の成長のため」

「私としては全然かまわない。ただ、覚えておいて。もし、再び9SがA2や2Bを悪意を持ったうえで攻撃したら、私は彼を殺す」

「・・・了解」

「一応聞いておくけど君たちの中で2Bと9Sが上手くいく確率が高いの？」

「正直なところ。高いとは言えない。だが、低いとも言えない」

「やる価値はあると?」

「そうだ」

「なるほど。でも大丈夫? 私としては少し不安があるのだけど・・・」

「例えば?」

「君たちのデリカシーの無さ」

「?」

2体とも自覚がない様子。

「君たちの処理能力はあくまで任務達成を第一に考えたものよね。でもね。こういうのは遠回りのほうがうまくいくこともあるの」

「要求：根拠の提示」

どうやらデリカシーがないと言われたのがお気に召さないご様子。たぶん、これを納得させるのは無理ね。

「まあ、心に留めておいて」

「了解」

「さて、終わったのなら戻るわよ」

こうして私たちはみんなの元へ戻った。映画のほうはもうラストシーンに差し掛かっていた。見ると数名は感極まって泣いてしまっているようだ。ジャツカスなんかは顔がすごい。そしてラスト、エンディング。再生を止めプロジェクターを片付け初めてようやくみんなが動き始めた。あるものは感想を言い合ったり、シーンの真似をした。あるものはまだ感極まって泣いてしまっている。ジャツカス、姉妹、11B・16D・2Bのことです。仕方なく、私とA2だけ片づけをする。

「ふうー。片付けも終わり。それじゃあ帰るわよ。みんな……な？」

視線の先には泣き疲れたせいかさヤスヤ眠る3人の姿。

「ラヴィ、今日はこのまま休ませてやれ」

「そうね」

「私たちは帰りますか」

A2と私で食材がなくなった分いくらか軽くなった道具を拠点へ持ち帰った。帰ってこられたからと言って疲れていないわけではない。そのままなし崩し的に横になった。またいつものように少しイタズラしてやろうと思っていた矢先。

「ラヴィ」

A2が後ろから抱き着いてきた。暖かい。

「よいしょ」

寝返りを打ってお互い向かい合うようにする。

「なあラヴィ。さっきの映画の中でしていたキス。経験あるのか？」

「あるけど・・・どうしたの？」

「その・・・」

「んー？」

「・・・したい」

「え？」

「ラヴィとキス・・・したい。映画で見たデープなの」

「what!？」

まさかそんなこと言われるなんて・・・

「いや、私今日ちよつと疲れつちやなーなんて・・・」

「ダメだ。こつち向け。あれだけ焦らしておいて今更無しは生殺しだ」

改めてA2の顔を見る。じつと私を見つめてくる。表情も真剣だ。目がとろんとしてる。なんだかこつちもそんな気分になってきた。

「後には引けないからね？それに頼んだってことはリードは貰っていいのね？」

コクン

A2がうなずく。もう後には引けない。

「A2。舌をだして。最初は目をつぶってて」

「ん」

A2が舌を出す。何気に初めて見たかも。それにアンドロイドの舌なんて今まで注意してみたことなかったけど人類と一緒に。それに本物ではないだろうけど唾液も出る。

「はやぶしろ」

いけない。まじまじと見ちゃってた。それじゃ。

第188話

エージエントside

「おはよう。眠れた？」

「あまり眠れなかった」

沸かしたお湯をコップに移してA2に手渡す。

「はあ」

冷えた朝、凍え切った体に温かいお湯が染みわたる。

「疲れが抜けてない」

「今回ばかりは私も疲れた。途中でBモードになろうか考えた」

「やめて」

結論から先に言おう。あの後、キスだけでは終わらなかった。もつと詳しく言おう！私がい慢できなかつた!! 1回目が終わわり一瞬見つめあい、2回目が始まった。私はA2の胸に手が伸びていた。互いに口が離れ糸が引く。A2も真似するようにぎこちない手つきで私の体をなぞってきた。その手を誘導して私も上着を脱ぐ。長く感じられた2回目が終わる。口づけの位置が耳や首筋、徐々に下に降りて行った。こそばゆさを我

慢したような今まで聞いたこともなかったような妖艶な声。一通り終わると、A2も同じようになぞった。この時点で互いにやめるという選択肢はなかった。汗をかいたりしていたのに互いにシャワーも浴びなかった。だがお互いそんなこと気にせず交代しあいながら続き、深夜になり、明日のことを考え、イチヤイチャしながらシャワーを浴びて横になった。すぐにA2の寝息が聞こえてきた。釣られるように私も意識が落ちた。

チユンチユン

朝日が顔に当たると、鳥の鳴き声で目が覚めてしまった。寝る直前に時計を見なかったが、そんなに時間は立っていないように感じる。だがしかし、もう一度眠ろうにも眠気が湧いてこない。ゆっくりと寝返りをうって隣のA2の方を向くと目があつた。流石にA2も目が冷めてしまったらしい。それで眠気覚ましを兼ねて屋上に上り、風が吹いて寒いためお湯をわかしたという所で最初の場面に繋がる。

「どうする？もうひと眠りするか？」

「私はもう目が冴えちゃった。いつもの癖でね」

「いつも朝起こしてもらって悪いな。ならどうする？」

「とりあえず、このままキャンプ行っちゃおう？どうせ、みんな迎えにくつもりだったし」

「そうしよう。前に私が寝ていたところ知ってるだろ？あそこな、太陽がちょうどよく当たるんだ」

「アンドロイドっていいわよねえ。日焼け気にしなくてよくて」

「日焼け？なんだそれ」

そういうA2の姿が太陽に照らされる。

「・・・ずるいなあ」

「ブツブツ言ってるんで行くぞ」

本当、可愛いくてカッコいいってずるい。A2の横に行く。

「なんだ？ニヤニヤして」

「別になにもないわよ」

「そういう時のラヴィほど怖いぞ」

「本当になにも無いって」

軽口を叩き合いながらキャンプまで歩いた。

「よお！飯の姉ちゃん」

キャンプに到着するや否や見知らぬアンドロイドから声をかけられる。すごい親しげに声かけてもらったところ申し訳ないけど・・・顔に見覚えがない。あの時あまりの激務で脳死で作業してたから顔なんて1人1人覚えてないよね。どうしよう。かと

言って話すこともないし・・・無言が続く。

「コラ」

隣のアンドロイドの方がそのアンドロイドの頭を叩いた。

「失礼な呼び方するな。すいませんラヴィさん」

そう言って2人はどこかに行ってしまった。

「ねえA2。私の認識って飯なのかな？」

A2に聞いてみた。するとおもむろにどこか真剣な表情をしたA2が振り返る。

「バカ言うな。さっきのアイツが非常識なだけだ。みんなラヴィのことしつかり分かってるさ。少なくとも私はラヴィのことしつかり見てる」

「あ、ありがとう」

A2も成長したなあ。大人の階段一気に登った影響はすごいってことか。

「お取込み中に悪いね」

「ジャツカス、おはよう」

「おはよう。昨日は手伝えなくて申し訳ないね」

「別に気にしてないわよ。それより楽しめた？」

「もちろんだ。すごくドキドキしたよ。最初は研究のためと思っていたが、いつの間にか見入ってしまったよ」

「それはよかった」

「みんなは？」

「友人たちと話してるよ」

「お前はどうした？」

「2号。君にデリカシーを求めるのは間違いなんだろうな」

ジャツカスに多大なダメージ！効果は抜群だ！効果は抜群だ！そんな2人を放つてアネモネを探すと目が合った。それに耳を澄ますと姉妹や11Bたちの声が聞こえる。とりあえずアネモネの方に合流する。

「おはよう」

「お、ラヴィか。おはよう」

「おはよう（ございます）」

私とアネモネの声に気づいたみんなが集まってきてくれた。

「おい、話はまだ・・・」

A2がジャツカスの手を引いてやってきた。

「全員集合完了」

「そうか。それで何か用か？」

「アネモネ、今日ってキャンプって暇？」

「一部のものは偵察や警戒に出ているが私を含め大半の者は暇してるはずだぞ」

周りを見渡すと確かに沢山のアンドロイドがいる。これなら集客効果もばっちりね。

「ねえ、広い場所かしてくれない?」

「構わんぞ。おい、ジャツカスとデボル、ポポル付いてこい」

アネモネは片手にロープを持っている。

「おい、悪いがそこを退けてくれ」

その様子にはかのアンドロイドも集まってきた。

「ラヴィーこんなものでどうだー!」

一斉にアンドロイドがこちらを向く。ちよつと怖い。

「ありがとう!」

視線が怖くて人をかき分けていく。アネモネの隣についてアンドロイドと目を合わせないように指示を出していく。使つてない机を置いて、銃を置く。これを3か所つくる。次に机からだいたい距離15m、25m、50mに人型っぽくして胴体と頭部は機械生命体のスクラップを使う。真ん中あたりに射撃用紙を張り付ける。

「こんなもんかな?」

ライフルを構えてスコープを除いて位置を確認する。

「よし」

「ラヴィこれは・・・」

「見ての通り射撃場よ。銃を買ってもらった時のサーブスをしようと思ってね」

「射撃場？ラヴィさんよ。俺たち銃は撃てますぜ」

話し方の癖が強いアンドロイドが反論してきた。にしても話し方の癖つよいな。

「あなた見てないの？ラヴィさんの射撃？レジスタンスキャンプが襲われた時に助けに来てくれたラヴィさん格好良かったんだから」

「俺達はその時キャンプの外だったからな。戻ってきたときにはラヴィさん達はいなかった。何があつたか知らないが機械生命体に銃は非効率だろ」

「はあ。まったく・・・みんな見てて」

私はライフルを腰撃ちでバラまいた。15 m程度では精度は問題ないが20 mで既に精度が悪いと言わざるを得ない。50 mになると弾痕の数が一桁になる。

「この撃ち方。馴染み深いわよね？でもね。私からするとただの間抜けにしか見えないし、弾も当たらない。良い？弾を当てるには簡単にいえばサイトで狙えばいい。まず、姿勢は前屈みに、ストックを頬につける。足を少し曲げる。正しい姿勢で銃を構える」

ダンツダンツ　ダンツダンツ

胴体部分、頭に2発ずつ。距離が伸びることによって多少のバラツキが出たが誤差だ。

「・・・」

後ろを振り返ると拍手が起きた。

「ねえそのアナタ、よかつたらその銃を貸してくれない？」

彼から銃を借りる。

「みんな拍手してるけどこれを目指すんだからね？」

彼の銃を構えて同じように撃つ。口径が大きいため少し精度が落ちた。落ちたと
言ってもこれも誤差だが。借りた銃を返す。

「ありがとう。きれいに整備されてるいい銃ね。さて、それじゃあボチボチやっていき
ましようか。自分の銃がある人、各種質問も受け付けるわ」

すると先ほど銃を貸してくれた彼以外のアンドロイドが全員駆け出した。私とヨル
ハ部隊の全員が呆気に取られているとアネモネが解説してくれた。

「私たちは一応全員に銃を支給しているんだ。まあ私も含め使うやつは皆無だが。それ
が今のラヴィの射撃で触発されたんだろう」

さすがにお世辞が過ぎない？

「私がお世辞言ってると思ってるだろ。見てろ」

そう言つてアネモネは残っているヨルハの前に立った。

「私の部下たちのことだ。見つけて戻ってくるまで時間がかかるだろう。時間は有限

だ。やりたい奴から頼んだらどうだ？」

「ハイ!!」

60が真つ先に手を挙げた。

「60あなたオペレータータイプでしょうが。必要ありません」

「嫌です!!私は先輩と一緒に戦いたいんです!」

「だからあなたはオペレーター・・・」

「素敵じゃないか。なあ」

「私も素敵だと思えますよ」

「クソ真面目。だからアンタは嫌われるのよ」

「嫌ってるのはアナタだけ・・・」

「周り見てみ」

210が周りのヨルハを見るとみんな顔を逸らした。

「60さん何か撃ちたい銃は？」

「私のような小柄な体形でも使える銃ありますか？」

「ならポールの銃がいいかな」

B e r e t t a M9

9mmなら女性でも問題なく扱えるし良い銃だ。ま、私は9mmあまり使わないけ

ど。

「それじゃあ60さん行きましようか。それと1人じゃ不安なので11Bさんお願いで
きますか?」

「ちよつと待つてください」

「なによ」

おつと・・・?何だ何だ修羅場か?

「私がやります」

「あんなに止めといて?」

「それは・・・その・・・」

「大きな声で話さないよ」

「60は大切な後輩なんです!!!」

おー。かつこいい先輩だこと。まてよ。まさかポポルはこれを狙って・・・?
にこっつ

出来る奴つてなんでこんなに可愛いのかしらね。

「え?結局アイツが教えるの・・・?」

「先輩く最愛の彼女がいますよ」

「え?あつごめん!待つて!そんなつもりじゃ!」

「一人分かってない奴がいるけど、こっちもこっちで微笑ましいからよし！」

「ほらほら時間を食ってるぞ。どんどん行け！」

これを機に立候補者が大勢でた。私とジャツカスでライフル、ポボル、デボルと210で拳銃、マシンピストル、11Bがショットガンと格闘。ヨルハは大体11Bに行つてたかな。そのせいで始めは11Bが忙しそうだったんだけど、しばらくして銃探し出したアンドロイド達が参加して結局私とデボルが忙しくなつた。まあコツをつかんで上達してきたアンドロイドが少し教える側に回ってくれたりもしたんだけどかなり疲れた。全員それなりに上達してきたころポッドに声をかけられた。

「要請、10H及びポッド006が翌日到着予定。ヘリを使って移動するにはそろそろ出発しないと間に合わない」

「あ、そっか。ごめん少し待つてね」

私は射撃訓練をしているみんなの真ん中に立つ。

「全員注目!!」

一斉にこちらを向く。

「貴様ら!!これで銃の使い方は分かつただろう!だが!あくまで訓練であると言いう事を忘れるな!いいな!返事は!!」

「Sir yes sir!!」

いい返事をするようになったじゃない。さて、準備しますか。

「おいA2く起きてる〜？」

「今ので目が覚めた」

「10H達を迎えに行くから降りてきて」

「ラヴィ」

するとホワイトに声をかけられる。

「私も一緒にいいか？」

「構わないけどケンカしないでね？」

「善処しよう」

「断言してほしいんだけど・・・」

「私はしないぞ。コイツとは違う」

A2? いつの間にか? さては飛び降りて来たわね。

「おい」

「なんだ? 早速か？」

A2 だったらいつの間にかそんなに余裕を持ったんだか。

「それじゃあ行きますか？」

「ラヴィく私達は どうする？」

「みんな好きにしておいて良いわよ？みんなと一緒に訓練してもいいし。あ、ジャツカスくれぐれも食べ過ぎないでね」

その瞬間キャンプにいるすべてのアンドロイドの視線がジャツカスに集まった。

「ジャツカスさん！その銃の撃ち方教えてください！」

どこからか出て来た青年がジャツカスを引つ張っていく。あらあら希望者殺到ね。これは直ぐには解放されそうもなさそう。悪い事しちやったかな？

「おっ！ラヴィ早くしろ。行くぞ」

A2に呼ばれて私はキャンプを出た。さて、いい加減終わらせないとね。

第189話

エージエント side

「今、行くから」

私とホワイト小走りで先を歩いているA2に追いつく。

「あっ!!!」

何かに躓き転びかけたホワイトにA2が手を差し伸べる。

「全く。先が思いやられるな」

「悪い」

普通に見れば2人の仲が悪いことはわかる。だが、以前の険悪だった仲よりはこうやって声をかけるようになっただけでも大きな前身と微笑ましくなる。だが、まだ互いにぎこちなく話していない。それを私はただ微笑ましくみる。以外にもそれなりに時間がかかる道中それでどうにかなつてしまったのが凄い。

「それじゃあ2人も乗って。揺れることもあるから気をつけてね。下手すると振り落とされるわよ」

私もバイザーをかぶる。2人がしっかりと座ったことを確認して高度を上げていく。

すぐに拠点や周りのビルが小さくなる。その様子をホワイトは興味深そうに見ていた。

「ヨルハの飛行ユニットと違ってこっちはゆっくり優雅でしょ」

「いや、私は空を飛ぶことすら初めてだ」

「え？乗ったこと無いの？あんなに楽しそうなの？」

「楽しそうって・・・ラヴィお前」

「ふふつ。ラヴィは何でも興味を持つな。しかもかなりの物好きだ」

A2？私が興味を持つのはおもしろいとか美しいと思うものだけなんだけど？

「まあ楽しいかどうかは置いておいて、空を飛ぶのは初めてだ。司令官が前線に出るわけないだろう？」

「確かに。いわれてみればそうね。だと、ホワイトってヨルハ創設の時から司令官なの？」

「悪いが話す気はない。それにA2、お前も私の話なんぞ聞きたくないだろう」

「眠くなる」

「そういうことだ。コイツの場合私の話よりお前の話のほうが好きだろ」

「え？なんでもいいの？」

「私は何でもいい」

「なら子供向けの童話でもいいの？」

「いいぞ。私たちはそんな子供向けの話にすら馴染みがないからな」

「冗談のつもりだったんだけど・・・っていうか話してるこつちが飽きちやう」

「なんでいい年(?)したアンドロイド共に童話なんか聞かせなきゃならんのだ。」

「それじゃあ、なんか質問してくんない? 答えられる範囲で答えるから」

「そこから始まったトークショーは別に他愛のないものだった。好きな食べ物とか昔何をしてたかとか。時折、こちらから質問を試みたが、プライベートが皆無な奴らに質問するだけ無駄だった。」

「今日はこっから辺で野宿ね」

「以前と同じ場所にへりを着陸させる。A2とホワイトに周囲の確認をしてもらって間に火を起こして持って持ってきた肉塊を焼いていく。それなりの大きさだけあの2人にはすんなり入っちゃうのよね。それでいてアンドロイドは太らない。はあー女としてはうらやましい限りだわ。」

「ラヴィ、ある程度見てきたが何もなかった」

「こつちもだ」

「ナイスタイミング。こつちも丁度焼けたわよ」

「焼けた肉をナイフで切り分けて2人に渡す。2人とも涎の量が凄い。それに肉塊の大きさも相まってゲームみたい。」

「召し上がれ」

2人と大口を開けて食らいつく。口の周りに肉の油がついてることすら気にしてない。

「おいしい?」

「旨い!!」

ええい。キラキラさせやがって。肉の油だけだ。

「ごちそうさまでした」

肉塊はその後、数分で消えてしまった。そうして食べ終えたらやることも無いので2人は直ぐに寝てしまった。

「はあーうらやましい」

1人夜空を眺めてしばらく消化を待ってすぐに寝てしまった。

朝、

「結局、私が1番早いよね」

目を覚まして体を伸ばして一通りの準備を完了する。

「ほらー2人とも起きてー」

A2とホワイトの体を揺する。

「ああ・・・おはよう」

A2が体を起こして伸ばし始める。だが、ホワイトがなかなか起きない。

「ホワイト。ねえ、ホワイト起きて」

体を揺すり続ける。

「ホワイトってば」

「あああん？」

ホワイトの目が少しだけ開きこちらを睨みつけてくる。寝起き悪。こんなところまでで人類に似せなくてよくない？

「おはよう？そろそろ出発だから準備して？」

「あああ」

ヨボヨボと体を起こしてヘリに乗り込み座席に座り、再び寝始めた。

「はあ。まったくアイツと来たら」

「日ごろから疲れてるのよ。寝かせておいてあげましょ」

さすがに寝てる人がいるのに騒ぐわけにもいかずヘリの中は静かだった。

数時間後

「A2さすがに起こしてあげて」

ホワイトの体を乱暴に揺らし始める。

「オイ！起きろ。つくぞ！」

「あー！起きた起きた。覚めた覚めた!!」

「おはよう。ぐっすり寝てたところ悪いけどそろそろ到着するから起きてね」
「あー。すまん。そんなに寝てたか」

よく見ると目元の隈が取れているような気がする。

「お疲れみたいね。帰りも長いからぐっすり寝てていいわよ」

「悪いな」

へりをホワイトハウス前に着陸させてロケットの発射場まで歩く。

「到着予定時間まであと30分。時間はあるし、ゆっくり行きましょう」

「ああ。いい天気だな」

「驚いた。戦うしか能がないお前からそんな言葉が出るとはな」

「今ここで叩き切るぞ」

「ほらほら」

どこかホワイトの声が明るい。冗談も楽しげだ。そんな様子をA2も感じ取っているらしく付き合っただけでやっている。そんな感じがする。

数分後

「お、到着まで残り10分。丁度いいわね」

3人で空を見上げる。空に一つ明るい点が徐々に大きくなっていく。ふと気になる

ことがあった。

「ねえこれってロケットの噴射ってどうなるの？」

「ホワイト？」

「え？」

「え？」

すう・・・

「走れええええええ」

ああもう！本当に私って間抜け。なんで普通に近づいちゃうかな。

「あそこーあの地下鉄に！」

後ろからはロケットの轟音が響いてくる。後ろを振り返る余裕はない。

「飛び込めえ！」

階段を駆け下り、線路に降りて頭を下げる。2人も同じように頭に手を置いて身を守っている。

ゴオオオオオオオオオ

轟音と共に激しい揺れが私たちを襲った。

「・・・もう大丈夫か？」

「多分」

「なら外に出よう。肝心の10Hに動き回られたら面倒だ」

ホームが上がって外に出る階段を上ろうとすると凄まじい焦げ臭さに鼻を覆った。階段を上って地上に近づけば近づくほど匂いはきつくなっていく。

「うわ……」

地上に出るとあたり一面匂いがすごく、植物の一部は燃えていた。

「おい、ロケットはあそこだ。急ぐぞ?」

あまりの大きさに言われなくてもわかる。

「扉は開いてないみたいだ」

「ならまだ中にいるよな?」

「多分そうだけど、周りがあれだからできるだけ早くここから移動したいわ」

私たちは扉があくことを待ったが、開く気配がない。A2が扉の横を思いきり蹴飛ばす。

「きゃっ!」

扉の向こうから可愛い悲鳴が聞こえてきた。そして何かの駆動音。扉から離れる。

「わあ……綺麗」

そういつて彼女は太陽の光を眩しそうにしていた。後ろにはポッドが浮いている。

「あ……初めまして。出会ってそうそう悪いんだけど、周りの状況から早急に移動し

たいんだけど……」

「推奨：すみやかな移動」

あー……ポッドでどれもこんな感じなのね。

「はい。お願いします」

一応、周囲を警戒しつつへりに戻る。かなりの爆音だったがへりへ戻るまでの道に機械生命体は見当たらなかった。

「さあ、乗った乗った。A2、ホワイトベルト閉めるの手伝ってあげて」

10Hはイスに座ってキョロキョロしている。両手を上げさせてベルトを締める。まるで遊園地に来た子供ね。

「それじゃあ離陸するわよ」

エンジンの回転数を上げて離陸する。

「おい、見ろ。すごいな」

眼下にはロケットのジェットによって燃えた街並みが真っ赤に燃えていた。この規模の火事は消しようがない。

「ああ。DCの町が……」

炎がどうかホワイトハウスに届かないことを祈って街を後にした。

「わあ地上ってすごいきれいですね！」

しばらく空を飛んでいると10Hが感嘆の声をあげる。確かに木々や建物が燃える嫌な臭いはいつの間に消えていた。

「わ！すごい！アレ！」

指さすほうを見ると、鳥たちが群れになって飛んでいた。

「一緒に飛んでみる？」

「是非！」

ヘリを群れに近づける。鳥たちはヘリが近づいても全く恐れていない。多分、人類が消え、空に飛ぶ航空機が極端に少なくなつた結果、鳥は人工物を恐れない。それどころか関係なしに突っ込んできてバードストライクを起こしかけそうになる。

「手を伸ばせば届いちやいそうですね」

そんな私の不安を他所に10Hははしゃいでいる。まあ楽しそうならなんでもいいか。

「あ、さようなら〜バイバイ〜」

鳥たちがヘリから離れて行く。視線で追っているとすぐ下の森の木に止まったようだった。どうして突然進路を変えたのかしら？ふと目の前を見ると大きな雨雲がこちらに近づいて来ていた。中では雷も鳴っているようだった。

「これ、マズくないか？」

後ろからホワイトがのぞき込んでくる。

「そうね。嵐の中飛ぶのは危険だわ。ここで着陸して嵐が止むのを待ちましょう。多分だけど、ここで一夜を過ごすことになりそう」

着陸するころには周囲の風がかなり強くなってきた。みんなに周りの確保を急いでもらおう。

「まさかコイツを使うことになるなんてね」

もしもの時に備えて残しておいた肉塊1ブロック。

「周囲は安全そうだ。それよりラヴィ、ここに留まって大丈夫か？」

「移動したいけど、ヘリは使えないし徒歩じゃ時間もかかるわ。ここに留まるほうが安全ね。それより、あの木の下に入って休みましょ」

一番大きな木の下入り根元で集まる。

「寒いし、何か腹に入れたほうがいいわね。10Hも一緒にね」

穴を掘って炉を作りそこで肉を焼く。焼き加減は確認できないが火はしつかり入っているみたいだ。いい匂いがしてきた。

「そろそろかしら」

取り出して周りに雑にコシヨウを振る。適当な大きさに切り分けて・・・確定食いしん坊2人に10Hの分にも同じ量切り分ける。必然的に私の量が少し減った。

「はいどうぞ」

「わ！食べていいんですか？」

10Hの目がキラキラしている。いつ見ても良いものね。

「召し上がれ」

「「頂きます」」

10Hと食いしん坊2人が肉塊に齧り付く。

「疑問、アンドロイド及びヨルハ部隊に食事は必要・・・」

「黙れ」

ヨルハ部隊司令官様によつて一瞬で黙らされた。この2人の食に対するブレなさ加減すごいな。

数分後

「「ごちそうさまでした」」

あくなんか血が回つてる感覚がする。因みに言うとな風は食べ始めるよりも強くなつている。

「今日はこれ以上何もできないし体力温存のため、みんなでくつついておきますか」

「そうだな」

「おい10H、お前はこっちにいろ」

10Hがホワイトに引つ張られA2の間に入れられる。私のほうもA2に引つ張られ隣に入る。ここはまだお互いに頑固なのよね。寒さを凌ぐ（特に私）ために塊で暖をとる。「これは朝までこのままでしようね。この寒さと風の轟音じゃ寝られないでしょうね」

話している私ですらしつかり聞き取れない。風の轟音に話しても無駄だと理解して全員黙って嵐が晴れるのを待った。

朝

「よし・・・多分嵐も過ぎたでしょ。ほら、みんな乗った乗った出発するわよ」
小雨が降っているが風は穏やかだから問題ない。

「ラヴィ休まなくていいの？」

「なんとか。とりあえず、帰ったら体を洗いましょう。あと、寝たいなら寝ていいわよ」

「悪いな」

「すみません・・・私も寝させていただきます」

「・・・」

「ホワイトも寝ていいわよ。普段から疲れてるでしょ？それに戻ったら忙しくなるんでしょ？」

「お言葉に甘えよう。お前も無理するなよ」

「おやすみ」

「ああ」

3人とも寝息を立て始めた。あー、私も帰ったら1日くらい寝てやろ。

第190話

2 B s i d e

トントン

「どうぞ」

「失礼します」

210だ。11Bは彼女のことを嫌っているけど、私はそうでもない。それに、9Sとの合流前からサポートして、9Sも上手くやってたんだと思う。私と210はただ9Sの傍にいる。彼が目覚めるまであと1日。正直、不安だらけ。

「2B、どうしてあなたはあの時、彼へのメッセージに直接的な表現を残さなかったんですか？」

あの時。論理ウイルスに汚染された私は、偶然通りかかったA2に殺してくれるよう頼んだ。最期、駆けつけた9Sの顔を見て満足だった。その後、ラヴィから一通りの事を聞いた時、私は彼の事を何もわかっていなかったんだと気づいた。

「今まで私の思いは全部伝わってると思ってた。でも違った。ただ・・・私の反応や行動に合わせてくれてただけ」

「そんな事ありませんよ。S型機は優秀で……」

「違う!!」

咄嗟に210の言葉を遮ってしまった。

「いや……ごめん。でも……違うの。確かに他のS型機は知識は優れているかもしれない。でも……9Sなら仮に私と意見が違っても口に出さないんじゃないかって思ってた」

「そうかもしれないですね。彼は変に人間味がありますから」

「それを勘違いして……私、私ずっと繰り返して。どう足掻いても結局最後は変わらなくて……9Sを」

ああ。なんで気づけなかったんだろう。いや、違う。目を逸らしただけ。蓋をして放っておいただけ。どれだけ足掻いて変えようと努力しても、根本の勘違いが直ってないなら結果はズレたまま。目から大粒の涙が溢れる。9Sを思うなら彼が望む方法で死んだ方が償えるかな?でも……

「9S……」

死ぬ前に1度でいいから9Sの笑った顔がみたいな。

「2B!」

「なに」

「ネガティブになつてはいけません。ここでアナタが諦めたら、私や11B、そしてラヴィさんの苦労を無駄にすることになります。それに折角のチャンス無駄にはできません」

「なっ!?!」

い、今! 210! ナ、9Sの髪にキ、キスした!?!

「遅い時間ですし、私はこれで」

そういう210の目はどこか慈愛に満ちている。

「お、おやすみ」

「おやつすみなさい」

・・・なんだ。210が部屋から出ていく。

「・・・私も・・・」

左右を見るけど当然部屋には誰もいない。

チュ

210と同じように髪にキスをする。

ポッ

一気に顔が紅くなる。脳裏に浮かぶ以前みた映画のラブシーン。頭を激しく振って考えをかき消す。だけど消えない。

「あ、あんな風に9Sと・・・」

さらに顔が紅くなる。だけど、どこかやる気が出た気がした。

「よし。ラヴィやみんなの為に頑張らないと」

そうやって目を閉じる2Bを、2体のポッドは静かに見守っていた。いや、存在を消していただけで210がいたときもいた。だからこそあの210の様子に軽いパニックを起こしていたのは2体だけの秘密となった。

16D side

「2Bさん。ほら起きてください。朝ですよ」

「ん・・・」

「おはようございます。寝坊なんて珍しいですね。昨日の夜なにかあったんですか？」

「きのうのよる・・・」

2Bさんの目が開く。

「なにか・・・」

「なんでもない！」

顔を真っ赤にする2Bさん。これは何かあったんでしょうね。まあ追及しませんが。

「そうですか。では、失礼しました」

部屋を出る。

「全く珍しいわね。アンタが寝坊なんて」

「昨晚はなぜか寝つきが悪くて・・・」

「寝る前に2Bと話して様だったけどなんかあったの?」

ポフウ!

音が聞こえるほど顔が赤くなった。ふむ… 妙ですわね? ですが、210さんが2Bさんと会話したところでこんな風になるなんて想像できません。

「ちよつと大丈夫? 今日なのよ? 9Sが起きるの」

「はい・・・分かってます」

あー・・・これは原因は9Sさんですかね?

「あ」

部屋から出てきた2Bさんと210さんの目が合いました。2人は互いにどこか慰めあっているような相手を敵視するようなそんな視線です。これは絶対9Sさんですね。

「ちよつとアンタたち昨日なにあつたのよ! 教えなさいよ」

先輩く少しくらい空気を読んでくださーい。後ろから出てきたポッドたちにも目配せをする。

「～～」

「電子音で口笛って……」

なんか……アホなのか真剣なのか……

「ちよつと。アンタたち何突っ立てるの？」

デボルさんの一言で私以外の全員が我に帰り動き始める。さて、私も行かないと。現在私たちの仕事はレジスタンスキャンプの雑用です。戦闘からちよつとした研究の補佐なんかですね。2Bさんは特例でずつと9Sさんのそばにいます。とりあえず、再起動されるまで待ちましようか。

数時間後

「16D！」

「そろそろですか？」

「そうみたい」

「わかりました。皆さんを集めまてきます」

全員集合

「それで誰が状況を説明するわけ？」

「え？2Bじゃだめなの？」

「ダメだ。今の9Sのメンタルがわからない以上2Bを出すのは逆効果だ。それどころか下手すれば2Bが殺されるぞ。せめて一クッションおかないと」

「それじゃあ誰がいけます？」

「私は・・・ほら効果作戦の初期の段階で死んでることになってるし・・・」

「それなら先輩と私、それに210さんもダメですね」

「となると・・・デボルとポポル？」

「ダメよ。私とポポルなんて塔で9Sを進ませるために・・・」

「多分死んだと思われてます」

「一体なにやっただんですか。」

「ホント、あの時は大変だったんだからね」

「そう言ってますけど、ジャツカスさん奇声あげて銃弾バラまいただけじゃないですか」

「なっ!?! 助けてもらってその言い草はないだろう」

「本当に一体なにやっただんですか。」

「でも消去法で言ったら爆薬オタク。アンタになるんだけど」

「うへえ。これ私切り殺されないかな？」

「大丈夫。そんな事させない」

「ジャツカスさんへ集まる視線。」

「ハイハイ分かったとも。やればいいんだろう？やれば」

「よし。決まりですね。それじゃあ早く準備を」

数分後、

今、このキャンプにいる全員が扉の9Sのことを注目している。あるものは興味本位で。またある者は最悪の恐れを案じて銃や武器に手をかけている。

ガチャ

扉が開く。

「ほら、ここはあの世じゃないだろう?」

9 S side

「・・・あれ?・・・ボクは・・・?」

どこか世界が新鮮に見える。見慣れた天井。見慣れているはずなのに新鮮に見える。

「!?!」

記憶が蘇る。そして沸き起こる疑問。

「どうして・・・」

2Bがいらない世界なら死んだ方がまだ。

「目は覚めたかい」

体を起こす。

「ジャツカスさん。僕はどうして生きてるんですか?」

「そりゃあキミが死んでしまったら2Bが悲しむからね」

第191話

2 B s i d e

「推奨：停戦」

「ポッド153に命令ッ！貴様の独断の倫理思考と発言を禁止する！！」
「命令を拒否する」

ポッドが命令に逆らった？

「・・・もう一度繰り返し返せ」

「命令を拒否する。私はここにいる誰も傷つけない」

「黙れ」

「9 S」

「口を閉じろ」

「命令を拒否する。9 S。君もわかっているだろう」

「うるさい」

「君に必要なのはすな・・・」

「黙れ！！」

「ポッド153!!」

耐えかねた9Sがとうとう刀を抜いた。そしてすかさずポッド153に投げつける。
「問題ない。心配してくれてありがとう」

今まで見たことのないポット同士のやり取り。

「9S。お願いだ。一度でいい。私たちの話を・・・」

ポッド153が9Sの前に立つて懇願する。

「反抗するその口を塞いでやる」

マズイ、ハッキング!

「9S! 止すんだ!」

ガコンツ!

「ポッド!?!」

その瞬間ポッド042が9Sの頭に体当たりした。そして、武装を9Sに向ける。

「ちよつと待った。2人いや、1人と1体? 落ち着くんだ」

「そこは別に重要じゃないと思いますよ」

「9S。私は君がポッド153に危害を向けることを許さない」

「黙れ! 君が守るなんて言葉口にするな! 2Bを守れなかった癖に!」

「そうだ。私は2Bを守れなかった。しかし、2Bは生きている。もう二度と失敗しな

「い」

「戯言を！」

「そして、同じくらい気持ち悪さをポッド153に持っている。私は決めた。この2人を死んでも守る」

「ジャツカスさんどうやらポッドを数えるときは人でいいみたいですよ」

16D、重要なのはそこじゃない。

「どいつもコイツもバカにしゃがって！」

「9S！」

彼の正面に立ってまっすぐ彼を見つめる。

「2B！」

11Bの声。

「9Sと2人つきりで話がしたい」

「2B・・・」

「私は構いません」

「まあいいんじゃない？ 私達みたいな外野いるよりも2人の方が有意義だよ」

「先輩の言う通りです」

「ちよつとあとは保護者のOK待ちなだけ？」

「ポッド」

「構わない」

「あ、ちよつと待つて。9 S」

9 Sが嫌そうな顔で11Bの方を向く。

「そんな嫌な顔しないで貰いたいんだけど……まあいいわ。どんな決断であれ、私達はアンタの決断を尊重するから。誰にも邪魔はさせない。あのクソ司令がなんかやろうとしても黙らせるから安心して」

「僕が2Bを殺してもですか？」

「もちろんですよ。それに9 Sさんならすぐに後追つてそうですし」

「やっぱりヨルハつて頭おかしいんじゃない」

段々否定できなくなってきた。

「9 S、さあ行こつか」

「……はい」

私達は歩き出す。9 Sは私の後ろにいる。前のように隣は歩いてくれない。しばらく互いに無言で歩きしばらくして9 Sが口火を切った。

「2 B、これから質問する事に正直に答えてください」

「うん」

「今まで何体の僕を殺してたんですか？」

「わからない。数え切れないほど沢山」

「今まで印象的だった僕はいますか？」

「いない」

「え〜??そんなはずないでしょ〜!だって毎回少しは違う会話してきたんですよ!毎回、違う殺し方で僕を殺したんですよ!正直に答えるって言ったじゃないですか〜?」

「いい加減にして!それに私も殆ど覚えてない」

「いい声を荒らげてしまおう。」

「9Sとの会話は全てソフトウェアのアップデート時に強制的に消去させられてるの。残るのは楽しげな会話をしていたという記憶と、あなたの最期の時だけ」

「今、この瞬間にも数多の9Sの最期を思い出す。」

「だから、私は君に冷たくしているの。でも、会話をしていると何故かどこか懐かしい感覚がするの」

「胸に手を当てる。機械に命はない。でも心はある気がする。」

「忘れないように、印象的だった会話を自分のボディに刻みこんだ事もあった。結局、パーツ交換されたけど」

確か・・・刻んだのは右手だったかな。

「結局、9Sと過ごした時間は長いのに覚えてる事は少ししか無いの」

目から涙が溢れる。

「2B・・・泣かないでください」

「次の質問いいですか？」

「うん。ごめん」

私の事を励ましてはくれない。悲しみを抑えて涙を止める。

「2Bは・・・僕がした事をどう感めました？」

「私は・・・正直・・・嬉しかった」

9Sが立ち止まる。

「冗談かどうかは判断できませんよ」

「冗談じゃない。私は本当にうれしかった。確かにA2と争ってほしくはなかった。でも、9Sが任務を抜きにしてただ私の為だけに動いてくれたことが嬉しかった」

ああ・・・やっぱり私もイカしてるんだ。気づいたところでこの思いは止まらない。2

10にも9Sは渡さない。

「9Sは間違っていない。誰も9Sを責めたりしない。ただA2と話し合っただけ。どうするかはその後決めればいい。どんな決断でも誰も責めないし止めない」

私は彼の前に立つ。そして目隠しを取って投げ捨てる。風で目隠しは飛んで行ってしまった。そして砂が時折、目の近くに当たる。

「どうかな？」

9 Sは私の目を真っ直ぐ見つめている。やっぱり9 Sは綺麗な目してるなあ。

「2 B・・・彼女は、A 2は僕のこと許してくれるでしょうか」

「大丈夫。A 2は私の最期の願いを聞いてくれた時から怒って無かったと思ったよ」

「そうだといいんですけどね」

「そして私からも一ついい」

「どうぞで」

大きく深呼吸をする。無いはずの鼓動が早くなるのを感じる。9 Sの手を取る。

「2 B? 顔が真っ赤ですけど・・・?」

9 S! お願い。指摘しないで。

「9 S。私はアナタの事が好きです」

.....

「アハハハっ! もしかして2 B、この話をする方が緊張したんですか? 変なのよそれに僕も2 Bの事好きですよ」

違う。その想いは私の求めるものじゃない。

「9 S!」

「なんですr」

「あつ!」

悲劇にも足元の砂が崩れ2人共バランスが崩れる。

「おつとつと2 B大丈夫ですか・・・!?」

現在の私達の体勢はと言うと9 Sの上に私が乗っかっている状態である。

「とーとりあえずどけてくださー・・・力つよ!」

「うるさい」

「どけてください!」

「・・・ごめん」

なんとか自分を押さえつける。この行為を求める資格は私にはない。

「これはエミール?」

立ち上がり辺りを見渡すと巨大なエミールの顔が何個も転がって(?)いた。先程まで全く気づかなかったほど自分が緊張していた事に改めて気づいた。9 Sと顔を見合わせる。

「行ってみよう」

その巨大なエミールの顔に近づく。顔の間と間を通っていくと横たわっているエ

ミールを見つけた。

「エミール!!」

「気を……つけて……まだ……生きて……」

その瞬間地面が大きく揺れる。

「グウアアア、アア、アア、アアア!!」

そして球体が連続した芋虫のようなものが空へと勢いよく飛び出した。

「クソツ」

明らかに友好的じゃない。

「警告、旧世界の魔法兵器」

後をつけてきていたのかポツドが物凄い速さで私の少し後ろについた。

「魔素を利用した攻撃はあらゆる防御システムを貫通する可能性あり。推奨、回避」

「そんなこと言われたって……」

こんな激しい攻撃、今まで経験したことがない。以前の降下作戦のほうがまだ余裕があった。

「僕は……ボク達ハ……!!永遠……クルしい……イタイ」

「9S!」

9Sは慌てて回避する。バランスが崩れた彼の手を取って支える。

「2B！助かりました！」

「気をぬかない」

「あの・・・手」

「あつ！」

「2B！危ない！」

その瞬間9Sに抱き寄せられる。

「これで貸し借りはなしですよ」

「うん／＼」

いけない。いけない。まだ戦闘中なのに。顔が熱い。

「何で、コンナ・・・僕達だけ・・・もう・・・全部・・・殺してヤル!!こんな世界!!!要ラナイ!!!」

「2B背中は預けましたよ」

「任せて」

なんだか自信が湧いてきた。でも、自信だけじゃ倒せない!!そもそもコイツはなんなの!?

「警告、敵性魔法兵器、魔素の放出量増加」

「そんな・・・」

CALL

「あれは僕の……分身の慣れの果てです……度重なる増殖と、長年に渡る戦争で……自我が崩壊してしまっているんです……あいつらは……僕が決着を……つけないと……」

「黙ってて!」

巨大ないくつものエミールから放たれる多彩かつ激しい攻撃。

「9S!」

「ええ!まだいけますよ!それよりアイツを」

9Sが指さす方には他の個体よりダメージが蓄積された個体がいた。

「ララ……ラ……ラ……ラララ……ラララララ……ラララララ……僕
は!僕達は頑張ったよ!雨の日も嵐の日も嵐の日も。たとえ仲間が死んでも僕達はく
じけずに戦ったよ!でも、永遠に続く戦争が、永遠に続く痛みが、ツフツツ……永
遠に続く苦しみが……僕達に叫ぶんだ!この世界は守るべき価値が無いって……
こんな世界に意味は無いって……ハハハツ……そう叫ぶんだよ!フツツ……
ハハツ……ハハハハハハアーハハハハハハツハハハハハハお前に……お前たちに……
この痛みが!!悲しみが!!絶望が!!わかるかアアアああああああああつ」

エミールも私のように、いや私以上に苦しんだらう。その叫びの一つ一つが私の

心に突き刺さる。

CAL L

「だからって!!こんなの間違ってる!!どんなにくるしくても、どんなに辛くても……あの人は諦めたりしなかった。いつか乗り越えられると信じて、戦ってたんだ!そうですよね!?カインさんッ!無駄だとわかっていても、やらなきゃダメなんだッ!だって、あの人が、守ろうとした世界なんだからッッ!!」

「……………!!!」

エミールの顔たちが転がるのをやめ、その場で凄まじい速さで回転し始めた。

「うわッ!!」

「9S!」

突如、私たちの視界が光に包まれた。9Sの頭を下げさせる。

「ダメ……だなあ、僕は。あんな大事な事を、最後に……思い出すなんて」

「エミール……」

「僕は逃げていたんです……大事な人を失った記憶から……だって……辛くて……苦しくて……最後の最後で……2お2人に迷惑をかけちゃいましたね……でも、もうすぐ会えるから……きつと……」

「大丈夫。修理すれば……」

「……やだなあ……みんな、いるじゃ……逢えて……良かった……」

僅かな電子音。Eメールの最期だった。

「Eメール……」

「2B……帰りましょうか」

「うん……うん!?!」

一瞬、9Sの言葉が理解できなかつた。

「つまりそれって……」

「A2と話してみます」

「了解。通信をA2に接続」

CAL

「倒したか。2人共ケガはないか」

「大丈夫。損害は軽微」

「そうか。よかつた」

もしかして……A2もちよつと変わったのかな？ 優しくなった気がするな。

「わかつた。今からキャンプに戻る」

「それじゃあ行こつたか」

「はい。でもできるだけゆっくり歩きませんか？」

「・・・いいよ」

A2を待たせる事になるだろうけど、少しくらいいいだろ。そう思いながらキャンプへの道を歩き始めた。

最終話 前編

エージエントside

2Bたちがキャンプを出てすぐの頃。

「は〜い到着ー」

「長時間の操縦、ご苦労だったな」

「いえいえ。今後とも当機をよろしく」

ヘルメットを脱いで機体から降りる。

「ぬわああああん」

大きく伸びて解放感からつい奇声をあげる。あークソ眠い。

「ラヴィ、おかえり。だいぶお疲れみたいね」

「本当に疲れた」

「ラヴィさん、帰りは私が操縦しますよ」

「お願い。ありがとうポポル」

「ラヴィ、肩貸そうか？」

「ジャツカス〜疲れが取れるツボとか知らない？」

「残念ながら」

奇声を聞きつけて11B、16D、210が寄ってきた。

「ラヴィ、おかえり」

「おかえりなさい。ラヴィさん」

「お出迎えどうも。210もありがとね」

「いえ」

さて、挨拶は済んだし本題に入ろうか。

「2Bと9Sは？」

「2人なら・・・」

少女達説明中

「なるほど。いいんじゃない」

「それで、ご主人様を失ったポッド2体は太陽に当たってるわけだ」

視線の先でふわふわ漂っているポッド達。

「平和だねえ」

そうボヤいた瞬間だった。

「あれ？」

ポッドがピタッと動きを止めた。

「その必要は無い」

意気揚々とした4人がポツドの一言で動きが止まった。

「それはどういう意味だ？」

A2の声が低くなる。

「今、2人は1歩を踏み出そうとしている。以前よりも進んだ関係に。これはピンチでありチャンスだ。それに今のところ何とか対処している。だから・・・」

「私からも要請する」

ポツド153。

「・・・まあそれなら。いいんじゃない」

11Bそう言つて納得してないでしょ。まあでも予防線ぐらいは張つとくべきよね。

よし！

「もしもに備えて砲撃支援の準備だけしましょう。ポポル操縦して」

「了解です！」

「ほら動くぞ！ウーラー！」

適当に喝を入れてへりに乗せる。

「心配しないの。もしヤバそうだったら、私が操縦して戦いのど真ん中に降ろしてやる

」

「離陸します」

この間も無線からは2B達の戦闘音と機械音質の笑い声や叫びが聞こえていた。

「ほら、こんくらい私達なら何ともないだろ。飛べ！」

着陸より一足先にヨルハ組が飛び降りた。

「砲弾は下の階です！」

4人は慌ただしく下に降りていく。ある程度、ヘリの高度も飛び降りられる高さになつてきた。

「それじゃあ、ジャツカス手伝つて」

私も飛び降り後ろにジャツカスが続く。カバーを取る。

「ラヴィ!!」

A2を先頭に砲弾が到着する。

「こちら準備よし」

「了解。座標を送信」

ポッドから砲撃指定座標が送信されてくる。A2に頷く。

「装填！」

照準も完了した。でもヘルキャノンはあまり精度が期待できない。

「もし、撃つたら修正指示をよろしくね。あとしっかり警告してあげてね。2人を吹っ

飛ばしたとか勘弁よ」

「了解」

後は、ポッドからの射撃の合図待ちだ。

数十分後

「……やだなあ……みんな、いるじゃ……逢えて……良かつ……」

通信終了

「さて……」

装填していた砲弾を慎重に取り外す。正直、クソ重いから用意した分を全て撃って終わらせたい。無理だけど。

「さーてさっさと片付けましょ。あ、誰かそっち持つて」

「わかった」

「A2しつかり持った？いくわよ。せー……」

「待て。ポッドから私にだ」

どうやらポッドから通信が入ったみたいね。

「倒したか。2人共ケガはないか」

「大丈夫。損害は軽微」

「そうか。よかった」

原理がわからないけど何故か私達にも通信が聞こえる。

「A2。話しがしたい」

A2がチラリとこつちを見る

「いいよ。行つといで」

「わかった。今からキャンプに戻る」

通信終了

「ラヴィ悪いな」

「別に気にしなくていいわよ。これでようやく一段落かな」

「すまん。行ってくる」

「気おつけてねー。あ、デボルそっち持って」

「いくわよー。1、2、3」

数分後

「あー疲れた」

「お疲れ様でした。どうぞ」

ポポルから貰った水を飲む。

「ふう〜」

壁に寄りかかると心地よい風が吹いてきた。みんなも風に当たって心地よさそう。

「ラヴィ、大丈夫？」

「ち　か　れ　た」

もう、動きたくない。

「お昼寝でもしたらいいかがですか？」

「ポポル、それいいわね。それじゃあお言葉に甘えておやすみなさい」

「はい。おやすみなさい」

「あ、夕方には起こして」

私はそう言い残して、睡魔に身を委ねて気絶するように眠りについた。

A 2 side

「何気に初めてだな」

声にだして見ると改めて不思議な感覚だ。

「お、どうした？2号だけとは珍しいな。なんならはじめてか？」

「はじめてだな。9Sから話しがしたいと言われてな」

「2Bも9Sも戻ってないぞ？」

「なんだと？」

人を呼びつけといてこれか。

「まあすぐ来るさ。後、ホワイトが何か話があるみたいだったぞ」

「なんだその言い方」

「ボヤいてるのを聞いてな」

「なるほどな。気乗りしなが行ってくる」

「あ、2号」

歩き出そうとすると呼び止められる。

「調子良さそうだな」

「確かに調子良い。肩の荷が降りたし、心に余裕を持てるようになった。そっちはどうなんだ」

「変わらず気長にやってるさ。最近は部下が死ぬことも少なくなった。悲しまなくていい」

「そうだな」

「だが忘れた訳じゃない。そうだろ？」

「ああ」

「おっと長くなった。悪いな」

そう言つてアネモネは作業に戻っていった。

「ホワイト。いるか」

キャンプの奥の扉をノックする。

「何の用だ？こつちだつて暇じゃないんだが？」

扉が開き不満げなホワイトの顔が出てきた。

「アネモネから聞いたぞ。私に話があるんだろ？」

「なんでアネモネが知って……」

「独り言が聞こえたらしいぞ」

不満げな顔が露骨に不機嫌になった。

「それで、9Sが話しがあると呼び出されてな。だが戻ってないんだらう？それまで話してやろうと思つてな」

ホワイトは手を顎において考えている。そんな悩むような話しをされる覚えはないんだが……？

「とりあえず今はやめておけ。そうだな。9S達との話が終わつたら来い」

「わかった。だが2人が帰ってくるまで……」

「来たみたいだぞ」

指さす後ろを振り向くと2人がキャンプの入口にいた。

「じゃあ後でな」

アネモネは中へ戻つた。さて、まずは遅れた理由からだな。

「おい、遅れたくせに随分楽しそうだな？」

「あ、ごめん」

「それじゃあ2B。しばらく部屋を借りますね」

「・・・うん」

「安心しろ殺したりするものか」

9Sとキャンプの個室に入る。

「適当なところに座ってください」

ベツトに腰掛ける。9Sも向かい側に座り向かい合う。互いに無言の時間が流れる。

仕方ない。口火を切ってやるか。

「そういえば、さっきの戦闘大丈夫だったか？」

「なんとか。特にケガもなかったですよ」

「流石だな。お前らの連携は並のコンビで出せるものじゃないぞ」

「お褒めにいただき光栄ですね」

「そう卑屈になるな。本当に凄いと思ってる。初めて会って戦ったときからずっと思っ

てたよ」

当時を思い出して笑みが溢れる。あの時からそんなに時間は経っていないのにな

り昔の事のように感じるなあ。

「あの時の無口な印象とはだいぶ違いますね」

「ああ。口数がすくなくないと肝心な部分が伝わらないと最近気づいたからな」
9Sが黙る。

「今回の件、根本的な原因はこれだ。私もお前も2Bも互いに互いの事を過信しすぎてたんだ」

「違う」

「違わないさ。私は2Bに最期の時になってお前の事を託された。アイツから送信された記憶や想いを同じようにお前も知ってると思ってた」「それはどんなものだったんですか」

「沢山の記憶だった。綺麗なものばかりじゃなかったし、お前の死に顔を何個も見た。それらが流れ込んできたんだ。苦しかったさ。だが」

「だが・・・?」

「お前への想いや好意はしっかりと言葉として伝わって来たな」

「それがどうして僕を救う事に繋がるんですか?」

「まあ色々理由はあるんだが・・・まあなんだ。お前から見ると懐かしくてな」
「懐かしいですか?あなたが?」

「ハアとため息がでる。」

「お前も私のことを感情を失ったバーサーカー扱いか?私だって仲間はいたさ。死んで

からかなりの時間がたったがな」

その驚いた目を向けるのをやめろ。

「まあいい。だがな、今こうやって話してやっと私の事がわかったろ？」

9Sが再びバツが悪そうな顔をする。

「お互い腹を割って話してみないとわからないことってのは沢山ある」

「こんなふうにですか？」

「そうだ」

「僕には無理です」

「無理じゃない。やれ。どちらかが踏み込まないと一生このままだぞ」

「なんで僕なんですか！2Bだって！」

「諦めろ。筋金入りのアイツよりお前の方が簡単だ。それに結局お互い勇気をだすことになるんだぞ」

「でも、僕が勇気を出したって2Bがそれに応えてくれる保証なんて・・・」

チツこんの相思相愛片思いどもめ。

「自覚無いのか？お前、2Bが最期に想いを託したのが私だったこと嫉妬してただろ？」

「そんなこと・・・」

ウソだろ。今気づいたのか・・・

「私が選ばれた理由は2Bに聞け。そこまでは知らん。それにお前ってそんな初心だったか？」

9Sの顔が真っ赤だ。

「ほら、安心して行って来い」

コク

「ちよ、ちよつと待って！」

「なんだ？」

「A2。ありがとうございます」

「あ、私からもいいか？」

「はい」

「これからよろしくな。9S」

「こちらこそ」

そう言って9Sは飛び出していった。

「世話が焼ける……」

ホワイトのところに行くか。

2B side

「2B!!」

「ど、どうしたの?」

中の様子が気になって扉を見つめていたら9Sが勢いよく走ってきた。

「大切な話があるんです。人の少ないところに行きませんか?」

「9S! 声大きい!!」

キャンプ中の視線が私達に集まっていた。すると部屋からため息をついたA2が出てきた。

「なら話しは部屋の中で!」

9Sの手を引いて部屋に飛び込む。

「座って!???

「それで話して?」

「.....」

「9S!?! 落ち着いて!?!」

どうしよう?!?! まだ論理ウイルスが...

「2B!!」

「なに!?!」

「2B.....僕は.....僕は.....」

その瞬間、私の全機能が一時的に停止した。

「あなたの事が好きです」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

あれえ？おかしいな・・・？視界にノイズが・・・9Sの顔が見えない。彼の顔がみたい。目に手を当ててて気づく。

「あ、」

涙。大量の涙。今まで経験した事の無い量。9Sをこの手で殺めた時以上の涙が溢れた。

「9Sう」

彼の名前を弱々しく呼ぶ。

「ねえ。返事して・・・」

「はい・・・・・・・・」

「私もあなたの事が大好きです」

やっとお互い自分の思いを伝えあつた瞬間だった。それを理解した瞬間さらに大粒の涙が流れる。

ギユ

彼がたどたどしく抱きしめてくれる。

「僕はいつでも2Bの隣にいます」

「ありがとうありがとう」

遂に私は声を出して泣いた。彼の小さな体を抱き締める。それに反応するように彼も私の体を抱き締めてくれる。そこから私は数十分泣き続けたのだった。

数十分後

「ねえ2B一つ教えてください」

「なに？」

「どうしてA2に僕のことを？」

「彼女は悪人じゃない」

「他には？」

「それだけ」

「え？」

「うん」

「本当にそれだけなんですか？」

「それだけ」

途端に9Sの顔から力が抜ける。

「だって、ウイルスに侵された状態でまともな思考回路なんて機能しない」

「それもそうですけど・・・」

「これ以上何も無い。それよりも」

彼の目をしっかりと見つめる。

「これからもよろしく」

「こちらこそ2B」

「ありがとう9S。いや、”ナインズ”」

窓から入ってくる夕日が私達を照らしていた。

エージェントside

「ラヴィ、ラヴィ起きて」

「んあ?」

目を開けるとテボルに体を揺さぶられている。

「おはよう。もう夕方?」

「そう。日も傾き沈んで来たわよ」

「A2は?」

「まだ帰ってきてきてないです」

「昔話が盛り上がってるんじゃないですか?」

「そうかもね。さて、ご飯の準備しましょうか」

「手伝います。たまにはみんなで手伝ませんか?」

「私は不器用だから。パ・・・」

「いいわね。16D、2人仲良く夫婦みたいで」

「先輩」

「はい。やります」

結局その日の夕食の準備は賑やかになった。私としては大家族のお母さんになった気分だった。

数十分

「A2さんまだですかね？」

「もうしばらくしたら帰って来ますよ」

「今帰った」

「お、噂をすれば」

「おかえりー。ごはんできたわよ」

「悪いが今日はいい。ちよつと眠りたい。悪いな」

そう言うとうとA2は上の階に行ってしまった。

「珍しいこともあるものね」

「まあ大丈夫でしょ。それじゃあ冷める前にいただきます」

「あ、11B！」

久しぶりにお腹いっぱいになって、みんなすぐに眠たくなつたみたいでそのまま寝ること。

「A2。隣いい?」

「・・・」

返事はない。顔を覗き込んで見る。どこか息苦しそうだった。頭を起こさないように撫でてやる。

「何があつたか知らないけど、ゆっくりおやすみ」

心なしか、A2の寝息が穏やかになつた気がする。

「それじゃあ、おやすみなさいA2」

翌朝、

朝、身支度を整えて風に当たって目を覚ましていると、

「おはよう」

「!!おはよう」

ビククリして一瞬反応が遅れた。

「珍しいわね」

「早く寝た分早く目が覚めたただけだ」

そう言うのと下に戻っていった。どこかA2に避けられてる気がする。とりあえず、A

2 以外のみんなを起こす。

「さて、各々自由にどうぞ〜」

そう言つて私の方はライフルだけをもつてイノシシを狩りに来た。どうも最近、この辺りのイノシシの量増えいる気がする。もしかして、以前のことから味を占められたかしら？ そうなると、厄介ね。この動物たちは機械生命体やアンドロイドたちに触れてきた。その結果、人工物を恐れなくなった。追い払う意味を込めて今回は多めに狩ろう。

数十分後〜

そこには5体の巨大なイノシシが倒れていた。近くによつてまだ息があるものになり、イフを使つてとどめを刺していく。

「ふうさて、これ運ぶのだつるいなあ・・・」

イノシシ1体の重さはかなりのものだ。

「誰か呼んで・・・」

いや、みんな自由に楽しんでるのに呼んじや悪いわよね・・・でも、コイツ重いよねえ。私が、最初にキャンプから出てきたからみんながどこに行つてるかもわからない。いや、考えてる暇があるなら体を動かしたほうがいいわよね。

「おいししょー」

なんか、すごい年寄りっぽいわね。なんとなく恥ずかしくなって周りを見渡してみ
る。

「がんばろ」

1時間後

「あゝあゝ」

拠点に1体目を持って帰って確認したけど全員どこかに出ていて誰も残っていない
かった。そのため、5往復した。クツソ疲れた。それになんで今日に限ってこんな暑い
のよ!? 耐えきれず頭から水を被った。

「私、随分と髪の毛傷んでるわね」

ここ数日の忙しきでシャワーすら浴びていなかった私。

「はっ!」

A2から避けられたいたのは、私の体が臭かったからでは!? クンクン。

「そんなに臭いは・・・いや、鼻がバカになってるんだから臭いなんてしないわ」

A2「ごめんなさい。臭い体で隣で寝て、頭まで撫でてごめんなさい。」

「なんとかしないと」

嵐にもうたれたしただお湯で頭を軽く洗うだけじゃダメね。やるなら徹底的にやら
ないと。となると・・・お風呂。せつかくならみんなで入りたい。大きいお風呂みたい

なのが必要ね。

「どうせお風呂でスッキリするならいくら汗かいても一緒か」

よし、やる気が出てきた。私ってチョロい。となればまずは、目の前のイノシシを肉に変えないとね。

数十分後

「ただいまー。どうしたんだいラヴィお疲れかい？」

「とつても」

解体を終えて休憩しているとジャツカスが帰ってきた。

「どこ行つてたの？」

「キャンプで起爆装置の改良をね。ほら」

ジャツカスから起爆装置が投げられる。

「起爆装置可能な範囲が10mぐらい伸びた」

「砂漠に行つたの？」

「ああ。爆発物を弄つていいのは砂漠だけと決まつてるからな」

「何やらかしたの？」

「やらかした前提なのやめないか」

「古い対戦車地雷から爆薬を抜こうとしてしくじつてね。私も若かつた」

それ絶対に若い頃の失敗で片付く問題じゃないわよね。これはアネモネも大変そう。「ラヴィは解体作業か。ご苦労様」

「ねえジャツカス。正直に答えてほしいんだけど、私って臭う？」

「ん？ああ確かに臭うよ。凄い臭いだ。この部屋の臭いは少しすれば消えるさ」「ですよー。でも部屋の臭いは消えても私に染み付いた臭いは消えない。」

「よし！そうと決まればやるわよ。手伝って」

「え？構わないが・・・」

必要な道具を持って川の近くの比較的建物に囲まれた所にやってきた。

「まずは穴を掘ろう」

「確認だけどこれ訓練じゃないよね？」

「訓練ではないわよ。それに汗かいたほうが後で気持ちいいわよ」

数十分後

十分な深さと大きさの穴を掘り終わった。そこにシートを上からかけて端を石で書いて飛ばないようにする。次に川から溝を掘って水を貯める。都市の中を流れてる川の水がきれいな方がいいわね。人類がいなくなってからここまで綺麗になるなんて。自浄作用。自然の偉大さを感じる。

「その辺の苔がついてない大きい目の石何個かこつちに頂戴」

私のほうは杖を拾ってまとめおく。

「ラヴィ〜このくらいでいいか？」

「大丈夫。お疲れ様。いったん帰りましょう。そろそろみんな戻ってくる頃でしょう」

数十分後

「あ、おかえりなさい」

「おかえり〜」

拠点に戻るとデボルとポボルが先に帰っていた。

「ただいまー」

その直後に11B・16Dが帰ってきた。

「遅いわね」

立て続けにA2も帰ってくるかと思っただけどなかなか帰って来ない。

「誰かアイツの動向知らないの？ 話に行くとか言ってた気がする」

「なら相当絞り込めるだろ」

「A2さんの交友関係って狭いですからね・・・」

「大体、キャンプでアネモネさんと喋ってるじゃないかい？」

「え？ 私達キャンプにいましたけど、A2さん見かけませんでしたよ？」

「すれ違った？」

「有り得る」

「あ、おかえり」

A2がなにか大きな袋を背負って帰って来た。

「村の連中からだ」

「ありがとう。少し持つわ」

無言で袋を差し出してきた。それを上の階に運ぶ。

「ありがとう。今日は多めにご飯作ったから沢山食べてね」

「ああ。あと、ホワイトがラヴィにようがあるそうだ」

「わかったわ。それじゃあ戻りましょうか」

「……」

A2がどこかそっけない。

「「いただきます」」

私とA2が食卓についた所でみんなの元気な声が響いた。その瞬間いつものように一瞬にしてテーブルの上の料理がなくなっていく。私の食べる分は確保してあるので問題は無い。あれ？でも今日は少し皿が空になるのが遅い。見るとA2が殆ど食べてない。私と同じぐらいの量しか食べてない。

「A2ッ」

「「ごちそうさまでした！」」

A2に声をかけようとした瞬間、私の声は完食を告げる元気な声にかき消されてしまった。大丈夫かしら・・・

「そういえば、ラヴィ私がさつき準備したものはこの後使うんだろう？」

「そうよ。それじゃあLet's GO！」

数十分後

「なにこれ」

未知との遭遇。誰かがボソツと呟いた。

「ちよつと待ってて」

集めた石を火にかける。

「ラヴィ、悪いが私も含めた全員に説明を頼む」

「そうよ。これは何？」

「風呂」

「は？」

「お風呂」

「外で!？」

「別に誰も通つたりなんかないわよ」

「だからって・・・」

「ラヴィって変態だったの!？」

何を今更。

「何を今更」

あ、ヤベ声にでちゃった。

「二・・・二・・・」

「まあ、変態じゃなければあんな映画選んだりしないだろ。それにお前らも顔赤らめてたくせに」

「それを言われると・・・」

「確かに変態じゃなきや私たちのセツ：アレ／／／やったかとか聞いてきませんよね」

・・・A2助けてるようで助かってないわよ。まあいいや。石も熱々になったしそろそろかな。

「はーい熱いのが飛ぶから離れてねー」

シャベルで石を運んで、穴の中に放り投げる。

「あっちー!」

「あ、飛んだ？だから言ったのに」

忠告を踏まえてみんな穴から2 m以上距離をとった。それを確認して石を次々に放つていく。

「そろそろいいかな？」

湯に手を突っ込んで確認する。

「お、いい温度」

さて、温くなる前に入りますか。

「ほ、本気ですか・・・？」

「え？だから脱いでるんだけど」

砂が付いた上着を脱いで下着だけになる。

「えッ・・・」

何その声？今更、私の体に何を思うわけ？

「ラヴィさんって今更ですけど相当鍛えてらっしゃいますよね？」

下着も脱いで生まれた時と同じ姿になる。

「うわっ腹筋すごっ！」

あの・・・私の腹筋をみんなで見るとやめて貰えません？みんなの視線を避けるためにも湯に入ろう。

「ふう〜〜〜」

全身から力が抜けていく。疲れが全身からお湯に放出されるようだ。ついつい顔がだらしなくなる。それに強烈な眠気が襲ってくる。お湯を掬って肩にかける。あく気持ち良い。

「ラヴィそこどいてくれ」

「はいはい」

A2が隣に入ってくる。すぐくびくびくしてるけど。

「熱くない？」

「ああ。大丈夫だ」

慣れてきたようで力を抜いて目を閉じて温まっている。

「あら〜随分と凝ってますね」

「なんだ。やめろ」

「硬いこと言わずに〜」

A2のそばに寄って肩を揉んでやる。突然、手を置かれて驚いていたがすぐに体を預けてくれた。

「気持ちいい？」

「わからん」

実際、揉んでると一切凝ってない。柔らかい。

「私はいい。変われ」

「お言葉に甘えて〜」

肩にA2の手が置かれる。

「痛い痛い！強い強いって！」

「冗談だ」

まああのA2が冗談を覚えただけ前進か。

「ラヴィ、お前本当に人類か？肩が凄い硬いんだが」

「それを凝ってるって言うの。中々上手よA2」

力の加減は絶妙だし、お風呂に入って手が温かいからすごく気持ちがいい。A2ってガサツに見えて繊細だし細かな力加減もできるのよね。

「ふあ〜」

2人で温まって蕩けている。

「2人とも凄いだらしない顔してますね」

「気持ちいいのは見て伝わるし・・・入りたいのは山々んだけど・・・」

「私達は2人みたいに変態じゃない」

「失礼な。ところで、そろそろ温まってきたし私上がるわ」

湯船から出て布で体を吹いて服を着る。そして、開けた場所に出て両手を広げて風を感じる。

「あゝ整う〜」

火照つた体から熱が放出されている感覚〜

「気持ちよさそうだね」

「ええ。それで、みんなは人目になるんだっけ？」

「そうです。先輩の裸をそこらの奴に見られようものなら・・・」

「なるほど。確かにそこらの変態に見せてやれるものじゃないわね」

近くの背の高い草を草を刈る。その刈つた草を隙間なく並べて外から見えないようにする。

「これでどう？」

「これなら安心です！さあ先輩入りますよ！！」

「え!?ちよつと待つて。やめて引つ張らないで！」

「良いじゃないですか〜」

「分かった。入るから！だから自分で脱ぐから！」

16Dがただのエロオヤジに見えてきた。

「えへへ〜」

「ちよつと誰か助けて！」

「騒ぐな。入るならさっさと脱げ」

「A2、さっきの腑抜けた顔は忘れないからね」

「爆薬オタクに姉妹！目を逸らすな！」

あ、私はニコニコして見てるわよ。

「いいわよ。脱いでやるよ！やってやるわよ！」

11Bは豪快に服を脱ぎ腰に手を当てて胸を張ってジャッカスや姉妹を睨みつけている。顔は真つ赤だけど・・・それより私が気になることが一つ。

「11Bって、着痩せするのね」

「うん。戦闘のときに揺れてじやまになるのよね」

この何気ない一言に傷ついた姉妹がいた事を11Bは気づいていない。

「ほくと先輩もつたいないですよね」

「揉むな!!16D!アンタは自分のがあるでしょうが！」

「先輩の反応が可愛くてつい・・・」

「人目がある中で乳繰りあわなくてももらえないかな」

「そうよ。初めてはしっかり暗い所でムードから大事にしてさ」

「ラヴィ」

はい。すいません。あれ？そういえばA2が静かね。

「ちよつとちよつと!?!早く上がって上がって!」

A2の顔が真っ赤になってのぼせているようだった。アンドロイドつてのぼせるんだ……

「いや……すまん……」

フラフラとA2が立ち上がる。倒れないように支えながらゆつくり服を着せる。服を着せて通りに出て風に当たらせる。

「水、ゆつくり飲んで」

「ああ……」

横になって体を冷やせる。

「これで少しすれば大丈夫だから」

A2がコクリと頷いて目を閉じる。顔の熱も先程よりは冷めた気がする。

「あゝゝ」

草のカーテンの向こうから2人の気持ち良さそうな声がする。

「どう?湯加減は丁度いい?」

カーテンをくぐると脱力して気持ちよさそうにしている2人がいた。

「ラヴィゝこれ気持ちいいゝ」

「私も心地よい暖かさで眠くなってきました」

「寝ないように気をつけてね。それじゃあごゆっくり」

カーテンを潜るとA2は先程と同じ姿勢で目を閉じて風を感じているようだった。

「ちよつとヒヤツとするわよ」

水で濡らしたタオルを顔に乗せてやる。騒がしい向こうと違ってこちらは風の音しか聞こえない。しばらくするとタオルの温度も温くなってきた。取り替えるためにタオルを取ってやると前よりも冷たく顔も気持ちよさそうだ。タオルを濡らそうと川へ向かう途中みんなの様子を覗いてみた。見ると、みんなが入っていて11Bが16Dからのお触りに逃げデボルに助けを求め、ポボルとジャツカスは気持ち良さそうにしていく。

「なんだ。結局みんなが入ってるじゃない」

そんな楽しそうな横をこっそり通ってタオルを濡らしてA2のところへと戻ってタオルを顔に乗せてやる。

「スースー」

戻るとA2が気持ちよさそうに寝ていた。試しに頬をぶにつと押して見ると熱はなくなっていた。頭を膝の上に乗せて一応、濡らしたタオルを額の上に置いておく。騒がしい向こうと比較してゆっくりと時間が過ぎていく。

数十分後

「あゝ涼しい」

えらく清々しい表情をした11Bと、無表情のデボル・ポボル・ジャツカスそして両手で顔を覆っている16Dが涼みにきた。

「なにがあつたの？」

「にへへ。あの後ね。流石にイラツと来ちやつてゝ反撃に16Dの胸揉んでやったわ
！」

「感想は？」

「なにかに目覚めそう」

「喘ぎ声を聞かされ続けた身にもなつてくれ」

「助けてくれないアンタ達が悪いんでしようが！」

「先輩が・・・先輩が・・・」

「16Dさん大丈夫ですか？」

「大丈夫です。余韻に浸つてるだけですの」

そう言う16Dの顔は手で隠れて見えづらいものの恍惚とした表情をしていた。

「うわあ」

ドン引きしているポボルを守るようにデボルが間に入った。ゴミを見るような目だ

が。

「それじゃあ片付けは明日にして帰りましょうか」

折角きれいにしたのに片付けで土と汗にまみれる気にはならない。それに、ポカポカしてかなり眠たい。

寝ているA2を背中に背負って拠点に戻った。拠点に帰っても体はポカポカのままだった。

「それじゃあおやすみなさ〜い」

「……おやすみなさ〜い……」

A2の横に一応いつもより距離をとって横になる。少しして辺りが静かになった時「ラヴィ。これから私が話す事に反応しないでくれ」

突然A2から話しかけられる。なぜか私が寝てないことは確信を持っているようだった。

「まず、ここ数日冷たい態度をとって悪かった。今、私はとある重要な決断を迫られている。決める選択肢はたった2つ。だけど私は他の奴らと違って処理能力が高くない。だから時間がかかっている。あーダメだ。やっぱりもう少し時間が欲しい。あと、2、3日待ってくれ。そこで決着をつける」

口ぶりからA2の悩みがどんなものかは想像もできないけど、私はA2が無理せずし

たい事をしてくれれば良いと思ってる。言わないけどね。

「あと、この件はラヴィは悪くないんだ。それなのに・・・ごめん」

ギユ（っ、ω・ω・ω）っ

「!!」

静かに抱きしめてすぐ離れました。約束違反ですが後悔してません。満足したし私は寝ます。おやすみ〜